葉といふ歌云々」と見えてゐる。

【花　子】

深山のその奥山のこけ猿小猿が雨にそぼ濡れて、ひひつくばうてかいつくばうて（凱陣八島）

花子に、「深山の奥のこけ猿めが雨にしよぼ濡れて、ついつくばうたにさも似た」。「こけざる」の義に就いては語解部を見よ。

【枕物狂】

枕物にや狂ふらん（隅田川）

枕物狂の文に、「枕物にや狂ふらん、ぬるも寝られず起きもせず」とあるに據つたのである。

【その他の小歌】

磯邊の千鳥、ちんりちりちりと友鳴く聲との、島隱より櫓の音がからりころり（閻魔曾我）

狂言唄・宇治のさらしに、「鴫の洲崎に立つ浪つけて、はんま千鳥の友呼ぶ聲は、ちりちりやちりちり、ちりちりやちりちりと友呼ぶ處に、鴫陰よりも櫓の音がからりころり、からりころりと漕ぎだいて」。

七つになる子がいたいけな事言うた、殿がほしと唄うた（賀古教信）

これは狂言謠の小歌に據つたもので、この小歌は日本歌謠類聚・上卷にも「七つになる子」といふ題で出てゐる。巣林子作・閑八州繋馬には「七つになる子がいたいけな事言うて、殿がほしいと謠うた」と見えてゐる。

森の下浮かれ烏の告げ渡り（大職冠）

狂言小唄に「ここは山陰、森の下森の下、月夜烏はいつも啼く」。

伊勢物語に據れるもの

淺間の嶽に立つ煙　淺間の嶽に立つ煙、その一筋をさまざまに、霞にえいじ雲に見て、歌人は思ひをのぶるとかや（最明寺殿）

伊勢物語に、「信濃なる淺間が嶽に立つ煙、をちこち人の見やはとがめぬ」。謠曲・鉢の木に、「信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く」。

在原の中將なりしまめ男、かのこまだらと詠じけん富士（大磯虎）

「在原の中將」とは在原業平のこと。「まめ男」「かのこまだらと詠じけん富士」を見よ。

在原の優男　かの在原の優男、はるばるきぬるつまかはに（加增曾我）

在原業平は美男であつたのでいふ。ここの文は、業平が三河國八橋で、「から衣きつつなれにしつましあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」と詠んだ歌の語句によつたのである。この歌は伊勢物語にも古今集にも見えてゐる。「妻川」は遊女の名。

言野初瀬の花よりも紅葉よりも、戀しき母が見たいものぢや（三世相）

これは狂言小歌に據つたもので、この小歌は日本歌謠類聚・上卷にも「七つになる子」といふ題で出てゐる。

色に身代宇津の山、高安、齋宮、西の對、二條の后の俤に、似たつきもなき戀の闇、さそひ出せし白玉を、どこぞと問へば芥川、しばしは露の置き所、伊勢物語の模樣もあり（蛙合戰）

伊勢物語にあることを頭樣にした着物雛形を、伊勢物語中の語を引用して記したのである。色に身代をうち無くするといふに宇津の山をいひかけ、「宇津の山」「高安」「齋宮」「西の對」は皆伊勢物語に見え、「二條の后云々」も伊勢物語に、「二條のきさきに忍びて參りけるを、世の聞えありければ、せうとたちの守らせ給ひけるとぞ、昔男ありけり、女のえ逢ふまじかりけるを、年を經てよばひわたりけるを、からうじて女の心をあはせて盗み出で、いと暗きに率てゆきけり、芥川といふ川をいきければ、草の上におきたりける露を、かれは何ぞとなむ男に問ひけるを、ゆくさきはいと遠く夜もふけにければ、云云、白玉かなにぞと人のとひしとき、露とこたへてけなましものを」と見えてゐる。

鶉とならんと詠じけん古歌

「野とならば鶉とならん云云」を見よ。

＊おほぬさの　大ぬさの引く手數多のうき節や（大磯虎稚物語）

ああ大幣のこの蒲團、小六も寢つろ、小夜も寢つらん、房も寢よう、引く手數多に何處の誰めと寢くさつた（亜井筒）

「大幣の」「大」は美稱、「幣」は麻で作るが故に麻をぬさとも訓む、「の」はの如くの意、大幣は被する時に用ゐる串にさした四手である。被果つれば各引寄せて撫でる物なれば、引く手數多とつゞけていふのである。以て彼方此方の數多の人人から引張られて靡くことにいふ。伊勢物語に、「大幣の引く手あまたに聞ゆれば、思へどえこそ頼まざりけれ」と見え、古今集には第三句「なりぬれば」となつてゐる。

春日の里も近ければ若紫の色深く（井筒）

伊勢物語の歌に、「春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れ限り知られず」。

風吹けば沖つ白浪たつた山、夜半にや君がひとりゆくらむ（井筒）

「立田山」は大和國平群郡大和川の上流に沿うた龜瀬越である。この歌は業平が河内國高安の里の女の許に通ひ、夜中に歸るゝを女が氣遣うた歌で、風が吹けば沖に白波が立つことであるが、その立つと云ふ名の立田山を、時もあらうに夜半に君が獨り行かれることであらうか、さてさて御身の上が案ぜられること

だわいとの意。この歌は伊勢物語及び古今集・雜下部に出て、「ひとり行くらむ」は「ひとり越ゆらむ」となつてゐる。六帖・新撰和歌集・金玉集・謠曲井筒などには、ここにあるやうに「ひとり行くらむ」となつてゐる。

鹿子斑と詠じけん富士（大磯虎）

鹿子斑とは、牡鹿の背の毛が赤黃色に白い斑があるのでそのやうなのをいふ。斑は梵語・曼荼羅（Mandala）を雜色の意にとつた語であると云ふ。伊勢物語・在原業平の歌に、「時しらぬ山は富士のね、いつとてかかのこまだらに雪の降るらむ」。

神はうけずやいやいやましの、思ひは罰か因果かや（龜大臣）

伊勢物語に、「被へけるままに、いとどかなしきことかずまさりて、ありしよりに繼しくおぼえければ、繼せじとみたらし川にせしみそぎ、神は受けずもなりにけるかな」。

韓くれなゐの水くくる（唐船嘶）

「韓紅」は韓國から傳はつた紅の義で、紅染色の美しいのを稱美していふ。「水くくる」は、水をくくり染めにする意。伊勢物語、在五中將業平朝臣の歌に「ちはやぶる神代もきかずたつ田川、からくれなゐに水くくるとは」。

からころもきつつ　から衣きつつなれつつきらざか（三世相）

からころもきつつなれにしつましあれば、在所住居もめづらしく（井筒）

から衣我も昔は木綿物着つつ馴れにし緣あれば、今日の錦の旅をしぞ思ふ（三國志）

〔韓衣著つつ〕韓衣は美しい衣の意、著つつの枕詞ともなる。著つつに來つつをかけ、また褄に妻をかけて云うたのである。伊勢物語、在原業平の歌に「から衣きつつなれにしつましあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」。

信濃路や淺間の嶽　在原の中將なりけるまめ男、戀ゆゑ旅をしなの路や、淺間の嶽とつられける山の烟も（川中島）

伊勢物語に昔男（在原業平）の詠める歌「信濃なる淺間の嶽に立つ烟、をちこち人の見やは咎めぬ」。

忍びて出づる春日野や若紫の摺衣（大織冠）

伊勢物語に「春日野の若紫の摺衣、しのぶのみだれかぎりしられず」。

しらたまか何ぞ　抱取りたるしら玉か何ぞと問はば、魂も消ゆるばかりの心地なり（加增曾我）　后は夢ともしら玉か何ぞと咎む犬の聲、露と答へて消えぬべく、姿しをれて出で給ふ（井筒）

伊勢物語に「白玉か何ぞと人の問ひしとき、露と答へて消なましものを」とある歌を引用したのである。傾城島原蛙合戰に「誘ひ出せし白玉男ぞと、とへば芥川」とあるも、伊勢物語のこの歌に據つたのである。

背くとて雲にも乘らぬものなれば、心ぞ緣に引かれ行く（女夫池）

世を背くとて、仙人などのやうに雲に乘つて飛行するものならねば、心も世を背く緣に引かれて、自ら世と遠ざかり行くとの意。伊勢物語の歌に「背くとて雲には乘らぬものなれど、世の憂きことぞよそになるてふ」。

たつたや沖つ白波のたいこも連れず（淀鯉）

伊勢物語に「風吹けば沖つ白波たつ田山、よはにや君がひとり越ゆらむ」とある歌の詞を用ゐたのである。「白波」を白波緣林（盜賊）の意として、幣間が金を貪り取るより「白波のたいこ」といひ續けたので、「立つ」に「太鼓」をいひかけたのである。（序に云、伊勢物語なるこの歌の白波には白波緣林をいひかけたのではないが、これをいひかけたと說いた古註もある）。

誰かあぐべきつくも髮　色黑く背高くたれかあぐべきつくも髮、花のあたりの深山木と（天智天皇）

伊勢物語に、「くらべ來し振分髮も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき」、「もとせに一年たらぬつくも髮我を戀ふらしおもかげに見ゆ」（その條を見よ）。

千代もと祈る子　善惡ともに親のならひ、千代もと祈る子を殺し、たとひ老母が嘆かずとも（井筒）

伊勢物語に、「世の中にさらぬ別れのなくもがな、千代もと祈る人の子の爲」とある歌の句に據つたのである。

千夜を一夜に百夜さも、語り明しつ寢明して、飽かぬぞ色の道しある（三國志）

伊勢物語の歌に「秋の夜の千夜を一夜になずらへて、八千夜し寢ばや飽くときのあらむ」。

月やあらぬ

「わがみはもとの身なれども云云」を見よ。

＊つましあれば　誰が名を立てて虎が石、身の戀衣つましあれば、古鄕へ返せから錦、もろこしが原にぞ着きにける（國八景）　しゆらの旅路につましあれば、はるばるきぬるから衣三河の澤（源義經）

「つま」は妻と褄とをいひかけ、「し」は意を强める助辭であつて、妻（褄）あれはの意。伊勢物語に、「から衣きつつなれにしつましあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思ふ」。

つまも籠れり若草に、けふはな燒きそ武藏坊（雪女五枚羽子板）

伊勢物語に、「武藏野は今日は燒きそ若草の、つまも籠れり我も籠れり」、とある歌を作りかへたのである。

手には取られぬ桂男（出世景清）

桂男とは月のことにいひ（「桂の夫婦」を見よ）、そして月の如き君の意をふくめたのである。伊勢物語の歌に「目には見て手には取られぬ月のうちの、桂の如き君にぞありける」。

飛ぶ螢雲の上までいぬべくは、秋風吹くと歎きしも（弘徵殿）

伊勢物語に「時は水無月のつごもり、いとあつきころほひに宵は遊び居りて、夜更けてやや涼しき風吹きけり、螢高く揚上る、此男ふせりて、飛ぶ螢雲の上までいぬべくは、秋風吹くと雁に告げこせ」と見えてゐる。螢は、天上まで飛行くならば、世界は既に涼しい秋

風吹いてゐると雁に傳言して呉れよの意であつて、雁にことよせて亡魂に歸つて來よといふ意を含めて歎いたのである。

問へば言ふ問はねば恨む武藏鐙(吉野忠信)

問うて心を打明ければうるさいといふ、さればとて問はねばつらいと恨む、どうとてせんすべが無い意。「武藏鐙」はその條を見よ。伊勢物語の歌に、「問へば言ふ問はねば恨む武藏鐙、かかるをりにや人は死ぬらむ」。

鳥の子を十づつ十は重ぬとも、思はぬ人に身をこがす(井筒)

「鳥の子」は鷄卵である。「十づつ十」は百である。鷄卵を百累ねるは至難のわざなれども、なほ累ね得る術もあらう、されど我を思うてくれない人に、我を思うてくれるやうとりとめん術なく、我ばかりひとり思ひ焦れるの意。伊勢物語の歌に、「鳥の子を十づつ十はかさぬとも、思はぬ人を思ふものかは」。

名にし負はばいざ言問はん都鳥、わが思ふ人はありやなしやと(隅田川)

都鳥よ、汝は都といふ名を負うてゐるならば都のことも知つてゐるであらう、どれ聞いて見よう、我思ふ都の人は今も無事でゐるや如何にの意。この歌は在原業平の詠であつて、伊勢物語、古今集、謡曲・隅田川などにも見えてゐる。

形は鹽尻のやうになん 代代の歌人の眺めの種、形は鹽尻のやうになんと傳へしも(三國志)

伊勢物語に、「その山(富士山)はここにたとへば、ひえの山をはたちばかり重ねあげたらん程して、形は鹽尻のやうになむありける」、とあるに據つたのである。「鹽尻」は鹽後で、鹽後の砂の義である。鹽濱では砂に潮水を撒きて日光に乾かした後、其鹽砂を採集めて塚の如く圓く高くせるものを鹽尻と云ふ。またこの鹽砂を瀘過中に入れ、海水を灌ぎて砂に附着せる鹽分を瀘過採集した後の砂は、大笊に入れて適宜の所に棄てる、その形擂鉢を伏せたやうである。これをも鹽尻といふ。

野とならば鶉とならんと詠じけん古歌(千疋犬)

伊勢物語に、「野とならば鶉となりて鳴き居らむ、狩にだにやは君は來ざらむ」、とある歌をさす。

二十重ねて駿河なる富士にたとへし比叡山(兼好)

「むかし男のこの山を云云」を見よ。

二十ばかりの富士の雪、消えてはかなくなりにけり(三國志)

伊勢物語に、「富士の山を見れば、……雪いと白う降れり、……その山はここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ね上げたらん程して」とあるに據つて、お通が二十歳で死ぬをかくいうたのである。

はるばるきぬるつまかはに

「在原の優男」を見よ。

富士を擧びし鹽尻や(融大臣)

「鹽尻」はその條を見よ。伊勢物語に「富士の山は……形は鹽尻のやうになむありける」。

***ふりわけがみ** 振分髮の頃よりも井筒にたけをくらべこし、互にかげを水鏡(井筒) 振分髮を競べ來し井筒燈籠井戸屋形(嫗山姥)

〔振分髮〕童男童女が髮を結ばないで、生ひたる儘に左右に分けて垂れたるをいふ。伊勢物語に、男から女に贈つた歌に、「筒井筒井筒にかけしまろがたけ、おひにけらしな相見ざる間に」、またその返歌に、「くらべこし振分髮もかた過ぎぬ、君ならずして誰かなづべき」。

***みやこどり** 夫婦も元は都鳥、あるかなきかのかせ所帶(隅田川)

〔都鳥〕小鷗をいふ、嘴赤く腹白く背鼠色である。ここの文は、夫婦も元は都の者なるが、今は有るか無きかの貧乏所帶といふを、伊勢物語にある「名にし負はばいざこととはん都鳥、我思ふ人はありやなしやと」、とある歌の句によつて飾つたのである。

昔男の芥川、ちりも厭はぬ露の身を、草におくてふ白玉か、問へど答へず消えもせず(關八州)

伊勢物語にある文に據つてかくいうたのである。「色に身代宇津の山云云」の條に、ここにいへる伊勢物語の文を擧げておいた。

昔男の、この山を二十重ねて駿河なる富士にたとへし比叡山(兼好)

「昔男」とは在原業平をいふ。伊勢物語に、「不二の山を見れば五月のつごもりに雪いと白う降れり。時しらぬ山は富士の嶺、いつとてかかのこまだらに雪の降るらむ。その山はここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ね上げたらん形して、なりは鹽尻のやうになむありけろ」とあるに據つたのである。

葎生ひて茂れる宿のうれたきに、假にも鬼のすだくなりとは、昔男のこはざれに女を鬼との捨言葉(艶狩)

伊勢物語に、「昔男田からすこて見をりけるに、女どもこの男を見て、いみじきすきもののしはざやと戯れ言ひつつ集り入り來りければ、一旦は男恥ぢて隱れたれど、女ども戯れ歌よみてそこに居れば、男も負けじ心起りてよみたる返歌に、葎生ひてあれたる宿のうれたきは、かりにも鬼のすだくなりけり」と見えてゐる。一首の意は、葎生ひ茂つて荒れ果てた宿のいやらしきは、かりそめにも怖しい鬼の集ることであるわいといふのであつて、女どもの集り入り來たのを罵ざれに、女を鬼と見立てた捨言葉である。

武藏野や我ぞ籠れる若草に(五人兄弟)

伊勢物語の歌に、「むさし野はけふはな燒きそわかくさの、つまも籠れり我も籠れり」。

百年に一年足らぬつくも髮(蟬丸)(井筒)

「九十九」を「つくも」とよんである。「つくも髮」とは老人の頭髮の白く短きをいふ、恰も江浦草(ふとゐとも云ふ)といふ水草の花が短き毛のやうな柄を有してゐる・それに似てゐるからの稱である。和名抄に、「辨色立成云、江浦草、和名豆久毛」。伊勢物語の歌に、「ももとせに一年足らぬつくも髮、我を戀ふらしおもかげに見ゆ」。

行く水と過ぐるよはひと散る花と、いづれまててふことを聞くら

む（井筒）

流れ行く水と過ぎ行く年と散る花といづれ遲速もあることだから、時節を待てといふことを聞いてゐるだらう、さればあながち悲嘆すべきものでなく時節の到來を待つべきである の意。この歌は伊勢物語に「行く水に數かくよりもはかなきは云云」の歌の次に出てゐる、但し異本にはこの歌が載せて無い。

行く水に數かく　行く水に數書くよりもはかなきは、思はぬ人を思ふなりけり（井筒）　行く水に數かくよりもはかなきは、思はぬ人を思ひ川（關八州）　行く水に數かくよりもたよりなき（深草）

伊勢物語の歌に「行く水に數かくよりもはかなきは、思はぬ人を思ふなりけり」とあるに據つたのである。この歌は古今集戀歌一の部にも出てゐる。一首の意は、流水に一二三の數字を書いても、忽ち消えてはかなきものであるが、それよりもまさつてはかなきは、我を思うてくれぬ人を我ばかり思ふことぢやわい、それは更に何のしるしも見えぬかからの意である。

わが門に千尋あるかげと詠ぜしも（女護島）

伊勢物語の歌に「わが門にちひろある竹を植ゑつれば、夏冬たれかかくれざるべき」とあるに據つたのである。一首の意は、我門のあたりに千尋もある竹を栽ゑたればその蔭も廣くして、我一門の者皆この蔭にかくれて夏には涼み冬には霜雪をおほひて暖であらうの意で、一族に皇子御生れ給へば、この皇子の御蔭によつて一門の者ども皆御惠みを豪ることであらうの意を含めたのである。

若草につまも籠れり（生玉）　**若草の妻もこもれる鴛鴦の中**（生玉）

伊勢物語の歌に「武藏野は今日はな燒きそ若草の、つまもこもれり我も籠れり」とあるに據つたのである。

我身はもとの身なれども契りし人のなき故に、月やあらぬとかこちしはげに理と（弘徽殿）

伊勢物語に「昔、東の五條に大后の宮おはしましける西の對に住む人ありけり、それを本意にはあらで往きとぶらふ人志深かりけるを、睦月の十日ばかりにほかに隱れにけり、在處は聞けど人の往き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなんありける、又の年の睦月に梅の花盛りに、去年を思出でてかの西の對に往きて、立ちて見・居て見・見れど去年に似るべくもあらず、打歎きてあばらなる板敷に月の傾くまで臥せりて、去年を戀ひてよめる、月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つはもとの身にして」とあるに據つたのである。

大鏡に據れるもの

こち吹かばにほひおこせよ梅の花、あるじなしとて春な忘れそ（天神記）

この歌は大鏡・左大臣時平の條に出で、菅公が左遷されて京都を出られる時に前栽の梅花を御覽じて詠まれたのである。春風が吹く頃になつたら、梅の花よよき匂を筑紫のはてまでもおくりよこしてくれよ、我身は配流されて今からは家主人なくなることなれども、必ず主人がないとて春を忘れること勿れと、心なき梅花に對して名殘を惜まれたのである。さるを巢林子が應用したのである。

東風吹く風に飛梅の　筑紫の旅を菅原や、現人神も故郷の、春を慕へば慕はれて、東風吹く風に飛梅の（國性爺後日）

大鏡・左大臣時平の條に、右大臣菅原道眞のことを記して、「右大臣の御ためにゑからぬ事いできて、昌泰四年正月二十九日太宰權帥になし奉りて流され給ふ、梅の花を御覽じて、東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ」と詠まれたること見え、この梅後に配所に飛んで行つたといふ。「とびうめ」を見よ。

筑紫の旅を菅原や、現人神も故郷の、春を慕へば慕はれて、東風吹く風に飛梅の（國性爺後日）

「東風吹く風に飛梅の」を見よ。

流れ行く筏は波に沈むとも、君しがらみとなりてとどめよ（天神記）

大鏡・左大臣時平の條に菅公の歌、「流れ行くわれはみくづとなりはてぬ、君しがらみとなりてとどめ」よと見えてゐる。「筏」は「みくづ」とあるべきである。我は流れ行く水屑となつて筑紫へ左遷される身となつた、願くは君筌とならせ給うて、水屑即ち左遷される我を敢されるやうに計らはせ給への意。

金葉集に據れるもの

あまの川苗代水にせきくだせ、天降ります神神たり（嵯峨天皇）

「苗代水」とは、苗代田にそそぎかける水、「苗代」は早苗を仕立てる田。「天降ります神」とは、高天原から天降りましたことを、雨降りの意に取做したのである。金葉集、卷十・雜部下に、「天の川苗代水にせきくだせ、あま降ります神ならば神」。この歌は古今著聞集・卷五にも出て、能因法師雨乞の歌である。

通ふ千鳥の淡路町　佐渡と越後の間の手を、通ふ千鳥の淡路町、龜屋の世繼忠兵衛（冥途飛脚）

忠兵衛が新町遊廓なる佐渡屋町・越後屋と淡路町との間を通ふことを、「淡路島かよふ千鳥の鳴く聲に、いくよねざめぬ須磨の關守」の歌句によつたのである。この歌は金葉集冬部また小倉百人一首中に出で、源兼昌の詠である。淡路町は忠兵衛の住居せる町名である。「ゑちご」をも見よ。

指櫛の蒔繪に似たる松原（卯月紅葉）

指櫛は蝦甲などで作り蒔繪などあつて頭髪の飾にさす櫛。金葉集・雜部上、大中臣輔弘の歌に、「玉櫛笥二見の浦のかひしげみ、蒔繪にみゆる松のむら立」。

誰が文も見ぬ戀の道（天網島）

金葉集卷九、雜部上、小式部內侍の歌に、「大江山いく野の道の遠ければまだ文もみずあまの橋立」。

文も見ぬいくのの道や大江山（賀古教信）

金葉集・雜部上、小式部內侍の歌に、「大江山いくのの道のとほければ、まだ文も見ず天の橋立」。「生野」は但馬國朝來郡、「大江山」は丹後國與謝郡にある。

もろともにあはれと思へ山櫻　もろともにあはれと思へ山櫻、花より外に知る人もなし（鍋）　**もろともにあはれと思へ山櫻、花に心をそみかくだの**（凱陣八島）

金葉集・雜部、前大僧正行尊の歌に、「もろともにあはれと思へ山櫻、花より外に知る人もなし」とあるに據つたのである。この歌は小倉百人一首中にも見えてゐる。一首の意は、山櫻よ相互にあはれと思ひくれよ、この山中にては花より外には更に知合ひもなければとの意である。

源氏物語に據れるもの

命がつらき老後の恥（大經師）

桐壺の卷に、「命長さのいとつらう思う給へ知らるるに」。徒然草第七段に、「命長ければ恥多し」。

源氏は明石の鯛を釣る（隅田川）

明石の卷に、源氏の君が明石の浦に佗住居したことがあるによつて、かく云うたのである。

五條あたりの軒の端、白く咲けるとも見ず（賀古教信）

夕顔の卷に、「五條わたりなる家たづねておはしたり、……かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る、……むねむねしからぬ軒のつまごとに蕚ひ纏はれたるを」と見えてゐる。源氏の君が大貳の乳母が重く煩うて尼となつたを見舞ふ爲、五條あたりなる家を尋ねて行かれ、大貳の乳母の隣家の垣に白い花の咲亂れてゐるを見給ひ、隨身を召してあれは何の花ぞ一ふさ折つて參れと宣へば、夕顔と申しますと答へて折りに行き、夕顔の君を見そめて、やがて源氏の君がこれと契を結ぶことが記してある。

小萩がもとを思ふにも、我が宮城野が遣瀨なさ（賀古教信）

桐壺の卷に、「宮城野の露吹き結ぶ風の音に、小萩がもとを思ひこそやれ」。

***たそがれ　彼のほのぼのとのほの暗き、たそがれ早く寢し時は**（用明天皇（二枚繪））

「黃昏」誰ぞ彼の義であつて、誰か彼か見分難き頃、即ち夕暮をいふ。淮南子・天文訓に、「日至三虞淵一、是謂二黃昏一」。ここの文は夕顔の卷に、「よりてこそそれかとも見めたそがれに、ほのぼのと見つる夕顔の花」、とある歌の詞によつたのである。

橘の木の埋れし御隨身召して拂はせ給へば、羨しげに松の木のおのれとひとり起き返り、さつとこぼるる其氣色花とも波とも眺むべし（融大臣）

末摘花の卷に、「橘の木の埋れたる、御隨身召して拂はせ給ふ、羨み顏に松の木のおのれと起きかへりて、さとこぼるる雪も、名に立つ末のとは、後撰集に「我が袖は名に立つ末の松山か空より波の越えぬまぞなき」とある。

尋ね行く幻もがな傳にても、傳にても、魂のありかは其處としも、しら露分けて（弘徽殿）

桐壺の卷の歌に、「尋ね行く幻もがなつてにても、魂のありかをそこと知るべく」。

名に立つ末のといひ置きし　名に立つ末のといひ置きし、末摘花の閨の雪、花に擬へて吉野山（冷泉節）

末摘花の卷に、光源氏の君が末摘花といふ女の內に宿りて、朝早く歸らうとしてあたりの景色を眺める文に、「さとこぼるる雪も名に立つ末のと見ゆるなどを、いと深からずとぞなだらかなる程にあへしらはむ人もがなと見給ふ」、とあるに據つたものである。さて源氏物語に、「名に立つ末の」といへるは、雪の樣が空より波の越える如く見える景色の面白きを云うたので、後撰集・卷十、土左の歌に、「我が袖は名に立つ末の松山か、空より波の越えぬ日はなし」、とあるに據つたものである。

俄に持たせし提灯の吹消すやうに消えてけり（雪女）

夕顔の卷に夕顔の死を叙した條に、「物におそはるる心地して驚き給へれば火も消えにけり、……渡殿の火も消えにけり、風少しうち吹きたるに人は少くて」などとあるより得た着想であらう。凡を巢林子が幽墓のあはれを書けるは、傾城反魂香、卯月潤色などの諸篇に見えて、何れも神韻飄渺凄氣人に逼るを覺えしめる。

花のあたりのみやま木　誰かあぐべきつくも髪、花のあたりの深山木（天智天皇）

と、各どつとぞ笑はるる。紅葉賀の卷に、「源氏の中將は青海波をぞ舞ひ給ひける、片手には大殿の頭中將、かたち用意人には異なるを、たち並びては花のかたは

らの深山木なり」。

はははきぎのまき 自らこれにて琴を調べて合せんに、如何にと咎むる人あらば帚木の巻と答ふべし（孕常盤）

（帚木巻）帚木の巻に、ある殿上人・女の門近き廊の簀子だつものに腰かけて、暫く月を見る風情にて笛を吹く、家の内には女が琴を取出して、笛の音に合すことを記し、また同巻・空蟬の歌に、「數ならぬ伏屋におふる名のうきに、あるにもあらず消ゆる帚木」と見えてゐる。この二者を取合せて、「帚木の巻と答ふべし」といふた謎である。

＊ひとだまひ 人人轅に取附きつつ、人だまひの奥に押遣られて物見車の力も無き、身の程を思ひ知らすべし（弘徽殿）

思出でたりその昔賀茂の祭の車あらそひ、車の前後にばつとよりて人人轅に取附きつつ、人だまひの奥にオオ押遣られて物見車の力も無き（蛙合戯）

（人給）人に給うて乘らしめる車の義。供の女房の出車。副車。葵の巻に、賀茂祭の日に葵の上と六條御息所とが車爭ひのことを記して、「遂に御車ども立て續けつればひとだまひの奥に押遣られて、物も見えず心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるがいみじう妬きこと限なし」と見えてゐる。巣林子のここの文はこれに據つたのである。

巣林子作・本領曾我に、「翼はあけに染めなされ、人だまひにぞ逃げ入つたり」とある「人だまひ」は人混りの意に誤解し、人の集合する控所の意に用ひたのであらう。

ひろはば消えん玉篠の霰 ひろはば消えん玉篠の霰の手にも取られぬ面影（西王母）

ひろはば消えん玉篠の霰と譬へたは光源氏（千疋犬）

帚木の巻に、「御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉篠の上の霰などの、艶にあえかなる好さ好きしさのみこそをかしくおぼさるらめ」とある中の文によつたのである。

ほのぼののほの暗き黄昏 かのほのぼののほの暗き、黄昏早く寢し時は、蚊屋釣草を思ひ出し（用明天皇）

（二枚絵）

夕顔の巻の歌に、「よりてこそそれかとも見め黄昏に、ほのぼの見つる花の夕顔」とあるに據つたのである。「かの」は卽ち源氏物語・夕顔の巻のこの歌をさしたのである。

松の雪暖かげなる 白妙匂ふ空の色、朝日夕日の影までも共に凍りて松の雪、暖かげなると書きたるもこれならん（冷泉節）

末摘花の巻に、「いとあはれに淋しう荒れ惑へるに、松の雪のみ暖げに降り積めり、山里の心地して物あはれなるを」とあるに據つたのである。

紫も色の名 紫も色の名、あかしといふも色の名、藤壺に末摘花散里ぞゆかしき（源義經）

紫の上も色ある女の名だとの意。ここの文の明石、藤壺の女御、末摘花、花散里、これ等總て源氏物語に見えてゐる女である。箏曲・中組の須磨に「須磨といふも浦の名、明石といふも浦の名、更科の月共に眺めていざやあかさん」。

藻鹽草いせをの海人にあらねども（今宮）

「藻鹽草」はその條を見よ。須磨の巻の歌に、「うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれ、藻鹽たるてふ須磨の浦にて」、とあるによつて、「藻鹽草伊勢をの海人」とつづけたのである。

＊ゆふがほ さながら鬼神と夕顔の五條の橋の橋板をとどろとどろと蹈鳴し（孕常盤）

はらしてほしやと夕顔の黄昏照す行燈の障子にうつるをよく見れば（反魂香）

過ぎにし御見の夕顔の露の黄昏、身にしみじみと我魂に封じ文（賀古教信）

夕顔の黄昏たどる覺束なさ、先にも見付けて編笠の（氷朝日）

夕顔のそれにはあらぬ小家の軒（最明寺殿）

夕顔の花をやる五條わたりの黄昏に、光源もじ御げんもじ、白き扇の伊達なるに一ふさ折りて參らせし、花の情のかね言を今もみどりの松原や（大原問答）

「夕顔」夕顔の巻に、光源氏の君が乳母の大貳の病を見舞に五條に行かれ、門前に立つて大路の樣を見れば、乳母の家の傍に板圍ありて、夕顔這上つて白い花美しう咲いてゐるので、光源氏の君が隨身に命じてその花を折らせにやつたれは、圍の内より童が白扇を持出て、これに夕顔の花を載せて持つて歸れといふ、こんな事から光源氏の君と夕顔の女が契を結ぶことになつたことを記してある。孕常盤に「夕顔の五條」とあるは、夕顔の巻の故事によつて、「五條」の上に「夕顔の」を添加へたまでである。謠曲・橋辨慶にも、「夕顔の花の色、五條の橋の橋板をとどろとどろと蹈鳴し」と見えてゐる。巣林子この文に據つたのである。

「夕顔の黄昏」は、夕顔女に夕方薄暗い顔をきかせたので、夕顔の女は光源氏と契つたが薄命であつた。ここの文もそのはかなき契、つれなき戀、新戀離恨の悲哀を含んでゐる。

「夕顔のそれにはあらぬ小屋」とあるは、源氏物語に、夕顔の家は五條にある破屋で、賤者と軒近く話し聲や白・砧の音など枕上に響いたとあるやうに、佐野源左衛門常世の破屋の狀は夕顔の陋屋のそれに似てゐればがくいうたのである。

折らば落ちなん萩の上の露、拾はば消えなん玉篠の霰と譬へたは光源氏（千疋犬）

帚木の巻に、「御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、ひろはゞ消えなむと見ゆる玉篠の上の霰などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそをかしくおぼさるらめ、今さりとも七年あまりの程に思し知り侍りなむ」、と見えて馬頭が光源氏及び頭中將に語つた言葉であつて、光源氏の言葉ではない。

源平盛衰記に據れるもの

いしだがくび　巴が馬上の女武者、石よりかたき石田が首、鞍の前輪に押付けて捩切り（兼好）

〔石田が首〕内田の首の誤である。内田三郎家吉は六十人力ある剛の者であつたが、開寺の合戦に木曾義仲の妾巴御前と格闘し、巴御前の鞍の前輪に組敷かれて首を搔取られた。源平盛衰記・巻三十五、巴闘東下向の條に、「やをれ家吉よ、日本一と聞えたる木曾の山里に住みたる者なり、我を軍の師と憑めとて、弓手の肘を指出し、甲の真甲取詰めて、鞍の前輪に攻付けつつ、内甲に手を入れて、七寸五分の腰刀を抜出し、引あをのけて首を搔く」とある。石田爲久は粟津が原で木曾義仲を討取つた人である、それを巣林子が思違したのであらう。ここの文は、巴が内田の首を搔取つてゐる繪馬をいふのである。

孝は百行の始（持統天皇）

源平盛衰記・巻十七に、「孝は百行の源」。

耆婆が良薬かなはずして、跋堤河の涅槃に入り給ふ、病者は佛體、醫師は耆婆、定業の天命藥によらば釋尊入滅あるべきか（孕常盤）

「耆婆」「涅槃」「定業」「入滅」はその條を見よ。源平盛衰記に、「彼の耆婆が醫術及ばずして、釋尊涅槃に入り給ひき、これ卽ち定業の病癒えざることを示さんが爲なり、治するは佛體なり、寢するは耆婆なり、定業なほ醫術にかかはるべくは、豈釋尊入滅あらんや」。

才力を以て人に勝つ者は亡び、德を以て人に勝つ者は強し（源義經）

源平盛衰記・巻三、小松大臣入道教訓の條に、「以ㇾ德勝ㇾ人者昌、以ㇾ力勝ㇾ人者亡」といふ事あり。

日月は一人の爲に其明を暗まさず、明王は一人の爲に其法を枉げず（本領曾我）

參考盛衰記・巻十一に、「倩愚按を廻らすに、明王爲二一人一不ㇾ枉二其法一、日月爲二一物一不ㇾ暗二其明一」。

白河の法皇、祇王・祇女・佛・刀自が法名を過去帳にとめさせ給ひたる其例（三世相）

後白河法皇が祇王・祇女・佛・刀自の節操あつたを聞召されて、六條の長講堂の過去帳にこれらの女の名を書留められたことが源平盛衰記巻十七、祇王祇女佛の前の條に見えてゐる。「ぎわう・ぎぢょ・ほとけごぜん」をも見よ。

仙宮の蛙息を吐いて虹となる（蛙合戦）

白氏文集・蝦蟇の詩に、「常恐飛上ㇾ天、跳躍隨二姮娥一、往往蝕二明月一」。南浦文集に、「我日本之蟾有ㇾ之曰、蝦蟇之嘆息、其氣昇ㇾ天」。源平盛衰記・大地震の事の條に、「昔も今も怨靈は恐しきことなり、蟇の息天へ上るといふこともあるぞかし。これらから云つたものであらう。

細谷川の丸木橋ふみ返れとぞ祈りける（萬年草）

飛脚の九兵衛が心細くなるを細谷川にいひかけ、そして源平盛衰記なる平通盛の歌、「我戀は細谷川の丸木橋、ふみかへされてぬるる袖かな」に據つたもので、踏みかへさるを文返さるにきかせたのである。

昔は巖窟の洞に籠められて三春の愁歎を送り、今はくはうでんのうねに捨てられて故敵の一ぞくと恨みしも、雁に古郷の便あり（百合若）

「くはうでん」は嘴田か。（或は嘴田又は旱天の誤か）。「胡敵の一ぞく」は「胡敵の一足」の誤である。巣林子作・平家女護島（紙屋與右衛門版七行本二十六枚目の裏二行目）に、「今は胡狄の一足とかこちしも」と見えてゐる。「胡敵の一足」とは、胡敵の中にありて一本足の不自由極まる者の義である。慶長活字版・源平盛衰記・智卷第八、漢朝蘇武の事の條に、漢の蘇武匈奴に使し、捕はれて北海の邊に放ち棄てられ、羊を飼はせられたこと十九年、一日雁の翼に文を結付けて之を放つた、其文に、「昔籠二巖穴之洞一、徒送二三春之愁歎、今放二嘴田之畝一、空同二故敵之一足一、設身留永朽二於胡國一、必神還再仕二于漢君一」と書いたと見えてゐる。平家物語・巻二、蘇武の事の條に、「昔は巖窟の洞に籠められて三春の愁歎を送り、今は旱天のうねに捨てられて胡敵の一足となれり」。

明王は一人の爲にその法を枉げずとかや（百日曾我）

參考盛衰記・巻十一に、「倩愚按を廻らすに、明王爲二一人一不ㇾ枉二其法一、日月爲二一物一不ㇾ暗二其明一」。

古今和歌集に據れるもの

あさかのぬまのはなかつみ　みちのくのあさかの沼のはなかつみ・さまざま名あると聞きたるに、伊勢の濱荻・難波の蘆、よしといふも同じ草か（佐佐木）

〔安積沼の花かつみ〕あさかの沼は岩代國安積郡にありて、日和田の里・東勝寺の跡の田圃がその舊跡だといふ。「はなかつみ」には諸說あれども、「はな」は花で、「かつみ」は菰をいふのであらう。能因の歌枕に、「かつみは菰をいふ、菰花を花かつみといふか」と見え、釋契沖などこの說に從うてゐる。屋代弘賢のかつみ考に、今陸奥の人にきけば、安積沼にまきしくかつみあり、今は鞠詘してかつき又はかつごとよぶ也、他國のまこもに違ふことなし」と見

えてゐる。巣林子も蓋の類と思うてゐたことはこの文によつて知れる。古今集戀歌四の部に「みちのくのあさかの沼のはなかつみ、かつみる人に戀ひやわたらむ」。

あさみどりといふ柳樽　虎が名に負ふ竹葉の、あさみどりといふ柳樽、封を切らんと悦びける（加增智我）

近松のここの文は、俚諺に「竹に虎」「虎は千里の藪に棲む」などいふによつて、虎が名に負ふ竹を竹葉（その條を見よ）にいひかけ、清酒の銘を淺綠というて、古今集春歌上の部に「あさみどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」とある歌によつて、柳樽にいひかけたのである。

飛鳥川の人心　これぞ娘の靜と名乘らんとせしが、いやいやいや飛鳥川の人心と、そしらぬ顔にて（藤駒太子）

飛鳥川淵は瀬となる人心（聖德太子）

飛鳥川は淵瀨常なきよりの人心の變り易きに喩ふ。古今和歌集・雜歌下部、よみ人しらずの歌に「世の中は何か常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀨になる」。飛鳥川は明日香川とも書き、大和國高市郡にあつて、山川なれば淵瀨變り易いと云ふ。

あだなりと名にこそ立てれ櫻花（嫗山姥）

櫻花は散り易く、頼み難いものぢやと、評判になつてゐるがさての意。古今集・春上部、讀人しらずの歌に「あだなりと名にこそ立てれ櫻花、年に稀なる人を待ちけり」。

逢はずは何を玉の緒　逢はずは何を玉の緒も、絶えなば絶えれと伏し沈み（卯月紅葉）

古今集戀歌一の部、よみ人知らずの歌に「片糸をこたたかなたに縒りかけて、逢はずは何を玉の緒にせむ」。玉の緒は玉を貫く緒である。命をも魂の緒というて玉の緒に通はせたのである。「玉の緒」をも見よ。

天地を動かし、鬼神を感ぜしめやかに、妹背も猛き武夫も、心柔か饅頭や（二枚繪）

古今和歌集の序に「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をもやはらげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり」とあるをもちつたのである。

＊あやなし　闇はあやなし梅澤村（會稽山）

〔文無〕布帛の文の無いから出た詞で、理の立たぬ、わけの分らぬ、どやうの意。古今集・春歌上部に「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくるる」。

在原のかの中將の訴歌の如く、唐紅の水くくる（唐船噺）

在原の中將は在原業平のことで、在五中將と稱した人。「からくれなゐ」とは、韓國から傳はつたくれなゐで、韓は染色のよきに附けていひ、後には唐衣などと廣く美稱に用ゐる「くれなゐ」は呉の藍の義で、染めかた藍の如きより名づけた語で、紅色をいふ。「水くくる」とは、水をくくり染即ち絞染にするをいふ。古今集・秋の下部、業平朝臣の歌に、「ちはやぶる神代もきかず龍田川、からくれなゐに水くくるとは」と見え、この歌小倉百人一首にも見えてゐる。

荒れたる宿　蹤躅げげばな壺菫、荒れたる宿と詠みけるは、今の我身にくらべつつ、眺めやるさへ哀れなり（十二段）

古今集・秋上部、兼覽王の歌に、「女郎花うしろめたくも見ゆるかな、荒れたる宿にひとり立てれば」と見えてゐる。この歌の意は、この荒れてゐる宿に女郎花ただ一人生ひ立つて居れば、あの女郎花はさても凄慘たる宿によくもゐることぢやと、不安心に思はれることよと、荒れたる宿の女主人を女郎花に喩へて詠んだのである。また堀河院百首、藤原公實の歌に「昔見し妹が垣根は荒れにけり茅花まじりの薑のみして」といふもあゝ。

いそのかみ　年經てここにいそのかみ、古道具屋のふる柊な、かたちの父の親の手を（卯月紅葉）

〔石上〕大和國山邊郡にある地名で、その石上には布留といふ所がある。古今集・夏の部に、「いそのかみふるき都の時鳥、聲がかりこそ昔なりけれ」。ここの文はこの歌句を取つて、「ふるき都」を「ふる道具」にかへて云うたまでである。

いとせめて戀しき時は烏羽玉の、夜の衣を身に重ね（吉岡染）

古今集・卷十二、戀歌二の部に「いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣を反してぞ着る」。「戀しき時はうば玉の云云」をも見よ。

絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳と、つらねたる西の大寺是かとよ（大縞冠）

古今集・春上の部、「西大寺のほとりの柳をよめる」の題で、僧正遍昭の歌に「淺みどり絲よりかけて白露を、玉にもぬける春の柳か」。「西の大寺」をも見よ。

色こそいはね山吹の十兩ばかり一包（嵯門松）

口にこそいはねども山吹の花の色（黄金）十兩ばかりといふ意で、古今集卷十九、誹諧歌の部、素性法師の歌に「山吹のはな色衣ぬしやたれ、問へど答へず口なしにして」とあるに據る。

色こそ見えね河與が悅喜（女殺）

古今集・春上部の歌、「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくるる」の下の句の、香を河與（河内屋與兵衛の略稱）にかけていひ續けたのである。

浮世の淵瀨常ならぬ（嫗山姥）

古今集・雜下部、讀人知らずの歌に「世の中は何か常なるあすか川、昨日の淵ぞ今日は瀨になる」によつたのである。

鷺の縫ふてふ　鷺の縫ふてふ旅の笠（百合若）　**鷺の縫ふてふ花の名にし負ふ葛西**（蛙合戰）

「てふ」は「といふ」のつまつた語。鷺が笠を縫ふといふ古歌によつたもので、古今集・卷二十、かへしものの歌に「青柳をかた絲によりて鷺の、縫ふてふ笠は梅の花がさ」。「花の名にし負ふ葛西」は、笠・葛西をかけたのである。

右近の橘の昔の契りは忘れじも

の（酒呑童子）

右近の名に紫宸殿前の右近の橘をいひかけ、花橘の香を襲げば、今に忘られぬ昔馴染の人の袖の香がするといふに據つたのである。古今集・夏歌の部に、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」。

歌に六義あり

「りくぎ」を見よ。

歌人の評判つけ置きし、よき衣着たる商人も（二枚繪）

古今和歌集、紀貫之の序文に、文屋康秀の歌を評して、「文屋の康秀は詞はたくみにてそのさま身におはず、いはば商人よき衣着たらむが如し」とあるによつたのである。遊女はよき衣着るにより、天満屋お島に當てていうたのである。

歌よむ蛙（小栗判官）

古今和歌集の序に、「花に啼く鶯、水に棲むかはづの聲をきけば、生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける」。

打渡すをちかた人に物申す、あれその其所に白く咲けるは何の花ぞもや（用文章）

古今集・巻十九、旋頭歌の部、題知らず、よみ人知らずの歌に、「うち渡す遠方人に物まをすわれ、そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも」。巣林子作・今川了俊に、「打渡す遠方人の假名は誰を」、とあるもこの歌に據つたのである。

映りにけりないたづら者め（國性爺後日）

古今集・春の部、小野小町の歌に「花の色は移りにけりないたづらに我が身よにふるながめせしまに」。

沖つ白波立つ　世界の男の命の山賊、沖つ白波立つ名もわざくれ（關八州）

古今集雜歌下、よみ人しらずの歌に、「風吹けばおきつ白波たつ田山、よはにや君がひとり越ゆらむ」。白波を白波綠林の意とした古説もあれば、「山賊」より「沖つ白波立つ」の文句につづけたのである。

沖つ白波立田越、夜半にや君が一しぐれ（女楠）

沖の白波立つを立田越にかけて序としたのである。立田越は、大和國平群郡大和川の上流に沿うた龜瀬越のことである。こゝの文は、古今集・雜歌下、題しらず・よみ人しらず、「風吹けばおきつ白波立田山、よはにや君がひとり越ゆらむ」とある歌によつたのである。

おきまどはせると詠みけるも（伊豆日記）

「おきまどはせる」とは、初霜が置きてまぎらはしう見するを云ふ。古今集・秋歌下部に、凡河内躬恒、「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」。この歌は小倉百首中にも出てゐる。

昔羽山、關のこなたと詠みたれど（融大臣）

古今集・巻十一、雜一の部、在原元方の歌に、「昔羽山昔にきつつ逢坂の、關のこなたに年を經るかな」。昔羽山は清水寺のある山。「見え渡る山は云云」を見よ。

かきのもと島屋をちよつと島隱れ

身のうきしほで梅川も、此處を思ひの定宿と、餘所の勤もかきのもと、島屋をちよつと島隱れ、申し清さん、今日は島屋で彼の田舍のうてすにせびらかされて頭が痛い（冥途飛脚）

「かきのもと」の語には、勤も缺きの「缺き」と「垣の本」と柿本人麿の「柿本」の三つをかけたのである。「島屋をちよつと島隱れ」と、島の同韻語を用ひ、梅川が田舍客に招かれて島屋に揚げられてゐながら、忠兵衛を繼ひ蔡うて中途暇を取つて越後屋に來たことを、柿本人麿の歌、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に、島隱れ行く舟をしぞ思ふ」の中の句を用ひて文飾したのである。（序云、この歌は古今集羇旅歌の中に出で、その左註に「この歌は或人の曰く柿本の人麿がなり」とあるによつて、人麿の歌といはれるのであるが、その實左註は後人記入の竄入したので、人麿の詠ではないことは申すまでもない）。

歌人の家のことぐさは、千千の心を種として、よろづの言の葉もしげり（女夫池）

古今集假名序に、「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」。

風の掛けたる柵　青葉交りの花筏、流れ柳・川風の、風のかけたる柵も、かかる憂き身はよも留めじ（加增曾我）

風のこしらへた柵、柵は流れ水を堰く爲に杭を連ね立てて、横に竹や柴を搦め附けたもの。古今集・秋部、春道列樹の歌に、「山川に風の掛けたるしがらみは、流れもあへぬもみぢなりけり」。

片絲の絲よりかけて白露を、玉にもぬける春の柳（大織冠）

古今和歌集・春上部、「西大寺のほとりの柳をよめる」の題で、僧正遍昭の歌に、「淺みどり絲よりかけてしら露を、玉にもぬける春の柳か」。

神鳴も思ふ中をばよもさけぬ（今宮）

「さけぬ」は遠放けないの意であつて、雷も打拆かないに寄せたのである。古今集巻十四・雜歌四の部の歌に、「天の原ふみとどろかし鳴神も、思ふなかをばさくるものかは」。

かやはかくるる　借屋の路次へも廻されず、押入には夜着蒲團、どこへかくさんかやはかくろる、帷子入れて夏過ざし（女腹切）

ここの文、「どこへかくさんかや」の「かや」に蚊帳をかけ、「蚊帳はかくろる」と云うて、下の「夏過ざし」の句に應じ、しかも古今集・春上部、「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくろる」の歌句によつたものである。

からくれなゐの水くくる

「ありはらのかの中將云云」を見よ。

雁よ新町の花を見捨てて蜆川（女殺）

古今集・巻一、春の部、伊勢の歌に「春霞立つを見捨てて行く雁は、花なき里に住みやならへる」。

昨日といひ今日と暮してあすか川流れの里（女腹切）
古今集・巻六、冬部、春道列樹の歌、「昨日といひ今日と暮してあすか川、流れて早き月日なりけり」の句を取りて、流れの里につづけたのである。「流れの里」は遊里をいふ。

昨日まで早苗とりしが、いつの間に稲葉そよぎて秋の野や（小槌判官）
「さな〈」は早苗と書けど、「さ」は「さ月」「さ夜」「さをとめ」などの「さ」と同じく接頭語である。昨日あたり苗をとつて植付をしたばかりのやうに思はれるに、月日の經つは早いものぢやわい、何時の間にか稲葉延び、それに秋風がそよそよと動いて、秋の野となつたことやとの意。古今集・秋上部、よみ人知らずの歌に、「昨日こそさなへとりしか、いつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く」。

君が代千代に八千代に巌に（兼好）
我大君の御代は千年も萬年も、そして小石が巌石となるまでもの意。古今集・賀歌の部、題しらず、よみ人しらずの歌に、「わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔の衣のむすまで」。和漢朗詠集・雜の部に、「君が代は千代に八千代に、さざれ石のいはほとなりて苔のむすまで」。

君と我が寝る床夏の花（千疋犬）
古今集巻三、夏歌の部、躬恒の歌に、「鹿をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我がぬる床夏の花」。

心あてに折らばや折らん（本領曾我）
推量りに折つたならば或は折られるであらうの意。古今集・秋の部、凡河内躬恒の歌に、「こころあてに折らばや折らん、初霜のおきまどはせる白菊の花」。

心を種として和歌に和らぐ日の本（酒呑童子）
古今集序文に、「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける、……男女の中をも和らげ、たけき武夫の心をも慰むるは歌なり」と見えてゐる。

戀しき時は烏羽玉の夜の衣を反せ（吉野忠信）
烏羽玉は夜にかかれる枕詞である、「うばたまの」を見よ。寝巻を裏反して着て寝れば、戀しい人を夢に見るといふ迷信があつた。古今集・巻十二、戀歌二の部に、「いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣を反してぞ着る」。「いとせめて戀しき時は云云」をも見よ。

聲帆にあげて（以呂波）
聲を高くあげるといふ。古今集・秋上部、藤原菅根の歌に、「秋風に聲を帆にあげてくる舟は天の門渡る雁にぞありける」。

酒屋のしるしに我宿も杉立てる門（天智天皇）
「三輪のしるしの神杉云云」を見よ。

さざれ石巌とならん八千歳（日本武尊）
古今集巻七、賀歌の部、題しらず、讀人しらずの歌に、「我が君は千世に八千世にさざれ石の巌となりて苔のむすまで」。

さそふみづ　身を浮魚の寄邊を頼む、誘ふ水はそもじ様、いざ拜殿へも一緒にと（川中島）
〔誘ふ水〕水の行方へ浮草の誘はれるやうに誘ひくれる人。古今集・雜下部、小野小町の歌に、「わびぬれば身をうき草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」。

しかぞ住む世をうぢ川を堰き入れて（赤染衛門榮花物語）
古今集・雜歌上の部、喜撰法師の歌に、「わが庵は都のたつみ然ぞ住む、世をうぢ山と人はいふなり」。

＊しがらみ　しがらみは流れもあへぬ紅葉ばと（賀古教信）
〔柵〕水流を堰く爲に杭を連ね立てて横に竹柴などを搦附けたのを云ふ。古今集・秋歌下部に、「山川に風のかけたる柵は、流れもあへぬ紅葉なりけり」。

締めてまつはれ藤の棚（曾根崎）
締めてまつはれ藤の花を、藤の棚の地名にいひかけたのである。古今集春歌下の部、僧正遍照の歌に、「よそに見て歸らむ人に藤の花はひまつはれよと枝は折るとも」。「藤の棚」は地名部を見よ。

霜のたて露を貫く　茶宇の單衣の霜のたて、露をつらぬく袖の數珠くる乘物をそれと見て（源義經）
「たて」は經糸のこと。古今集・秋歌下の部、隅雄の歌に、「霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦のおればかつ散る」。

白き蓮の露の玉、濁に染まぬ心もて（隅田川）
「白き蓮」は白蓮社の故事をいひかけたのである。「ゑんほふし」を見よ。古今集・夏部、僧正遍昭の歌に、「はちすばのにごりにしまぬ心もて、何かは露を玉とあざむく」。

すぎたつる　幕の外面は數數の商ふなかに夫婦づれ、男茶を賣る女は酒屋、杉立つるとのしるしかや（十二段）
〔杉立〕昔は酒屋に酒ばやし（杉葉を集め圓めて酒屋の看板にしたもの）があつた。ここの文は酒ばやしの緣を以て、「酒屋杉立つる」といひ、それに古今集・雜歌下の中に、「わが庵は三輪の山本戀しくは、とぶらひきませ杉立てる門」とある歌をきかせて、戀の意を含めたのである。

住吉の岸の姫松幾千歳絶えぬ（大織冠）
古今集・雜歌上の部に、「われ見ても久しくなりぬ住のえの、岸の姫松幾世へぬらむ」。

住吉の松を秋風吹くからに、聲うちそふる沖つ白波（百日曾我）
住吉の松を秋風がどうどうと吹くにつけて、沖の白波がどうどうと聲を打添へ和することよとの意。古今集・賀の部、秋の題にて躬恒の歌に、「すみの江の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つ白波」。

末の松山波越ゆる幾世を見ん（融大臣）
末の松山は奥州にあつて、海岸に遠い地なれば、波の越えることはあるまいが、その末の松山を波が越える時のあるまで、我が心の變ることなく幾久しう契らうとの意。古今集・陸奥歌に、「君を置きてあだし心を我が持たば、末の松山波も越えなむ」。

僧正遍照が女郎花といふ草花の罰当りて落馬して
「我落ちにきと」を見よ。

薪を負へる山人も　薪を負へる山人も、立寄る花の景清も、常に清水寺の觀世音を信じ奉り（田世景清）

薪を負へる山樵も花の蔭には宿るとかや（主馬判官盛久）

ここの文は、古今集序文中に、「薪を負へる山人の花の蔭にやすめるが如し」と見え、謠曲・飛雲にも「薪を負へる山人の花の木蔭に休むけしき」、とあるに據つたのである。「立寄る花の景清」は、立寄る花の蔭を景清にいひかけたのである。

猛き武士の心をも和らぐる歌（女護島）

古今集・紀貫之の序文に、「男女の中をも和らげ、猛きもののふの心をなぐさむるは歌の道なり」。

龍田川の秋の夕べ

「ならのはの」の條を見よ。「龍田川」は地名部について見よ。

龍田山神代もきかずと詠じけん（三世相）

龍田山は大和國平群郡にある山の名。古今集・秋部、在原業平朝臣の歌に、「ちはやぶる神代もきかず龍田川、からくれなゐに水くくるとは」。

玉と欺く白露の濟み濁る世（蛙合戰）

古今集巻三、夏歌の部、僧正遍昭が蓮の露を見てよめる歌に、「はちす葉の濁りにしまぬ心もて、何かは露を玉と欺く」。

誰脱ぎかけし秋の野　庭には千草にうつり合ひ、たれぬぎかけし秋の野の、花摺衣も露照りて（五人兄弟）

古今集巻四、秋歌上の部、素性法師の歌に、「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に、たが脱ぎかけし藤袴ぞも」。

誰をかも知る人にせんこの廓の松と（反魂香）

誰をかもあの知人として交をせうぞ、この廓に賣られて太夫となつたものの意。「松」は太夫の異稱である。「まつ」を見よ。古今集・雜部、藤原興風の歌に、「誰をかも知る人にせん、高砂の松も昔の友ならなくに」。

千千の心を種として萬の言の葉もしげり（女夫池）（宰町千鳥歌）

古今和歌集・假名の序に、「やまと歌は人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける」。

千歳の坂　千歳の坂と詠ぜしも、耳にはふれて手にふれぬ憂き節しげき竹の杖（女楠）げにげにこれもつくからに千歳の坂も越えなんと、彼の遍照が詠みし杖か、それは千歳のさか行く杖、ここは所も逢坂山（歸丸）

古今集・賀歌の部、僧正遍照の歌に、「千早ぶる神のきりけむ、つくからに千歳の坂も越えぬべらなり」、とあるに據つたのである。この歌の意は、この杖はありふれた杖とは見えませぬ、大かた神樣が惻切りなされた杖でござらう、さればこの杖を衝くからには、越えにくい千歳の坂でさへも越えられさうだわいの意である。「宣旨默止難く云云」をも見よ。

＊ちはやふる　天の岩戸にあられども、ここにもかみの貸家札、殘らぬ千早ふる道具（博多）ちはやふる神代も聞かぬ紙袋、から藏にして米つめるとは（三國志）

「千早」は逸早の轉、「ふる」は「ぶ」の延音で形容の語なれば、荒ぶる意である。強き勢の緣によつて神または人などの枕詞とする。博多小女郎波枕のここの文は、「紙の貸家札」のかみを神にいひかけて、神の枕詞なる「ちはやぶる」に古をいひかけて、古道具につけたのである。本朝三國志のこの狂歌は古今集秋歌下の部、業平朝臣の歌「ちはやふる神代もきかず立田川、から紅に水くくるとは」をもぢつたのであるから、久吉が評して「其歌は立田川」といひ、剽竊したのだから「おのれはすつぱの皮なり」といひ、「立田の川」と「すつぱの皮」（その條を見よ）と語呂を合した地口である。曾呂利の米袋の話は甲子夜話などにも見えてゐる。

千代にやちよをさざれ石の

「酷久しきためしには千代にやちよを云云」を見よ。

つくからに千歳の坂も越えなん

「千歳の坂」「宣旨默止難く云云」を見よ。

つづりさせてふ蟲の音（女護島）

つづりさせといって鳴く蟲の音。「つづりさせ」は綴り刺せで、蟋（きりぎりす）のこと）の鳴聲を形容した語である。古今集・卷十九、誹諧歌に「秋風に綻びぬらし藤袴、つづりさせてふきりぎりす鳴く」。

つひにゆく　乘る人も乘せたる駒も、つひに行く道とは知れど、最期日の今日か明日かの我身には、我のみ消ゆる心地して（大經師）名殘も緣もつひに行く道ならばいざ伴はん（反魂香）今行く道もつひに行く賽の河原いつとても（會稽山）

「卒行」死の道は誰も何時ぞは必ず行く道であるによつて、死ぬることを卒に行くと云うたのである。古今集・哀傷の部、業平朝臣の歌に、「つひに行く道とはかねて聞きしかど、昨日今日とは思はざりしを」。

終によるせはありてふもの　常に御手馴れし定紋の桐の臺、終に寄る瀬はありてふものと、手づから蒔繪にかかせ給ひ（三世相）

古今集・戀四の部、業平朝臣の、「大ぬさと名にこそ立てれ流れても終に寄る瀬はありてふ物を」の歌句である。我は引く手數多の大幣であると世評にされたれど、その大幣も川に流れてまあ果には流れ寄る瀬はあるといふものを、我とても末にはいづれ寄るべがあらうよとの歌意である。

年の内に春は來けり一日に（夕霧）

古今集・春上部、在原元方の歌に、「年の内に春は來にけり一とせを、こぞとやいはむことしとやいはむ」。

とぶひの野守出でて見よ、今幾日して又此處に（大經師）

「飛火野」には地名部を見よ。古今集・春上部の歌に、「春日野のとぶひの野守いでて見よ、今幾日ありて若菜摘みてむ」。

流れもあへぬ紅葉ば

「しがらみ」を見よ。

鳴き捨てて何方行くらん、やよや待てなれよ冥途の鳥ならば（會稽山）

古今集・巻三、夏歌の部、紀友則の歌に「五月雨に物思ひをれば時鳥、夜ふかく鳴きていづち行くらん」。「やよや待てなれよ云云」をも見よ。

夏草の茂りていとど野となれば、鶉となられんと詠じけん（千疋犬）

古今集・雜歌の下、業平朝臣の歌「年を經て住みこし里をいでていなばいとど深草野とやなりなむ」。かへし、よみ人知らずの歌「野とならば鶉と鳴きて年はへむ狩にだにやは君はこざらむ」。

名にめでてをれるばかりぞ女郎花、我落ちにきと人に語るな（松風）

この歌は古今集・秋の部に、題しらず、僧正遍照の詠として出てゐる。女郎花と云ふからにその名なつかしく、心とまりて手折つたばかりの事なるぞ。されば女郎花よ、我が女犯の罪に落ちたと人に噂すなの意。但し巣林子は「をれる（折）ばかりぞ」を「おれる（下）ばかりぞ」に誤きて、馬より下りたまでである、落馬したといふ勿れの意にとつたのである。

なまめき立てる女郎花、男山からこいこいと（千疋犬）

古今集・巻十九、僧正遍照の歌に、「秋の野になまめき立てる女郎花、あなかしがまし花も一時」。古今集・秋上部の歌に「女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる、男山にし立てりと思へば」。謠曲・女郎花に、「この男山の女郎花は古歌にもよまれたる名草なり」。ここの文は蓋しこれ等のものに據つたのである。

涙のをすげて風やひくらん

「みやこまで響き通へる云云」を見よ。

ならのはの　楢の葉の帝の御目には、龍田川の秋の夕べ錦とも御覽あり、渡らば中や絶えなんと惜み給ひし御製もあり（絶狩）

ならのはの賢き天皇萬葉を撰ばれ（西王母）

「楢の葉の帝の御目には云云」とあるは、古今集の序文に、「秋の夕べ立田川に流るる紅葉をば、帝の御目には錦と見給ひ」、とあるに據れるものにて、これは同書・秋歌下部に、題しらず・よみ人しらずの歌、「たつ田川紅葉みだれて流るめり、渡らば錦中や絶えなむ」の左註に、「ここの歌はある人ならの御門の御歌なりとなむ申す」と見えてゐる。「ならの帝」は舊說に、文武帝といひ或は聖武帝といひ或は平城帝といふ、按ずるに平城帝と見るべきである、巣林子も亦しか信じたものである。「わたらば中や云云」の條を併せ見よ。

「ならの葉の賢き天皇萬葉を撰ばれ」といへるは、古今集・雜歌下部に「貞觀の御時萬葉集はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければ詠みて奉りける、文屋のありすゑ、神無月時雨ふりおける楢の葉の、名におふ宮のふることぞこれ」と見え、增鏡・おどろのしたの條にも、「大かたいにしへならの御門の御代に、始めて左大臣橘の朝臣勅をうけたまはりて萬葉集を撰びしよりこのかた云云」、とあるに據つたのである。即ち醍醐の君主平城天皇が萬葉集を撰集し給うたといふのである。（序云、萬葉集は實は平城天皇以前橘諸兄が編纂したものを大伴家持等が補修したのであつて、勅撰集ではない。さるを古來勅撰集と心得られ、巣林子も亦古來の說によつてしか信じたものである）。

鼠も所の男山をみなめしとぞなりにける（弘徽殿）

御菜飯に女郎花をいひかけたのである。古今集・秋歌上部に、「女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる男山にし立てりと思へば」。謠曲・女郎花に、「この男山の女郎花は古歌にもよまれたる名草なり」、などあるによつて「鼠も御菜飯とぞなりにける」といふにかくいひなしたのである。

はぎのつゆ　疵なき玉の盃の、酒もよい酒、假名文書き手の萩の露、ころび寢し夜の睦言は（歌念佛）

（「萩の露」假名文字筆蹟の目もあやなるに響ふ。蓋し古今集卷四、秋歌上の部に「をりてみば落ちぞしぬべき秋萩の、枝もたわわにおける白露」と見え、また小野道風筆蹟の假名書歌帖に安幾破起帖といふがあるによつて、かくいうたのである。そして安義破起帖の首に古今集の歌「秋萩の下葉色づく今よりや獨りある人の寢ねがてにする」が載つてゐるにより、「寢ねがてにする」を「ころび寢し夜の」と改作したのである。

初霜に折らばや折らん花の宴（鰐丸）

「折らばや折らん」は折らば折れようかの意。但しここの文は、古今集・秋部、凡河内躬恒の歌に、「心あてに折らばや折らむ初霜の、おきまどはせる白菊の花」とあるを用ゐたまでである。

はなたちばな　花橘の袖の香に昔男（歌念佛）

むかはり待たぬ花橘、昔の人と短夜の、雲隱れして人の世の（卯月調色）

（「花橘」四・五月の交、橘の花の咲く時につけていふ、また柑橘類の一種に勝れて花の美しく香の高きものをいふ。ここの文は古今集・夏歌の部に、「五月待つ花橘の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする」とありて、懷しう匂ふ花橘の香に、昔の人の袖の香を聯想するといふに據つたものである。

花に鳴く鶯・水にすむ蛙の聲、何れか歌を詠まざるや（百日曾我）

古今和歌集・假名序に、「花に鳴く鶯・水にすむ蛙の聲を聞けば、生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける」。

花の色移りにけりないたづらの・風も形も好き女の惱める形とすさみしも（本領曾我）

古今集・春歌の部、題知らず、小野小町の歌に、「花の色は移りにけりないたづらに、わが身世にふるながめせしまに」と見え、また同書・假名序に小野小町の歌を評して、「をのの小町は……あはれなるやうにてつよからず、いはば好き女の惱めるところあるに似たり」、とあるに據つたのである。

＊はふらす　代代民間に下れども心なだにもはふらさず（西王母）

放ち捨てる。振捨てる。物を投棄てるをハウル又はホルといふも「はふる」である。古今集・巻十九、雜體の部、興風の歌に、「身は捨てつつ心をだにもはふらさじ、遂にはいかゞなると知るべく」。

濱の眞砂と敷島や彼の貫之の言の葉（十二段）

古今集、紀貫之の序に、「山した水の絶えず、濱の眞砂かず多くつもりぬれば、今は飛鳥川の淵になるうらみも聞えず、さざれ石のいはほとなる喜びのみぞあるべき」とあるを指す。

＊ひとく　擔鞭に來鳴く鶯の、ひとくひとくの囀をひと夜ひと夜と聞きなして（浦島）

鶯の切聲に疾く啼く聲を形容して、人の來るを厭うて人來人來と鳴くといひなした語。古今集・誹諧歌の部、題しらず、よみ人しらずの歌に、「梅の花見にこそ來つれ鶯の、ひとくひとくと厭ひしもをる」。

一夜に變る淵瀬こそ大和にあると聞きけるが（冷泉節）

大和國高市郡なる飛鳥川を云うたのである。古今集・雜歌下の部、題しらず、よみ人知らずの歌に、「世の中は何か常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀬になる」。

風も形も好き女のなやめる形云云

「花の色移りにけりな云云」を見よ。

ふつつかならぬ山人の薪に花とはこれならん（堀山姥）

古今集序に大友黒主の歌を評して、「心はをかしくてそのさまいやし、いはば薪を負へる山人の花の蔭に休めるが如し」、とあるを應用して山人の姿の賤しきを薪に喩へ、不束ならぬ優しい女の心を花に喩へていうたのである。

麓に立てる女郎花、りんきしんきとなまめきてくねる心の男山（淀鯉）

古今和歌集・序に、「男山の昔を思出で女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞ慰めける」。同書・誹諧歌に、「秋の野になまめき立てる女郎花、あなかしがまし花も一時」。「くねる」はその條を見よ。

ふるは涙か春雨の、萎るる花世（鯰蛾天皇）

古今集・卷二、春歌下の部、大伴黒主の歌に、「春雨の降るは涙か櫻花、散るを惜まぬ人しなければ」。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に（天神記）（百日曾我）

古今集・羇旅部、よみ人しらずの歌に、「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に、島隱れ行く舟をしぞ思ふ」とありて、添書に「この歌は或る人のいはく柿本人麿がなり」と見えてゐる。歌の意は、ほんのりと夜明けて來る明石の浦の朝霧に渭出して、向の島蔭に隱れて見えぬやうになつて行く舟をあはれと思ふといふのである。百日曾我にこの歌意を殊更に曲解して、「人間生死の有樣を浦渭ぐ舟になぞらへ、弘誓の海を渡り涅槃の岸に至るべき、甚行末を思ひやる深き心を詠まれしなり」というてゐる。

ほのぼのと明石の客の乘る舟に、お島も隱れ島隱れ（二枚繪）

明石の客の貞と天滿屋の遊女お島の乘れる舟の次第に遠ざかり行くことを、古今集・羇旅の部の歌、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に、島隱れゆく舟をしぞ思ふ」を應用したのである。

まくらより跡よりやり手の責めくれば（夕霧）

古今集・卷一九、誹諧歌に、「枕より跡より繼のせめくればせん方なみぞ床なかにをる」。

みかさと申せ三笠山（三世相）

古今集・大歌所御歌の部の、「みさぶひ御笠とまをせ宮城野の木の下露は雨にまされり」の歌句を取りて、同諧語の三笠山につづけたのである。

陸奥の信夫擦摺誰れ故に、亂れんと思ふ我ならなくに（融大臣）

古今集・繼部、河原左大臣源融の歌に、「みちのくのしのぶ擦摺たれ故に、亂れそめにし我ならなくに」。「しのぶ擦摺」はしのぶずりともいひ、布帛に忍草の忍葉を種種の色に摺つたもので、其文亂髪のやうに捩れれば捩摺ともいふ、陸奥の信夫郡にかけていうたのである。「我ならなくに」は我にあらぬにの意。一首の意は、君をのみ繼ひわびて、それ故にかやうに心亂れそめた我なるものをの意。

都まで響き通へる唐琴は、涙の緒すげて風や彈くらん（浦島）

都までも名の響き聞えた唐琴の浦は、どうしてさやうに遠くまでも響けるものかと見れば、さてこそ浪の緒附けて風の彈くのだらうの意。「唐琴」は備前國にある沼である。古今集・雜上部、しんせい法師の歌に、「都までひびき通へる唐琴は、波の緒すげて風ぞひきける」。

みよしのの吉野の川の、よしや世の中に落つるや妹背山（以呂波）

古今集・繼五の部の歌に、「流れては妹背の山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中」。「妹背山」は地名部について見よ。

見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦小路（大原問答）

古今集・春部、素性法師の歌に、「見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける」。

三輪のしるしの神杉をかたどり、酒の標に我宿も杉立てる門をしるべにて（天智天皇）

三輪は大和國城上郡にありて、山麓に大三輪神社がある、三輪の神山は杉檜欝蒼としたれば、三輪に標の杉立てる門などと古歌にも詠まれてゐる。昔時酒屋の軒に杉葉を集め丸めて標としたる。「さかばやし」を見よ。古今集・雜歌下の部の歌に、「わが庵は三輪の山、本こひしくば、とぶらひきませ杉立てる門」。謠曲・三輪に、「杉立てる門をしるしにて尋ね給へといひ捨てて」。瓦礫雜考・卷二に、「うまざけの三輪とつづけたれば、三輪に印の杉立てる門などとよめる古歌多し、件の杉の葉は之によりて旨き酒ありとの標にはしたるなるべし」。

三輪の山いかに待ちみん年經とも、尋ぬる人もあらじと思へば（百日曾我）

古今集・繼五の部に、「なかひらの朝臣あひしりて侍りけるを、かれがたになりにければ、父が大和の守に侍りける許へまかるとて、よみてつかはしける。伊勢」、とありてこの歌が載つてゐる。一首の意は、私は貴方に見捨てられて都住居も面白くありませぬによつて、三輪山の方へ下ります。古歌に、「わが庵は三輪の山もとこひしくば、とぶらひきませ杉立てる門」と詠んであれども、私は既に見

捨てられた身なれば、年經とも私を繼しう思うて訪ひ來る人もありますまいと思へば、三輪山でどうして待たうか、さてさて待ちやうもなく物悲しい身の上だとの意。

梅に年取る鶯の翼は雪に疊まれて（烏帽子折）

古今集・春上の部、題しらず、よみ人知らずの歌に、「うめが枝に來ゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ」。

＊むらさき　びらり帽子の紫や、色で逢ひしはは昔（冥途飛脚）　**かの紫の由緣求めて杜若、三河の國に御陣を召され**（冷泉節）　これも誰ゆゑ紫の一もとの緣ぞや（世繼曾我）

〔紫〕古今集・雜上部の歌に、「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」とあるによつて、紫のひともと、又は紫のゆかりといふて、紫を中緣の意にいふ。

目に見えぬ鬼神も三十一文字に柔らぐる（虎が曆）

「三十一文字」は歌をいふ。古今和歌集・假名序に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をも柔らげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり」とあるに據つたのである。

藻鹽たれつつ佗ぶといふ蜑の仕業（融大臣）

古今集・卷十八、雜歌下、在原行平朝臣の歌に、「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に、藻鹽垂れつつわぶと答へよ」。

藻に棲む蟲のわれから　妻も同じ海士の業、藻に棲む蟲の我からと、媒人なしの手枕に括枕と締合はし（國性爺）　**藻に棲む蟲のわれと我心ひかるる後髪**（浦島）

古今集・戀五の部、藤原直子の歌に、「あまの刈る藻に棲む蟲のわれからと、音をこそ泣かめ世をば恨みじ」とあるに據つたのである。

一心五戒魂（巢林子作）に、「我からと藻にすむ蟲の音を絕えて」とあるも、この歌に據つたのである。「われから」はその條を見よ。

紅葉踏分け鳴く鹿の聲　さらさらさつと踏立て蹴立て踏散し、紅葉踏分け鳴く鹿の聲も、互の身の上と連れて假屋に歸りけり（娥）

古今集・秋部、猿丸太夫の歌に、「おく山に紅葉踏分け鳴く鹿の、聲聞く時ぞ秋はかなしき」とあるを應用したのである。

柳櫻もこきまぜて　繫り合ひたる袖摺り松、柳櫻もこきまぜて（小栗判官）

古今集・春歌上の部、素性法師、「見渡せば柳さくらをこきまぜて、都ぞ春の錦なりける」の歌句に據つたもので、「こきまぜて」は入れ交ぜてといふ程の意で、「こき」は輕く添へたまでの詞である。なほ近松のこの文に「袖摺り松」とあるは、馬場に植えて袖が觸れて摺れる程の小松をいひ、近松作・鑓權三重帷子にも「乘戻し引廻し乘る、袖摺りの松も女松の十八公」と見えてゐる。「柳・櫻」も馬場に植えてある樹木である。大坪本流馬道祕書・禮術の條に、「馬場に木を植ゑる事、櫻・柳・楓・松也、外の木は植ざる者也」とある。

＊柳櫻をこきまぜて　柳櫻をこきまぜて、錦小路の中納言冬通卿（枹符）　**柳櫻をこきまぜて錦につつむ**（國性爺）　**柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦革**（文武五人男）

古今集・春部・素性法師の歌に、「見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける」とあるを應用したのである。

大和歌は天地を動かし佛神も感應あり（西王母）

古今集序文に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をも和らげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり」とあるに據つたのである。

山人の薪に花

「ふつつかならぬ山人の薪に花云云」を見よ。

闇のうつつ……（曾根崎）（堀川波鼓）

古今集・戀三の部、題知らず・讀人知らずの歌に、「ぬば玉の闇のうつつは定かなる、夢にいくらもまさらざりけり」。

闇はあやなし梅　闇はあやなし梅澤村（會稽山）　闇はあやなし梅の花、梅の梢にゆかしき人の（吉岡染）

「あやなし」は文無の義、文目もわかぬ意。古今集・春上部の歌に、「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくる」。

やよや待てなれよ冥途の鳥ならば（會稽山）

古今集卷三、夏歌の部、みくにのまちの歌に「やよやまて山時鳥言づてむ、われ世の中に住みわびぬとよ」。

よききぬきたるあきびと

「うたびとの評判云云」を見よ。

好き女のなやめる形

「花の色移りにけりないたづらの云云」を見よ。

よしのの川のよしや云々

「みよしののよしの云云」を見よ。

よそに見て歸らん人に藤の花、はひまつはれよまとへと訴みし言の葉（弘徽殿）

古今集・春下部に、「志賀より歸りける女どもの花山に入りて、藤の花のもとに立寄りて歸りけるによみておくりける」、と詞書ありて僧正遍昭、「よそに見て歸らむ人に藤の花、はひまつはれよ枝は折るとも」。一首の意は、ここに立寄りながらよそよそしう見て歸らうとする人に、藤の花よ這ひ纏附いて必ず引留めるやうにせよ、それが爲には枝が折れても構はないの意。

世の中に絕えて　世の中に絕えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし（百日曾我）　世の中に絕えて心中なかりせば、二世の頼みもなからまし（氷朔日）

古今集・春上部の歌に、「なぎさの院にて櫻を見てよめる」と詞書ありて、在原業平、「よの中に絕えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし」と見えてゐる。心中又氷朔日のこの文はここにいへる歌の改作である。一首の意は、若しも世の中に櫻が無いものであるな

らば、櫻狩などと心浮き立つて彼此と忙しう思ふこともなく、春の長閑な心持でゐるものを、櫻がある爲に心浮き浮きして忙しう思ふことよと、深く櫻を愛する情を反言したものである。

齡久しきためしには、千代に八千代をさざれ石の巖となりて苔のむすまで（十二段）

古今集・賀部、題知らず・よみ人知らずの歌に、「わが君は千代にやちよにさざれ石の、巖となりて苔のむすまで」。

＊よぶことり　木木の梢も繁藏と、誰が呼子鳥草履取（蘇鐵歌）　**呼子鳥覺束なくも行燈の影**（天網島）

〔呼子鳥〕古今集・春上部の歌に、「をちこちのたづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥かな」、とありて郭公であるとの說に據つたものである。（よぶこ鳥に就いては安齋）。ここの文は、呼ぶを呼子鳥にいひかけたのである。

＊よみ人知らず　金の取手はよみ人しらず大内方より御詮索（女殺）

詠者の知れない者を「よみ人知らず」と書いて、古今集などの歌書に多く見えてゐる。近松がここの文は洒落てその詞を借り、金の取手は知らずにきかせ、歌人は多く大官人であつたから、大内方と緣語をつづけたのである。

夜の衣を反す　まろれがちなる我はただ、夜の衣を反しつつ夢のただちに逢ふことを玉緒になして（伊豆日記）

應袞を反して着て寢れば戀人を夢に見るといふ。古今集・戀二の部の歌に、「いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣をかへしてぞ著る」。

和歌は天地を動かし鬼神も感ず（川中島）

古今集の序文に、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこをんなの中をも和らげ、たけきものの〻ふの心をも慰むるは歌なり」。

若紫の武藏野や草の莚に（隅田川）

古今集・雜上部の歌に、「紫のひとともゆゑに武藏野の、草はみながらあはれとぞ思ふ」とあるを應用したのである。「若紫」は淡紫である。

渡らば中や絕えなんと惜しみ給ひし御製もあり（艶狩）

古今集・秋下部、題知らず、よみ人知らずの歌に、「たつた川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦なかや絕えなん」とありて左註に、「この歌はある人ならの御門の御歌なりとなむ申す」とあるに據つたのである。一首の意は、立田川の錦を織つてゐるやうに見事なのは、紅葉散亂れて流れる樣子であるよ、今渡るならばあつたら錦の中が斷たれることであらうの意。「ならの御門」は平城天皇のことである。「ならのはの」の條を併せ見よ。

わびぬれば身をうき草のねをたえて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ（百日曾我）

この歌は古今集雜下部に出で小野小町の歌で、詞書に「文屋の康秀が三河のぞうになりて、あがた見にはえいでたたじやといひやれりけるかへりごとによめる」とある。一首の意は、姿は蜉蝣にくらして身を憂く思つてゐますが故に、恰も浮草の根の切れて水の流れる方に流され行く如くに、姿を誘ふ人があるならば何處へでも從つて參りませうと思ひますとの意。

＊われおちにきと　かの僧正遍照が女郎花といふ草花の翻當りて落馬して、我落ちにきと人に語るなと詠ぜし歌を聞くにつけ（蛙合戰）

古今集・秋上部、題しらず、僧正遍照の歌に、「名にめでてたれるばかりぞ女郎花、われおちにきと人に語るな」とあるに據つたのである。「名にめでてたれるばかりぞ云云」を見よ。

をちこちのたづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥かな（百日曾我）

この歌は古今集・春上部の歌に、題知らず、讀人知らずとして出てゐる。一首の意は、あちやこちやの取付き所も知らぬ山の中で、ぼんやりした聲で誰を呼ぶのやら、來よと呼掛ける呼子鳥だわいの意。「よぶことり」はその條を見よ。

男と女郎花、それはくねる（今宮）

男と女が戀の爲にくよくよ物思ひにくれるを、古今集序文に「男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねる」、とあるに據つてかくいうたのである。「くねる」をも見よ。

男山さかゆく　げに九重もはるばると跡に名殘の男山、さかゆく事もありこしに今のうきめを三津の浦（女殺）

古今集・雜上部の歌に、「今こそあれわれも昔は男山、さかゆく時もありこしものを」とあるに據つたのである。男山は山城國八世郡石清水八幡宮のある山である。

男山をみなめし

「鼠め所の男山をみなめし云云」を見よ。

男女の中を和らぐる和歌（川中島）

古今集序文に、「をとこをんなの中をも和らげ、たけきものの〻ふの心をも慰むるは歌なり」とあるに據つたのである。國性爺合戰に、「日本で歌といふげなが、男女を和らぐとや」、とあるも古今集・序文に據つたのである。

古今著聞集に據れるもの

稻荷の山の薄紅葉、あをかりしよりとよみ給ふ和泉式部のながめあ（娘）

よみ給ふとあるから、稻荷の山の薄紅葉云云の歌を和泉式部が詠んだやうであるが、さうではない。古今著聞集・卷五、和歌第六に、「和泉式部忍びて稻荷へ參りけるに、田中明神の

程にて時雨のしけるに、いかがすべきと思ひけるに、田刈りける童のあをと云ふ物をかりて來てまゐりにけり、下向の程に晴れにければ、このあををかへし取らせてけり、きて次日式部はしの方を見いだしてゐたりけるに、大やかなる童の文持ちて侍みければ、あれは何者ぞといへば、此綱文まゐらせ候はんといひてさし置きたるを、ひろげて見れば、時雨するいなりの山のもみぢばは、あをかりしより思ひそめてき、と書きたりけり、式部あはれと思ひて此童を呼びて、奥へといひて呼入れけるとなん」。

金岡の大納言が書きたる馬、夜毎に出でて萩の戸の萩を食ひ荒し（閑八州）

金岡、姓は巨勢、人物又は馬を畫くに妙を得、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に歷仕して、大納言に昇進した。金岡が畫いた跳馬の障子の繪夜毎に出でて、萩の戸の萩を食ひ荒した由古今著聞集卷十一に見えてゐる。「清涼殿に立てられし跳馬云云」を見よ。

苗代水にせき下せ、天くだります神ならば神（會稽山）

古今著聞集、卷五に、「能因入道、伊豫守實綱に伴ひて彼國に下りけるに、夏のはじめ日久しく照りて民のなげき浅からざるに、神は和歌をめでさせ給ふものなり、試みによみて三島に奉るべき由を國司しきりにすすめければ、あまの川苗代水にせきくだせ、天くだります神ならば神、と詠めるをみてぐらに書きて神司して申上げたりければ、炎旱の天俄に霽りわたりて大なる雨降りて、枯れたる稻葉おしなべて綠にかへりにけり」と見えてゐる。能因法師は攝津國古曾部に居つたによつて、曾部入道ともいふ。

跳馬の障子　跳馬の障子の繪夜毎に出でて萩の戸の萩を食ひしも、金岡が筆のすさみの跡たえず（反魂香）

清涼殿にある馬形の障子をいふ。古今著聞集、卷十一に、「昔かの馬形の障子を金岡が畫きたりける、夜夜はたれて萩の戸の萩を食ひければ、勅諚ありて其馬を繫きたる體を畫きなされたりける時、はなれず成りにけりと申傳へ侍るは誠なりける事にや」。

古事記に據れるもの

まだき時雨の秋なれば、紅葉も靑き稻荷山（融大臣）

時雨もまだ降らぬ秋なれば、紅葉しないで靑葉である伏見の稻荷山の意。古今著聞集・和泉式部の歌に、「時雨する稻荷の山のもみぢ葉は、靑かりしより思ひそめてき」。「見え渡る山山は云云」を見よ。

鵜の羽を茅にふき合はせずの尊の嘉例をひきおゐらせ（弘徽殿）

彥火火出見尊が海神國に至り、豐玉姬と婚す、後姬日向に來り、彥瀲尊を生まれた、時にいまだ產家の葺くに及ばずして生れた故事。古事記・神代下に、「於是海神之女豐玉毘賣命、自參出白之、妾已妊身、今臨產時、此念、天神之御子不可生海原、故參出到也、爾卽於其海邊波限、以鵜羽爲葺草、造產殿、於是其產殿未葺合、不忍御腹之急、故、入坐產殿、爾將方產之時、白其日子言、凡佗人國者、臨產時、以本國之形、產生、故妾今以本身爲產殿、願勿見妾、於是思奇其言、竊伺之、其方產者、化八尋和邇而匍匐委蛇、卽見驚畏而遁退、爾豐玉姬毘賣命知其伺見之事、以爲心耻、乃生置其御子而白、妾恒通海道、欲往來、然伺見吾形、是甚作之、卽塞海坂而返入、是以名其所產之御子、謂天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命」。

かいこそ和田のそこづつを　〃かいこそ和田のそこづつを傳へ傳へし秋津御代、君たるかな齊明天皇惠みも廣きさざなみや（天智天皇）

海こそ海の底筒男であらう。底筒男は底土の義であつて、伊弉諾尊が日向の橘小門の阿波岐原に出でまして禊祓ひ給うた時、海底から生れ給うた命の名。古事記・神代上卷に「於是水底、滌時、所成神名、底津綿津見神、次底筒之男命、云云」。巢林子がここに海神底筒男命をいへるは、琵琶のうみ迹や志賀の都をいふ緣である。

神のみことの御產家、鵜の羽を茅にふき合はせず

「鵜の羽を茅にふき合はせず云云」を見よ。

醫上大盡瓢屋のとぼそに引籠り、常闇の夜見世となりけるを、八百萬の末社達おろせが宿にてこれを歎き、神樂を以て文作神を醮へせば、又常闇の草も晴れて、燈火光り輝けり（吉野忠信）

古事記・上卷・神代の條、神代紀・上卷、古語拾遺などに見えてゐる。天石窟戸變を故作したものである。「大盡」「末社」「おろせ」「もんさく」はその條に就いて見よ。

「神樂」とは、神事に奏する舞樂なるは勿論であるが、巢林子のこの文にいへるは、神樂の眞似をする語謔をいふのである。諧謔大雜卷一、覇の顔は見ぬ初夢の條に、「或時鹽西の彌七、神樂の庄左・巽鶴の吉兵衛、亂酒の與左衞門まじりに、揚屋町を立破して出口の茶屋に腰掛けながら、朝がへりの客に賢付るに、獨も遲はず」と見え、日本永代藏、卷六、見立て養子が利發の條に、「茶の湯は利休がながれをくみ、文作には神樂顚齋もはだしでにげ」と見えて、庄左・顚齋などは文作・神樂の名人であつた。

そびらに千箭の靫と五百箭の靫を負ひ、たたむきに稜威の高鞆をはき、弓彌を振立て堅庭を踏んで淡雪の如く蹴はらかし、稜威の雄詰（百合若）

「そびら」は脊のこと。「靫」は矢を盛る器である。「たたむき」は臂である。「稜威」は嚴めしい威勢の義、「高鞆」は高く鳴り響く鞆の義、鞆とは古昔弓を射るとき左臂に着けた圓き革製の物で、革緒にて臂に結んだものである、もと弦の臂に觸れるを防ぐ爲の物で、また弦の觸れて音をなし威容を示すものである。「弓靫」は弓を云うたのである。「堅庭」は堅い庭土の義である。古事記・神代上に、「曾毘良

後拾遺集に據れるもの

あこがれいづる玉の緒　心は跡に殘るぞと、あこがれ出づる玉の緒の、互に眼には見えねども（二枚繪）

思あまりて身から離れ出た魂を「玉の緒」は魂の緒で、いのちをいふ、後拾遺集・神祇部、和泉式部の歌に、「物思へば澤の螢もわが身より、あくがれ出づる魂かとぞ見る」。

跡なくなりし　奥州武隈の松と云ふ名木は、いにしへ能因法師さへ跡なくなりしと詠みたれば（反魂香）

「たけくまの松」を見よ。

ありまやまゐなの小笹の粽の節句（賀古教信）

「有馬山ゐなのささ原風吹けばいでそよ人を忘れやはする」といふ古歌の語句によつたのである。そして小笹の粽の節句と續けたのである。粽の節句は、陰曆五月五日（端午）の節。有馬山は攝津國有馬郡有馬山をいひ、猪名の笹原は攝津國河邊郡猪名野の笹原のことで、有馬山と猪名野笹原とは遠く隔つてゐる地である。それを有馬山ゐなの笹原と詠んだのは、その土地が隔つてゐることを知らなかつたのであらう。この歌は大貳三位の詠で、後拾遺集雜部に出で、（小倉）百人一首の中にも見えてゐる。

えやはいぶきの艾屋（柏狩）

後拾遺集・戀部、藤原實方の歌、「かくとだにえやはいぶきのさしも草、さしもしらじな燃ゆる思ひを」の文句を取つて艾屋につづけたのである。さてこの歌につきて、「えやはいふ」を山名の「伊吹」にいひかけたので、「え」は副詞で下の反語「やは」に應じ、ようの義。近江の伊吹山は艾の產地で伊吹艾の名があるが、この歌の伊吹はそれではなうて下野の伊吹山である。

かくとだにえやはいぶきのさしも草、さしも知らじな燃ゆる思ひを（娥）

「えやはいぶき」は、心に思ふことを口にいふにもよう言はれねばの意で、「いふ」を山の名の伊吹にいひかけたのである。伊吹山は近江國にあるのではなうて、下野國のをさしたのである。「さしも草」は、艾の事で、「さし」はさしつける意より轉つた語である。さて一首の意は、かやうかやうとでも言へばよけれども、それもよう言ひ得ねば、ただ胸の中に艾の燃えるやうに思焦れる身を、我思へる人はそれとも思ひ知るまいなあといふこと。この歌は後拾遺集・戀部に、「女に始めていひ遣しける。藤原實方朝臣」として出てゐる。（小倉）百人一首の中にも出てゐる。

草に蟄るる白露を、あこがれ出づる魂かとて（生玉）

後拾遺集第二十、神祇部、和泉式部の歌に、「物思へば澤の螢も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」。

心ある人に見せばや津の國の難波のあしの（佐佐木）

後拾遺集・春上部、能因法師の歌に、「心あらん人に見せばや津の國の、難波わたりの春の景色を」。

戀に朽ち果てん名こそ惜しけれ（蟬丸）

戀の爲に世に噂が立つて朽ちてしまうであらう我名が惜しいことであるとの意。後拾遺集・戀部・相模の歌に、「恨みわびほさぬ袖だにあるものを、戀に朽ちなん名こそ惜しけれ」。

澤の螢とあこがれて、…魂よばひ、…明けて見せたる（井筒）

後拾遺集卷二十、神祇部、和泉式部の歌に、「物思へば澤の螢も我が身より、あくがれ出づる魂かとぞみる」。

末の松山浦の浪、上越す人もなかりしに（歌念佛）

後拾遺集・戀の部に、「契りきかたみに袖をしぼりつつ、末の松山浪越さじとは」、とある歌によつて文をなしたもので、契約を違へなんだにの意にいうたのである。

武隈の松　奥州武隈の松といふ名木は、いにしへ能因法師さへ跡なくなりしと詠みたれば（反魂香）

後拾遺集・第十八・雜四に、能因法師の歌に、「みちのくに再び下りて後のたび、武隈の松も待らざりければよみ侍りける」、と詞書ありて、「武隈の松はこの度跡もなし、千年を經てや我は來つらむ」。

はかなの戀に朽果てん名こそ惜しけれ（蟬丸）

あだ戀で身も朽果てることであらうと思へば、この名それが惜しう思はれる、わいの意。後拾遺集・戀部、相模の歌に、「恨みわびほさぬ袖だにあるものを、戀に朽ちなむ名こそ惜しけれ」。

萩の錦　古歌の詞を考ふれば萩の錦と詠じたり（懸物掛）

後拾遺集・秋上部、御製歌にも「かひもなき心地こそすれさを鹿の、たつ聲もせぬ萩の錦は」と見えてゐる。

はばかりのせきたぐ 人目の中にはばかりのせきたぐるこそ哀れなれ（夕霧）

人目を憚るを、憚関（はばかりのせき）にいひかけ、関を咳（せき）にいひかけて、せきたぐるといひつづけたのである。憚関は陸前國柴田郡にあつた関所だといふ。後拾遺集・戀二の部の歌に、「しるらめや身こそ人目をはばかりの、せきに涙はとまらざりけり」。奥之荒海に、「あぶくま川を渡る、野越え山越え行けば、やがて憚の関をも越ゆ」。「咳たぐ」は咳あげるをいふ。

一本松を二木とも三木ともつらねし言の葉（反魂香）

後拾遺集・雜四の部、橘季通の歌に、「武隈の松はふた木を都人、いかがと問はばみきとこたへむ」。ここの文は「三木」に「見き」をいひかけたのである。

ほさぬ袖だにあるものを戀に朽葉や（融大臣）

後拾遺集・戀部、相模の歌に「恨みわびほさぬ袖だにあるものを、戀に朽ちなむ名こそ惜しけれ」。この歌は小倉百人一首にも出てゐる。

物思ふ心の闇に迷ふ身は、明石の浦もかひ無かりけり（大職冠）

後拾遺集巻九、羈旅の部に、「筑紫に下り侍りけるに、明石といふ所にてよみ侍りける。帥前内大臣。物思ふ心の闇しくらければ、明石の浦もかひ無かりけり」と見えてゐる。この歌は伊周公が長徳二年四月に左遷された時の詠である。

後撰集に據れるもの

親心闇にはあらで子に迷ひ（賀古教信）

後撰集・雜部、藤原兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。

かかれとてこそ撫でずやありけん

「黒髪もかかれとてこそ云云」を見よ。

かかれとてこそ我が父母も撫でつらめ

「我が黒髪の 髻（もとゞり）際云云」を見よ。

＊かつらぎのかみ あの葛城の神ならで、畫の通路つつましく、身を忍ぶ道戀の道（冥途飛脚） 人忍ぶ我には辛き葛城の、神隱れして遣り過し（天網島） 葛城の久米の岩橋（いはばし）夜ならで（國性爺） かつらぎや久米路にかけし岩橋の、渡しもやらで中中に（百日曾我）

（葛城神）葛城山一言主の神、己が貌の醜きを恥ぢて、晝は人目を忍び、夜のみ出て岩橋の工事に從つたといふ故事によつたのである。

後撰集・巻十三、戀五の部に、「葛城や久米路にわたす岩橋の、なかなかにてもかへりぬるかな」。「いはばし」（岩橋）をも見よ。

君とならびの池にこそ、身を投げつと詠み置きし古歌（女夫池）

後撰和歌集・巻十二、戀歌四に、「まだあはず侍りける女の許に死ぬべしといへりければ、返事にはや死ねかしといへりければ、又遣しける。同じくは君とならびの池にこそ、身を投げつとも人に聞かせめ」。

黒髪もかかれとてこそ撫でずやありけんと、彼の遍昭が連ねしも（用文章）

我が親が我が頭の黒髪を撫でて下さつたことも、いづれは髪を剃りてつるつる坊主になるものだとは思うて撫でられなかつたことであらうとの意。後撰集・巻十八・雜歌三の部に、「はじめて頭おろし侍りける時物に書付け侍りける」と、詞書ありて遍昭の歌に、「たらちめはかかれとてしめ烏羽玉の、我黒髪を撫でつる」とあるに據つたのである。

心は闇にあらねども子を思ふ闇（大磯虎）

後撰集・巻十五、藤原兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。

戀ぞつもりてみなの川、さそふ水とて（百日曾我）

戀しいと思ふその思ひ積つて、みなの川の如く深くなり、誘うてくれる人とての意。「みなの川」は筑波山中にある川の名。後撰集・戀部陽成院の御歌に、「筑波嶺の峯より落つるみなの川、戀ぞつもりて淵となりぬる」。古今集・雜歌下部・小野小町の歌に「わびぬれば身をうき草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」。

＊子を思ふ心の闇（五人兄弟）

後撰集・巻十五・藤原兼輔の歌に、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。

三世の御佛に花奉る

「三世の御佛に花奉る」を見よ。

筑波川つもる戀しさ（蟬丸）

後撰集・戀部、陽成院の御歌に、「筑波嶺の峰より落つるみなの川、戀ぞ積りて淵となりぬる」とあるに據つたのである。

筑波嶺の峰より落つる 筑波嶺の峯より落つる源の（雪女） 筑波嶺の峯より落つるみなの川、いまだ春にはあられども（鎌田） 筑波嶺の峯より落つる瀧の白玉（鳴門松）（烏帽子折） 筑波嶺の峯より落つる瀧つ流れ（融大臣）

後撰集・戀部、陽成院の御歌に、「筑波嶺の峯より落つるみなの川、戀ぞつもりて淵となりぬる」、とあるみなの川、戀ぞつもりて淵となりぬは、前述の歌となほ古今集・賀部にある、「龜のをの山の岩根をとめておつる、瀧の白玉千世の數かも」、の歌句とを取合せたのである。

天智天皇のわが衣手の御製（融大臣）

後撰集・秋部、天智天皇の「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、わがころも手は露にぬれつ

つ」の歌をさす。この歌小倉百人一首にも出てゐる。

波の花咲く櫻川、彼の貫之の言の葉にかけし昔の面影も（雛田）

「櫻川」は地名部を見よ。後撰集・巻下部に、櫻川といふ所ありときこの題にて貫之の歌に、「常よりも春べになれば櫻川、波の花こそまなく寄すらめ」。謠曲・櫻川に、「常陸の國に名も櫻川ありと聞きて、常よりも春べになれば櫻川、波の花こそまなく寄すらめとよみたれば、花の雪も貫之も、ふるき名のみ殘る世の」。

人の親の心は闇にあらねども子故に迷ふ（大原問答）

後撰集・巻十五、藤原兼輔の歌に、「人の親の心に闇にあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな」。

程もなく誰も後れぬ世なれども、とまれば行くを先立つと見る（西王母）

後撰集・巻二十、哀傷部・伊勢の歌に、「程もなく誰も後れぬ世なれども、とまるは行くを悲しと見る」とあるに據つたのである。

三世の御佛に花奉る（兼好）

後撰和歌集春歌下の部、俊正遍昭の歌に「折りつれば手ぶさにけがる、立てながら三世の佛に花奉る」とある歌句を引用したのである。遍昭の歌の意は、折りつれば手に汚れるから、折らないで其儘に過去現在未來に出現する諸佛に花を供するといふのである。

紅葉分けつつ行けば錦着て家に歸ると人や見るらん（艶符）

後撰集・巻七、秋歌下部の歌に、「紅葉ばを分けつつ行けば錦着て、家に歸ると人や見るらむ」とあるに據つたのである。

我が黑髮の髻際用意の錐刀ぶつつりと切る、……、かかれとてこそ

催馬樂に據れるもの

我が父母も撫でつらめ（唐船歌）

後撰集巻十七、雜歌三の部「はじめて頭おろし侍りける時物にかきつけ侍りける」と詞書ありて、俊正遍昭の歌に「垂乳めはかかれとてしもうば玉の我が黑髮を撫でずやありけん」。

田中の井戸　田中の井戸に力なき蝦の聲も呂の歌（源義經）

催馬樂の呂の田中井戸の歌、「田中の井戸に光れる田水蔡摘め攝め吾子女吾子女たちらり田中の子女子女」。

力なき蝦　田中の井戸に力なき蝦の聲も呂の歌（源義經）

催馬樂の呂の無力蝦の歌、「力無い蝦骨無い蜥蜴」。

みつばよつばのとのづくり（大原問答）

（浦島）

三棟四棟と殿屋の棟の數多造られたのをいふ。催馬樂に「この殿はむべも富みけりさきくさの、みつばよつばに殿造りせり」。「さきくさ」をも見よ。

みもひも寒し　夫を思ふ想夫戀、みもひも寒しと謠ひけん（孕常盤）

井水もひややかでよいの意。「みもひ」は水をいふ。もと水を盛る器を毛比といふより、轉じて淦泉の飲むべきものをいふとぞ。催馬樂、飛鳥井の歌に「飛鳥井に宿りはすべし、陰もよし、みもひも寒し、みま草もよし」。

＊むべも富みけり　宜も富みけりさきくさの三つば四つばの大伽藍（田世景清）　むべも富みけりさきくさの三つば四つばの殿造り（振袖始）

催馬樂に、「この殿は宜も富みけりさきくさの、三つば四つばに殿造りせり」とあるに據つたのである。「さきくさ」「伽藍」はその各條を見よ。

わがかど　刺櫛わが門の律の歌（源義經）

（我門）催馬樂の律の中に、「我門瑚」と「我門乎」との二歌がある。

藏玉集に據れるもの

刈るならば千束もあらん繼草の云云

「繼草」を見よ。

＊こひぐさ　刈るならば千束もあらん戀草の、種とは袖の涙なり（十二段）

（繼草）松の異名。二條良基撰・藏玉集に、「繼草（松）。刈るならば千束やあらん繼草の、種とは袖のなみだなりけり」。ここの文は草の名寄であつて、繼を繼草にいひかけたのである。

ときみぐさ　なかなかに花とは見えぬ時見草（十二段）

（時見草）藏玉集に、「時見草。松。ながめても花とは見えず時見草、たよりの雲を惜しと思へば」、とありて松の異名である。

ねざめぐさ　何咲かで種とはならん寢覺草、心の外に枝も葉もなしと連れし歌はいかに（十二段）

（寢覺草）松の異稱。藏玉集に、「寢覺草。松。何をさて種となすらむ寢覺草、心の外に葉も枝もなし」。

ものみぐさ　實に實にそれは物見草、袖にかざさんなりなりは、涙

たゞにも花と見る（十二段）

〔物見草〕松の異稱。藏玉集に、「物見草。松。ものみぐさ袖にかざさん折折に、涙をだにも花とおもへば」。

ゆふみぐさ 夕見草月や今宵の花となるらんとは詠みたれど（十二段）

〔夕見草〕松の異稱。藏玉集に、「夕見草。松。まつにふれことによせつつ夕見草、月や今宵の花とみゆらん」。

をりみぐさ 折見草枝もやあらん事にふれ、なぐさみ多き夕ぐれと書きしも浮世の人心（十二段）

〔折見草〕松の異稱。藏玉集に、「折見草。松。折見草枝もやあらん事によせ、なぐさみおほき今日の夕暮」。

詞花集に據れるもの

あしかれと思はぬ山の嶺にだに、なげきおふなりなげきおふなり、人の歎きはおふなりとよ（弘徽殿）

詞花集・卷九、雜上部に、男をうらみてよめるといふ題で、和泉式部の歌に、「あしかれと思はぬ山の峰にだに、おふなるものを人の歎きは」。惡かれと思はぬ所でも、人の歎きはおふものを、まして善かれと思ひ給はねば、歎くことぢやわいと恨みる意で、なげきのきに木をかけたのである。この歌謠曲・鐵輪にも引用されてゐる。

古の奈良の都の八重櫻、いま九重に移されし（大原問答）

詞花集・春の部に、伊勢大輔の歌、「いにしへの奈良の都の八重櫻、けふ九重ににほひぬるかな」。小倉百首中にも出てゐる。古の帝都奈良にて咲出た八重櫻が、二度時を得て今日宮中に移されて、えもいはぬ美しい花の色をあらはしたことだわい。

岩に碎けてわれても末にあふ隈川（融大臣）

逢ふを阿武隈川にいひかけ、詞花集・戀部、崇德院の歌、「瀨をはやみ岩にせかるる瀧川の、われても末にあはむとぞ思ふ」の語句に據つたのである。

つのぐむ 淀野の澤の眞菰草つのぐみ渡る折しもは（鎌田）

角萌む義、角の如く芽を出すを云ふ。詞花集・卷一、春部、俊惠法師の歌に、「眞菰草つのぐみ渡る澤邊には、つながぬ駒もはなれざりけり」。

＊みかきもり衞士の焚く火 御垣守衞士の焚く火の夜は燃え、晝は消えつつ物をこそ思へ（鎌）

今ぞみかきもり衞士の焚く火の夜は燃え、晝も思ひに結ぼふる烟（西王母）

詞花集・卷七、戀部、題知らず、大中臣能宣朝臣の歌に、「御垣守衞士の焚く火の夜は燃え、晝は消えつつ物をこそ思へ」とあるに據つたのである。この歌は（小倉）百人一首にも見えてゐる。一首の意は、禁裏を警固する衞士どもが焚く篝火のやうに、胸の思焦れる火は盛んに燃え、晝は思に消入りながら物思のみすることだわいといふのである。最明寺殿寺殿百人上覆（巢林子作）に、「みかきもり衞士の焚く火はお爲なり」とあるは、謠曲・鉢の木に據つたものである。

拾遺集に據れるもの

明くるわびしき葛城や（吉野忠信）

葛城山の神が夜の明けるをなやまれた故事。拾遺和歌集卷十九、雜戀部、春宮女藏人左近の歌に、「岩橋の夜の契も絶えぬべし、明くる佗しきかつらぎの神」。吉野金峯山と葛城山との間に通路を作らうとして、岩橋を架する工事に、葛城の神は形の醜いのを恥ぢて、夜のみ工事に從うたと云ふ。

うぐひすの聲なかりせば、雪消えぬ山里いかで春を知らまし（百日曾我）

深山幽谷の里では春になつても未だ寒く、雪消えぬにより、若しも鶯が鳴かずにあつたならば、どうして春が來たことが知れうや知られぬことぢやに、鶯が鳴くに心づきて、春となつたことが知れるとの意。この歌は拾遺集・卷一、春の部に、「天曆十年三月二十九日内裏歌合に、中納言朝忠」の題で出てゐる。朝忠は異本には中務としてある。

馬はあれどもこの身には、徒歩路越え行く木幡山（雪女）

拾遺集卷十九、雜戀の部、柿本人麿の題しらずの歌に、「山科の木幡の里に馬はあれど、かちよりぞ來る君を思へば」。

暗きより暗き道にぞ出でらるる（大原問答）

拾遺集・卷二十、哀傷部の歌に、「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥に照せ山の端の月」。

暮れてゆく秋の形見におく物は、我もとゆひの霜にぞありけ

昔のきやうの八重櫻、九重かをる小紫（淀嶋）

詞花集・春部、伊勢大輔の歌に、「古の奈良の都の八重櫻、今日九重ににほひぬるかな」。

むねに焚く火の夜は燃え、晝は消えつつ物思ひ（十二段）

詞花集・卷七、大中臣能宣の歌に、「御垣守衞士のたく火の夜はもえ、晝は消えつつ物をこそ思へ」とあるに據つたのである。この歌は（小倉）百人一首の中にも見えてゐる。

る（百日曾我）
秋の暮れて行く形見として殘し置く物は、老の歎をひ我が頭に霜を置いたやうに白髪となることだわいとの意。この歌は拾遺集・卷三・秋の部に「くれの秋重之が消息して侍りけるかへりごとに。平兼盛」として出てゐる。

ここの木の下彼所の木蔭、濡れても寢んと詠ぜしは（鯽丸）
拾遺集・春の部、題しらず・よみ人しらずの歌に、「櫻狩雨は降りきぬ、同じくは濡るとも花のかげに隱れむ」とあるをときくだいたのであらう。

木幡の里か馬はあれど、明日の軍にはかちと見えしは誰やらん（源義經）
拾遺集卷十九、雜繼の部、人麿の題しらずの歌に、「山科の木幡の里に馬はあれど、かちよりぞくる君を思へば」。

さくら散る木の下風は寒からで、空にしられぬ雪ぞ降りける（百日曾我）
春風櫻に吹いて落花繽紛たる狀を雪と見立て一詠んだ歌である。拾遺集・卷一・春部に「亭子院の歌合に。紀貫之」としてこの歌が載つてゐる。

五月五日の一夜さを女の家といふ（女殺）
五月五日（端午）は菖蒲の祝儀、男子の節句はじめで、此日は世間一般に祝日の挨拶（禮と云）に廻り遊興に日を暮し、女が留守居する場合が多いからいうた諺。
拾遺和歌集・卷二・夏部・大中臣能宣の端午の歌に、「昨日までよそに思ひし菖蒲草、今日わが宿の妻とみるかな」。內膳文草撰・ねころび草にも、「菖蒲ふく一夜は女の宿なるものを」と、獨言する云々」。

すきまの風も寒かりし身は習はしと身を捨てて（烏帽子折）
拾遺集・卷十四、雜四の部の歌に、「手枕のすき間の風も寒かりき身は習はしの物にぞありける」。

空に知られぬ白雪　今日まで黑髪の一夜の中にかくぞとは、空に知られぬ白雲と紛ふばかりになり給ふ（加增曾我）
黑髪が一夜の中に白髪となつたことを、拾遺集・卷一・春の部、貫之の「櫻散る木の下風は空からで、空に知られぬ雪ぞ降りける」の歌句を應用したのである。

千年まで限れる松も今日よりは、君にひかれて萬代や經ん（百日曾我）
松は千年と云はれて、松の壽命は千年と限あれども、式部卿の宮の御壽命は萬歲なるべければ、今日からは松もそれに引かれて共に萬代を經ることであらう。この歌は拾遺集・卷一、春の部に「入道式部卿のみこの子日し侍る時。大中臣能宣」の歌として出てゐる。

寺寺の鐘の聲、けふも暮れぬと聞ふれば（百合若）
拾遺集卷二十、哀傷の部、よみ人しらずの歌に、「山寺の入相の鐘の聲ごとに、けふも暮れぬと聞くぞ悲しき」。

友まどはせる小夜千鳥　友まどはせる小夜千鳥、驚く潟の人足や（最明寺殿）
友をうしなひ惑うてゐる夜の千鳥の驚く干潟の人の足音といふに、次の歌の句を引用したのである。拾遺集卷四、冬の部、紀友則の歌に、「夕されば、きほの川原の川霧に、友まどはせる千鳥鳴くなり」。

濡れても寢ん　ここの木の下彼處の木蔭、濡れても寢んと詠ぜしは、花に戯れし歌の體（鯽丸）
拾遺和歌集卷一、春の部、題しらず、よみ人しらずの歌に、「櫻がり雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花のかげに隱れむ」。

初子の日　まづ新町のはつねの日、松澤山に深翠、千代も根引きは絕えすまじ（奮門松）
初子に初腰をいひかけたのである。遊女となつて客と初腰の床に入る日より、それ等の歌多の遊女が後には松（卽ち太夫）の位にのぼり、その品備はるに至つて根引（卽ち身請け）の相談絕えず起るであらうの意。昔時正月初子の日に野邊に出て小松を引いて祝とした古例がある。巢林子のこの文は拾遺集・春部、忠岑の歌に「子の日する野邊にこまつのなかりせば、千代の例に何をひかまし」、とあるに據つて文をなしたのである。「深翠」は謠曲・高砂にも、「松が枝の葉色は同じ深みどり」と見えてゐる。

春の野にあさる雉子のつまごひに、おのがありかを人に知られつつ（百日曾我）
春の野の草叢の中に沒して餌を尋求める雉子の、妻戀ひかねて、鳴くによつて己が居る所を人に知られて身を危うすることよの意。この歌は拾遺集・春の部に、題しらず、中納言家持として出てゐる。

松の響か琴　夢の斬は大淀の松の響か琴にも膝枕（女夫池）
松は太夫を云ふ（「まつ」を見よ）。太夫大淀の斬を松の響といひなして、「松の響か琴」といひつづけたのである。松籟琴音に似るといふことは、拾遺集・八、齋宮女御の歌に、「琴の音に峯の松風かよふらし、いづれの緒よりしらべそめけむ」と見えてゐる。

峯の松風琴の音に通ひ（孕常盤）
松籟琴音に似てゐるといふに據つたのである。拾遺集・卷八、雜上部の歌に、「琴の音に峯の松風通ふらし、何れの緒より調べそめけむ」。平家物語・卷六、小督の條に、「峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か」。

身は習はしの汐風や（百合若）
拾遺集卷十四、雜四の部、よみ人しらずの歌に、「手枕の透間の風も寒かりき、身は習はしの物にぞありける」。

＊みるめ　みるめかる尼が崎（卯月紅葉）
「海松布」綠色藻の一種、多數の管狀をしてゐる。ここの文は「みるめかる海人」に「尼が崎」をいひかけたのである。拾遺集・戀二の部に、「みるめかるあまとはなしに君戀ふる、わが衣手の乾く時なき」。

山鳥の尾のしだり尾　山鳥の尾のしだり尾の長長し夜を（扇八景）　山鳥の尾のしだり尾の長袖なりと（袍狩）　山鳥の尾のしだり尾の長居（烏帽子折）

拾遺集・繼部、柿本人麿の歌に、「あしびきの山鳥の尾の下垂尾の、長長し夜を獨りかも寢む」（萬葉集卷十一には作者未詳としてある）とあるに據ったので、「山鳥の尾のしだり尾の」は「長」にかかる序詞である。

淨瑠璃に據れるもの

巢林子の淨瑠璃文中に註記してある、江戸、文彌、一中、冷泉、道具屋などは何れも淨瑠璃節の一派で、これ等は語釋部に就いて見よ。

いつか都へ歸る山云云

「春は梢にいろいろの云云」を見よ。

いよし御見と書いたるは、絆の種か花薄、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文、方樣まゐる花よりと、思ひ參らせ候べくの、譯の盃色見えて、湧きて泉の思はくは、只逢ひまして逢ひまして、またの御見をまづかしく（女腹切）

半太夫節の文詞に據ったもので、「花より」「またの御見を」とある所が、半太夫節の文詞には「梅より」「またのえにしを」となってゐる。

沖に戀路の戀路の、またいろは船、・・・風も昔に吹きかへれ（二枚繪）

巢林子作・用明天皇職人鑑、山路玉世の姫追行の中にある文である。

川中島の四段目　このたび生玉大寶寺の開帳に築山を飾られたも、筑後の川中島の四段目から出た事ぢやげな（宵庚申）

巢林子作・信州川中島合戰の第四段目を竹本座で演じたのは享保六年八月で、天目山の作物に張りぬきの本山を用ゐた。晩晴翁撰、雲錦隨筆・卷之四に、「享保六年辛丑八月信州川中島合戰（竹本座にて興行）、此時山巖を張ぬきの本山に作り始む（是迄はすべて山の段は、すだれに山を畫きたるを用ゆるなり）」。

蒲原宿の約束　駿河國蒲原宿の約束が伊豆の伊東へ洩れ聞え（冷泉節）

蒲原宿は駿河國庵原郡にある、蒲原宿の北に七曲坂があり、その右を吹上濱と云ふ。淨瑠璃十二段草紙に、牛若が三河國矢矧宿某長者の娘淨瑠璃姫と契り、奥州に下らうとして七曲坂まで來て重病に罹った、淨瑠璃は神の告によって之を知り、來って看病に盡したので漸く平癒した。牛若乃ち明年は奥州の秀衡の大軍を率ゐて平家追討の爲上洛するによって、その時の再會を約束して別れたことが記してある。この文は即ちその事をさすのである。

京の吉岡紙子染、やぼてり柿か云云（重井筒）

「やぼてりがき」を見よ。

***悃城に誠なしと世の人申せども、・・・つらや如在と恨むらん**（冥途飛脚）

三世相（巢林子作）に出てゐる文で、遊女夕霧の妹女郎荻野の繼物語である。梅川が荻野のこの繼物語を竹本頼母の節で淨瑠璃に語るのである。

***けんびゐし**　某は親王の執權檢非違使勝舟と申す者（用明天皇）　すなはち山路の四段目、檢非違使が鹿島の事觸、島樣とつくとお聽きなされ（二枚繪）　異形は手を伸べ、けんびゐしが眉間を割れて退けとはたと打つ（二枚繪）

〔檢非違使〕「けびゐし」を見よ。心中二枚繪草紙のこのあたりの文は、用明天皇職人鑑・第四にある檢非違使勝舟が鹿島の事觸に變裝して入込んだところの文を應用したのである。

此世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、・・・手にかけて殺しておいて行かんせな、放ちはやらじと泣きければ（曾根崎）

巢林子作・唐崎八景斧風（狂言本）の中にある「からさき心中道行（萬山小歌）」の文は曾根崎心中道行文の添削であり、唐崎八景斧風は三勝七回忌狂言の狂言の句あれと、元祿十六年の上演であらう。まことに今年は此方樣も云云」を見よ。

小萬泣く泣く申すやう　小萬泣く泣く申すやう、緣は異なもの其時に、起請一枚書かれども、雲津のかはせ二世三世、指切してのいひかはせ（丹波與作）

晉曲色酒盛・八百屋お七の祭文に、「お七泣く泣く申すやう、いつぞや類火にあひし時・・・・逢うて語らん嬉しやと、思ひ定めて夕暮に、一わの蓙に火を包み、ほほり上げたるばかりにて云云」。「雲津のかはせ」は地名部を見よ。

扨も其後和田義盛九十三騎の人人は、山下宿河原長者の宿所に集って、・・・虎御前の思ひざし誰になりともさし給へ、朝比奈お酌候（兼好）

古淨瑠璃・和田義盛に據った文である。

しのだの森のうらみくず水（氷朔日）

信太森は和泉國泉北郡信太村にある名所である、巨椋樹下に葛の葉の社がある。ここの文は、古淨瑠璃・信田妻に、「こひしくば尋ね來て見よ、和泉なる信太の森のうらみくずの葉」とある歌句をとりて、葛水にいひかけてその序にしたのである。心中双氷朔日のここの文に、「三十郎の初日見て、芝居では大酒、戻りは蹴籠で蒸し立てる、暑い事暑い事、此暑さでは霍亂して、信太の森のうらみ葛水云云」とあつて、卽ち嵐三十郎の初日芝居は信田妻を演じたので、かくいうたのである。

新町橋を鵲の橋　又義太夫が口の端に、新町橋を鵲の橋と語りて行く人も（淀鯉）

巢林子作・曾根崎心中道行に、「梅田の橋を鵲の橋と契りて」、とあるを新町橋（新七夫妻が新町橋をうろつくによつて）にいひ替へた。

大將嚴に腰を掛け、……嗅達いかにと宣へば（百合若）

巢林子作・酒呑童子枕言葉、額光山入の條に「額光嚴に腰を掛け、……方方いかにと宣へば」とあるの改作。

＊はなひとしんわう　ますらがこの目玉ぐつと脫出で、花人親王の蜆川の御所の體とつくと見屆け候へば（二枚繪）

〔花人親王〕用明天皇職人鑑の中に見える人物である。假作人名部に就いて見よ。ここの文は花人親王をお島にきかせて蜆川の御所というたのである。卽ち用明天皇職人鑑に、「ますら横手を丁と打つて、花人親王の御所のさまをよつく見屆け候が」、とある所に當る。

春は梢にいろいろの、花咲く山にと山巡り、隣りは青し夏山の、柏散るてふ卯の花や、山時鳥山間の、景色の花に顯つくる、笠を傾け山巡り、……、山又山や峰白し、雲を誘うて山巡り、巡り巡りて山姫の、山衆交りの淨瑠璃も、夕限りのロぐせや（女腹切）

都一中の淨瑠璃、「姫ケ瀧四季山めぐり」の文に據つたもので、「山衆交りの淨瑠璃も」といへるも、遊女どもが交つて語つた、一中節・姫ケ瀧四季山めぐりの淨瑠璃を言つたのである。都一中のこの文は、謠曲・山姥にある文（「いとま申して歸る山の云云」を見よ）に據つたものである。

火打が禁物ぢや　消えてもこちは火は打たぬ、おれには火打が禁物ぢや、打つ音聞いてもぞつとする（二枚繪）

以前この天滿屋の抱妓お初が燧火の音に紛らして戸を明けて脫出し、德兵衛と曾根崎の森で情死した。今またお島の情死を氣遣うてかく言うたのである。曾根崎心中に、お初が死を決して天滿屋を逃出る文に、「門口までそつと出で鐵は外せしが、車戸の音いぶかしく明けかねし折柄、下女は火打をはたはたと、打つ音に紛らかし丁ど打てばそつと明け、かちかち打てばそろそろ明け、合せ合せて身を縮め袖と袖とを楓の戸や、虎の尾を蹈む心地して二人續いてつつと出で、顏を見合せアヤ嬉しと、死にに行く身を喜びしあはれさつらさあきましさ、跡に火打の石の火の、命の末こそ短けれ」と見えてゐる。

一引が千僧供養、二引が萬人の物笑ひ（會稽山）

當流小栗判官第四に、藤澤寺の上人が小栗判官の死骸を車に乘せて挽かしめる條に、「一引ひけば千僧供養、二引ひけば萬僧供養」、とあるに據つた洒落である。

法藏比丘の淨瑠璃　そもそも法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と藥師は御夫婦と云云（女殺）

法藏比丘と云ふ題名の淨瑠璃をさす。（此書佐渡七太夫豐孝の說經章指淨瑠璃本は六段物、八乃至九行の刊本で、享保三年初春の序がある、版元總兵衛）その大意は、せんじやう太子があるで、しゆく夫人と契つて二子を擧げたが、あしゆく夫人の腹後せんじやう太子は法藏比丘と改名して佛道修行に志し、雞行六十顆を立て、其中十二願はあしゆく夫人の爲に、他の四十八願は一切衆生を遍く救ふ爲の願である。かくて佛道成就の時あしゆく夫人は藥師如來となつて其姿を蓮華中に現じ、御手に八萬四千の藥味を入れた壺を持つて淨瑠璃世界に飛去り給ひ、せんじやう太子は阿彌陀佛とならせ給ひ、二子は觀音・勢至となり給うたことを作つてある。巢林子これを引いて「阿彌陀と藥師は御夫婦と云云」というたのである。（序云、愼城色三味線・鄙之卷、高洲ちもりに茂繇草の條に、「旅芝居の人形役者を招き、只かはつた思付きの趣向をのみ相談すれど道具少く役者足らず、まづ人數不足にて今日いうて今日になる操り法藏比丘がましといふ。それは好い太夫ども已前より度度してとり、今は阿彌陀でも鍵の光が梨の木の花、素い見物も其樣には貪ふまじ云云」と見えてゐる。されば法藏比丘は元祿頃盛興行されたもので、巢林子もこれに思付いてかくはいうたのである。

やぼてりがき　京の吉岡紙子染・やぼてり柿かうす柿か、正月前のきはぎはに旦那殿は外が內（重井筒）

「やぼてん」（その條を見よ）に「ほてりがき」（火照柿卽ち熟柿で、染物屋に緣ある熟柿色染をきかせて）をいひかけたのである。ここの文は、蟬のぬけがら（延寶六年成、山本九兵子の作で）大坂萬屋介六道行の文に、「京の吉田の神帳に入つた神かや入らぬのか、わけも情もわきまへぬやぼてん神かうつじんか、正五九月の月日もうぶすなどの緣日」、とあるを作かへて用ゐたのである。

をじかのその　笛に誘はれ妻戀ふる、牡鹿の苑の法の導これなれや（用明天皇）（二枚繪）

「牡鹿苑」「妻戀ふる牡鹿」に「鹿苑」をいひかけて、「法の導」といひつづけたのである。鹿苑は Mrgadava といひ、中印度波羅奈斯城の北東に當り、現今の Sarnath の地である。法華科註序に、「婆羅痆國都城東北有河、同名婆羅痆河、河東北十餘里至鹿野伽藍、其側大林名施鹿林、亦名鹿苑」と見えてゐる。釋尊成道して佛陀伽耶の道場を離れて、最初に說法された靈跡の地である。法藏比丘の淨瑠璃（その條を見よ）に、せんじやう太子が妃のあしゆく夫人と鹿苑の地で死別し、太子無常を感じて法藏比丘と名乘つて佛道修行に志したことが記してある。「牡鹿の苑の法の導云云」は蓋しこれに據つたのである。

新古今集に據れるもの

あかぬ別れの曉の鐘（會稽山）

まだ夜中と思うてゐたに、曉の鐘の音を聞いて、最早夜が明けたかと、飽足らずして別れるといふことで、待宵小侍從の故事。新古今和歌集・戀三の部、小侍從の歌に、「待つ宵にふけ行く鐘の聲きけば、あかぬ別れの鳥はものかは」。

あかぬわかれの鳥はものかは　佛法最初の法隆寺、寂滅爲樂の鐘の聲、あかぬ別れのとりは物かは、それはなさけの恨みのたね（三世相）

前條に述べた小侍從の歌句によつたのである、小侍從のこの歌の意は、曉鶏鳴きて夜明けを告げれば、飽足らずして別れることの悲しいものと思うてゐたが、人待つ宵の更け行き、鐘の音の初夜後夜と響き渡るときの悲しさに較べては、物にもあらずといふこと。

あき篠や外山の松よことと問はん（鶯門松）

新古今集・冬の部、西行法師の題しらずの歌に、「秋しのや外山の里やしぐらむ生駒の嶽に雲のかかれる」。

あさくらやきのまるどの（天神記）

新古今和歌集・雜歌部に、天智天皇御歌、「朝倉や木の丸殿にわれ居れば、名乘をしつつゆくは誰が子ぞ」。朝倉は今筑前の朝倉郡朝倉村である。木の丸殿とは木を削らないで丸太で造つた御殿をいふ。十訓抄・上卷第一、可レ定二心操振舞一事の條に、「天智天皇世につつしみ給ふ事ありて、筑前國上座郡朝倉といふ所の山中に、黒木の屋を造りておはしけるを木の丸殿といふ、丸木にて造る故なり云云」。

蘆の節の間も待つ命こそ短かけれ（女夫池）

新古今集・戀部の歌、「難波潟みじかき蘆の節の間も、淺はでこのよを過ぐしてよとや」、とある語句に據る。「節の間も」とは、いささかの間もの義、蘆の節の間は短いものなればいふ。

ありとは見えてその原や、伏屋に立てる我妻の、位牌に隱れ消えにけり（卯月淵色）

新古今集・卷十一、戀一の部、坂上是則の「そのはらや伏屋におふるはねぎの、ありとは見えてゐはぬ君かな」の歌句によつたのである。「そのはらや」の條をも見よ。

いづくの松も染めかねぬ模樣の時雨（融大臣）

新古今集・戀歌一の部、前大僧正慈圓の歌に、「わが戀は松をしぐれの染めかねて、眞葛が原に風騷ぐなり」。

いつはりのなきを亂の神路山（用文章）

新古今集・卷十三、戀歌三の部、平定文の歌に、「僞りなただすの森のゆふだすきかけつつ誓へ我を思はば」。

薄霧の籬の萩の朝濕り、秋は夕と誰がいひて（千疋犬）

新古今集卷四、秋歌上の部、藤原清輔朝臣の歌、「うす霧の籬の花の朝濕り、秋は夕と誰がいひけん」。

うつり行く心の花のあだ人を、思ひくち木と身はなりにけり（今川了俊）

心の移變るあだ人を思焦れて、わが身は朽木のやうに朽ち果てたことぢやわい。新古今集・卷十四、戀四の部に、「さりともと待ちし月日ぞ移り行く、心の花のいろにまかせて」とある歌と、同じやうな意の歌である。

重きが上の小夜衣

「さよごろも」を見よ。

かささぎのはし　新町橋をかささぎの橋と語りて行く人も、絶えて其夜も更けにけり（淀鯉）星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも（曾根崎）かささぎの渡せるはしにおく霜の（蛾）　臺子が緣の橋渡し、此樽も橋渡し、橋にて祝ふ鵲の、身も紅に染るとも、世に謠はるる端ならん（鍵權三）

「鵲橋」鵲は鳥の名、本草に、（緣背白腹尾脚黑白駁雜）とある。七月七日の夜、鵲群をなし天空を塡めて橋をなし、以て織女（星の名）を牽牛（星の名）の處に渡すといふ、この故事によつて、鵲の橋を男女契りの橋渡しの意にいふ。

娥歌加留多のここの文は、新古今集・冬部、中納言家持の歌、「鵲の渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜ぞふけにける」とあるによつたのである、この歌は小倉百人一首中にも出てゐる。さて一首の意は、大空を見渡せばさえ渡りて、天の川の鵲橋に霜眞白に降つてゐる光景なれば、夜は既に更けてゐるわいといふこと。

鍵權三重帷子のここの文は、橋渡しをして祝ふおさいの身を鵲の身とはいうたのである。

春日野や若紫の摺衣（大職冠）

新古今集卷十一、戀歌一の部、在原業平の歌に、「春日野の若紫の摺衣、しのぶの亂れ限りしられず」。

交野のみ野の櫻狩（蟬丸）

「交野」は河内國交野郡（今は北河内郡）にあつて櫻の名所。「櫻狩」は櫻見物。新古今集・春部、藤原俊成の歌に、「またや見む交野のみのの櫻狩、花の雪散る春のあけぼの」。

君が代の年の數をば白妙の濱の眞砂と、敷島やかの貫之の言の葉（十二段）

新古今和歌集・賀部、題しらず・紀貫之の歌に、「君が代の年の數をば、白妙の濱の眞砂にたれかしきけむ」。

古今集十戒の和歌（兼好）

「じつかいのわか」を見よ。

御祕藏の帶世の松は枯れにけり、おのが千歲を君に讓りて（三國志）

新古今集・冬歌の部、源重之の歌に「夏がりの荻の古枝は枯れにけり云々」と見え、また榮花物語・松のえだの卷の歌に「……松の千歲は

君に讓れり」と見えてゐる。これ等から思ひついた狂歌である。

越ゆる小夜の中山年たけぬ、……命なりけり世なりけり（日本武尊）

新古今集卷十、羈旅歌の部、西行法師の歌に、「年たけて又越ゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山」。

***さしもぐさ　拜み納まるさしもぐさ、草のはすはな世にまじり**（曾根崎）　**命にかけてさしも草、頼み甲斐なき觀世音**（一心五戒魂）

このさし傘をさしも草、觀世紙捻の觀世音（賀古教信）

さしも多くの民草。衆生。新古今集・卷二に、「清水觀世音の御歌となむいひ傳へたる」とありて、「なほ願めしめぢが原のさしも草、われ世の中にあらん限りは」。「命かけてさしも草」は命かけてさしもに、この歌句をきかせたのである。「このさし傘をさしも草」は、この差傘をさしにこの歌句をきかせ、觀世紙捻の觀世音と同韻語によつた文飾である。

五月雨の一しきりをだやみて、空さりげなく靄々と、北斗の光鮮かに晴れ渡れば（曾禰山）

「だやむ」はその條を見よ。「空さりげなく」は、空さありげなくの意で、空を擬人したところ面白く、あわただしい雨の一過後、洗ひ去られた天地の清さを思はしめる。尤も巢林子のこの文は、新古今集卷三・夏歌の部・從三位頼政の歌に、「庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄める月かな」、とあるに據つたのである。

佐夜の中山年たけぬ……命なりけり（日本武尊）

新古今集・卷十、西行法師の歌に、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや、命なりけり佐夜の中山」。佐夜中山は小夜中山また佐益中山とも書く、遠江國小笠郡日坂の東なる坂嶺をいふ。掛川志稿に、「その道兩山に夾まれて左右の谷間甚だ狹し、佐夜は狹谷なるべし、その中間の山なれば狹谷の中山と名づけたるなるべし」。

***さよごろも　恨も仇も外になし、憎いもつらいも唯獨り、重きが上の小夜衣よなう**（卯月艶）　**扨その次はさよ衣、我つまならぬ邪淫戒**（盛久）

彼女の手にも觸れず小夜衣とて投返す（兼好）　**今まで輕き上薦の俄に重き小夜衣、我妻ならぬ念力か**（女楠）

「小夜衣」新古今集・卷二十、釋教部に、「さらぬだに重きが上のさよ衣、わがつまならぬつまな重ねそ」とある歌によつて、「小夜衣」を邪淫の意に用ゐる。「じつかいのわか」を見よ。

***しぎたつさは　鳴立澤に氣をとめし西行法師**（千疋犬）　**鳴立澤の秋の暮、心なき身もあはれ知れ**（虎が歴）

鳴立澤は相模國中郡大磯より小磯に至る間にある叢林である。ここの文は新古今集・卷四・秋上部に、西行法師の歌、「心なき身にもあはれは知られけり、鳴立澤の秋の夕暮」とあるに據つたのである。「心なき身」とは、世俗の名利を離れて行雲流水を友とする僧の身を云ふ。

滴る水の柳蔭、暫しとてこそ旅人の立寄る所（會稽山）

新古今集・夏の部、題知らず、西行法師の歌に、「道のべに清水流るる柳蔭、しばしとてこそ立ちとまりつれ」。

じつかいのわか　古今集・十戒の和歌を引き、女の罪を驚し貞女の道の教訓をこまごま書いて送りしかば、彼の女手にも觸れず小夜衣とて投返す（兼好）

「十戒の和歌」ここの文に「古今集」といへるは「新古今集」の誤である。新古今集・卷二十、釋教歌の部に「十戒の歌よみ侍りけるに」と詞書ある歌の中に、「不邪淫戒」といふ題にて、「さらぬだに重きがうへのさよ衣、わがつまならぬつまな重ねそ」とある歌をさす。一首の意は、一人の妻を持つだに佛法に對して罪であるのに、まして他人の妻など犯すことは尤もあるまじきことだといふのである。この歌を邪淫の戒の意に用ゐる。

しづはたおび　賤機帶のかた結、人目を包む朝霞（天神記）

「賤機帶」賤女の機織るとき結べる帶。新古今集・卷十三・雜歌三の部に、「あしのやのしづ機帶のかたむすび、心やすくもうちとくるかな」。ここの文は、賤女が機織るときに帶をゆるく片結にしてゐるそれのやうに、菅公の御臺所が帶しどけなう寢れてゐるを云うたのである。

末の露本の雫や世の中の、おくれ先立つためしなるらむ（百日曾我）

葉末に宿る露も葉本にたまる雫も、落ちるに遲速こそあれ何れも遂には落ちるやうに、人の壽命に於ても亦かくの如しであるとの意。この歌は新古今集哀傷の部に「題知らず。僧正遍照」として出てゐる。

袖打拂ふ蔭もなし　佐野のわたりも

さのみやは（雪女）

新古今集・冬部、藤原定家の歌に、「駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮」。

***園原や　ありとは見えてその原や、伏屋に立てる我妻の、位牌に隱れ消えにけり**（卯月潤色）　**一目見てさへなれし夜の、面影だにもまがはぬ物、よくよく見れば園原や、ありとも知らぬ死顏に**（女楠）

「園原や伏屋に生ふる箒木の、ありとは見えて逢はぬ君かな」の歌に據つたものである。この歌は新古今集・卷十一、雜歌一の部に出てゐる。「箒木」は美濃・信濃兩國の界なる園原と云ふ處に生ふる樹である。遠方から見れば帚を立てたやうな形に見えれども、近寄つて見ればそれに似た樹も無い。さるによつてありとは見れど逢はれぬものに喩ふ。（蓋し箒木は樅の樹の秀でたのが箒草の如く見えるのだといふ。）「ありとは見えてその原や云云」をも見よ。

空に消えてはこれも亦云云

「吹きて亂るる薄煙云云」を見よ。

高き屋に登りて見れば煙立つ民の竈は賑ひにけり（三國志）　高き屋に登りて見れば煙立つ、民のかまどは賑ひにけり、と詠じ給はれたと俗にいふ歌に據つたのである。この歌は新古今集・卷七・賀部に出てゐる。

契り置きてし難波津や（曾根崎）

仁德天皇が難波の高津宮にましまして、民の竈から煙の立昇るを見られて、「高き屋に登りて見れば煙立つ、民のかまどは賑ひにけり」、「契り置きてし」と云へるは、後文の靈佛にかかりて、彌陀の誓願にかけたのである。

＊たまのを　長らへつらき玉の緒の、玉よといふもうつつにて（三世相）

玉の緒の絶えなば絶えれ（大原問答）

玉の緒も絶えなば絶えれ（卯月紅葉）

魂の緒の義であつて、命を云ふ。「玉の緒の絶えなば絶えれ」は、我命の絶えるなら絶えよの意。新古今集・戀部、式子內親王の歌に、「玉の緒よ絶えば絶えね、長らへばしのぶることのよわりもぞする」。卯月紅葉のこの文は、「逢はずは何を玉の緒」をも見よ。

民の竈も富の小路（大原問答）

新古今集卷七・賀部に、「みつぎもの奏されて國富めるを御覽じて、仁德天皇御歌」と詞書ありて、「高き屋に登りて見れば煙立つ、民の竈は賑ひにけり」、とある歌句を取つて京都なる富の小路にいひつづけたのである。

露霜の白きを見れば夜も更けて（大經師）

新古今集・冬部、題しらず、中納言家持の歌に、「かささぎの渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜ぞふけにける」、とある句に據つた文飾であつて、涙は露の如くに玉をなし、霜となつて凍るといふに、夜更けるに從つて寒さ加はり、露の霜となつて地上に白く凍るにいひかく。

取る手もゆらぐ玉の緒　手首をしかと取る手もゆらぐ玉の緒に、まだ力あるものごしにて（會稽山）

病身の老母が二子の手首を握る手も顫ひ、餘命も聚と足らぬの意で、新古今集卷七、賀歌の部、讀人知らずの歌に、「初春の初子のけふの玉ははき手に取るからに搖ぐ玉の緒」とある下の句に據つたのである。「玉の緒」はその條を見よ。

なにはづのうた　吉田屋の庭の竈は難波津の、歌の心よ蒸籠の湯氣の大杵（夕霧）

「難波津の歌」仁德天皇の御歌、「高き屋にのぼりて見れば煙立つ、民の竈は賑ひにけり」をいうたのである。この歌は新古今集にも見えてゐる。ここの文に、「庭の竈」といひ、「蒸籠の湯氣」とあるは、「煙立つ民の竈は賑ひ」の心をいうたものである。

はし鷹の野守の鏡（百合若）

「はし鷹」は倭訓栞に「鶻をいふ、和名抄に見ゆ、このりの鷂なり、はいたかともいふ、本は速鷹の義、轉じていとなり、又しとなる也」と見えてゐる。「野守の鏡」は倭訓栞に「野中の水に影のうつるをいふ也といへり」と見え、後頴口傳に「昔帝野邊に出て鷹狩せられけるに、御鷹それて失せけるを、野守を召して索めよと仰せられければ、長りてうつぶして土を守りてありけるが、御鷹は松の木にありと申す、いかでかくいふぞと問ひ給へば、芝の上に溜れる水を鏡として鷹のありかを知れりと申す、これより野に溜れる水を野守の鏡とはいふなり」と見えてゐる。新古今集卷十五、戀歌五の部、よみ人知らずの歌に、「はし鷹の野守の鏡えてしがな、思ひ思はずよそながらみむ」。

葉山繁山繁けれど、茨障らず思入る（鵜樹三）

新古今集・卷十一、戀歌一の部に、「筑波山葉山しげ山繁けれど、思入るには障らざりけり」、とある歌を應用して、枳殼垣繁つて入り難けれども、四斗樽の鏡を拔いて突込んだれば、茨に障らないで入ることができる意にいうたのである。

春過ぎて夏來にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香具山（持統天皇）

最早春が過ぎて夏が來たやうである、天の香具山に白妙の夏衣を乾して里人どもが夏の用意をすると侍臣どもが申すといふ意である。新古今集・卷三、夏部にある持統天皇の御歌に、「春過ぎて夏來にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香具山」。萬葉集・卷二、藤原宮御宇天皇御製歌に、「春過ぎて夏來るらし白妙の、衣乾したり天の香來山」。

吹きて亂るる薄煙、空に消えてはこれも亦、行く方も知らぬ相思ひ草（曾根崎）

新古今集卷十七、雜歌中の部、西行法師の歌「風になびく富士の煙の空に消えて、行くへも知らぬ我が思ひかな」に據つたもので、「これも亦」といへるは、富士の煙もさうであるが煙草の煙も亦さうである意。「相思ひ草」は煙草をいふ。その條を見よ。

富士の煙の上もなき　天慈の鉢に立つ湯氣は、富士の煙の上もなき、ほとび過ぎたる湯上りの（酒呑童子）

新古今集卷十二、戀歌二の部、家隆朝臣の歌に、「富士の嶺の煙もなほぞ立ち昇る、うへなきものは思ひなりけり」。

まくず原誰が染めかねし　裾に模樣の眞葛原、誰が染めかねし染浴衣（鼎好）

新古今集・卷十一、戀歌一の部、慈圓の歌、「わが戀は松をしぐれの染めかねて、眞葛が原に風騷ぐなり」、に據つたものであつて、つれない戀に思ひ焦れる意。（この歌意は、松を人の無情に喩へ、時雨を我が懸想するに喩へて詠んだものので、松を時雨が染めかねるが如く、懸想しても先方は無情で色も變らねば、恨みる計りである。眞葛が原とは葛の多い原、また名所にもある。騷ぐといへるは、恨みる心の强く切なるをいはう爲である）。ここの文に染浴衣といへるは、太平記・卷二十一に高師直が鹽谷の室の湯上り姿を見て、戀ひ焦れるに至つたといふその條によつた語である。

待つ夜の鐘も別れの鳥の聲聲（反魂香）

新古今集・戀部三、小侍從の歌に、「待つ宵にふけゆく鐘の聲きけば、あかぬ別れの鳥はものかは」。

みかの原わきて流るるいづみ

川（井筒）

「みかの原」は山城國相樂郡瓶原村をいふ。新古今集・戀部、題知らず、中納言兼輔の歌に、「みかの原湧きて流るるいづみ川、いつみきとてか戀しかるらむ」とあるに據つたのである。この歌は（小倉）百人一首の中にも見えてゐる。

短き蘆の難波潟（女腹切）

新古今集・戀歌二の部、伊勢の歌に、「難波潟短き蘆のふしの間も、逢はでこの世を過してよとや」とあるに據つたのである。

道のべの清水が店に暫しとて（生玉）

新古今集・夏部、題しらず、西行法師の歌に、「道の邊に清水流るる柳陰、しばしとてこそ立とまりつれ」とあるを取つて「清水が店」にいひかけたのである。

みやましげやましげくとも、思ひいるには障りなき（本領曾我）

新古今集・卷十一、戀一の部、源重之の歌に、「筑波山はやましげ山しげけれど、思ひいるにはさはらざりけり」。

村雨の露　村雨の露もまだひぬ槙の戸よなう、げに扨は秋の夕に立のぼる霧樣にてましますな（三世相）

むら雨のまだひぬ露もまだひぬよやアア霧は（淀鯉）

村雨は叢雨で、一叢づつ強く降過ぎる雨卽ちにはか雨をいふ。ここの文は、新古今集・秋部、寂蓮法師の歌に、「むら雨の露もまだひぬまきの葉に、霧立のぼる秋の夕暮」とあるに據つたのである。この歌は小倉百人一首中にも出てゐる。

山寺の春の　山寺の春の夕暮來て見れば（曾根崎）　山里の春の夕を來て見れば入相の鐘荻の聲（碁盤太平記）　山寺や春の夕を來て見れば、入相の鐘に花や散るらむ（用明天皇）

新古今集・春下部、能因法師の歌に、「山寺の春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける」とあるに據つたのである。この歌は謠曲・道成寺に、「山寺のや春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける」となつてゐる。曾根崎心中のここの文は、「初瀬も遠し難波寺云云」とも見よ。

夕立の空さりげなく澄む月に（蛙合戰）

新古今集・卷三、夏歌の部、從三位頼政の歌に、「庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなく澄める月かな」。「さみだれの一しきり云云」とも見よ。

よそにのみ見し白雲の高間山（浦島）

新古今集・卷十一、戀歌一の部に、題しらず、讀人知らずの歌に、「よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山の峯の白雲」。

餘所に見て高間の山　山杜鵑餘所に見て、高間の山をや過ぎぬらん（國性爺後日）

大和國葛上郡葛城山の第一の峯を高間山といふ。新古今集卷十一、戀歌一の部、讀人しらずの歌に、「よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山の峯の白雲」。

夜の涙なそへそほととぎす　器物ふためとだにもみじか夜の、涙な添へそ時鳥（井筒）

この文は、器物蓋に二目をいひかけ、短夜に見じ（見られず）をいひかけ、新古今集・夏歌の部、皇太后宮大夫俊成の、「昔思ふ草の庵の夜の雨に、涙な添へそ山ほととぎす」、の歌句に據つたのである。

世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと言捨の言の葉（西王母）

新古今集・羇旅の部、遊女妙の歌に、「世を厭ふ人とし聞けばかりの宿に、心とむなと思ふばかりぞ」と見えてゐる。この歌は西行法師の歌の、「世の中を厭ふまでこそかたからめ、かりのやどりを惜む君かな」の返歌である。一首の意は、世を厭ひ給ふ人と聞及ぶからには、かやうの所に宿つて心をとめ給はれるもあぢきないことと思うて、宿を貸し申さぬまでであつて、宿を惜むのではありませぬの意。

千載集に據れるもの

あらはれ渡る　無筆といひしそら言も、あらはれ渡るあじろ木や、うぢうぢとして隱しかれ（碁盤太平記）

あらはれ渡る川霧や、宇治の網代に寄る氷魚の（文武五人男）

千載集・冬、權中納言定頼の歌に、「朝ぼらけ宇治の川霧絶え絶えに、あらはれ渡る瀬瀬の網代木」とある語句を用ひたのである。この歌は小倉百人一首にも出てゐる。

うき世の民に置ふかな　始終菩提の道にもあらず、うき世の民におほふかな、おほへど漏るる竹の笠（最明寺殿）

天下萬民が安全であるやうにと、法師の身として祈り居るを、竹の笠も覆ひ慈むにかけて云うたのである。千載集・雜部に前大僧正慈圓の歌に、「おほけなくうき世の民におほふかな、わがたつ杣に墨染の袖」。この歌は小倉百首中にも出てゐる。

宇治の川霧絶え絶えに、あらはれ渡る網代木の（淀鯉）

「たえだえ」はきれぎれ。「あじろ木」とは、川瀬に數多の竹木を編んで列ね、網に代へて魚を捕るものである。宇治川は冬日氷魚を捕るに有名であるこ千載集・冬の部、宇治にまかりて侍りける時よめる、權中納言定頼、「あさぼらけ宇治の川霧たえだえに、あらはれ渡る瀬瀬のあじろ木」。この歌は（小倉）百人一首にも出てゐる。

笠置山ゆるぎの森も近ければ、いかで笠置の寢はやすく寢る夜なくとも（持統天皇）

千載集・釋教歌の部、登蓮法師の笠置の岩屋

の歌に、「名にし負はば常は動の森にしもいかでか鶯のいはやすくぬる」。

さざなみや　さざなみや志賀の浦にぞ着き給ふ、古き都の所から（蟬丸）

漣波や昔ながらの草履取（三國志）

琵琶湖面に漣波が立つより、そのほとりなる志賀の地にかけて枕詞とする。ここの文は千載集に載つて平忠度の詠と云ふ歌、「さざなみや志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かな」の詞によつたのである。

長柄の橋も名のみにて（天神記）

千載集巻十七、源俊頼朝臣の歌、「行末を思へばかなし津の國の長柄の橋も名は殘りけり」。

はげしかれとは山おろし　一昨日の夜半の頃、山賊の手に掛り上の小袖と諸共に、はげしかれとは山おろし、あるにもあらぬ憂き身の果（持統天皇）

「剝がる」を「烈し」にいひかけて、源俊頼の歌の「うかりける人をはつせの山おろし、烈しかれとは祈らぬものを」の句にいひつづけたのである。この歌は千載集・戀部に出づ。（小倉）百人一首中にも出てゐる。

道こそなけれ思入る、山の奥にて鳴く鹿（五人兄弟）

千載集・雜部、皇太后宮大夫俊成の歌に、「世の中よ道こそなけれ思ひいる、山の奥にも鹿ぞなくなる」とあるに據つたのである。この歌は小倉百人一首中にも出てゐる。

山の奥にも鹿ぞ鳴くなる（女夫池）

人住まぬ奥山に分入るとても、そこにはまた鹿が物悲しう鳴くわいの意。千載集・雜部、皇太后宮大夫俊成の歌に、「世の中よ道こそなけれ思ひいる、山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」。

小笹に露のたまられぬ　町で名護屋の胸高帶は、小笹に露のたまられぬ（女殺）

千載集巻十四、繇歌四の部、藤原伊經の歌、「分けきつる小笹が露の繁ければ、逢ふ道にさへ濡るる袖かな」の下の句をきかせたのである。ここの文は、町風でないを名護屋帶にいひかけ、小菊が伊達な帶を胸高に躍うてゐる遊女風は、道で逢ふ人人のそれ者と見て、濡れかけること（麹話ごと）の詮方ないの意。

曾我物語に據れるもの

哀しみを含んで七日を餓ゑず（加增曾我）

正本屋九兵衛板、繪入十七行亟本に、「あはれみをふくんで七日をうへず」とあるは意淺い。心に悲哀を感ずること強ければ、胸つまりて七日間も食せないでも腹へらぬとの意。曾我物語・巻二、酒の事の條に、「美酒一度口に含めば七日餓を忘るる德あり」とあるを改作したのである。

きよりくりう　養由が術きよりくりうが神變も、かなふべしとは見えざりけり（百日曾我）

曾我物語・巻八、仁田猪にのる條に、「たとへば養由が術きよりくりうがじんべんも及ぶべしとは見えざりけり」と見え、古活字版・曾我物語には、「養由が術きよりくわう」となつてゐる。百日曾我のこの文は曾我物語に據つたのであるが、「きよりくりう」は如何なる人かどうしても知れぬ。按ずるに十訓抄・可庶幾才能藝業事の條にも、「養由が藝をつぎ李廣が跡をつたふる外云云」とあるやうに、養由と李廣とは並び稱される事が多いによつて、李廣のことを云つたものであらう。「養由が術きよ、李廣が神變」といふのであらう。前漢書・李廣傳に、「李廣爲人長猿臂、其善射亦天性、雖子孫他人學者莫能及、李廣出獵、見草中石、以爲虎而射之、中石沒矢、視之石也、他日射之、終不能入矣」。

しえんはりうじゆ云云　少將莞爾と打笑みて、しえんはりう樹の枝に戯れ、禿は梯子の下に睡る（虎が磨）

曾我物語・巻九、十番斷の條に、「槃燕は柳樹の枝に戯れ、白鷺は夢花の蔭に遊ぶ」とあるを作りかへたのである。

せんだんどうの弓　栴檀籐の弓に征矢取添へ（關八州繫馬）

栴檀籐の弓の眞中取り（五人兄弟）

〔栴檀籐弓〕弓法私書に、「弓のせんだ卷の事。こしらへ樣は下をしげく、卷目五歩間を五歩ばかりおきて絲にて卷て、其上を漆にてぬりこめたるをせんだ卷と申也」と見えてゐる。曾我物語・かはつらたれし條に「せんだん籐の弓の眞中とり」。

ちやうさいわうが害に遭ひしも佯ることを知らでなり（伊豆日記）

この文は曾我物語・頼朝伊東を出で給ふことの條に出てゐる。「ちやうさいわう」は趙遷王のことか。趙遷王は秦の反間に欺かれて秦兵に捕はれ、これより趙國亡びるに至つた。

波にゆらるる沖つ船、しるべの磯はこなたぞと（會稽山）

道に迷へる曾我兄弟を船に曙へ、道案内する者我だとの意を寓したのである。曾我物語・巻九に、「波にゆらるる沖つ船、しるべの山はこなたぞと、いひすててこそ恐びけれ」。

ふくみぐつわ　連着鞦の山吹色なるを懸け、ふくみ轡に紺の手綱を入れてぞ乘つたりける（五人兄弟）

〔含轡〕轡の一種。曾我物語・河津討たれし條に、「れんぢやく鞦の山吹色なるを懸け、ふくみくつわに紺のかた綱を入れてぞ乘つたりける」、とあるに據つたのである。

蛇は一寸にして兆あらはれ、頻伽は卵の中にて其聲諸鳥にすぐる（曾我）

異本曾我物語に、「蛇は一寸を出して其大小を知り、人は一言を以て其賢愚を知る」。太平記巻十八、越前府の軍附金崎後攻の條に、「頻伽羅は、卵の中にありて聲衆鳥に勝れたり」。

松浦潟領巾麾山の石よりも積る思ひはなほ重き（鰐山姫）

「まつらさよ」ひめが石となり」を見よ。

まつらさよひめが石となり（天神記）

かの松浦さよ姫は夫を焦れて石となる（西王母）

松浦佐用姫が夫の大伴佐提比古と別れるを嗟き、高嶺に登り離去の船を望んで領巾を脱いで麾いた。「ひれふるやま」を見よ。これを夫を慕うて石となつたといふ望夫山の故事（「ばうふざん」を見よ）と混同して、松浦佐用姫が石となつたとしたもので、曾我物語・巻四に佐用姫が石となつたことが見えてゐるから、その頃既に望夫石の故事と混同してゐる。東海道名所記（萬治元年成）虎が石のことを記せる條に、「むろこしの望夫石、我朝には大伴の佐手彦が妻松浦佐夜姫も被巾振山の石となれり」

むしの罪障を消滅す（用明天皇）

曾我物語・巻八、箱根にて暇乞の條に「無始の罪障消滅すと覺えたり」。「むし」を見よ。

樂天が三つ頭、王良が祕密の鞭（百日曾我）

曾我物語・巻八に「樂天が傳へし三頭、王良が祕めし手綱」とあるに據つたのである。「樂天は伯樂の誤であらう。伯樂はハクラウともいひ、もと星の名。石氏星經に「伯樂天星名、主二典二天馬一」。古昔孫陽といふ人能く馬を相したので、人稱して伯樂といつた。轉じて馬のことに明かな人をいふ。「三つ頭」はさんづであらう。その條を見よ。王良は孟子に見えて、馬を御する名人。「わりょう」を見よ。

れんぢやくしりがい　梨地にまきたる白覆輪の鞍、連着鞦の山吹色なるを懸け（五人兄弟）

〔連着鞦〕總をいくつもならべ連ねた鞦。「しりがい」は「しりがき」（尻懸）の音便、馬の尾から鞍へかける組紐をいふ。貞丈雜記・馬具之部に、「れんぢやく鞦と云ふは大ぶさ小ぶさの總名なり、……連着の二字をれんぢやくと讀みて總をいくつもならべつらねて著くるなり、此連著に大ぶさ小ぶさの兩品あり、大ぶさを厚ぶさとも云ふなり、餝抄に曰く古鞦小さく總短し、近代鞦甚だ大く總長し云云、然らば上古は小總にて、其後大總は出來たる物なり」。曾我物語に、「梨地にまきたる白覆輪の鞍に、れんぢやく鞦の山吹色なるをかけ云云」。

太平記に據れるもの

雨をふくめる孤村の樹　雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ（女楠）

この文、太平記・巻五、大塔宮熊野落の條下に出てゐる。三體詩・唐盧綸の興二從弟一同下第出一關の詩句に、「孤村樹色昏二殘雨一、遠寺鐘聲帶二夕陽一」。

一念無量劫繫念無量罪　修行者横手を打つて、一念無量劫繫念無量罪疑ひなく候よ（藤醫）

一念の妄想を浮べても何億萬無量の年に亘つてその報を受けるべく、情念の駆着は無量の罪報を受ける因となるので、妄想怨恨の執着恐るべきをいふ。太平記・巻十一、越前牛原地頭自害の條に、「陽生則忘とは申しながら、また一念五百生繫念無量劫の業なれば、奈利八萬の底までも同じ思の炎となつて」。

きしん　討手向はば一命を養由が矢先にかけ、義を紀信が忠烈にくらべ攻め戰ひ（女楠）

〔紀信〕西漢の高祖劉邦の臣である、滎陽の戰に高祖の身代りとなり、項羽の爲に燒殺された。史記・高祖本紀に、「前漢紀信爲二將軍一、項羽圍二漢王於滎陽一、信曰事急矣、臣請詐二楚可一以間出一、信乃乘二王車一、黄屋左纛、曰、食盡漢王降一楚、楚皆呼二萬歲一、之二城東一觀、以故漢王得二與二數十騎一出二西門一、遁上、羽見二信問一漢王安在一、曰、已出去矣、羽燒二殺信一」。太平記・巻十六、正成兵庫に下向の條に、「敵害せ來らば命を養由が矢先にかけ、義を紀信が忠に比すべし」。

漁陽の鼙鼓地を動かし（千疋犬）

「霓裳羽衣の一曲に云云」を見よ。

くわうき　今須くくわうきを護るべしと、宣ふ息は金色に南無天滿大自在天神と九字の文字に顯はれ（天神記）

〔皇基〕皇室の基礎。ここの文は、太平記・巻十二、大内裏造營附聖廟の御事の條に、「昨爲二北關蒙一悲士一、今作二西都警一耻尸一、生恨死歎其我奈、今須望足護二皇基一」とある詩句を和譯したのである。

くわけんきやうしや　華軒香車の外を出でさせ給はぬも、いつしか剔れぬ皮脚半（女都）

〔華軒香車〕「軒」は左傳・閔公二年の條に、「鶴有二乘一軒者一」とありて註に、「軒、大夫車」とある。「華軒」も「香車」も華美な車のこと。太平記・巻五、大塔宮熊野落の條に、「華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば」。

霓裳羽衣の一曲に漁陽の鼙鼓地を動かし、烽火萬里の詐りの後に戎翠の旌旗天を掠む（千疋犬）

「霓裳羽衣の曲」は、玄宗皇帝或夜夢心地に天上月宮殿に遊び、天人の音樂を聽き、これに擬して作つた曲であるといふ。「漁陽」は唐の天寶十四年安祿山反して兵を擧げた地である。「鼙鼓」は攻め太鼓。唐の玄宗皇帝が寵姫楊貴妃と共に霓裳羽衣の一曲を奏して樂しんでゐた時、突如として漁陽に安祿山反して兵を擧げ、その攻太鼓の音は地も震動する程で大亂に及んだ。また周の幽王の寵姫褒似は笑ふことを好まないので、幽王これを笑はせようとして故なく烽火を擧げた、諸侯は事變の起つたことと思うて悉く至つたが何事も起つてゐない、褒似大いに笑つた、後に申侯が犬戎を率ゐ大擧して幽王を攻む、王烽火を擧げて兵を徵したけれども、諸侯は以前の詐りに懲りて至らなかつた爲に、犬戎遂に王を驪山下に弑した。太平記・巻十・鎌倉合戰の條に、

「是ぞ此鬣髮一曲の聲の中に漁陽の鼙鼓地を動かして來り、烽火萬里の詐りの後に戎翟の旌旄天を掠めて到りけん」。

＊どうん 痛はしや、子を思ふ恩愛九輪の川波に生死五蘊の泡消えず（賀古教信）　いで空海が四大五蘊の結縁して得さすべし（嵯峨天皇）

五蘊假に形を成し、四大今空に歸す、首を將つて白刃に當て、截斷す一陣の風（用文章）

〔五蘊〕蘊は蘊集の義。各人個體の屬性を蘊集分類すれば色・受・想・行・識となる、これを五蘊と云ふ。祖庭事苑に、「變礙曰レ色、領納曰レ受、取像曰レ想、造作曰レ行、了知曰レ識、亦名二五蘊一、蘊以二積聚一爲レ義、陰以言二其覆蔽一也」。五蘊假に集合して形體を成すもののなれば、これを五蘊假成形とも五蘊假和合とも云ふ。本朝用文章のこの文は、色・受・想・行・識の五蘊假に集合して形體を成し、地・水・火・風の四大の原素結合して一身を成せども、今や本來の空に歸する、首を差出して白刃に當て、截斷されること風一しきり颯と吹く程の我身と觀じるとの意。太平記・卷二、阿新殿の事の條に、資朝卿辭世の頌を載せて、「五蘊假成形、四大今歸レ空、將レ首當二白刃一、截斷一陣風」。

子を見る事父に如かず（嫗山姥）（鰕田）

左傳に、「擇レ子莫レ如レ父、擇レ臣莫レ如レ君」。管子に、「知レ子莫レ若レ父、知レ臣莫レ若レ君」。太平記・卷十、三浦大多和合戰當見の條に、「子を見ること父に如かず」。

さほいうひつ 左輔右弼の旗を立て（唐船頭）　干戈戚揚相挾み、左輔右弼列を引く、行幸は昨日の昔にて（國性爺）

〔左輔右弼〕「さふいうひつ」ともいふ。輔弼の臣を左右に分ち、左方を左輔、右方を右弼といふ。太平記・卷十一、還幸の條に、「干戈戚揚相挾み、左輔右弼列を引き、六軍次を守り」。

＊すゐじやくわくわう 垂跡和光の方便にや、名所名所宮立まで現はれ動き見えければ（反魂香）　佛法擁護の本地の月、垂跡和光の影淸く、再び朝廷あきらかに四海を照させ給へやと、丹誠無二の御祈、神慮も暗に計られて（女楠）

〔垂跡和光〕「垂跡」は足迹を垂れる義、即ち佛菩薩が衆生利益の爲に其本體本地より娑婆に化現し給ふを云ふ。「和光」とは、佛菩薩が其本體本地の光を和らげて娑婆に應同し給ふを云ふ、即ち垂跡のことである。太平記・卷五、大塔宮熊野落の條に、「垂跡和光の月明に分段同居の闇を照し、逆臣忽に滅びて朝廷再び耀くことを得しめ給へ、……丹誠無二の御勸、感應などかあらざらんと、神慮も暗に計られたり」。

せいげつ 二十二歲一睡の夢を拂つて、せいげつ己が眉間に施し、今月今日髮剃の刃に滅し畢んぬ（卯月淵色）　見上ぐれば萬仞のせいげつ鎬を削り、見下せば千丈の碧潭藍に染みたり（酒呑童子枕言葉）

〔清月〕曇りなき利刀を清月の靑白い光に喩へて云うたのであつて、なほ秋水と云ふが如きである。酒呑童子枕言葉のここの文は、太平記・卷五、大塔宮熊野落の條に、「見上ぐれば萬仞の靑壁刀に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり」、とあるに據つたものである。蓋し利刀を清月といふことは巢林子の造語であらう。遊仙窟に、「高嶺橫レ天、刀削崗巒之勢……向上則有二靑壁萬尋一、直下則有二碧潭千仞一」。

小敵を見ては畏ると云へり（弘徽殿）

太平記・卷六、楠天王寺に出張の條に、「されば大敵を見ては欺き、小勢を見ては畏れよと申すこと是なり」。

せんさんごをくだく一兩曲 手を盡し給へばせんさんごをくだく一兩曲、氷玉盤に落ちて千萬聲（源義經）

〔纖碎珊瑚一兩曲〕音樂の一兩曲恰も珊瑚を纖碎する響のそれに似て、妙音を極むとの意である。太平記・卷十八、春宮還御の事附一官御息所の事の條に、「年の程二八ばかりなる女房のいふばかりなくあでやかなるが、秋の別れを驚ふ琵琶を彈ずるとてやかなるが、纖珊瑚を碎く一兩曲、氷玉盤に落ちて千萬聲、かきならしたる其聲は庭の落葉に紛れつつ」。白氏文集・第三卷、五絃彈の詩中の句に、「纖聲二珊瑚一一兩曲、水寫二玉盤一千萬聲」、とある。これを太平記に語を換へて用ひ、そして巢林子はその太平記の文に據つたのである。

千仞の碧潭藍に染み（文武五人男）

仞は、「ひろ」とも訓み、曲尺六尺ばかりである。太平記・卷五、大塔宮熊野落の條に、「直下せば千丈の碧潭藍に染めり」。遊仙窟に、「向上則有二靑壁萬尋一、直下則有二碧潭千仞一」。

梅檀の林に入る者は染めざるにその衣香しと云へり（千疋犬）

「梅檀」はその條を見よ。このあたりの文は總て太平記・卷十、安道入道自害の條にある文に據つたのである、併せて見よ。

抑 最期の一念によつて善惡の生を引くといへり、九界の間に何か御邊の願なると問ひければ（女楠）

太平記卷十六に出てゐる文である。「九界」を見よ。

千劍破の城の寄手は前の勢八十萬騎に、赤坂吉野の勢馳せ加はつて百萬騎に餘りければ、……楯の板を微塵に打碎いて、漂ふ所を差詰め射ける間、手負ひ死人一日が中に五六千人に及びけり（國性爺後日）

太平記卷七、千劍破城軍の條にある文と大同小異である。

東魚來つて四海を呑み、西鳥來つて東魚を食ひ、海內既に一に歸し（女楠）

太平記・卷六、正成天王寺未來記披見の條に、大權聖者の未來記の文を記して、「當二人王九十五代一、天下一亂而主不レ安、此時東魚來呑二四海一、日沒二西天一三百七十餘箇日、西鳥來食二東魚一、其後海內歸レ一、云云」とありて、「東魚來りて呑二四海一」とは、逆臣相模入道の一類な

るべし、西鳥食二東魚一とあるは、國東を滅す人あるべし云云」と見えてゐる。

***虎の尾を蹈む　善惡千里の虎の尾を踏む心地して顏隱し**（賀古教信）

「氷を歩む御差足云云」を見よ。ここの文は、惡事千里といふ故語を善惡千里にいひ、その千里を千里の虎につづけたのである。

にたにたしき首どもをまさしげにもかけたりと落書を立てられ（女楠）

「にた」は「似た」に「新田」（新田義貞）をいひかけ、「まさしげ」は「正しげ」に「まことしげ」に「正成」（楠正成）をいひかけた洒落である。太平記・卷十五、將軍都落の事の條に、律僧等が京勢の者どもを欺いて、新田義貞、楠正成等の討死した尸骸を尋ね求める由を語つたので、京勢どもがこれを眞と思うて、新田や楠に似た首を曝したから、誠者が其曝首の札の側に「これはにた首なり、まさしげにも書きけり虛事かな」と、秀句をして書き添へて見せたことが見えてゐる。

燈火萬里の詐の後に…（千疋犬）

「魂、寒羽衣の一曲に……」を見よ。

ほんかうじやくげ　ほんかうじやくげの秋の月照さずといふ處なく（百合若）

〔本高迹下〕本地は高けれども樞に下位のものに身を現ずるといふ。太平記・卷三十六に、「和光同塵の跡を垂れしより以來、本高迹下の秋の月照さずといふ處もなく、化俗結緣の春の花……」。「わくわうどうぢん」をも見よ。

まうしやう　まうしやう・せいしも面を恥ぢ、かうじゆせいきん袂を翳す（伊豆日記）

〔毛嬙〕支那上代に居た美女である。莊子に、「毛嬙麗姬、人之所レ美也云云」。太平記・卷一、立后の事附三位殿御局の條に、「毛嬙西施も面を恥ぢ、絳樹青琴も鏡を捺ふ程なれば」。

見上ぐれば萬仞のせいげつ鎬を削り、見下ぜば千丈の碧潭藍に染みたり（酒呑童子枕書）

「せいげつ」はその條を見よ。太平記・卷五、大塔宮熊野落の條に「見上ぐれば萬仞の青壁刀に削り、見下ぜば千丈の碧潭藍に染めり」。遊仙窟に「向上則有二青壁萬尋一、直下則有二碧潭千仞一」。

***みけんじやく　眉間尺が古は首に留まる念力の仇を報じて其譽れ**（大纏冠）

昔干將莫耶夫婦の鍛冶勅諚の劍を惜み、一子眉間尺が取つて深山に隱れしを探出し、親子が首切つて熱湯に投じ、煮れども焚けども七日七夜爛れず盪けず怒るが如く、鋩を帝に吐きかけ仇を報ぜし形をうつし、女童の言の葉まで巴の紋の濫觴と末代長き譽を殘す（唐船噺）

〔眉間尺〕干將の子、眉間一尺あつたのでこの名がある。干將が楚王に殺されたので、眉間尺父の仇を報じようとして死し、その口に含んだ劍楚王の首を斬落したといふ。太平記に「客・眉間尺が首を取りて則ち楚王に獻ら、楚王大いに喜びてこれを獄門に懸げられたるに、三月まで其頭爛れず、……是を鼎の中に入れ七日七夜までぞ煮られける、……楚王自ら鼎の蓋をあけさせてこれを見給ひける時、懸け奉る、劒の鋒誤らず楚王の頭の骨を切りければ、楚王の頭忽に落ちて鼎の中へ入りにけり」。

***やういう　討手向はば一命を養由が矢先にかけ、義を紀信が忠烈にくらべ攻め戰ひ**（女楠）

養由が矢に啼く猴も親子の思ひ焦るる火繩（三國志）

〔養由〕上古支那にて弓射る術に妙を得た人である。淮南子に「養由基・楚將善射、去二楊葉一百步射レ之百發百中」。吉野都女楠のこのあたりの文は、太平記・正成下二向兵庫一事の條に見えてゐる。

夕を送る遠寺の鐘（女楠）

「雨をふくめる孤村の樹」を見よ。

夢は如夢幻泡影とて定め難き物にてあり、某が心體をも御存知なく、夢に任せて大事の國を預けんとは近頃粗相千萬なり、夢に任せて國を治め給はば、若し某を引出して討つて捨てよとの夢を御覽ぜば、科なき五郎を　せられんか、エエ事可笑し頼もしからず（今川了俊）

太平記卷三十五、青砥左衛門が事の條に、青砥左衛門の言葉に「物の定相なき喩にも如夢幻泡影如露亦如電とこそ金剛經にも說かれて候へ、若し某が首を刎ねよといふ夢を御覽ぜられ候はば、科なくとも夢の如く行はれ候はんずるか、云云」。「如夢幻泡影」はその條を見よ。

りやうゑん　御いたはしや先帝は梁園の昔の御遊、くわけんきやうしやの外を出でさせ給はぬも（女楠）

〔梁園〕梁の孝王が宮室苑囿の遊を好んだ故事によつて宮室苑囿をいふ。杜甫の客二李白一詩に「醉飽梁園夜、行歌泗水春」。ここの文は太平記・卷十八、先帝芳野へ幸の條に「梁園の昔の御遊に御淚を催さる」とあるに據つたのである。

***わくわうどうぢん　かかる蠻地に垂跡し和光同塵ましまして、ほんかうじやくげの秋の月照さずといふ處なく、化俗結緣の春の花匂はぬといふ袖もなし**（百合若）

〔和光同塵〕佛菩薩が人間界を超越せる威德の光を和げて、世俗の塵埃に同じ種種の身に示現するをいふ。止觀・六之二に、「和光同塵結緣之始、八相成道以論二其終一」。ここの文は太平記・卷三十六、太神宮御託宣の條に、「我本覺眞如の都を出で和光同塵の跡を垂れしより以來、本高迹下の秋の月照さずといふ處もなく、化俗結緣の春の花薫せずといふ袖もなし」とあるに據つたものである。「げぞくけちえん」「ほんかうじやくげ」はその條を見よ。

（備考）

巢林子が太平記から脚色して取入れたものでは、吉野都女楠などはその主なものである。

徒然草に據れるもの

愛著の道その根深く源遠し、六塵の樂欲多しといへども、ただこの惑ぞやめ難き、才能は煩惱の增長、學んで知るは智にあらず、可不可は一條なり（兼好）

吾人がねがひ思ふ六塵は、心の持ちやうによつては皆いとひはなれる事ができれども、かはゆいと思込んだ執念は、恰も木の根の深く土中にさし入り、水の源遠くして流れのつきぬが如く、遂に斷念することができぬ。才能とても煩惱の增長したものである、學んで後に知るは眞の智ではない、可といひ不可といふとも畢竟ただ一つで、善惡不二である。

「愛著」「六塵」「樂欲」「煩惱」は、その條について見よ。

ここの文は、兼好翼の徒然草第九段に「愛著の道その根深く源遠し。六塵の樂欲多しといへども、皆厭離しつべし、その中にただかの惑の一つ止め難きのみぞ、老いたるも若きも智あるも愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる」。第三十八段に、「才能は煩惱の增長せるなり。傳へて聞き學びて知るは識の智にあらず。如何なるを智といふべき。可不可は一條なり」とあるを引用したのである。

あかざのあつもの・かみふすま（卯月淵色）（女夫池）

「藜羹・紙衾」藜といふ草の吸物、紙で作つた夜具であつて、世捨人の極めて質素な衣食なるをいうたのである。第五十八段に「紙の衾麻の衣、一鉢のまうけあかざのあつもの、いくばくか人の費えをなさむ」。

あしだの笛に寄來る寄來る鹿も寄來る（賀古教信）

第九段に「女のはけり足駄にてつくれる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞいひ傳へ侍る」。

あだし野の露消ゆる時なく　鳥邊山の煙立去らで（兼好）

第七段に、「あだし野の露消ゆる時なく、鳥邊山の煙立去らでのみ住みはつるならひならば」。

蟻の如くに集りて何事をか營む、昨日は嘆き今日は笑み、朝に怒り夕に哀しみ、寶につながれ名にからまれ、露の命を危ぶむ（兼好）

第七十四段に、「蟻の如くに集りて……營む所何事ぞや、……名利におぼれて、先途の近き事を顧みねばなり」。

蟻のすさみの浮世のさま（西王母）

第七十四段に、「蟻の如くに集りて、東西にいそぎ南北に走る、高きあり賤しきあり、老いたるあり若きあり、行く處あり歸る家あり、夕にいねて朝に起く、營む所何事ぞや、生を貪り利を求めてやむ時なし」とあるにより、義自ら明かである。

命長ければ恥多し（女楠）　命長きは恥多し（扇八景）

第七段に、「壽則多辱」。莊子・天地篇に、「壽則多辱」。

言はねば腹ふくるるわざ（兼好）

思うたこと言はずにゐると蕁詰りがしたやうに、腹がふくれるわざであるとの意。ここの文は第十九段に「いひつづくれば皆源氏物語枕草紙などにことふりにたれど、同じことまた今更に言はじとにもあらず、おぼしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば」、とあるに據つたのである。

牛の角文字　牛の角文字急げば急ぐさせいほう精出せば（振袖始）

「い」の假字をいふ、牛の角の對立せるに似てゐるからである。ここの文は「急げ」の「い」にかかる序に用ゐたのである。第六十二段に、「延政門院いときなくおはしましける時、院へまゐる人にことづてとて申させ給ひける御歌、ふたつのもじ牛のつのもじすぐなもじ、ゆがみもじとぞ君はおぼゆる、こひしく思ひまゐらせ給ふとなり」とありて、『壽命院抄』に、「牛の角文字。い」と見えてゐる。

牛若君の角文字に、ともじしもじもことわりや

「つのもじ」を見よ。

お梅に通を失ひし久米が心ぞあはれなる（萬年草）

高野山・吉祥院の寺小姓成田久米之助が、紳谷の宿・雜賀屋興次右衛門の娘お梅と密通してゐるのが露見して、山を放逐されるを、同じ名の久米の仙人が物洗ふ女の脛の白いのを空から見て、忽ち心迷うて通力を失ひ墜落したのをかけていうたのである。「久米の山邊の仙人云云」をも見よ。

愚に拙き人も時に遇ひぬれば・高き司位に登るとは、古人の傳へし詞とかや（今川了俊）

第三十八段に、「おろかに拙き人も家に生れ時に遇へば、高位にのぼりおごりをきはむるもあり」。

重ね文字・牛の角文字・すぐな文字（千疋犬）

重ね文字は「こ」、牛の角文字は「い」、すぐな文字は「し」であつて、即ちこひし」（戀）の意である。「ふたつのもじ牛の角もじすぐなもじ」をも見よ。

腦竭きて萩の下葉も色づきて、わさ田刈りほすなんどこそ、野分のあしたをかしけれ（兼好）

「わさ田」「のわき」はその條を見よ。徒然草・第十九段に、「雁鳴きてくる頃萩の下葉色づくほど、わさ田刈乾すなど、とりあつめたる事は秋のみぞおほかる、又野分のあしたこそをかしけれ」。

疵なき玉の巵　男の藝に一つでも、疵なき玉の巵の、酒もよい酒（歌念佛）

物のあはれを知つて缺點なき男に譬ふ。蓋し第三段に、「萬にいみじくとも、色好まざらん

男はいとさうざうしく、玉の巵の當なき心地ぞする」、とあるに據つてかくいうたのである。

吉凶は人に由つて日によらず（國性爺）

第九十一段に、「吉日に凶をなすに必ず凶なり、惡日に善を行ふに必ず吉なりといへり、吉凶は人によりて日によらず」。事文類聚に、「吉凶由レ人、惡擇二時日一」。漢書敍傳に、「窮達有レ命、吉凶由レ人」。

久米の山邊の仙人だにも、袖のぬれぎぬ洗ひし女、雲の肌のかの白妙を裾のひまびまほの見そめつつ、雲の通ひ路通力失せて（天智天皇）

第八段に、「久米の仙人のもの洗ふ女の脛の白きを見て通力を失ひけんは、まことに手足はだへなどのきよらに肥えあぶらづきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし」。

黑髭のめてたからんこそ女はめやすかるべけれ（徳樹三）

「めやすかる」は目易くあるにて、見苦しからぬをいふ。第九段に、「女は髪のめでたからんこそ、人のめだつべかめれ」。

君子あれば仁義あり、家あれば鼠あり（兼好）

第九十七段に、「其物につきて其物を費しそこなふ物かずを知らずあり、身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり」。

金は山に捨て玉は淵になぐべし（井筒）

第三十八段に、「金は山に捨て玉は淵になぐべし、利にまどふはすぐれて愚かなる人なり」。莊子・天地篇に、「藏二金於山一、藏二珠於淵一、不レ利二貨財一、不レ近二富貴一」。

才能は煩惱の増長、學んで知るは智にあらず、可不可は一條なり（兼好）

第三十八段に、「才智は煩惱の増長せるなり、傳へ聞き學びて知るはまことの智にあらず、いかなるをか智といふべき、可不可は一條なり」。「愛著の道云云」を見よ。

作文和歌管絃の道好色にいきかたの、手なんど拙からず走り書、聲をかしくて拍子とり、いたましうするものから下戸ならぬこそ女子はよけれ（兼好）

「作文」は詩賦を作ること。「管絃」は絲竹の音樂。「いたましうするものから」は、いたみ入るやうに辭退するものの。「下戸」は酒を嗜まぬ者。第一段に、「ありたき事はまことしき文の道、作文和歌管絃の道、また有職に公事のかた、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ、手など拙からず走りがき、聲をかくして拍子とり、いたましうするものから下戸ならぬこそ男子はよけれ」。

去る者は日日に疎し　忘れうとは思はれど去る者は日日に疎し、月日の經つも名殘あり（聖德太子）

第三十段に、「年月へても露忘るるにはあらねど、去る者は日日に疎しといへることなれば」。文選・卷二十九・古詩に、「去者日已疎、來者日已親」。

***しひしば**　今身の上に引替へて、乾かぬ袖は椎柴の、小柴掃部勝重は（大磯虎）

〔椎柴〕椎樹を云ふ。柴は檜柴などいふ類で雜木の義。ここの文は、椎柴の葉はぬれてゐるやうなつやがあるによつて、「乾かぬ」の緣より椎柴をいひ、同韻語小柴にいひつづけて文飾としたのである。第百三十七段に、「椎柴白樫などの濡れたるやうなる葉のうへに」。

盛親僧都の芋頭（兼好）

第六十段に、眞乘院に盛親僧都と云ふ僧が居つて、好んで多く芋頭を食うたことが見えてゐる。

食は人の天　食は人の天なれば、下人下女の据ゆるにも、膳に向へば禮儀あり（川中島）

食は人の命をつなぐものである故にいふ。第百二十二段に、「食は人の天なり、よく味を調へ知れる人大なる德とすべし」。書經・帝範に、「夫食爲二人天一、農爲二政本一」。

大事を思立つ者が小事に拘る事勿れ（碁槃太平記）

第五十九段に、「大事を思ひたらん人は、さりがたき心にかからん事のほいをとげずして、さながら捨つべきなり」。

***多能は君子の恥づる所**（本領曾我）

第百二十二段に、「多能は君子の恥づる所なり」。論語・子罕篇に、「君子多乎哉、不レ多也」。

たまのさかづき　茶の湯盤上打囃子男の藝に一つでも、瑕なき玉の盃の、酒もよい酒（歌念佛）　注げども雫さへ湛らぬ玉の盃の、底の拔けたる如くなり（松風）

〔玉盃〕玉でこしらへた盃、以て何不足なき好い男に喩ふ。第三段に、「よろづにいみじくとも色好まざらむ男はいとさうざうしく、玉の盃の底無きここちぞすべき」。文選・三都府序に、「夫玉巵無當、雖寶非用」。

***つちおほね**　只今の働きは畠に生へた土大根の精靈大根の者（兼好）

〔土大根〕今いふ大根のことである。第六十八段に、「筑紫に某の押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根をよろづにいみじき菜とて、朝毎に二つづつ蟻きて食ひけること年久しくなりぬ。或時館の中に人も無かりける隙をはかりて、敵襲ひ來りて圍み攻めけるに、館の中に兵二人出で來て命を惜まず戰ひて皆追返してけり、いと不思議におぼえて、日頃ここにものし給ふとも見えぬ人人の、かく戰し給ふは如何なる人ぞといひければ、年ごろ頼みて朝な朝なめしつる土大根に候といひて失せにけり、深く信をいたしぬればかかる德もありけるにこそ」、とあるに據つたのである。

罪なくして配所の月を見んといふ古人（雲門松）（兼好）

都離れた閑寂な侘しい流罪地に罪を得て流されたのでは物思ひのみ増すことであるが、罪なき自由の身で配所の月を眺めるのは物のあはれも深いことであらうと言うた昔の人。第五段に、「頼基中納言のいひけん、配所の月罪なくて見むこと、さもおぼえぬべし」。

徒然なるままに日ぐらし硯にむかひて、心に移行くよしなしごとの手

習よ（兼好）

退屈なのにまかせて終日硯に對して、それからそれと思ひ浮んで來るたわいもない感想を書くことよの意。徒然草の冒頭に、「つれづれなる儘に日ぐらし硯にむかひて、心に移り行くよしなしごとをそこはかとなく書付くれば」。

友とするに惡しき友七つ、善き友三つあり、一つには物くるる友、二つには醫師、智ある友こそ益者なれ（兼好）

第百十七段に、「友とするにわろき者七あり、……善き友三あり、一には物くるる友、二には醫師、三には智惠ある友」。

夏の蟬春秋を知らぬ（百日曾我）

（丹波與作）

第七段に、「夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし」。莊子に、「蟪蛄不レ知二春秋一」。

＊のわき　野分のあしたこそをかしけれ（兼好）

〔野分〕野を吹分ける義。秋の末頃（二百十日頃）に荒れる暴風をいふ。第十九段に、「また野分のあしたこそをかしけれ」。

花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは、雨にむかひて月を戀ひ、垂れ籠めて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し、咲きぬべき程の梢、散り萎れたる庭なんどこそ見どころ多けれ、男女の情もひとへに相見るをばいふものかは、逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、淺茅が宿に昔しのぶ（兼好）

この文は第百三十七段にある文であつて、物は總て始め終りこそをかしいもので、その十分な時よりも、却つてこれを待つのと、これを思出にしてしのぶのと、その二つの上にあはれは更に深いといふ兼好法師の趣味論である。

春秋知らぬ夏の蟬（弘徽殿）

「夏の蟬春秋を知らぬ」を見よ。

美人と呼ばるる女の履ける云云

「女の履けるあしだ云云」を見よ。

百丈の木に登つて一丈の枝より落つるとはここの事（碁盤太平記）

第百九段に、「高名の木のぼりといひし男、人を掟てて高き木にのぼせて梢を切らせしに、いとあやふく見えし程に言ふことも無くて、下るる時に軒だけばかりになりて、あやまちすな心して下りよと言葉を掛け侍りしを、かばかりになりては飛下るとも下りなむ、いかにかくはいふぞと申し侍りしかば、その事に候、目くるめき枝あやふき程は已れが恐れ侍れば申さず、過ちは易き所になりて必ず仕ることに候といふ」、とある文に據つた改作である。

笛による鹿・妻戀ふ鹿（懸物鄙）

第九段にも、「女のはけるあしだにてつくれる笛には、秋の鹿必ずよるとぞいひ傳へ侍る」と見えてゐる。巢林子作『心中二枚繪草紙』上卷に、「笛に誘はれ妻戀ふる牡鹿のその法の導きこれなりや」とも書いてある。「をじかのその」をも見よ。

ふげんざう　櫻結びの花かつら、繫ぎ留めん普賢象（賀古教信）

〔普賢象〕櫻の一種で、花白く大なるもの。俳諧歳時記栞草に、「普賢象櫻。和訓鼻と花と音同じ、花の白くしてかつ大なるもの、菩薩の乘る所の白象の如し云云」。ここの文にある「繫き留めん」は「象」にかかる文句で、第九段に、「女のかみすぢをよれる綱には大象もよくつながれ」とあるに據つたのである。

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじ（川中島）

「二つ文字」は「こ」、「牛の角文字」は「い」、「すぐな文字」は「し」。「こい（ひ）」の假名遣し」（戀）の義。第六十二段に、「ふたつもじ牛の角文字すぐなもじゆがみ文字とぞ君はおぼゆる、こひしく思ひ參らせ給ふとなり」。

豕でも鹿でも一疋生取り、龜菊が髭筋にて繫いで見たし（會稽山）

第九段に、「されば女の髭筋をよれる綱には大象もよくつながれ」、とあるに據つた著想である。

佛といつば何者が佛にはなる、サア何が佛になるやらん、愚の仰候や、佛に別の種はなし、佛の敎に隨ひて人が佛になるぞよ、佛の敎によるならば敎へし佛は何故に佛にはなり給ひしぞ、それこそはその先の佛の敎へ候、さてその先の佛は、又その先の佛の敎、又その先の先の敎へはじめし第一の師の佛とはいかにいかに、ハアア天より降つたか地より湧いたか（兼好）

第二百四十三段に、「八になりし年父に問ひて曰く、佛は如何なるものにか候らんといふ、父が曰く佛には人がなりたるなりと、又問ふ人は何として佛にはなり候やらむと、父また佛の敎によりてなるなりと答ふ、又問ふ敎へ候ひける佛をば何が敎へ候ひけると、又答ふ、それも又さきの佛の敎によりてなり給ふなりと、又問ふそのへはじめ候ひける第一の佛はいかなる佛にか候ひけるといふ時、父空よりや降りけん土よりや湧きけんといひて笑ふ。

ほとほと叩く水鷄の鳥、六月祓またをかし（兼好）

「六月祓」とは六月晦日に行はれる大祓をいふ。十九段に、「水鷄のたたくなど心細からぬかは、……六月祓またをかし」。

學んで知るは智にあらず（小栗判官）

第三十八段に、「傳へて聞き學びて知るは誠の智にあらず」。

無常の急に來ること瀧の水よりなほ速し、すは其時に至つて老いたる親・いとしき子・君の恩・妻のなさけ、棄て難しとていかがせん、萬事は皆非なり言ふに足らず願ふに足らず（兼好）

第五十九段に、「無常の來ることは水火の責むるよりも速に逃れ難きものを、その時老いたる親・いときなき子・君の恩・人の情、棄て難しとて棄てざらんや」。第三十八段に、「萬事

皆非なり、いふに足らず顧ふに足らず」とあるに據つたのである。

異途の使、誰をかも雨の晴れ間と蹉すべき（賀古教授）

第百八十八段に「人の命は雨の晴れ間をも待つものかは」。

ものぐるほし くさめくさめも我ながら物狂ほしと書きたるはこれかや（兼好）

物狂の義、癲狂めく。狂氣のやうである。徒然草冒頭の文に「心に移りゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつづくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」、とあるに據つた洒落である。

兩刃の劍にて人を切るに、振上げさまに我まづ切らるるといふ譬あり（雪女）

第百二十五段に「人に酒をすむるとて、おのれまづたべて人に強ひ奉らむとするは、劍にて人を斬らんとするに似たることなり、二方に刃つきたるものなれば、もたぐる時まづ我頭を斬る故に、人をばえ斬らぬなり、おのれまづ醉ひふしなば人はよもめさじと申しき」とあるに據つたのである。

柳原の法印樣 枕あがらず次第に重つて來る程に、お客衆のひきぴきで柳原の法印樣・半井の御典藥（反魂香）

近松の當時柳原（京都室町上御靈前の筋下る所の地名）に有名な法印が居たのではなくて、第四十六段に「柳原の邊に强盜法印と號する僧ありけり、たびたび强盜にあひたる故にこの名をつけにけるとぞ」、とあるに據つていうたものである。（また「半井の御典藥」は、雍州府志・土產門上・藥品部・龍腦丸の條に、「醫家和氣氏祖廣世清丸之長子也、……廣世之子時兩自二幼年一學二醫術一、寧平三年秋七月被レ試賜二醫博士號一、又稱二鍼博士一、遂任二典藥頭一、自レ是後世爲二典藥頭一、今半井家此裔也、半井宅元在二烏丸正親町北今施藥院地一、家有二大井一、隔二其中間一、半用二製藥之料一、半充二雜用一、依レ之有二半井之號一」と見えてゐる）。

よろづにいみじくとも、色好まぬ者は玉の盃の底なき心地（兼好）

萬の諸藝に堪能であつても、戀知らずの男は恰も玉で作つた盃の底の無いやうなもので、男子としての價値なき心地がする。第三段に、「よろづにいみじくとも、色好まざらん男はいとさうざうしく、玉の盃の底なき心地ぞすべき」。

兩刃の劍にて人を切る云云

「もろはの劍にて人を切るに云云」を見よ。

籠鳥の雲を戀ふ（峨）

第百二十一段に「飛鳥は翅を切り籠に入れられて雲を戀ひ」。

わが國の扇に嘆く古も、げにもと思ひしら雲に（以呂波）

第八十四段に「法顯三藏の天竺に渡りて故鄉の扇を見ては悲み、病に臥しては漢の食を顧ひ給ひける」。

女の履ける足駄にて作れる笛には秋の鹿必ず寄る（五人兄弟）

第九段に「女のはけるあしだにて作れる笛には秋の鹿かならずよるとぞいひ傳へ侍る」、とあるに據つたのである。

日本書紀に據れるもの

あなにゑや 聲は心の浮橋に、嫁入御寮のあなにゑや、うまし雜煮の味甘の、逆鉾逆鉾と賑へり（蛙合戰）

「あな」は感動詞、「ゑや」も感動の意を示す助辭。「に」は喜（悅）、研（麗、美好）の意。神代上卷に「喜哉」または「研哉」と書いて、「阿那に而熙夜」と訓んである。巢林子のここの文は、心の浮くに天の浮橋をいひかけ、味甘の榮ふ（榮ゆの訛）に天の逆鉾をいひかけ、神代紀にある語を以て文飾とした。

いかしほこ 嚴矛の本末をかたぶけず、中柄ふる人中臣といへり（用明天皇）

「嚴矛」いかめしいほこ。舒明天皇の條に「群卿者、從求如二嚴矛一取レ中事而奏調人等也」。

***かぐつち** されば伊弉諾尊、かぐつちといふ火の神を御誕生ありし時、そのかぐつちが火焰に燒かれて神さりませしも、内に大熱の火を包みし故なり（振袖始）

「軻遇突智」伊弉諾尊・伊弉册尊の二神、火の神軻遇突智を產み給はれたが、伊弉册尊は軻遇突智の爲に燒かれて崩御された。神代上に、「次生二火神軻遇突智一、時伊弉册尊爲二軻遇突智一所焦而終」。

こんこんとんとん それ世界未だ開けざる始めは渾渾沌沌として鷄の卵の如く、重く濁れる者は淹き塊りて國となり、輕く清める者は薄靡き上つて天となり（天神記）

「渾渾沌沌」元氣未だ分れないでむらがれたること。神代上に、古天地未レ剖、陰陽不レ分、渾沌如二鷄子一、溟涬而含レ牙、及レ其清陽者、薄靡而爲レ天、重濁者淹滯而爲レ地、精妙之合搏易、重濁之凝堅難、故天先成而地後定」。

玉津島神詠 戀ひわぶる賴信公とこの小蝶が緣の絲を結合せて、玉津島神詠のしるしを見せよ、急急如律令と懷にかくし入れ（閑八州）

玉津島明神は紀伊國海草郡和歌浦にある。祭神は世俗に衣通姫と云はれてゐる。「玉津島神詠」とは、衣通姫が允恭天皇を戀ひて詠まれた御歌「わがせこが來べき宵なり、ささがにの蜘蛛の行ひ今宵しるしも」をさす。この歌は日本書紀の允恭紀に見えてゐる。古今集には「わがせこが來べき宵なり、ささがにの

蜘蛛のふるまひかねてしるしも」となつてゐる。

百姓と書きて天が下の御寶と日本紀には讀ませたり（今川了俊）

日本紀に百姓を「あめのしたのおほんたから」と訓ぜることにいへる通りである。日本三代實録巻一（天安二年九月七日の條）に「率土黔黎」と書いて「あめのしたおほんたから」と訓んである。貞丈雜記・卷二、人品之部に、「百姓と云ふはあまねく天下の諸人をさして云ふ也、今は農民の事ばかりを百姓と云ふ事になりたり」。

八雲立つ出雲八重垣妻籠に、八重垣つくる其八重垣を、これこそ三十一文字の歌の始めや（振袖始）

素盞嗚尊が稲田姫と住み給はうとして宮造りし給はれたところ、雲のそこから立昇つたのでこの歌を詠まれたといふ。この歌は日本書紀卷一に見えてゐる。古今集序文にも謠曲・大蛇にもこの歌を和歌の始めとしてある。源氏烏帽子折（巢林子作）に「此方は素盞嗚の及びなき、八雲立つとの御歌は、大きに和らく日の本の和歌のはじめの御神にて」とも書いてゐる。

やへがきつくる　素盞嗚大社、八重垣造る玉垣は和歌を護りの神（國性爺後日）

〔八重垣造〕素盞嗚尊の御製歌、「八雲立つ出雲八重垣つまごめに、八重垣造る其八重垣を」は詠歌の始めであるとの說によつて、和歌を護りの神と云うたのである。

ゆづのつまぐし　何事無かれ撫附けて、髮引くゆづのつまぐしの齒の、はあ悲し一枚折れた、あきれてとんと投櫛は別れの櫛とて忌むことを、口には言はず氣にかかる（女殺）

〔湯津爪櫛〕「ゆつ」は五百箇の義、齒の繁多なるをもいふ。「つまぐし」は齒の間のつまり迫つた櫛の義。古來夜櫛を投げるは不吉として忌んだものである。神代紀上に、「伊弉諾尊不レ聽、陰取二湯津爪櫛一、牽折其雄柱一、以爲二乘炬一而見レ之者則膿沸蟲流、今世人夜忌二一片之火一、又夜忌二擲櫛一、此其緣也」。風俗文選に、「櫛の齒缺くれば子に別ろろ」といひ、また東鑑・建長二年六月二十四日の條に、「彈白地下二向田舍一訖、窺二其隙一有レ通、齟言於息女一事ハ、息女殊周章、敢不レ能二許容一、而令レ投櫛之時、取者骨肉皆變二他人一之由稱レ之、彼父薄到二于女子居所一、自二異風之上一投二入櫛一、彼息女不意而取レ之、仍父已準二他人一欲レ遂二志、于時不レ圖而彈自二田舍一歸著、入二來其砌一之間、忽以下不堪悲及二自害一」とある。櫛の齒の折れ、又は投櫛は不吉の前兆として忌む。

りやうけと書きてまひとと讀む、これ日本紀の初見たり（融大臣）

「りやうけ」は良家、「まひと」は眞人である。天武天皇十三年十月の條に「詔曰、更改二諸氏之族姓一、作二八色之姓一、以混二天下萬姓一、一曰眞人、二曰朝臣、云云」とあつて、通鑑に「眞人は美稱にて、天皇の御名にさへ申奉れるなれば、貴きこともとよりなり、されど此まではかかる姓あることなし、姓氏錄序に眞人は皇別之上氏也とあり」と見えてゐる。巢林子は眞人を其義によつて良家といひ、そして眞人を馬人に附會して馬に乘る人の意としたのである。

（小倉）百人一首に據れるもの

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、我衣手は露にぬれつつ（天智天皇）

鳥獸などに荒させまいと、朕が番をしてゐる秋の田の、假庵の庵の苫が粗いが故に、朕が袖は苦の編目を洩れる露に濡れ濡れて、難儀なことよとの意で、民の辛苦を勞はり給うた天智天皇の御詠である。この歌は、百人一首にも後撰集・秋部に題しらずとしても、また古今六帖にも借屋の歌中に出てゐる。巢林子作・蟬丸の夜中に、「あきの田のかりほの蓋屋……我が袂の乾くまも」とあるも、この歌句を取つたのである。

あはれと思へ袖櫻、知る人にせん花衣（三世相）

袖櫻とは、袖に櫻模樣のあるをいうたのである。袖櫻よ、我は汝をあはれ戀かしいと思ふによつて、汝も我をあはれ戀かしいと思うてくれよ、我は袖櫻なる汝を知人とせうとの意。この文は、前大僧正行尊の歌に「諸共にあはれと思へ山櫻、花よりほかに知る人もなし」とあるによつたのである。

あはれともいふべき人は思ほえで、身のいたづらになるまいぞ（娥）

我繼死すとも、それをあはれと言うてくれるとも思はれずして、徒死してはなるまいぞとの意。謙德公の歌に、「あはれとも言ふべき人はおもほえで、身のいたづらになりぬべきかな」。

逢坂山のさねかづら人は知らじと通ひしも（娥）

逢ふことを人は知るまいと思うて通ひたれどもの義に、「名にし負はば逢坂山のさねかづら、人に知られで來るよしもがな」の古歌の句を引いたのである。さてこの古歌は、後撰集・戀部、百人一首などに出で、三條右大臣の詠である。序に歌意は、逢坂山は逢ふといふ名を負ひ、また逢坂山にあるさねかづらは、小寢といふ名を負うてゐるからには、人に知られぬやうに我が思ふ女の我が許に來るやうにして、寢るすべもあつたらよいわいなあとの意。「さねかづら」はその條を見よ。

天つ風雲の通路吹閉ぢて、天地を動かす（酒呑童子）

僧正遍昭の歌に、「天つ風雲の通路ふきとぢよ、乙少のすがたしばしとどめむ」。

色よき紅葉を踏散す鹿（艶符）

「猿丸太夫が悲しみし云云」を見よ。

おくしもや、白きを見ればよめ遠

目（井筒）

中納言家持の歌、「かささぎの渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜ぞふけにける」の歌句と、「よめ遠目笠の中」と云ふ謡とを併せ用ひて、白絹附けた顔見れば、夜目（嫁をきかせ）また遠目から見るが好いといふ意。

奥山に紅葉踏分け鳴く鹿の、心は哀れと思はずや（川中島）

猿丸太夫の歌、「おく山に紅葉踏分け鳴く鹿の、聲聞くときぞ秋はかなしき」の上の句によつたのである。

風そよぐならの小川の夕暮は、禊ぞ夏のしるしなる（弘徽殿）

「ならの小川」は山城國葛野郡にある。「禊」は身の穢や罪を祓ふ爲に、川で身を濯ぐ儀式で、六月晦日・十二月晦日に行ふたものである。ここにいへるは六月晦日の禊である。風そよそよと楢の葉に吹くならの小川の夕暮は、いかにも涼しいので秋と思はれれども、禊をすることが夏の證據ぢやとの意。新勅撰集・夏部、從二位家隆の歌に、「風そよぐならの小川の夕暮は、みそぎぞ夏のしるしなりける」。この歌は百人一首中にも出てゐる。

岸打つ浪のおのれのみ、砕けて物を思へとや（天神記）

岸邊に打寄せる波濤が砕けて散るやうに、自身ばかりがいろいろに物思ひにくれよとやの意。源重之の歌に、「風をいたみ岩打つ浪のおのれのみ、くだけて物を思ふころかな」。

君がため惜しからざりし命さへ、長くもがなと春を待つ（吉野忠信）

君の爲ならば惜しいとも思はなかつた命までも、春にならば君に逢はれると思へば待遠しさに、命の長くもあれよと思ふことよとの意。藤原義孝の歌に、「君がため惜しからざりし命さへ、長くもがなと思ひけるかな」。

雲の通路吹きとぢて、天つ乙女の鹿の子の小袿（文武五人男）

僧正遍昭の歌、「あまつ風雲の通路ふきとぢよ、少女のすがたしばしとどめむ」とある語句をとりて、鹿の子の小袿にいひつづけたのである。

來ぬ人をまつほ　來ぬ人をまつほの浦の夕凪に、焼くや藻汐の身を焦す、それは吾妻の物語（卯月袍）

新勅撰集・戀部に、建保六年内裏歌合の題にて藤原定家の歌に、「來ぬ人をまつほの浦の夕なぎに、焼くや藻鹽の身もこがれつつ」とありて、この歌百人一首にも出づ。來ない人を待つ辛さは、松帆の浦の夕凪に焼く藻鹽のやうに、我が身も焦れてわびしいとの意。松帆の浦は淡路國津名郡にある。近松のこの文に、「それは吾妻の物語」とあるは、江戸で八百屋お七が繼の爲に放火して、火炙の酷刑に處せられたのをさす。

このたびは幣とりあへず手向山（天智天皇）

菅公の歌に、「この度はぬさもとりあへず手向山、紅葉の錦神のまにまに」。「ぬさ」はその條を見よ。

これやこの行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關（蝉丸）（蛾）

この歌は百人一首の中に出てゐる。後撰集・雜部には、上句の「別れては」が「別れつつ」になつてゐる。田舎へ出て行く人も京へ歸來る人も、知る人も知らぬ人も、此處にて別れ別れて又此處で逢ふと云ふ名の、これが逢坂の關であるかとの意。巣林子は「行くも歸るも」に流轉の意を含み、「逢坂の關」に萬法遂に一に歸する意を含ましめ、以て會者常離哀別離苦と、また萬法遂に一に歸する佛法の理を含ましめたのである。

櫻も八重の奈良草履、今日九重の鼻緒（隅田川）

伊勢大輔の歌、「いにしへの奈良の都の八重櫻、けふ九重ににほひぬるかな」の語句を取つたのである。「奈良草履」はその條を見よ。

さぞな憐れむ山櫻、花よりほかに知られじと（蘇鉄）

前大僧正行尊の歌に、「諸共にあはれと思へ山櫻、花より外に知る人もなし」とあるを作替へたのである。

猿丸太夫が悲しみし色よき紅葉を蹈散す鹿（艶容）

猿丸太夫の歌に、「奥山に紅葉踏分け鳴く鹿の、聲聞く時ぞ秋は悲しき」とあるによつてかく云ふたのである。さてこの一首の意は、秋はいつも物のあはれを感じるが、就中奥山に散り布く紅葉を踏分けて鳴く鹿の聲を聞く頃が一しほ悲しう感じると云ふのである。さるを鹿が色よき紅葉を蹈散すのを惜み悲しむことにいひなしたのである。

任の江の岸による波よるさへや、ひるは人目に木がくれし（天智天皇）

「住の江」は攝津國住吉郡にあつて今は住吉と云ふ。「住の江の岸による波」は「よるさへや」の「よる」の同韻を引起す序詞である。藤原敏行朝臣の歌に、「住の江の岸に寄る波よるさへや、ゆめのかよひ路人めよくらむ」。

瀬を早み岩にせかるる瀧川のわれても末にあふ（蛾）

瀧川は瀬が早いが故に岩に堰かれて碎けれども、その末は一所に會する如くに、人目にせかれて逢はずに別れてゐても、行末は必ず逢ふとの意。崇徳院の御歌に、「瀬をはやみ岩にせかるる瀧川の、われても末にあはむとぞ思ふ」。

曾我殿の刈穂の屋根の苫足らず、我とも萱きてよねに濡れつつ（扇八景）

天智天皇の御歌に、「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、わがころも手は露に濡れつつ」とあるをもぢつたのである。「よね」は妓をいふ、その條を見よ。「百人衆ほど働けども、屋根葺く苫の足らぬ故、一首の歌にかくばかり」、とあつてこの歌を書いてある。百人衆は百人首をきかせたのである。

***そみかくだ　諸共にあはれと思へ山櫻、花に心をそみかくだの、姿にかふる人人の御有様こそ悼しけれ**（凱陣八島）

さぞな憐む山櫻、花よりほかに知られじと、御身を變ふるそみかくだ、御供の人人は（蘇鉄）

「そみんかくふだ」（蔵民書札）の約であつて、

修驗者が蘇民將來（その條を見よ）符を書いて配ることによつて修驗者の稱となつたといふ。山伏。前大僧正行尊の歌に、「もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし」。この歌千載集・雜部にも出てゐる。

絶えなば絶えね玉の緒 命長きは恥の種、絶えなば絶えれ玉の緒よとはいひながら（天智天皇）

「玉の緒」は魂の緒であつて生命のこと。生命よ絶えるなら絶えよの意。式子内親王の歌に、「玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば、しのぶることのよわりもぞする」。

とも舟も櫟の道かや楫緒絶え、行方しら羽の矢走に渡る（絶符）

曾根好忠の歌に、「由良の門をわたる船人楫緒絶え、ゆくへも知らぬ櫟の道かな」。

歎きつつひとりぬる夜の明くるまは、いかに久しきものとかは知る（娥）

右大將道綱母の歌である。待人の來ぬを歎きながら一人で寢る夜の明け方間は、どんなに待遠いものであると思ひ給ふかの意。

夏來にけらし 今日ぞ廊の衣更へ、夏來にけらし染めけらし（賀古敎信）

夏が來たらしい。持統天皇の御歌に、「春過ぎて夏來にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香具山」。

難波潟短き蘆の節の間も、世世の報を晴さんと（吉岡染）

「節の間」とは、蘆の節の間の短いのを短時間に喩へたのである。「短き蘆の節の間」は蘆の短き節の間の意。伊勢の歌に、「難波潟短き蘆の節の間も、逢はでこの世を過してよとや」。

奈良の都の八重櫻、けふ九重の梅が香（女護島）

伊勢大輔の歌に、「いにしへの奈良の都の八重櫻、けふ九重ににほひぬるかな」。

泊瀬の山風 お姫樣の其美しいお顏の莞爾ほやほやを見せたらば、いかな泊瀬の山颪でも轉りとさせ連れ歸るは定の物（浦島）

泊瀬皇子の如何につれないとても意に、源俊頼朝臣の歌「うかりける人をはつせの山おろし、はげしかれとは祈らぬものを」の句を取つて面白くいうたのである。

人こそ知らね沖の石、涙を袖におし隱し（一心五戒魂）

二條院讃岐の歌に、「わが袖は汐干に見えぬ沖の石の、人こそ知らねかわく間もなし」とあるに據つたのである。

緋無垢干すてふ天の香具山（天智天皇）

龍田の山の初錦、紅に照る日の雲染めてゐるを緋無垢に喩へて、持統天皇の歌「春過ぎて夏來にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山」の下の句の作り替。この歌は新古今集卷三、夏歌の部に出てゐる。

＊ふりさけみる やせ大原ふりさけみれば、北に鞍馬やみぞろ池（三國志）

「ふり」は「ふりあふぐ」「ふりかへる」などの「ふり」で接頭語、「さけ」は離れの意で「さかる」といふ語に對する他動詞である。遠く目を放ち見る。安倍仲麻呂の歌に、「あまの原ふりさけみれば春日なる、三笠の山に出でし月かも」。

まだ文も見ぬ橋立や（松風）

小式部內侍の歌に、「大江山いくのの道の遠ければ、まだ文も見ず天の橋立」。

まつとしきかば歸り來む（松風）

中納言行平の歌に、「立別れいなばの山の峯におふる、まつとし聞かば今かへりこむ」。この歌の意は、我は汝と別れて因幡國に行くが、その國の法美郡稻葉山の峯に生ひてゐる松の名の如く、汝が我を待つと聞くならば直に歸つて來ようの意。

八重櫻今日九重の京雲駄奈良草履（象好）

伊勢大輔の歌に、「いにしへの奈良の都の八重櫻、今日九重ににほひぬるかな」とあるに據つたのである。

やへむぐら茂れる宿におしおしこめられて（弘徵殿）

「八重葎」とは葎の幾重も繁り生ひたるをいふ。葎は蕁草で刺がある。惠慶法師の歌に、「八重葎茂れる宿の寂しきに、人こそ見えね秋は來にけり」。

行くも歸るも別れては知るも知らぬも大幣の（國性爺後日）

蟬丸の歌に、「これやこの行くも歸るもわかれては、知るも知らぬもあふ坂の關」とあるに據つたのである。

わがころもでと諸共に濡れつつ袖のみやづかへ（娥）

天智天皇の御詠に、「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ、我衣手は露にぬれつつ」とある句を應用して、思ひに沈みくれて涙に袖を濡しながら官仕する意にいうたのである。

衞士の焚く火は顏に燃え、身は消えつつ玉の汗（女夫池）

赤顏して汗を出すことを、大中臣能宣の歌、「御垣守衞士の焚く火のよるは燃え、ひるは消えつつ物をこそ思へ」の歌にいひかけたのである。この歌は詞花集に出てゐる。

夫木集に據れるもの

あきのほたる 川水の果て埋れ澤、秋の螢と古歌にも連れ（小梨判官）

「秋螢」夫木和歌抄・雜秋部、忠峯の歌に、「おく露に朽ち行く野邊の草の葉や、秋の螢となりわたるらむ」に據つたものか。（「川水の果て埋れ澤秋の螢」といふ古歌あるか、なほ考ふべきである。）

谷の笹原 鑓の權三が古身の鑓、疵も古疵・咄も古し、歌も昔の古歌なれど、谷の笹原一夜さ話、其鑓の

柄も永き世の、御評判とぞなりにけり（鎧櫃三）

夫木和歌抄・巻二十八、篠の部、安嘉門院四條の歌に、「ながめやるたかねは春の日かげにて、谷の笹生に消えぬ白雲」とあるをとりて、世語りとなりて消えぬ意にいうたのである。

どやどや通りのむやむやの關（女殺）

夫木抄・巻二十一、雜部、關、よみ人知らずの歌に「もののふの出つさ入さにしをりする、とやとやとほりのむやむやの関」、とあるに據つたのである。色葉集には「もののふの出づさ入るさに枝折する、とやとやとりの無耶無耶の関」とありて、「出さ入るさとは出さま入さまなり、枝折とは歸らん道のしるしに木の枝を折かけて行くなり、しるしに折るといふ事なり、みちの國と出羽國との中に行通ふ山あり、常に人もありかずして、木茂きに枝折をしつつありくなり、さればとやとやとりとはとやとやとほりと云ふなり、むやむやの關とは、その山の陸奥國と出羽國方にある関をいふなり、又もやもやともいへり」と見え、秋田の假寢と云ふ本には、昔この山（秋田と山形との境界に近く、海に迫れる處の山で無耶無耶の関のある處）に手長足長といふ毒蛇棲みて往來の人を害せし故、諸天萬神これを禦みて、槍に怪鳥を棲ましめて、毒蛇居れば有耶といひ、居らねば無耶と言はしめたといふ傳説を載せてある。兵家茶話六之卷に「出羽國飽海郡うやむやの関は、庄内境由利郡境関村といふ所舊跡也といふ、此地山を東に海を西にうけて、関所といふべき所也」と見えてゐる。さればこの関は、むやむやの関とも、もやもやの関とも、うやむやの関ともいうたやうである。巢林子のここの文は、立腹してむやむやするに古歌をいひかけたのである。

平家物語に據れるもの

あづさ弓取傳へたるもののふの（源義經）

平家物語巻九、二度のかけの條、梶原平次の歌に「もののふの取傳へたる梓弓ひいては人のかへすものかは。」

伊勢武者は皆緋縅の鎧着て、宇治の網代にかかる例（文武五人男）

平家物語・巻四、宮の御最期の條に、「緋縅の鎧着たる武者三人網代に流れかかりて、浮きぬ沈みぬゆられけるを伊豆の守見給ひて、かくぞ詠じ給ひける。伊勢武者は皆緋縅の鎧着て、宇治の網代にかかりぬるかな。是等は皆伊勢の國の住人なり云云」。

霧は不斷の伽羅を焚き、畫にもまさる燈火は、月常住の夜見世かや（淀蟹）

煙べる伽羅の香煙はいつも霧のさまよふ如く、門行燈列つて其光晝を欺く夜見世の有様は不夜城といふべきであらうよと、浪華遊女町の繁華熱鬧をたたへたのである。「伽羅」はその條を見よ。平家物語・藏頂巻、大原御幸の條に、「壁破れては霧不斷の香を焚き、扉おちては月もまた常住の燈火をかかく」。謠曲・大原御幸にも出てゐる。「くるわずまひ云云」をも見よ。

祇王が段　姉が讀みさいた平家物語

祇王が段を聽かう（宵庚申）

平家物語・巻一、「祇王の事」とある條をいふ。祇王は白拍子刀自の女である、入道平清盛に再び召されてその命に從はないので、母の刀自が祇王を教訓して清盛の命に從はせることが書いてある。心中宵庚申のここのあとの文に「母の刀自泣く泣く又教訓しけるは、……世に定めなきものは男女のならひなり」とあるは、平家物語巻一、祇王の事の條に「母刀自泣く泣く又教訓しけるは、天が下に住まんにはともかうも入道殿の仰をば背くまじきことにてあるぞ、その上わどぜは男女の緣宿世今にはじめぬことぞかし、千年萬年とは契れどもやがて別るる中もあり、あかちまとは思へども長らへはつることもあり、世に定めなきものは男女のならひなり」とあるに據つたのである。

***きをんしやうじや**（用明天皇）

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理り、驕る者久しからず、遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高・唐の祿山、近く本朝を窺ふに、天慶の純友・承平の將門、間近くは六波羅入道前の太政大臣平の朝臣清盛公の有様こそ、心も詞も及ばれね（孕常盤）

「祇園精舍」祇園は祇樹給孤獨園の略である。祇樹は逝多林とも云ひ、波斯匿王の太子逝多の苑林の義、給孤獨は舍衛城の長者須達の異稱である。精舍即ち佛堂の地は逝多太子の所有地であつたのを、須達が買つて精舍を建てて佛及び僧衆に獻じた、これによつて逝多が施す所、須達の買ふ所の精舍の義で、兩人の名を冠した語である。この故事からして祇園精舍を寺院の意に用ゐる。孕常盤のここの文は平家物語に據つたもので、即ちその巻一、祇園精舍の事の條に「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現はす、驕れる者久しからず、……遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高・漢の王莽・梁の周伊・唐の祿山、……近く本朝を窺ふに、承平の將門・天慶の純友、……間近くは六波羅の入道前の太政大臣平朝臣清盛公と申しし人の有様、傳へ承るこそ心も詞も及ばれね。」「諸行無常」「沙羅双樹」「趙高」「祿山」などはその條を見よ。

ぐんでうづよ　あつぱれおのれは日本一の剛の者をぐんでうづよと、手をまはすを高手小手に搦み付け（百日曾我）

「ん」が鼻にかかる爲に「く」まで鼻にかかつて「くん」が「ぐん」となつたので「かに」（蟹）を「がに」といふの類である。「ぐんでうづよ」は組んで討つよの訛りで、即ち組んで討取らうとするよの義である。組んで失すよ・軍上手

よ・組んで遣すなどの義とする説に従はない。平家物語・巻七、實盛最期の條に、「あつぱれおのれは日本一の剛の者とくんでうづよなうれとて、我が乘りたりける戦の前輪に押付けて」。謡曲・實盛に、「あつぱれおのれは日本一の剛の者とくんでうづよとて、戦の前輪に押付けて」。

沙頭に印を刻む鷗、沖洲にすだく浦千鳥（國性爺）

「印を刻む」は足跡をつけるをいふ。「すだく」は集るをいふ。平家物語・巻三、有王島くだりの條に、「沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく浦千鳥」。和漢朗詠集・大江朝綱の詩に、「沙頭刻印鷗遊處、水底擒書雁度時」。

じく　不動明王の縛の繩手綱に變じ給へやと、慈救の偈を繰りかけ（會稽山）　不動の慈救の偈・明王の火焔の黑煙立ててぞ祈りける（用明天皇）　我この瀧壺に三七日打たれ、じくの三洛叉を滿てうと思ふ大願あるに（一心五戒魂）

〔慈救〕不動明王は大慈悲心をもて衆生を救護される。「慈救の偈」は不動明王慈救の眞言である、大日經に、「曩莫三曼多縛日羅合赦恒羅吒半娜蘇摩訶路瀧擎漦破合吽也娜引囊也阿娑荷阿三忙銀儞合吽吽尾覩南吽怛羅吽漫」とあるもの即ちこれである。「慈救の三洛叉云云」の洛叉は梵語（Lakṣa）で十萬または一億の義である、即ち慈救の眞言を誦念すること三億または三十萬度を滿たさうと思ふ大願を立てたのである。平家物語・巻五、文覺の荒行の條に、「我この瀧壺に三七日打たれて、慈救の三洛叉を滿てうと思ふ大願ありし。

四生の苦輪　痛ましきかな、二度三途の火坑に歸つて、永く四生の苦輪を廻らんことを心に深く思ひとり（一心五戒魂）

「四生」は「六道四生」の條を見よ。一切の衆生は四生から出て以て迷界生死の苦を脅め、彼此に輪轉することをいふ。平家物語・巻五、勸進帳に、「痛ましきかな、ふたたび三途の火坑に歸りて、永く四生の苦輪を廻らんことを云云」。

＊しまん　本有の月の光かすかにして、未だ三毒四慢の大虚に出でず（一心五戒魂）

〔四慢〕己を恃みて他を凌ぐを慢と云ふ、これに(1)慢、(2)過慢、(3)慢過慢、(4)我慢、(5)增上慢、(6)下劣慢、(7)邪慢、の七慢ある、その中の四つを取つて四慢と云ふ。平家物語・巻五、勸進帳に、「本有心蓮の月の光幽にして、未だ三毒四慢の大虚に顯はれず」。

しやうぶつのけみやう　生佛の假名を立つるといへども、法性隨妄の雲厚く十二因緣の峯にたなびき（一心五戒魂）

〔生佛の假名・生佛一如（その條を見よ）〕なれども、假にその相につきて衆生と佛陀との名をつける、これを生佛の假名といふ。平家物語・巻五、勸進帳の條に、「夫れ惟れば眞如廣大なり、生佛の假名を立つといへども、法性隨妄の雲厚く覆ひて、十二因緣の峯にたなびきしより以來云云」。

じやうみやうこじ　淨名居士の方丈に三萬二千の座を並べ、諸佛を請じ給ひしも斯くやと殊勝に羨し（盛久）

〔淨名居士〕維摩居士を云ふ。維摩經・不思議品に、「於レ是長者維摩詰現二神通力一、即時彼佛遣三萬二千師子之座、高廣嚴淨來入維摩詰室、諸菩薩大弟子釋梵四天王等、昔所未レ見、其室廣博悉包容三萬二千師子之座、無レ所二妨閉一」。平家物語・灌頂巻、小原御幸の條に、「かの淨名居士の方丈の室の内に三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけんもかくやとぞ覺えける」。

諸阿修羅等故在大海邊　諸阿修羅とうこざい大かいへん、そも三惡四趣は深山海づらにありと御說に說かれしが（女護島）

諸阿修羅等はもともと大海邊に在住してゐるとの意で、この文句は報世經にあると云ふ。「三惡」は地獄・餓鬼・畜生を云ひ、これに修羅を加へて「四趣」と云ふ、趣は趣き住む義で、即ち衆生が自己の業に引かれて趣き住む故に云ふ。平家物語・有王が島下りの條に、「諸阿修羅等故在大海邊とて、修羅の三惡四趣は深山大海の邊にありと、佛の說き置き給ひたれば」。

＊すだく　沖洲にすだく浦千鳥（國性爺）

集る。平家物語・巻三・有王が島下りに、「沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく浦千鳥」。

近き甲斐なき千賀の鹽竈身を焦す（重井筒）

尋ね人の近き所に居るも知らねば詮方なく、どうせうかと問える意で、平家物語巻六、小督の事の條に、冷泉大納言隆房の歌、「思ひかねぬ心はそちにみちのくの千賀の鹽竈近き甲斐なし」に據つたのである。

月常住の御燈をかかげ、霧不斷の香を焚き（大織冠）

月光は眞如常住の御燈をかかげたやうで、霧の鬚鬚せるは斷えず香を焚いてゐるやうである。平家物語・灌頂巻・小原御幸の條に、「髮破れては霧不斷の香を焚き、櫺落ちては月常住の燈をかかげ」。

艫舳に櫓を立てちがへ脇楫を入れ、いづ方へも廻し易いやうにと、言はせもあへず（最明寺殿）

平家物語・巻十一、逆櫓の條に、「艫舳に櫓を立てちがへ脇楫を入れて、どなたへも廻し易きやうにし候はばやと申しければ」と見え、なほ巢林子のこのつぎに書き續ける文も、平家物語・逆櫓の文の改作である。「わいかぢ」はその條を見よ。

流され人の彼の島で流す卒塔婆（薩摩歌）

俊寛僧都、平康頼、藤原成經の三人薩摩の鬼界島に流されて赦免なきより、深く歎いた中にも康頼はあまりに都を戀しがり、「薩摩がた沖の小島に我ありと、親には告げよ八重のしほかぜ」「思ひやれ暫しと思ふ旅だにも、なほふるさとの戀しきものを」、といふ二首の歌を

千本の卒都婆に書いて海に流したこと、平家物語・巻二・卒都婆ながしの條に見えてゐる。

花咲く頃を埋れ木のみのなる果こそ口惜しけれ（十二段）

平家物語・巻四、宮の御最期の事の條、源三位頼政の歌に、「埋れ木の花咲くこともなかりしにみのなる果ぞ悲しかりける」。

＊まさきのかづら　まさきのかづら、青つづら、くる人ありとも知り給はず（蟬丸）

〔正木葛〕「つるまさき」ともいふ、山野に自生する常緑の葛である、葉は對生し楕圓形で鋸歯がある、黄緑色の小形花聚り咲く。平家物語・藤頂卷、小原御幸の條に、「正木のかづら青つづら、くる人稀なる所なり」。本草綱目に、正木葛は四時凋まず厚葉堅強なるもので、花咲かないで實を結ぶ由を記し、常緑なものなれば眞幸の意であらうといふ。同じ名の葛に南天に似て黒みあり、冬の初に紅葉して美しいものがある。眞柝に析きて蠶とするよりの名であるといふ。古今集・神あそびの歌に、「深山にはあられふるらし外山なる、正木のかづら色づきにけり」とあるは、卽ちこの眞柝葛のことである。巣林子は常緑葛をいうたのであらう。鎌田兵衛名所盃にも、「常磐堅磐の正木のかづら、絶えず蠶きせず萬萬年」と云うてゐる。

〔正木葛〕

丸木橋ふみ返しては落ちそめて（加增曾我）

平家物語巻九。小宰相の條、女院の歌、「ただたのめ細谷川のまろき橋、ふみかへしては落ちざらめやは」。

屋島院宣の請文に、頼朝昔の厚恩を忘れ、狼羸の身を以て猥りに蜂起の亂を致す（鑑幣）

平家物語巻十、屋島院宣の請文の條に、「然るに昔の洪恩を忘れて芳意を存ぜず、忽ちに狼羸の身を以て妄りに蜂起の亂をなす」。

ゆがみ　經景さもとや思ひけん、手綱を鞍のゆがみに捨て、左右の鐙を蹈みすかし弓弦をくはへ（最明寺殿）

「ゆりがみ」（搖髪）の略。「鞍のゆがみ」とあるは「馬のゆがみ」の誤である。平家物語・巻九、宇治川の事の條に、「梶原さもあらんとや思ひけん、手綱を馬のゆがみに捨て、左右の鐙を蹈みすかし腹帶を解きてぞしめたりける」。

頼朝昔の厚恩を忘れ云々

「屋島院宣の請文に云云」を見よ。

（備考）巣林子が平家物語から脚色して取入れたものでは、娥歌かるた、平家女護島などはその主なものである。

平治物語に據れるもの

海底の魚は深けれども釣すべく、靈上の鳥は高けれども射つべし、計り難きは人心（鎌田兵衛）

平治物語、義朝野間下向并忠致心替の條に、「されば白氏文集に、天をも度りつべく、地をもはかりつべし、ただ人のみ防ぐべからず、海底の魚も天上の鳥も、高けれども射つべし、深けれども釣すべし、獨の心の相迎へる時、咫尺の間もはかること能はず」。

ぎよりよう　惡源太義平は練色のぎよりようの直垂（鎌田兵衛）

平治物語に、「義平は生年十九歳、ねり色魚綾のひたたれ」と見えてゐる。ここの文は平治物語に據つたのであるが、魚綾はなこ（魚子の轉）地のことで、魚のはらごのやうな綾の義との說もあれど明でない。貞丈雜記・巻五に、「魚綾は織物の名なるべし。扨如何なる織紋ぞと云ふに詳ならず、知らざるを知らざるとするにはしかじ」。

そなたは異國の范蠡をやらるるの

「はんれい」を見よ。

＊はんれい　これ比丘尼殿、そなたは異國の范蠡をやらるるの（女楠）　范蠡・西施を湖水に沈め（艶狩）

〔范蠡〕支那春秋戰國時代・越王勾踐の忠臣である。勾踐が吳王夫差と會稽山に戰ひ敗れて捕へられた時、范蠡智謀を盡して之を救ひ、後に勾踐をして夫差を滅さしめた。吉野都女楠のここの文は、平治物語巻三に、越王勾踐が吳王夫差と會稽山に戰ひ敗れて捕へられ、吳國の姑蘇城の獄に投ぜられた。勾踐の忠臣范蠡身を俏し、魚鹽を荷ひ魚商人となつて吳國を廻り、姑蘇城の獄に近寄り、一通の書を魚腹に入れて獄内に投じた、勾踐之を拾ひ魚腹より書を取出せば其文に、「西伯囚二羑里一、重耳奔二于翟一、皆以爲二霸王一、莫二死於許一歟」、とあるを讀んで自重したといふことが觀せてある、それに據つたのである。卽ち小山田太郎高家の妻が比丘尼に扮し、魚腹に一通の書を入れて投込んだ樣子を見て、後醍醐天皇に忠勤を盡す志を察して言うた詞である。

艶狩劍本地のここの文は、西施は越國の美女である、勾踐この女を吳王夫差に贈つた、夫差喜んで姑蘇臺を造り、西施と酒色に耽つて政治を顧みなかつた爲に遂に勾踐に滅された、勾踐・西施を取返して愛した、范蠡かくては國の爲によくないと思ひ、西施を誘うて小舟に乘せ、石湖に沈めたことを云つたのである。このことは通俗吳越軍談・范蠡扁舟歸三五湖一の條に委しく見えてゐる。

枕草紙に據れるもの

逢坂の鷄の空音か、太鼓の空音（扇八景）

仕舞太鼓の時でないのに仕舞太鼓を打つたのを、清少納言が孟嘗君の函谷開の故事を引いて詠んだ歌「夜をこめてとりの空音をはかるともよにあふ坂の關はゆるさじ」とあるをきかせて、面白う書いたのである。

***きのはし　あたら姿を慘たらしい、木の端と寢さいでも**（薩摩歌）　炭の折か木の端かといふやうなこの坊主（長明寺殿）

〔木の端〕役に立たぬ義、僧侶のことにいふ。枕草紙に「おもはん子を法師になしたらんこそはいと心苦しけれ、さるはいとたのもしきわざなり、ただ木のはしなどのやうに思ひたらんこそいとほしけれ」。徒然草に、「法師ばかりうらやましからぬものはあらじ、人には木の端のやうに思はるるよと、清少納言が書けるもげにさることぞかし」。

鳥の空音ははかるとも　鳥の空音ははかるとも、許す方なく云云（文武五人男）（國性爺）　鳥の空音ははかられど、佛神の感應にや判官安宅の關を越え（桑鬘）

清少納言の歌に「夜をこめて鳥の空音ははかるとも、よに逢坂の關はゆるさじ」、とあるに據つたのである。この歌の意は「夜明けに先立つて鷄のまだ鳴きもせぬに、その虚鳴に函谷開の守衛は欺かれ通すとも、其方と我と逢ふといふ逢坂の關では、さやうな僞では通しませぬが、眞實のお心だから通しますと云ふのであつて、昔孟嘗君が秦を遁れて函谷開を夜陰に出ようとしたが門が鎖してあつた、そこで孟嘗君の食客の中に能く鷄鳴をなす者があつた爲に、遁れることが出來たと云ふ故事を引用したのである。

鷄の鳴く音を二聲三聲、かけいこうかけいこうと空音をはかる人の聲（關八州）

清少納言の歌「夜をこめて鷄の空音ははかるとも、よにあふさかの關はゆるさじ」とある中の語句を應用したのである。この歌は枕草紙、後拾遺集雜部、（小倉百人一首に出てゐる。

法師はもとより木の端

「きのはし」を見よ。

舞之本に據れるもの

あつぱれ御馬候や、爪髪の切り樣は鎌倉樣候な、追つ樣向ふ横端張、尾ロ相當爪根のくさり、骨合ひ肉並夜眼の節、作つくり付けたる如くなり（源義經）

舞之本、堀河夜討上卷に「あつぱれ御むま候や、爪髪の切りやうは鎌倉やう候な、おつさま向ふ横はたはり、をくちさうたう爪根のくさり、ししあひ骨なみよめのふし、あうつくり付けたるごとくなり」。「よめのふし」はその條を見よ。

***三部經**（百日曾我）

百日曾我に、禪師坊が三部經を說いた文は、舞之本・十番切に、曾我五郎時致が斬罪に處せられる際、淨土の三部經を說いた文を添削したものである。今この兩文を書きならべるも長長しいから略した。

***しひんせき　泗濱石の硯には水なくして墨の色心のまゝに候こと、いづれも度度御覽あり**（大織冠）

〔泗濱石〕舞の本に「しひん石は硯、かの硯のとくゆうは水なくして墨をすつて、心のままにつかふなり」。謠曲・海人に「花原聲、泗濱石、面向不背の玉」とありて、謠曲拾葉抄に、「私云、世に泗濱石は硯なりといへり、然らば泗濱石にて作たる硯歟。

まはれば三里曾我中村、山道なれど直に打てば十八町（扇八景）

舞之本・和田酒盛に、「廻れば三里、すぐに打てば五十町、廻らば時刻もうつりなんと思ひ、曾我中村にさしかかり」。

萬戸が其日の裝束には、阿耨菩提の腹卷に隨求陀羅尼の籠手をさし云云（女護島）

幸若舞大織冠に據つたものである。大織冠（舞之本）に「萬戸が其日の裝束に、神通ゆびのうでかね、さはんやかんの臑當し、妙法蓮華のつなぬきはき、忍辱慈悲の鎧を草摺長に著くだして、阿耨多羅三藐三菩提の五枚兜を猪頸に著、忍びの緒をぞめたりげる、降魔利劍の大がたな、ま十文字にさすままに、大たうれんといふ劍あしを長に結んで下げ、云云」。

萬戸このよし聞くよりも、云云（女護島）

「萬戸このよし聞くよりも」は大織冠（舞之本）にある文であるが、その後の文は巢林子が改作してゐる。

（備考）

巢林子が舞の本から脚色して取入れたものでは、出世景清には景清、大織冠には大織冠、頼朝伊豆日記の初段には文覺、百合若大臣野守鏡には百合若大臣、用明天皇職人鑑の山路のことには烏帽子折、などはその主なるものである。

萬葉集に據れるもの

いほほた立てて山姫の、手織の錦誰れに着よ（酒呑童子枕言葉）

萬葉集巻十の歌に、「棚機の五百機たてて織る布の、秋より衣誰かとりみむ」。

鸞の子て子にならぬ時鳥（扇八景）

鸞の巣て育てられ、子て子にならぬ時鳥（春庚申）**鸞の卵の中の時鳥、しやが父に似て父に似ず**（乗好）

時鳥は巣を作らずして卵を鶯の巣の中に産み、鶯はそれとは知らずしてぬくめて孵化さすといふ。萬葉集巻九、詠二霍公鳥一一首并短歌の題にて、「うぐひすの生卵の中に霍公鳥ひとりかへりて、卵生れて己が父に似ては鳴かず、己が母に似ては鳴かず、云云」。

着馴れし衣逆様に返して召すは魂結び（持統天皇）

衣を返し着て寝る時は思ふ人を夢に見、魂通ふといふことは萬葉集にも古今集にも見えてゐる。萬葉集・巻十二に、「白妙布之袖折返寝者香妹之容儀乃夢二四三湯流」。古今集・戀部二に、「いとせめて戀しきときはうば玉の、夜のころもをかへしてぞきる」。

古歌にも奈良茶かや　されば古歌にも奈良茶かや、この手盛にて二よそひ（大織冠）

萬葉集巻・十六、有由縁并雑歌部に、「奈良山の兒手柏の両面に、かにもかくにも、佞人の友」とあるを、謡曲・百萬（喜多流）に引用して、「奈良坂や兒手柏の二表、兎にも角にも、佞人の云云」と見えてゐるので、巣林子これを取つて古歌にもといひ、「奈良坂や」を「奈良茶かや」にもぢり、「このてがしはの二表」を「このてもりにて二よそひ」ともぢつたのである。「ならちや」なども見よ。

戀草の力くらべ　男子に女子の勝ちはただ二つ、やや産むことと戀草の、力くらべの石の名や虎（虎が屠）

ここの文は、萬葉集巻四、相聞、賀河女王の歌に、「戀草を力車に七車、積みて繰ふ・く吾が心から」、とあるに據り、男子に女子が勝つのは子を産むことと、戀する力との二つであるとの意に、戀の力競べの「虎が石」（その條を見よ）をいひかけたのである。

七珍萬寶より子程の寶よもあらじ（醒大臣）

萬葉集、山上憶良の思子等歌の反歌に、「銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」と見え、遷兒・古日の夭折を歎いた歌に、「世の人の貴み藝ぶ七種の寶も我は何せんに」。

旅にしあれば椎の葉に盛る（最明寺殿）

萬葉集・巻二、挽歌の部に、「家にあれば笥に盛る飯を、草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」。

月の御舟　月の御舟に水棹さし、天のとよ川（加増曾我）

月の空行くさまを、舟の水をわたるに見たてていへる句、古歌に多く見えてゐる。其古いものには萬葉集巻七、雑歌の部、詠天の題で、「天海丹雲之波立月船星之林丹擬隠所見」。序にここの文に、「天のとよ川」とあるは、天の川とわたるに豐川をいひかけたもので、豐川は遊女の名。

黄楊の小櫛も取る間なく　あまの逆手を打ち休み、黄楊の小櫛も取る間なく（女護島）

萬葉集巻三、雑歌の部、石川少郎の歌に「しかの海人はめかり鹽焼き暇無み、髪梳の小櫛取りも見なくに」。伊勢物語の歌に「蘆の屋のなだの鹽焼き暇無み、黄楊の小櫛もささず來にけり」。

中大兄の御歌　この三つの山の爭ひ、中の大兄の御歌を萬葉集には載せられたり（奮稽山）

中大兄は後に天智天皇と申す。萬葉集・巻一、中大兄三山歌一首に、「高山波雲根火雄男志と、畝傍山と、耳梨と、相諍競き伐と、神代より如此聞有良し、古昔も然聞有許曾、虚蟬も嬬を相格良思吉。及び反歌に、「高山與耳梨山與、相之時、立見爾來之、伊奈美國波良」。

難波の今朝は珍しき妻子引具し（タ霧）

ここの文意は、昔仁徳帝の都であつた難波の延寶六の年の始めの今朝は、昨日に引きかへ珍しいここちがするに、我が妻は珍しいをいひかけたものであつて、萬葉集巻十一の歌、「難波人葦火焼く屋の煤したれど、己が妻こそ常珍しき」に據つたのである。

名乗りて過ぐる杜鵑、しやが父に似て父に似ず、子は色里に初音ふる（奮門松）

萬葉集巻九に、「詠霍公鳥一首并短歌」の題で、「鶯の之、生卵の中に、霍公鳥、獨所生而、己父聞、似而者不鳴、己母聞、似而者不鳴、字能花乃、開有野邊従、飛飯、來鳴令響、云云」とあつて、反歌に「霍公之、雨零夜乎、霍公鳥、鳴而去成、何怜其鳥」とあるに據つたのである。「己」は「し」と訓めど「しや」と訓んでもある。「己」は、巣林子は「しや」といつたので、「おのれ」といふこと。倭訓栞に「萬葉集の己父己母をしやがちちしやがはとよめる事、俊頼朝臣の抄物に見えたり」と見えてゐる。奮門松のここの文は、與次兵衛を杜鵑に喩へ、與次兵衛が父の眞面目なのに似ないで、放蕩で色里で羽振を利かす意にいふ。

はつをのかがみ　夫を思ふ山鳥の、はつをのかがみ嫁鏡（持統天皇）

（極尾の鏡）「はつを」は（ほつを（秀つ尾）の轉で、尾の中の長き尾、しだり尾をいふ。ここの文は萬葉集・巻十四、相聞の部に、「山鳥のをろのはつをにかがみかけ、となふべみこそなによそりけめ」、とある歌の古註に、山鳥を飼へども鳴かなかつたが、尾の方に鏡を置いたれば友を繰ひてよく鳴いたといふ説によ

つて、男女相愛の意を含めてかくいうたのである。

春秋の眺を爭ふ　位爭ひ歌爭ひ春秋の眺を爭ひし雲の上人の風骨にも劣るまじ（會稽山）

萬葉集・巻一に、「天皇詔ニ内大臣藤原朝臣、競ニ憐春山萬花之艷秋山千黄之彩ニ時、額田王以ニ歌判ニ之歌ニ」と詞書ありて春山の美景と秋山の美景を驛げて、秋山の方が更に好いと詠んである。蓋しこの歌によっていうたのである。

＊ひれふるやま　足を爪立て伸上り、見送る影も遠ざかる、唐土の望夫山、我朝の領巾麾山、今の我身の我思ひ、石ともなれ山ともなれ、動かじ去らじとかき口説き（國性爺）

〔領巾麾山〕肥前國松浦郡濱崎村の西南、鏡村の東嶺をいふ。欽明天皇の朝大伴狭手彦朝命を奉じて三韓に渡る時、その妻別を惜み山に登つて領巾を脱して振つたによつて、その山を領巾麾山と稱することになつたといふ。萬葉集・巻五に、「大伴佐提比古郎子特被ニ朝命一、奉ニ使藩國一、艤ニ棹言歸一、時佐用姫嬬面嗟ニ此別易一、歎ニ彼會難一、即登ニ高山之嶺一、遥望ニ離去之船一、悵然斷ニ肝、黯然銷ニ魂、遂脱ニ領巾一麾ニ之、傍者莫レ不ニ流涕一、因號ニ此山一曰ニ領巾麾之嶺一也」。「まつらさよひめが石となる」を見よ。

松のをの千代もと結ぶ　名もよしみれと聞くからに頼みて暫し松のをの、千代もと結びしかれごとのあだになり行く朝顔の（蛾）

松は千年も經るものなれば、松の枝を結んで我が壽命久しかれと齡を契るのである。古昔無事を祈り願ふ兇に草木を結んだもので、萬葉集・巻二に、「撃白刀乃、潮松之枝乎、引結、真幸くあらば、また還り見む」。同書・巻六に、「靈剋る壽者不知、松之枝、結情者、長等曾念」。漢土では別に臨む柳を結んだ。「離別河邊絹ニ柳條一、千山萬水玉人遥」の詩は即ちこれを示す。

眉根かきはなひ紐解け亂るれど（小栗判官）

「やなぎ」の條を見よ。

陸奥の黄金の花ぞ咲きにける（蛙合戰）

萬葉集・巻十八、大伴宿禰家持の詠める歌に、「須賀呂伎能、御代佐可延牟等、阿頭麻奈流、美知能久夜麻爾、金花佐久」とあるに據つたのである。

水莖の岡の葛原風騒ぎ恨みつわびつ（津戸三郎）

水莖は瑞莖の若しの意で、その若を普通にて岡にいひかけた枕詞。葛葉は風に飜つて裏反り勝なれば、裏見を恨みにいひかけたのである。萬葉集・巻十二、讀人知らずの歌に、「水莖の岡のくず葉を吹きかへし云云」。古淨瑠璃・信田妻にある歌に、「繰しくは尋ね來て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」。

柴野ゆき標野行き、行く道筋は多けれど（蛾）

萬葉集巻一、額田王の歌に、「あかねさす紫野ゆき標野ゆき、野守は見ずや君が袖振る」。

大和國天の香久山といふは女山云々（會稽山）

「中の大兄の御歌」を見よ。

わかの浦にしほ滿ちくればかたを波、あしべをさして田鶴鳴きわたる（百日曾我）

この歌は萬葉集・巻六、雜歌部に山部宿禰赤人の詠として出てゐる。「かたをなみ」は渦を無みで、渦が無い故にの意である。一首の意は、和歌の浦に潮が滿ちて來れば干潟が無くなる故に、鶴は岸の蘆邊をさして寄來つて鳴き渡ることよの意である。巣林子は「かたをなみ」を片男波の義に曲解して、この下の文に「實にこの浦のならひとて、女浪は立たで片男波云云」といつてゐる。

大和物語に據れるもの

生田の川に身を棄てし、うなね少女が名のしるしとへば（天神記）

生田川は攝津國武庫郡にある川で、摩耶山の陰から流出て布引の瀧となる。大和物語に、昔津の國に住む女があつて、二人の男より戀慕され、どちらの男へも嫁せられないで思ひわづらひ、「住みわびぬわが身投げてむ津の國の、生田の川は名のみなりけり」と、辭世の歌を詠んで生田川に身を投げたことが見えてゐる。「うなねをとめ」はその條を見よ。

＊ねくたれがみ　引いて留むる寢くたれ髪を、底の玉藻と見るめ和布に（松風）

〔寢腐髪〕寢亂れ髪。大和物語の歌に、「吾妹子が寢くたれ髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞかなしき」。

はもり　樗折敗く青楓、楢の葉もりのたたりなし（會稽山）

〔葉守〕葉守の神をいふ、饌を守る神であらう。蓋し大和物語の歌に、「かしは木に葉守の神のましけるを、しらでぞ折りしたりなさるな」とありて、葉守の神はかしは木を守る神、かしはの葉は古代に食物を盛つたよりして食器の稱にもいふによつて、葉守の神を饌を守る神としたものであらう。枕草紙に、「かしは木いとをかし、はもりの神のますらんもいとかしこし」と見え、和訓栞に、「はもりのかみ。葉盛の神の義にして、實は御饌津の神を申すにや」と見えてゐる。

わぎもこ　我はもとより此池の底の玉藻と、黑髪の亂れ心の戀路より執着の罪深く、浮きもやらぬわぎもこの采女が執心侍ふなり（一心五戒魂）　わぎもこがれくたれ髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しき（天智天皇）

「わがいもこ(吾妹子)の約、女を親んでいふ。ここの文は大和物語に、「昔ならの帝に仕うまつる采女ありけり、顔かたちいみじう清らにて、人人よばひ殿上人などもよばひけれど達はざりけり、そのあはぬ心は帝を限なくめでたきものになむ思ひ奉りける、帝召してけり、さて後又も召さざりければ限なく心憂しと思ひけり、よるひる心にかかりて愛え給ひつつ戀しく佗しくおぼえ給ひけり、帝は召ししかど事ともおぼさず、さすがに常にはみえ奉る、猶世に經まじきここちしければ、夜みそかに出でて猿澤の池に身を投げてけり、かく投げつとも帝は得しろしめさざりけるを、事のついでありて、人の奏しければ聞召してけり、いといたうあはれがり給うて池のほとりにおほみゆきし給うて人人に歌よませ給ふ、柿の本の人麿、わぎもこがぬくたれ髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞかなしき、とよめる時に帝、猿澤の池もつらしなわぎもこが、玉藻かづかば水ぞひなまし、とよみ給ひけり、さてこの池に墓せさせ給うてなむ歸らせおはしましけりとなむ」とあるに據つたのである。

雜（其の他の諸書）

引用の少きものを集め林子の文の片假名順に收錄した。

秋風に鱸釣る松江の港　日の本出でし秋風の、立ちもかはらずその儘の、未だ秋風に鱸釣る松江の港に着きにけり(國性爺)

雅有卿集に、「世の中は唯あき風に鱸釣る、浦の苫屋ぞ住みよかりける」。松江は鱸の名産地である。東坡の後赤壁賦に、「擧網得魚、巨口細鱗、狀如三松江之鱸一」。大明一統志卷九に、「松江在三(松江)府城北七十二里、一名三吳淞江一、源出三大湖一、東注三于海一」。

あさくは人を思ふものかは(吉野忠信)

今昔物語、卷三十に、内舍人が大納言の娘の美貌を見て思ひ焦れ、遂にその女を奪うて馬に乘せ、奥州安積郡安積山に逃げ行きて住居してゐたが、女は容貌の衰へたのを恥ぢて、「あさか山かげさへ見ゆる山の井の、淺くは人を思ふものかは」と詠み、心細さに堪へないで、思ひ死にに死んだことが書いてある。

あしたたぬ神の昔の西の宮(西王母)

蛭子は生れて三年脚が立たなんだといふ。「あまのいはくすぶね」を見よ。西の宮は攝津國武庫郡西の宮町にある西の宮惠美須神社。

阿波の鳴門の波風も、渡りくらべて世の中を、目出度く悟る(兼好)

兼好法師の詠と傳ふ歌に、「世の中を渡りくらべて今ぞ知る、阿波の鳴門は波風もなし」。

天照大神に奉る四月九月の神御衣は、和妙の御衣廣さ一尺五寸、荒妙の御衣廣さ一尺六寸、長各四丈(振袖始)

本居宣長撰、玉かつま第十三卷、遠江國より太神宮に神御衣を織て奉る事の條に、「遠江國人内山眞龍がいへるは、かの國の濱名郡神戸鄕岡本村といふに機殿有て、年毎に四月と九月と神御衣を織りて伊勢内宮に奉る、その機殿はかの村に神氏目大夫といふ者、世世相傳へて年毎に新しく造る、置葺の屋なり、神庫もあり、ふるめきたる造りざまなり、神御衣は年毎に三河國の大野村といふより、生絲を此岡本村に送り奉るを件の機殿にて織て奉る、和たへなりと云き」と見えてゐるから、巢林子當時もかくあつたのであらう。「にきたへ」「あらたへ」はその條を見よ。

天の下咎めて陳ねし大和歌、例もふりし雨乞の小野の小町(倉稿山)

俗に小野小町の雨乞の歌と傳へられてゐる、「理も日の本なれば照りもしつさりとては又天が下とは」とある詠に據つたものである。この歌は正保慶安頃の小野小町が雨乞の繪卷の中にも載り、新撰狂歌集(元和頃成)には、「日でりの年さる人のまゐる」。としてこの歌が載つてゐる。

雨降らば降れ風吹かば吹け(輝丸)

一休の歌に、「有漏路より無漏路へ歸る一休み、雨降らば降れ風吹かば吹け」。

ありのすさみにくかりし(佐佐木)

「ある時はありのすさみに憎かりきなくてぞ人は繼しかりける」の古歌に據る。

あればある世の命(天神記)

新千載集卷十八、前大納言良冬の歌、「うきながらあればある世の習こそ今は我が身に思ひ知らるれ」。

異國のしんじが螺中より龍女を得たる其例(西王母)

「しんじ」は「じんし」(任氏)の誤。(南大門秋彼岸には任氏となつてゐる。愈愚隨筆(延寶元年刊、伊有隣編)に、「見二閻越記一、其の略に云く、任氏の子あり、家貧しうして孝を以て稱せらる、釣りして一つの巨螺を得たり、中に一つの女子あり、既に將れて歸る、善く布を織る、識者ありて曰く、これは鼈須布なり、重價を倍與す、任益々喜びて且つ以て親を養ふに足れり、或人の曰く、これ必らず龍女ならん、領下必らず明珠あらん、殺して取るべし。何ぞ止だ鼈布の直のみならんや、任歸りて謀らんとす、女遂に龍に化して去る、今閻中に有二驪江一是なり」とあつて、もと閻越記に載れる故事である。

急げば廻る瀨田鰻(反魂香)

古歌に「ものの〻ふの矢橋の船は早くとも、急げば廻れ瀨田の長橋」とある句から、瀨田鰻へつづけたのである。「瀨田鰻」をも見よ。

一年三百六十日、紀日が三日云云

「三百六十日紀日が三日云云」を見よ。

一首の歌　君を慕ひて太宰府へ、たつた一飛梅田橋、跡老松の綠橋、別れを歎き悲しみて、跡にこがるる櫻橋、今に話を聞き渡る、一首の歌の御威德(天網島)

菅原道眞の詠歌、「梅は飛び櫻は枯るる世の中に、松はかりこそつれなかりけれ」とあるをさす。この歌は榻鳴隨筆にも出てゐる。ここの文については、「飛梅」「あと老松の綠橋」

「別れを歎き悲しみて跡にこがるる櫻橋」をも見よ。

僞のなき世なりけり いつはりのなき世なりけり神無月時雨れて（國性爺） 僞のなき世なりけりむら時雨（最明寺殿）

續後拾遺集・冬部、前中納言定家の歌に、「いつはりのなき世なりけり神無月、誰が誠よりしぐれそめけん」。

古鎧にかはる紙衣さへ風の射る矢は通さざりけり（大原問答）

熊谷蓮生坊の歌に、「古の鎧にまさる紙衣、風の射る矢も通らざりけり」とあるに據ったのである。

祈らずとても神や守らんとの御歌（謠曲）

金玉抄・菅公の歌に、「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん」。謠曲・班女にも出てゐる。

歌に詠むてふ文字が關 長門の秋の夕暮は、歌に詠むてふ文字が關（博多）

文字が關は古歌に詠まれた歌枕なるによっていふ。新勅撰集卷十九、雜歌四の部、入道前太政大臣の歌にも、「春秋の雲居の雁もとどまらず、たが玉章の文字の關守」。文字は門司とも書き、國花萬葉記卷十三、長門國の條に「門司關＝赤間と門司昔は……長門路につづきて一つなり、……、門司今は豐前の内になれり」と見えてゐる。

馬に七箇の祕事、三箇の手綱五箇の鞍、陰陽の鞭、朝嵐・大風・小風・運び・延べ足・千鳥足・霰流し（小栗判官）

大坪流馬術の祕傳をいうたものである。船田和先（多喜治）撰・鞍之傳（寫本）に「陰陽の策の事＝陰陽の鞭は一體にして陰は意也、陽は業働て動く象也、用る鞭に意を添へて、用る所の事理一體をいふ義なり、陰中の陽、陽中の陰是也、又陰は靜にして鞭を用ひざるの意あり」と見えてゐる。朝嵐・大風・小風・運び足・延べ足・千鳥足・霰流は、何れも曲乘の足並の稱。此文落葉集卷五、競馬女踊に引用さる。

おきもせず寢もせで露のたまたまも（雲門松）

新後撰集・卷四、秋歌上の部、宗尊親王の歌に、「小萩原夜寒の露のおきもせずねもせで鹿や妻を繼ふらむ」。

おもひたつ木曾の麻衣あさくのみ、染めてやむべき袖の色かは（兼好）

遁世を思立つて木曾路をたどり行くこの身は、墨染衣の袖淺く染めて止められぬやうに、深く思ひそめたことぢやとの意。風雅集・卷十七、雜下部に「世を遁れて木曾路といふ所を過ぐるとて。兼好法師」とありて、この歌が載せてある。

かかれとてこそ生れけめ

「よしやよしかかれとてこそ云云」を見よ。

餓鬼は水を火と見るとや（娥）

和名抄・天地部・神鬼類に「餓鬼＝内典云餓鬼、其喉如釘、不ノ得ノ飲ノ水、見ノ水則變成ノ火」。

懸くる佛の御手の絲（曾根崎）

彌陀如來は衆生濟度の手引に御手に絲を懸けてゐられる。榮花物語に、「御堂殿御臨終の時、御手には彌陀如來の御手の絲を引かせ給ひ」。平家物語・小原御幸の條に、「一間には來迎の三尊おはします、中尊の御手には五色の絲を懸けられたり」。

景清はかく魚の鱗を眼に張り、賴朝を欺きたり（平正犬）

鹽尻卷十九に、「世間惡七兵衛景清類朝をはからんが爲に、……、眼に魚鱗を覆ひ盲人の形となりて幕下を伺ひしといへり、按に……、鱗を眼にあてはかりしは上總五郎兵衛尉なり（東鑑十二）、これらの古事世に出ざりし時、誤りつたへて皆景清とせり」。ここの文に「斯く魚の鱗を眼に張り」とあるから、名張八郎爲勝が魚の鱗を眼に張り、盲目をよそほひ座頭となり、鶴還と變名したものであって、鶴還とは竹本筑後掾の脇三味線彈き瞽者鶴還三二の姓を利用したものであらう。

片削ぎの千木や內外に疊りなき（會稽山）

「片削の千木」はその條を見よ。風雅集卷十九、神祇歌の部、度會朝棟の歌に、「片削ぎの千木は內外に變れども、誓は同じ伊勢の神風」。

神は人の敬ふによって威を增し、人は神の德によって運を添ふ（烏帽子折）（百合若）

御成敗式目に、「神者依二人之敬一增レ威、人者依二神之德一添レ運矣」。謠曲・白髭に、「神は人の敬ふによつて威を增す」。

かんざきのたへ 建仁三年五月十三日に神崎の妙といへる傾城大內に參る由、定家卿の明月記に載せられたり（三世相）

〔神崎妙〕藤原定家撰、明月記に、「建仁三年五月十三日。雨降時時止、巳時參上御二向殿一、小時還御、遊女著座、神崎の妙すべりて顯仆、云云」。

聞きに北野の時鳥 聞きに北野の時鳥、初音を鳴きしその昔（反魂香）

しでの田をさの時鳥、聞きに北野の蓋畠（氷朔日）

聞きに來たに北野をいひかけたもので、「鳴け聞かん聞きにきた野の時鳥」といふ句に據ったのである。この句は傳說に、「鳴くかとて聞きにきた野の時鳥」としたところ、鳴くかとてでは疑の詞であるとて時鳥鳴かないので、「鳴け聞かん聞きにきた野の時鳥」としたら、忽ち鳴いたといふ。傾城反魂香のここの文に北野といへる話には、後に天滿天神の告をいひ出す伏線である。心中刄は氷の朔日に、きた野の藍畑といへるは、神明宮（その條を見よ）附近は當時藍畑であったからである。

衣笠山に白布引きはへ、夏の雪を御覽ぜし帝もあり（關八州）

衣笠山は山城國葛野郡衣笠村の西にある。寬平法皇仁和寺に御座します時、夏の雪景色を御覽なさらうとして、この山に白絹を張らされたと云ふ俗說がある。

金の冠を被ぬばかり、しやくは持病にありとかや（酒呑童子）

金の冠は金巾子の冠であって天皇の御冠。しやくは笏を病の癪にいひかけて、世話に碎

けた文である。此文句は撫尾漫筆卷五に「芝居主竹田小出雲狂言の筋を思ひついて、門左衛門筆をとる、穢稿以貫先生もその席に居られしが、段段作文するうち、金の冠被ぬばかりとは、町人の事蹟に狂言綺語ながら甚だしきに過きたり、明日書き直させ候べしと、小出雲申しけるに、以貫子のいへるは、いかさまけやけき言葉なり、定めて門左了簡あるべしと寐られけろ、翌日門左來りて、よべのあとを書かんと、金の冠被ぬばかり、しやくは持病にありとかやと續けたれば、兩人は慨然たりしとかや」とあつて、有名な文句である。

藏の戸出づる鶯

「春知り顏に七つ屋の云云」を見よ。

くれみぐさ　扨また月と花なくば何をかさしてくれみ草、山の外にといひけろも心につれて夕見草（十二段）

心をいふ。源俊頼撰・真傳抄に、「花と月となくば何をかくれみぐさ、山の外にも雲のあれども」。

黄帝華を以て鞠を作らせ蚩尤が首を表し、諸人の足にかけさせ調伏あり（持統天皇）

蹴鞠九十九箇條・蹴鞠之起之事の條に、「大唐にて蓑を始、黄帝の御敵蚩尤が頭也、其故は惡魔の大將災難の家主なり、上天之爲に敵國をまで人民の命を失、其身鎧にして却て矢太刀たたず思ひのままふるまふ、黄帝退治の術を失ひ給ひて天に祈り給ひしかば、無雙の相人出來て、占ひて云、蚩尤が頭と象り鞠をあそばし給へと、大蟲王の滅び給ふ樣を悉く申上間、被博士申ごとくに鞠を拵て翫給ふ、程なく涿鹿の野にて蚩尤と合戰ありしかば、天のせめを象て鎧の身皆とけて、調伏の故に其處にて討たれ滅失せ畢云云」。

ぐわつしのゐりよう

「げつしのゐりよう」を見よ。

月支の遺龍　月支の遺龍といつし人、妙法蓮華經卷第一乃至八の卷までの經文の外題を書き給ふ（賀古教信）

ここに月支とあるは天竺を云うたのである。西域記に、「天竺此云月」。異朝法華傳記・卷八に、遺龍は井州人と書いてある。十訓抄・中卷第六、可存忠直事の條に、「天竺に烏龍といふ手書・佛法をそむく者にて、多くの物を書くといへども佛法の方には一文字をも書かずしてやみにけり、其子遺龍と云ふ者相戀いで、いみじき手書なりけるを、烏龍死ぬる時、汝あなかしこ、我が如く佛法の方の物といはん一字も書くなと言ひて失せにけり、かかる不善の者なれば、惡道に落ちて大苦惱を受けたりけり、遺龍父の遺命に從ひて深く佛法を背くといへども、國王の勅宣によりて心ならず法華經の外題六十四字を書く間に、其字六十四體の佛となりて、烏龍が落つる所の地獄に行きて苦患を救ひ給ふによりて、父得道のよし遺龍夢の告げを見たりけり」。

外面似菩薩、內心如夜叉（蟬丸）（圓八州）

女人が紅粉を粧ひ、溫順の相をしてゐるを見れば恰も菩薩のやうなれども、その內心は邪惡を懷して、夜叉の如く暴惡であるとの意。「夜叉」はその條を見よ。寶物集に、「華嚴經に曰く」として「外面似菩薩、內心如夜叉」と見えてゐる。

勾踐は石淋を嘗め、會稽の恥を濯めし例（雪女）

支那春秋戰國時代、越王勾踐は吳王夫差と會稽山に戰ひ敗れて吳に捕へられ、吳王の石淋病の便を嘗めて吳王の機嫌を取つたが、後遂に吳王の軍を敗つて會稽の恥を雪いだ。「せきりん」をも見よ。

腰なは何ぞ日本一の大井川（丹波與作）

赤本・桃太郎に、「お腰の物は何ぞ日本一の黍團子」とある。巢林子は黍團子を大井川にかへたのである。

子は子なりけり鶯の（孫餐）

今鏡、村上の源氏、うちぎきの條、讀人知らずの歌に、「親の親ぞ今はゆかしき時鳥はや鶯の子は子なりけり」。

木幡山　雲に架橋・霞に千鳥、木幡山にあられども、こちや口無しとて音もせず（孕常盤）

山城國紀伊郡木幡山には山梔樹多く生茂したれば。以て口無しに言ひかけて答無き謎とする。新撰六帖・知家の歌に、「木幡山あるはさがなし口なしの、宿かるとても答へやはせん」。伏見常盤（寛永本）に、「木幡の里のことなれば、皆くちなしとて音もせず」。

戀しくは尋ね來て見よ法華經の、八卷が奥の九みやうかうたい（大覺）

「八卷が奥」とは、法華經八卷ある其第八卷の陀羅尼品を云うたのである。「九みやうかうたい」は九名二亀諦（諦また帝に作る）であつて、陀羅尼品の中の十羅刹女のことをいうてある條に見え、第九の羅刹女を亀諦と名づけ、譯して何所といふ。この羅刹女は天上人間來往自在であり、若し歸佛の後に從はば則ち諸法皆空無染にして、住著する所なきによつて何所というたのである。其他この歌の意明かである。（さてこの歌は、安倍晴明の生母といふ信太森の白狐が詠んだ歌の「戀しくは尋ね來て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」と構想同じうして別趣をそなへ、人のよく知れる歌である）。

戀せずば人は心のなかるべし、物のあはれこれよりぞ知る（三世相）

戀知らずの男はまことに落莫なもので、人としての生命がないといふべきである、物事にあはれを感じるも、この情寞あつてからこそ起るものであるとの意。藤原俊成の歌に、「戀せずば人は心もなかるべし、物のあはれもこれよりぞ知る」。

悟とて外に求むる心こそ　傳教大師の御歌に、悟とて外に求むる心こそ、迷ひそめけるはじめなるらん（蟬丸）

新後撰和歌集・卷九・釋教歌の部に、「悟とてほかに求むる心こそ迷ひそめけむ始めなるらめ」とありて、慈道法親王の御詠となつてゐる、これを傳教大師の歌としたのは思違ひである。さて一首の意は、吾人が認識する一切

の世界は皆各自が其心識から造出するもので、實に吾人の心識を離れて他の諸法があるわけではない、悟の道も吾人の心識を離れて他に求むべきものでない、さるお悟の道をば吾人の心識を離れて外から求めようとするこそ誤れるもので、これぞ即ち迷の始であらうと云ふのである。

さののくくたち 佐野のくくたち肴にて強ひ止めん、と詠み置きし古歌を吟じて凌げども（最明寺殿）

「佐野の蓴」「くくたち」は蓴立で、菜の蓴をいひ、おもに菘の蓴をいふ。箋注倭名類聚抄に、「蓴。久久太知、俗用二蓴立二字一、蓴菁苗也」。夫木集に、「篠原や佐野のくくたち肴にて、旅行く人を強ひとどめばや」。

澤水に上るも下る妻雲雀（藤幹）

新後拾遺集巻七、權大納言忠光の雲雀をよめる歌に、「影うつす野澤の水の底見ればあがるも沈むタひばりかな」。

さりともと昔は末も頼まれき、老は憂き身の限りぞと（鎧樫三）

續古今集・雜下部、道圓法師の歌に、「さりともと昔は末も頼まれき、老ぞうき身の限りなりける」。

三百六十日、紋日が三日足らぬとて忘八は嘆く、女郎はそれ程客に厄介を變替に行く客もあり（女殺）

貞享暦は一年の日數三百六十日である。大阪遊廓の紋日は一年に廣申日を除いても三十三日（もんび）を見よ）あつて、一ケ月平均約三日ある。女殺油地獄の上演された享保六年は七月に閏があつて、閏月の紋日は略されるので一ケ月の平均數の三日少いことになつて、その祝儀を得られぬを嘆き、又遊女は紋日が多い程多くの入費の厄介な客にかけ、客は遊女に頼まれて應諾しながら、費用の嵩む爲に約束を變改する者もあるとの意。

志賀の山越え頭は雪 顔の皺はささなみや、志賀の山越え頭は雪（雪女）

白髪の老人を云ふに、古歌「雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山越」の句に據つたのである。ここの文は、顔に皺の多きを、漣に喩へ、「志賀」にいひつづけたので、「ささなみや」は志賀の枕詞である。（序云、「雪ならば云云」の古歌は「花の吹雪云云」を見よ）。

しづのをだ卷繰返しくりかへし歸れや（天智天皇）

苧を績みて卷いたものを苧環と云ふ、賤の女の取扱ふものなれば、しづのをだ卷と云うたのである。ここの文は靜御前の歌、「しづやしづ賤のをだまき繰返し、昔を今になすよしもがな」の句を應用したので、「繰返し歸れや」の序に云うたまでである。（序に云、靜御前のこの歌は義經記に載つてゐる。蓋し古歌に「古のしづのをだ卷繰返し、昔を今になすよしもがな」とあるを、我名にもぢつて作替へたのである）。

師弟となつて七足去る（聖徳太子）

諫草に、「藝を習ふ人はまづ師匠をうやまひおそるべし、弟子は七尺去つて師の影をも踏むべからずとなり」。

正八幡大菩薩筑紫に御生の折からも、石上樹下の吉例あり（女夫池）

正八幡大菩薩とは譽田天皇（即ち應神天皇）をいうたもので、應神天皇は筑紫の石上樹下（その條を見よ）で御生れ給はれた吉例があろ、というのである。日本書紀・神功皇后紀に「皇后從二新羅一還之、十二月戊戌朔辛亥生二譽田天皇於筑紫一、故時人號二其產處一曰二宇瀰一也」。宇佐緣起に「十二月丙子定二瀰產之御產所、被造二內裏一、同十四日辛卯被二懸御手於彼槐枝一之時、王子御誕生」。貝原氏說に「宇瀰社在二糟屋郡宇瀰村一、所祭之神一座、八幡大神相殿四座、乃大神之產土也」。「石上樹下」を見よ

白雪かへつて黑し 物識顔なる文字の講釋、理を付けていふならば白雪却つて黑しとも云ふ義あり（國性爺）

公孫瓚の唱へた堅白異同の詭辯などに思付いたのであらう。綾錦・德元の俳句に、「何と見ても雪ほど黑きものはなし」。

しんじがら中より云云

「異國のしんじが螺中より云云」を見よ。

石上樹下 されば佛は石上樹下として、石の上・樹の下蔭の宿も厭ひ給はれば（薩摩歌）尾上の松の下やどりも石上樹下のいましめと、心とどめず行ひし（用明天皇）正八幡大菩薩筑紫に御生の折からも、石上樹下の吉例あり（女夫池）

屋外の石の上または樹木の下に坐臥するをいふ。この句は漢文の佛典中に見當らない。雜談集上に「盛年の頃樹下石上にして修行して、因行を熟すべかりけりと、後悔すれども益なし」。明德記下に「兄弟ながら出家して樹下石上の宿りをもなし」。「正八幡大菩薩筑紫に云云」はその條を見よ。

鶺鴒の鳥に習ひし妹背の道（雄）

「こひをしへ・どり」（繰教鳥）を見よ。

せたの長橋をとんどろとどろ、とどろとどろと蹈鳴し（懸物掛）

風雅集・巻二十、賀歌の部、兼盛の歌に「みつぎ物たえずそなふる東路の、勢田の長橋音もとどろに」とあるに據つたのである。

雪中の薫香逆樣に履きたる例

「武藏坊辨慶が雪中の薫香云云」を見よ。

先佛すでに去り、後佛はいまだ世に出でず（嵯峨天皇）

「先佛」は釋尊のこと。「後佛」は彌勒菩薩（「みろく」を見よ）のこと。

その名は言はじ名を問へば、父は長柄の田地持（二枚繪）

「物言はじ父はながらの橋柱、鳴かずば雉子も射られざらまし」の歌を應用したのである。この歌は攝津名所圖會・豐島郡雉子驛の條にも見えてゐる。播陽群談・巻八、野の部・雉子驛の條に、この歌を光照の詠としてある。狂言・禁野に、「父は長柄の人柱、鳴かずば雉子も射られまじきにと云ふ歌もあり」。

そも時は今五月の空云云

「時は今五月の空云云」を見よ。

そらに消えてはこれもまた、行方も

知らぬ思ひ草（曾根崎）
西行法師の歌に「風になびく富士の煙の空に消えて、行方も知らぬわが思ひかな」。

それ日本は神國たり（大掛物）
神皇正統記の冒頭の文にも「大日本は神國なり」と見えてゐる。

大地世界を以て一面の碁盤となすといへる本文あり……三百六十目、一目に一日を送る（國性爺）
枯杌集（寛文八年刊）巻一、圍碁の條に「横川禪師の碁の記にいはく、……凡盤のうへは婆娑世界なり、……黑白の石は晝夜なり、三百六十目は一年の日數、云云」。晉書、天文志に「蓋天如二圍碁一、地方如二碁局一」。

誰が狩すとはなけれども、落ちくる肉（宵庚申）
誰も狩してゐるのではないのに、逃げ落ちて來る鹿に、平右衛門の病衰して寢せ落ちる肉をいひかけたのである。

高天が原に神留まりまします（國八州）
延喜式巻八に「今年六月晦之大祓爾祓給比清給事乎諸聞食止宣、高天原爾神留坐皇親神漏岐云云」とあつて、大祓詞の中の文句である。

高御産日・生産日・事代主の八神殿（日本武尊）
延喜式（神祇官）の八神、即ち神御産日・高御産日・玉積産日・生産日・足産日・大宮賣・御食津・事代主の中の三神を擧げてかくいうた。

***たたく**　あさ江の水鷄よもすがら、叩かば叩け叩くとも、待人二人持たぬ身は（五人兄弟）
〔叩〕水鷄の鳴く聲は物を叩くやうに聞えるによつて、水鷄の鳴くをたたくと云ふ。紫式部日記に、道長が紫式部に心ありて夜訪れて逢はれぬなんだ翌朝の歌に、「夜もすがら水鷄よりけになくなくぞ、まきの戸口にたたきわびつる」。

妙の名は八巻ばかりにかぎらじな、松竹櫻當位即妙（大覺）
この歌は和泉式部の詠であつて人のよく知るところである。「當位即妙」とは、何物でも其位のままに妙であつて、即ち毒でも毒は其ままに妙であるとの意。

玉すだれ小町が歌（隅田川）
小野小町が詠といはれる歌に「雲の上はありし昔に變らねど、見しすだれの内ぞゆかしき」。

盥の底抜けて影も宿らぬ　傾城こまめにたらひが女房、請出したらひの底ぬけて、影も宿らぬきぬぎぬの、親を悲しみ妻を戀ひ（曙門松）
盥の底抜けて水たまらねば月影も宿らぬやうに、請出さうとしたことの空しくなつたことを、千代能の歌、「千代能が戴く柿の底ぬけて、水たまらねば月も宿らず」に據つたのである。「ちよのう」をも見よ。

たんふく　唐土蜀のたんふくが古事など常常に聞きながら、うかうかと書散らす故に似せられ（川中島）
〔單福〕徐庶を云ふ、潁上の人で字を元直といひ、單福はその替名である。蜀主劉玄德に仕へて軍師となつたが、魏主曹操が單福の賢なるを聞いて己が臣たらしめようとして、まづ程昱の謀を用ゐて單福の母を呼寄せ、而して後單福の母の筆蹟に似せて、若し汝が魏に降るならば母は死を免かれる由を記して單福に送つた。單福これを讀んで母が差出したものと信じ、その手紙を玄德に見せて言ふやう、予もと倆君樣と事を圖らうと思うてゐましたが、今は老母の危急を救はうとして心が亂れました、何卒徊暇を下されませよと、遂に奔つて魏に至つた。詳しくは通俗三國志、三編巻之五、徐庶定計取二樊城一、及び巻之六、徐庶薦二諸葛孔明一の條を見よ。（序云、山本九兵衛版七行本のこの所に單富となつてゐるのは單福の誤であらねばならぬ）。

千座の置戸に置足はし（酒呑童子）
許多のあまつかなぎを祓物を載す案の上に置き滿しの意。延喜式、巻八、大祓詞に「大中臣天津金木乎本打切末乎斷氏千座置座爾置足志波氏天津菅曾乎本苅斷末苅切氏」。日本書紀、巻一に「即科二案逡鳴尊一千座置戸之解除一、以二手爪一、爲二吉爪棄物一云云」。

月毛の駒に櫻狩（鎧櫻三）
「月毛」は葦毛の稍赤みた馬の毛色。「櫻狩」は近松作・當流小栗判官、小栗鬼鹿毛曲乘の段にも「明けの空行く月に鞭を揚げ、二千里刹那の驍馬の曲、之を名付けて櫻狩、父母の手綱といふとかや」と見えて、馬の息遣ひを知つて疾走さす鞭の打方で、馬術に於ける鞭祕傳の一。船田和先（多喜治）撰、鞭之傳（寫本）に「櫻狩の鞭＝しさり馬の下頭を鐙にて蹤ると有大相違也、櫻狩とは要名也、息合を知る事也」。なほこの次の文に「左右に輪をかけ違へ」とあるは、競馬の時合圖と同時に馬が駈出すやうに、互に左右より輪狀に乘廻し運動をつけおくをいひ、これも馬術の法である。

月にたれ寢て見よとてや伏見とは、舟に寄せたる里の名の（鎧櫻三）
伏見舟は臥し見舟の名に負ふが、さて月の下に誰と共にその夜舟に寢て見よとて、かく名付けたものか、その舟の名に寄せた里の名の伏見の意。伏見京橋のほとりは、大阪に往復する舟着場で、夜の舟・晝の舟或は都に通ふ高瀨舟、宇治川下る柴舟歌歌集り、川邊の家には旅客を留め三絃の聲も喧しかつた。

月の都の宮人の、胤や此の世に降る露（國性爺）
竹取物語に、かぐや姫の詞に「おのが身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり、それを昔の契ありけるにより てなん、この世界にはまうできたりける」。「月の都」は、起世經に「佛告二比丘一、月天子宮殿、縱横正等四十九由旬、四面垣繞、七寶所成、月天宮殿、純以二天銀天青瑠璃一、而相間錯、一分天銀清淨無垢、光甚明曜、餘之一分、天青瑠璃、亦甚清淨、……、亦有二大蘯一、青瑠璃成蘯、高十六由旬、廣八由旬、月天子身與二諸天女一、住二此蘯中一、天子壽五百歲、子孫相承、皆於彼云云」。

月も日も庭より出て庭に入る、廓の内の武藏野や（酒呑童子）
古歌に「武藏野は月の入るべき山もなし、草より出でて草にこそ入れ」とあるを文にくだいたのである。

茅花交りの菫草（國性爺後日）
藤原公實の歌に「昔見し妹が垣根は荒れにけり、茅花まじりの菫のみして」。

露の身もあればある世の習ひか

や（百合若）
新千載集巻十八、雜歌下の部、前大納言良冬の歌に、「憂きながらあればある世の習ひとぞ、今は我身に思ひ知らるれ」。

天子に父母なし　王子からからと笑ひ、孝行とは誰への事、天子に父母なしといへり（天智天皇）　島一箇所の天子は此大碓、天子に父母なし、むづかしい都より親持たぬ島がましと（日本武尊）
天子は天地を父母とすれば、其他には父母はないの意。增鏡・草まくらの條に、「天子には父母なしと申すなれど、十善の床をふみ給ふも賤しき身の宮づかへなりき」。北史に、「清河王曰、天子無父」。

時は今五月の空、天が下しる瑞相ぞと（三國志）
白石祕書などに、明智光秀が愛宕山で、「時は今天が下しる五月かな」、といふ發句を詠んだことが見えてゐる。

所も萩の唐錦、故郷の空に飜す（國性爺後日）
元輔集にある歌に「秋の野の萩の錦を故郷に、鹿の音ながら移してしがな」。巢林子のこの文によつて、彼の出生地を長州萩と推定するは牽強である。

年ある御代のしるしには野にも山にも積る白雪と古歌を吟じて（閑八州）
新勅撰和歌集・卷六・冬の部、內大臣の歌に、「あらはれて年ある御代のしるしにや、野にも山にも積る白雪」。

なかぬ烏の聲聞けば産れぬさきの我子戀しき（兼好）
六道輪廻の說によれば、我子に生れる者も烏の生れかはりかとも思はれ、闇夜に啼く烏の聲にその慕はしさを催すの意。道歌に、「闇の夜になかぬ烏の聲聞けば、生れぬさきの父ぞ戀しき」、とあるに據つたのである。

ながらのはしばしら　涙ながら餘所ながら、見置きながらの橋柱朽ち行く身こそ（二枚繪）
攝津國西成郡長柄の橋は古今和歌集にも見えて、古から歌枕となつてゐる。ここの文は宇治拾遺物語に、「朽ちにける長柄の橋の橋柱、のりのためにも渡しつるかな」、玉葉和歌集・卷十五・定家の歌に、「夏遷名のみながらの橋柱、朽ちずば今の人もしのばし」、などとあるこれらの歌句に據つたのである。

亡き魂よ結ひとめんと下がへの褄（會稽山）
「結びとめてもとまらぬは云云」を見よ。

夏來ては錦にまさる麻の小衣
「何事もただ時ぞ云云」を見よ。

夏果つる扇の女　今は我名をつつみても、夏果つる扇の女の物狂ひ（歌念佛）
班女の故事で、男に見捨てられた女の意に、我名のお夏をきかせたのである。「あきのあふぎ」を見よ。

何事もただ時ぞと思へ夏來ては、錦にまさる麻の小衣（閑八州）

この道歌は虛白齋撰・目の前・下卷にも、「何事も時ぞと思へ夏來ては、錦にまさる麻の狹衣」として引かれてゐる。

難波津の冬籠、今を春べの（二枚繪）
難波津の冬籠の季なれども、心は今を浮立つ春べのの意に、「難波津に咲くやこの花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花」の古歌を用ゐたのである。序云、この古歌を王仁の詠として謠曲・難波にも見えてゐれど、その實王仁の詠でなく、王仁よりも後人の詠であらう）。

難波に咲くやこの花（冥途飛脚）
難波をいふに、前條に擧げた古歌「難波津に咲くやこの花云云」に據つたので、「この花」に遊女の名の梅川をきかせたものである。

汝月明かなり　兩眼は暗くとも汝月明かなり、和歌の妙を授けん爲（蟬丸）
藤原定家撰・明月記に、「去んぬる元久の頃住吉參籠の時、汝月明かなりと、冥の靈夢を感じ侍りしによりて云云」。

任氏がら中より云云
任氏は「じんし」と讀むべく、「異國のしんじが螺中より云云」を見よ。

盜人を捕へて見れば我兒なり（二枚繪）
犬筑波、山崎宗鑑の句に、「盜人を捕へて見れば我兒なり」。

念力岩を通す（蟬丸）
李廣が籠中の岩を虎と思込んで射た矢は其岩に立込んだといふ故事で、深く思込んだ念力はよく岩をも貫くの意。

橋柱朽ちゆく身こそ（二枚繪）
宇治拾遺物語の歌に、「朽ちにける長柄の橋の橋柱、のりのためにも渡しつるかな」とあるに據つたのであらう。

花にまがひの櫻海苔、天をひたせば雲海苔に、月を包みて刈るとはすれど（出世景清）
櫻花にまがふ色の櫻海苔の生えてゐる海に天を映じ浸せば、映る雲に乘つて刈る海苔に、海中の月影を包んで刈るとはすれどの意。新千載集卷二、春歌下の部、從二位成實の歌に、「櫻花空さへ匂ふ山風に、うつろふ雲の跡もさだめず」。近松のこの文は、櫻・雲（櫻花爛漫たるは雲に似る）・天・月の緣語を以て飾り、雲乘りの乘りに海苔をいひかけた海苔盡しであつて、雲海苔といふ名の海苔のあることは未だ聞かない。「櫻海苔」は紅藻類の海藻で、長崎・大分・土佐・遠江・駿河・相模・安房・志摩・上總地方に產し、體は下部扁壓、莖を有し、扁平で扇狀に叉狀をなし、枝は幅廣く楔形で光澤がある。

花の上漕ぐ舟と詠み置きし（隅田川）
西行法師の歌に、「象潟の櫻は波に埋もれて、花の上漕ぐ海人の釣舟」。

花の盛りは冬至より百五十日、又は彼岸の後七日などとは云へど、立春より七十五日大樣は違はず（賀古敎信）
この文は、貝原篤信撰の大和めぐりの記、吉野山の條に出てゐる。蓋し出典は漢書であらうが思ひ當らない。

花ふみちらす鷺をうたんといひし人

もある（艶符）
古今六帖、紀友則の歌に、「わが宿の花ふみちらすとりうたむ、野はなければや此處にしもくるる」。古今集・物名の部にこの歌を擧げて、「花ふみちらす」を「花ふみしだく」になつてゐる。

花や主　硯短冊取出し、花やあるじの詠歌を書き（千載集）
平忠度の歌、「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花やこよひの主ならまし」をさす。「旅宿の花云云」を見よ。

花より白む嶺の雲（國性爺後日）
秋篠月清集・二、（南海漁夫百首）春十五首ノ内、「初瀬山尾の上の鐘のあけがたに、花より白む嶺の雲の空」。

花より外に知られじと
「さざなみ山櫻云云」を見よ。

濱の眞砂は盡くるとも彼等が涙はよも盡きじ（佐佐木）
石川五右衛門の辭世の歌、「石川や濱の眞砂は盡くるとも世に盜人の種は盡きせじ」をいひかへたのである。石川五右衛門のこの辭世の歌は巢林作の傾城吉岡染・下之卷の中にも用ゐてゐる。

はやだま　まだ青柳の絲長く、結ぶや早玉の、おのが力にささがにの（吉岡染）
〔速玉〕熊野三所の内なる速玉男神をいふ。この文は藥師寺公義集の歌に、「君を守る神をあがむる契のみ、絕えずや代に結ぶ早玉」とある詞によつたものであつて、「糸」から「結ぶ」といふ緣語を出し、「結ぶや早玉」と歌にある詞を用ゐ、「玉」を「玉の緒」にいひかけ、「緒」を「己が」にいひかけた文飾であつて、速玉男神に意味があるのではない。「歸る所を知らん云云」を見よ。

春知り顏に七つ屋の、藏の戸出づる鶯茶の布子（春門松）
「七つ屋」は質屋である、質を七に書いて「ななつ」と訓んだのである。春著にとて質屋の藏より請出した鶯茶の布子といふに、玉葉集・春上部にある「年ふれど變らぬものは鶯の、春知りそむる聲にぞありける」、及び續後拾遺集・賀部にある「君がため谷の戸出づる鶯は、幾萬代の春を告ぐらん」、とある以上二歌の詞を取つて文をなしたのである。

引き寄せて結べば露の命にて、とくればもとの道芝に（大經師）
おさん・茂兵衛引き寄せて縛に就けば、最早露の消える間のもろき命にて、共にもとの京に引かれるといふ意に、道歌「引き寄せて結べば柴の庵にて、とくればもとの野原なりけり」に據つてかくいうたのである。

日の本の王孫も御母方は龍女にて、鱗のありし帝もあり（百合若）
このこと厚添壞囊鈔に見え、また巢林子作・松風村雨東帶鑑第一にも、「忝くも神武天皇の御母玉依姫は龍神の娘、我が國の皇統御母方は龍女ぞや」とあつて、荒唐無稽な說である。

ふしきのゆみ　二十四差いたる大中黑・頭高に取つて着け、ふしきの弓のほこ短く射よげに見ゆる左手に持ち（吉野忠信）
〔節木弓〕節ある丸木弓。判官物語、忠信吉野山合戰の條に、「節木の弓のほこ短き射よげなるを持ちたりけり」。

＊ふだらく　大阪順禮胸に木札の、ふだらくや大江の岸に打つ波にしらむ夜明けの、とりも二番に長福寺（曾根崎）
〔補陀落〕梵語 Potalaka である、印度西南方にある處の名で、觀自在菩薩の住所であるといふ。華嚴經に、「善男子、於二此南方一有レ山、名二補呾洛迦一、彼有二菩薩一名二觀自在一云云」。曾根崎心中のこの文は、西國巡禮歌・第一番に、「補陀落や岸打つ波は三熊野の、那智のお山に響く瀧ノ瀨」の歌に據つたのである。次條をも見よ。

ふだらくや岸打つ浪は紀三井寺、人人それに違ひしとどつと笑へば（文武五人男）
西國三十三所順禮御札所第一番は紀伊國那智山青岸渡寺（東牟婁郡那智村にある）で、本尊は如意輪觀世音である。順禮の詠歌は、「補陀落や岸打つ浪は三熊野の、那智の御山に響く瀧つ瀨」といふ。さるを第二番の紀三井寺とどたまぜて、「ふだらくや岸打つ浪は紀三井寺」と言うたから、人人それに違つたと哄笑したのである。

文月半の空、都方には亡き魂を迎へて歸る槇の露（女護島）
文月は陰曆七月をいふ、蓋し穗見月で、稻穗の見え初める月の義であらう。都方では七月の盆に寺に參詣して精靈を迎へて歸り、精靈は槇の葉に乘つて來るといふ。日次記事（黑川道祐撰）七月初九日の條に、「東山六道地藏詣、男女擡ノ鐘而迎二聖靈一、各置二槇枝一而携歸、俗傳今月今日聖靈乘二槇枝一而來矣、云云」。

星の妹背の天の川　雲心なき水の面、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも（曾根崎）
「星の妹背」は織女星と彦星との夫婦星を云ふ。この二星は天の川の兩側に分れて、七月七日の夜のみ相逢ふといふ。「たなばた」を見よ。

菩提は山の小男鹿の、招けど更にこん泉寺（嶮峻天皇）
正覺を求める心の失ひ易きは、恰も山の小男鹿の招いても來ぬが如くに、金泉寺（阿波國板野郡板西村大字大寺にあつて四國遍路第三番）をいひかけたのである。寶物集中に「菩提は山のかせぎ繫げども留らず」。

時鳥聞きにきた野
「聞きにきた野の時鳥云云」を見よ。

紛はぬ花　げにも榮えある景色やな、紛はぬ花と詠ぜしは、咲かぬ梢もありつべし、槇も檜原もおしなべて、咲きも殘さぬ花の雪（冷泉節）
續拾遺集・卷十九、禪空上人の歌に、「夕日影さすかと見えて雲間より、紛はぬ花の色ぞ近づく」。

三上山の百足を滅し（五人兄弟）

往昔三上山に大蜈蚣がゐて勢多の離宮城に寇したによって、田原藤太秀郷が之を射殺したこと湿故録に見えてゐる。

巽鰒と隔つれど、とくれば同じかすりゐの水（反魂香）

一休の道歌、「雨あられ雪や氷と隔つらむ、とくれば同じ谷川の水」（この歌・古活字版みづかがみに載つてゐる）に據つたものである。そして「巽鰒」に、奈良の名物巽酒鰒酒をきかせ、酒の中に麹が溶けないで混つてゐるから、飛白を微井（その條を見よ）にいひかけたのである。

水たまらねば月影も宿定めず（吉岡染）

語釋部「ちょのう」を見よ。

みねうつ浪は三熊野の、那智のお山の南無觀世音大菩薩（磯鵯）

西國巡禮第一番の詠歌、「普陀落や岸打つ浪は三熊野の、那智の御山に響く瀧つ瀑」とあるに據ったのである。「みねうつ浪」とは、峰に打つ浪の響の意か、或は「岸打つ浪」の誤であらう。「ふだらくや云云」をも見よ。

みののを山の夕時雨、つれなき松も二葉より（吉岡染）

身のを美濃にいひかけて、續後撰集卷十七、正三位知家の歌、「いかなりしみののを山の岩根松ひとりつれなき年を經ぬらむ」の句に據ったのである。

＊身をすててこそ浮む瀬もあれ（振袖始）

空也上人絵詞傳卷上の歌に、「山川の末に流るる樣なれども、身をすててこそ浮む瀬もあれ」。

むあくぜん　無惡善といふ三字大筆にて書きたる額御階にさしあげ（嵯峨天皇）

この後の文に、空海が無惡善をさがなくばよからんと讀んで、御代を咒詛した君調伏の勝し詞云云と云ってゐるが、これは宇治拾遺物語卷三、小野篁廣才の條に、「今は昔小野篁といふ人おはしけり、嵯峨の帝の御時に内裏に札を立てたりけるに、無惡善と書きたりけり、帝、篁に讀めと仰せられたりければ、讀みは讀み侍ひなん、されど畏れにて候へば、え申し候はじと奏しければ、唯申せと度々仰せられければ、さがなくてよからんと申して候ぞ、されば君を咒ひ參らせて候なりと申しければ、云云」とあるの改作である。

武藏野の草より草に出て入る月（驢大臣）

古歌に「武藏野は月の入るべき山もなし、草より出でて草にこそ入れ」。

武藏坊弁慶が雲中の蔓沓逆樣に履きたる例（川中島）

義經記卷五、吉野法師判官を追かけ奉る事の條に、義經主從が吉野法師に追擊された時、弁慶が「たれも命惜しくは沓を逆樣に履きて落ち給へや」と言ったので、義經主從沓を逆樣に履いて逃去る跡をくらましつつ、吉野山の雪の中を落ち行くことが記してある。

結びとめ繋ぎとめん（曾根崎）

次條を見よ。

結びとめても留まらぬはわしが人魂（生玉）

拾弁抄上卷に、「魂は見つ主は誰とも知らねども、結びとどめつしたがへのつま、誦二此歌一結所著衣妻」、とあつて、人魂を見た時に咒ふ歌とされてゐる、それを應用したのである。なほこの歌に據ったものは、曾根崎心中・道行の文に、「二つ連れ飛ぶ人魂をよそ目の上と思ふかや、……常ならば結びとめ繋ぎとめんと歎かまし」と見え、また曾我會稽山・第四・とら少將みち行の文に、「いや兄弟の亡き魂よ、結びとめんと下がへの、褄吹き返す夜嵐に」と見えてゐる。

胸のほむらは夜に三度、我が思ひは日に三度、涙くらべん淺茅ケ原（西王母）

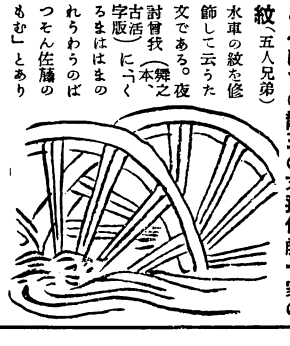
このあたりの文は傾城淺間ケ嶽に應用されて、「恨みも穢も殘らねど、若しや心の變りやせんと思ふ疑ひ晴さん爲の誓詞をばなぜに煙となし給ふ、恨めしや胸の焰は夜に三度、こちの思ひは日に三度、烟くらべん淺間山、あれ御覽ぜよあさましや、邪淫の惡鬼は身を責めて、ナウ劔の山の上に繼しき人は見えたり、云云」と見えてゐる。傾城淺間ケ嶽は元祿十一年作の狂言本で、日本西王母の作の方が古いから、ここに擧げるは不當であるが參考までに記した。

巡り見る浮世の波に比ぶれば、阿波の鳴門は磯小舟（賀古教信）

阿波の鳴門は海の難所と云はれてゐるけれども、これを渡世の艱難に比べたならば、淺磯を小舟で渡る程の易いものであるとの意。古歌（兼好法師の詠と云）に、「世の中を渡り比べて今ぞ知る、阿波の鳴門は浪風もなし」。

めぐりめぐりて行く水の、月をも共に汲入れて、筧に流す水車、これこそはまの龍王の末孫佐藤一家の紋（五人兄弟）

水車の紋を修飾して云ったる文である。夜討曾我（舞之本・古活字版）に、「くるまはまのれうわうのばつもん佐藤のもむ」とありて、この絵が載せてある。近松の此文の「はまの龍王」は「破魔の陵王」であらねばならぬ。



物の名も所によりてかはる（佐佐木）

筑波集に、「物の名も所によりて變りけり難波の葦は伊勢の濱荻」。

山海のさちがへせし神代　かの山海のさちがへせし神代を今に見ることは、再び穎朝が秋津島の海山を手に握るべき兆ぞと（冷泉節）

彦火火出見尊は山の幸あり、兄の火照尊は海の幸あり。一日相約して弓矢と釣竿とを交換して獵を試みられた故事をいふ。「ひこほほでみ」を見よ。

山田守らねど世にあきし僧都が身こそ悲しけれ（女護島）

續古今集・雜歌上の部、備中國湯川といふ寺にて、僧都玄賓の歌に、「山田もる僧都の身こ

を哀れなれ秋果てぬれば訪ふ人もなし。

山の井の水は濁れる時しあれど、濁らで澄むや任む人の心（國性爺後日）

山の井は浅いから、汲めば濁り易い。新拾遺集卷十七、釋教部の歌に「法の水汲みてや見まし山の井の、濁りやすきは心なれども」。

病除の爲ならば南天と大蘇（關八州）

「南天と大蘇」を見よ。

ゆるぎの森も近ければ、いかでか鷺の寢を安く、寢る夜なくとも（持統天皇）

古今六帖の歌に「高島やゆるぎの森の鷺すらも、ひとりは寒じと爭ふものを」とあるに據つたのである。

よしやよしかかれとてこそ生れけめ、理知らぬ心やと（大原問答）

增鏡、承久の亂を記せる條に土御門天皇の御製歌「浮世にはかかれとてこそ生れけめ、ことわり知らぬわが涙かな」。

夜夜は我もこがれて人戀ふる衞士の又五郎（弘徽殿）

續千載集、卷十二、戀歌二の部、寄二禁中一戀といふことをの題にて、權中納言爲藤の歌に、「夜夜は衞士の焚く火の焦れても人を雲居に思ふ頃かな。

羅城門の變化が渡邊の伯母に化け、取られし腕取返せし（關八州）

渡邊綱が羅城門で鬼の腕を斷取り、これを秘藏してゐたが、鬼は伯母に化けて綱の宅を訪ひ、鬼の腕を見せられたきを懇請し、遂にその腕を奪つて飛び去つたといふ俗說に據つたのである。攝陽群談卷十に「渡邊綱出生古跡＝武庫郡武庫庄村にあり、土俗此所出生の舊地と云へり、洛陽東寺の門に於て鬼神の腕を斬り、第宅に歸り戶を塞いで之を愼む、綱養育の伯母爰に來つて、其恐ろしき腕を見んと請ふ、綱不應之、伯母養育の昔を語り之を恨む、終に含見之、卽鬼女と成つて摶風を破り逃れ去る」と見えてゐる。ここに洛陽東寺の門とあれど、謠曲、羅生門には、羅生門で鬼の腕を斷つたことになつてゐる。

別を天外に求むれば蜀山の雲終に隔り、魂を地下に尋ぬれば巴陵の水轉た流れて留らぬ（隅田川）

別離の悲しさに天を嚮めば雲烟茫漠として求めるに由なく、魂魄を地に尋ねれば流水淚淚として愁人の爲に留まること少時もしないの意。蜀は山國で雲霧重れば蜀山の雲といひ、巴陵郡は洞庭湖のある所なれば巴陵の水といつて文飾としたのである。

別れを歎き悲しみて、跡にこがるる櫻橋（天網島）

菅公と別れを歎き悲しみ、跡にこがれて枯るる櫻に櫻橋をかけたのである。「櫻橋」「一首の歌」をも見よ。

小野とはいひて薄生ふ市原野（關八州）

袖中抄、十六にある歌「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とはならじ薄生ひけり」に據つたのである。「あなめ」は、あやにく又はあなにくの意。この歌の上句は小野小町の幽靈の詠で、下句は在原業平の詠であるといふ。

（備考）

巢林子がその他の國書から脚色して取入れたものでは、賀古教信七墓碑には今昔物語の播磨國賀古驛教信往生語、源氏十二段長生島憂及孕常盤には十二段草紙、鎌田兵衞名所盃上卷には保元物語、吉野忠信には義經記、などはその主なものである。

諺に據れるもの

巢林子の文中に引用されてゐる俚諺は頗る多い。それ等はここに擧げた外に、隨時他の部類中にも說き、又通俗平易で述べるに及ばないものは省いた。

あがる雲雀の影を追うて水底に沈む（虎が曆）

賤運の者好運の者を狙ふことは、却つて身を滅すとの喩。

明けて悔しき浦島の（天網島）

「明けて悔しき玉手箱」（浦島太郎の故事）の諺によつたもので、豫想のはづれたのをいふ。

あさはらのぐわんやく　未だ敵の五百や三百は朝腹の丸藥、金平が病氣には敵の首こそ藥なれ（文武五人男）

〔朝腹の丸藥〕朝の空腹に丸藥を服んだやうに腹の足にならぬ義で、無造作にやつつける意にいふ諺。

足の裏の疵にこたゆる小笹原（博多）

諺に「歷に疵持てば笹原が步かれぬ」といふに據つたもので、身に後暗い事ある者は、風に鳴る笹原の音にも心臆してたじろくとの意。

足元を見る　六百兩と言ひかけしに、無得心の長めに足元見られ、千兩無くては暇くれまいと、言募つて埒明かず（酒呑童子）

足元のあやふやを見ることで、卽ち心中に弱みのあるを察して、それに乘ずるをいふ。羞し獨籠昇などが客の弱點を察して賃錢を强請したことから起つた諺である。

當つて碎くる男（鬱門松）

諺に「男は當つて碎けぢや」といふに據る。近松作、丹波與作に「男は當つて碎けよぢや」。

味もしやしやりもおぢやるま

い（振袖始）
何の味も甘味もござるまいの意。「しやしやり」は「しやりしやり」であつて、歯切れよくく、脆味なるを形容した語であらう。和訓栞に「俗語にあぢもしやしやりもなしといふは、味より轉じて阿字も砂舎利もなしといふ也、眞言家に阿字を銅にて鑄て親す、砂は土砂也といへり」とある説はいかが。巣林子作・傾城懸物揃には、こ謬もしややりもなら」と書いてある。

預る物は半分の主　妬み悋氣の心なく、預るものは半分の、主は忘れてゐさんすか（諸門松）
預つた物は半分此方のものといふ謬によつたのである。この謬は毛吹草にも見えてゐる。

後は野となれ大和路（冥途飛脚）
「後は野となれ山となれ」といふ謬を「大和路」にかけたのである。

跡を濁さぬ水の面　新參の燕置付けて、跡を濁さぬ水の面、這出の蛙二合半（薩摩歌）
ここの文は、秦公人の出替りに新參の秦公人を燕に譬へ、立つ鳥跡を濁さずといふ謬を應用して、水の面というて、這出の蛙といひつづけ、蛙に奴をきかせて、奴の給料は定まりの二合半の意にいうたのである。

あひえんきえん　猫にも人にも合縁奇縁（大經師）　不孝第一の某を勘當不興もし給はず、如何なる合縁奇縁にや、親も及ばぬ御鴻恩（卯月潤色）　人には合縁奇縁、血を分けた親子でも中の惡いがあるもの（寄庚申）
（合縁奇縁）合ふも縁、奇なるも縁の義。心のあはぬ筈の者が其實合縁で、いとしう思うたり、心のあふ筈の者が其實不縁で、惡合うたりして、縁は不可思議なものとの謬。縁次第。佛典中に愛縁・機縁といふ語があつて、愛縁は恩愛の縁、機縁は衆生に善根の機あつて、教化を受ける縁の義であるが、これから轉じて出來た謬であらう。

尼御の血を狂はすは鮹藥師の出家衆か（藤姫）
俗説に蛸は女の血を狂はすといふによつて、蛸藥師とつづけ、蛸藥師は京都四條圓福寺をいひ、その坊樣衆かといふたのである。

網の目にさへ戀風が溜る　流れ渡りの情であろと、網の目にさへ戀風が、たまる荻の、荻の上風身にしみじみと（女腹切）
網の目にさへ風が溜るとの謬があるやうに、夜な夜な替はる客を相手とする遊女の身にも、なほ溜る樣があるとの意。毛吹草に、「網の目に風もたまるや春霞」。古今夷曲集に、「九重も春の霞の網の目に、風たまりてや今日のどかなる」。

洗物師の蛇の目後家　洗物師の蛇の目後家、鹿子結のお雪（蛙合戰）
眼光の鋭いを、謬に「蛇の目を灰汁で洗つたやう」といふ、その謬によつてかく名づけたのである。（なほここの文に「鹿子結のお雪」とあるも、伊勢物語の歌に「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子斑に雪の降るらむ」とあるに據つた名。またこの後の文に「森奈良」といへる醫者の名も、藥の盛り相違をきかせたのである）。

蟻は五日の雨を知る　蟻は五日の雨を知り、名將は百里の敵をはかるとかや（藤姫）
蟻は五日後の雨天を豫知す。新語園に蟻を記して「よく雨を知り、また水脈を知りて集り居る」と見えてゐる。

生身に餌食　生身に餌食、天道人を殺さず（生玉心中）　生身に餌食あり、人間一人生るれば、乳房といふ天道の御扶持方（博多）
生きてゐる身には、餌食がついてまはると云ふ意の謬。天道樣と米の飯はつきもの。

生身は死身　八年拜まぬ親の顏見たうなうて何とせう、生身は死身、若しひよつと死病受けたりとも（氷朔日）
生きてゐる者は必ずいつかは死ぬる身。生者必滅。

いざ鎌倉勢　辨慶を始め、何れも心底を定め、いざ鎌倉勢をここに引受け（凱陣八島）
ここの文は、「いざ鎌倉」といふ謬あるを、かけて云うたのである。この謬は一旦緩急の場合の意に用ひ、もと謠曲・鉢の木に、「これは只今にてもあれ、鎌倉に獅大事あらば、ちぎれたりとも此具足取つて投げかけ」とあるより出たのである。

石龜もぢだんだ　鯉鮒が蓮の花笠、しやんと着て踊る振かしはらし、石龜もぢだんだ、鰻鯰は不形なものよ（隅田川）
身分を知らないで、妄に他人の爲るを眞似るをいふ。毛吹草に「雁が飛べば石龜もぢだんだ」。後撰夷曲集に「元信、雁が飛べばぢだんだを蹈む石龜の、こふはつむとも羽ははえじな」。

石に謎かける（女殺）
感應なきをいふ謬。

石を抱き淵に入鹿（大職冠）
石を抱き淵に入るを入鹿大臣にいひかけたのである。太平記卷一、顏員回忠の條に「今の世にかやうの事思ひ企て給はんは、偏に石を抱きて淵に入るものにて候ふべし」。韓詩外傳に「抱石而沈于河」。

急げば廻る（會稽山）
「急がば廻れ」ともいふ。

馳の道切（百合若）
旅立に不吉として忌む。和訓栞に「馳の道を切るといふは、旅發などの時に忌める謬なり、往斷といふ義に取るなるべし」。羅磐察撰・温故要略（享保七年刊）卷二に「道行人の馳の道きるを嫌ふ事。古書云、横きるけ惡しと云ひ傳ふれども、左へきるは不苦、右へ通らば其道不可行」。

一か八か　若しあを馬の腹へなど生れては行かれぬか、但釋迦になられたか、一かぢちかが知りた

い（嵯峨天皇）
もと博奕から起つた語で、半か丁かといふ程の意。両方面のどちらか。

一子出家すれば九族天に生る（烏帽子折）
一子出家すれば、その功徳によつて九族の者天に生れるとの諺。尤草紙（慶安二年刊）上、うかぶもののしなじなの條に、「一子出家、九族生天」。群玉集に、「法語云、一子出家、九族登天」。

一寸先は暗（會稽山）　一寸先は闇の夜（鶴門松）

犬が食ふ　阿古屋も心打解けて、思ふあまりの小爭ひ、犬が食ふとやこれならん（出世景清）
俚諺に「女夫爭ひ犬も食はず」といふを轉用したのである。

戌で丁六十、うろたへ歩いて棒にあはぬ先に、長吠せずと往にましよ（鎌槌三）
諺に「犬もあるけば棒にあたる」といふに據る。

犬の長啼き（百合若）
俗説に、犬の長啼きは不祥の兆といふ。

犬も傍輩鷹も傍輩（賀古）
身分は違つてゐても互に友だちであるといふことで、往時大名の家に犬と鷹とを飼養したことから起つた諺。

***命を棒に振る**　熊の藝には棒を振る、己れは命を棒に振りたいな（隅田川）
命を失ふことをかまはぬ意。漢文の「捧二身命一」の「捧」を棒と誤り、棒だから振るを附けて出來た諺であらう。

憂き鹽ふむ
「しほをふむ」の條を見よ。

後指を指さる　無念千萬此の如く後指をささるとは知らなんだ（酒呑童子）
陰から批離される。義經記・八に、「父ともに劣れる者とて、傍輩たちに笑はれんぞ後指さされ家の疵なるべし」。

うすからきね　汗水流して組合ふとて何やら嘯き呟いて、互に因果を晒屋の臼から杵とは此事（薩摩歌）
〔臼から杵〕臼は玉門、杵は玉莖で、その形などから喩へたもので、「臼から杵」とは、女より男を挑むこと。

氏無うて玉の輿（持統天皇）（日本武尊）
女子は家系卑い下賤な者の子でも美人に生れて貴人の寵を得たならば、玉の輿に乘り高貴の身となることがあるとの諺。

***氏より育ち**　人は氏より育ちかや（鎌槌三）　手足は山のこけざるぢや、ほんに氏より育ちぞと、又さめざめと泣きけるが（丹波與作）　口と心が皆違うた、氏より育ちが恥かしい（氷朔日）
人の賢愚また人品の高卑などは、家柄筋目よりも躾方の如何によりて如何樣にもなるとの諺。古今夷曲集に、「給はりし榊尾の茶はすぐれたり、これやうぢより育ちなるらん。

打つたり舞うたり　内の仕舞と小拂と、油うつたり舞うたりに、三人の娘の世話（女殺）　半兵衛料理に心は念く、打つたり舞うたり身は一つ（寄席申）
一人して鼓も打てば舞もする義であつて、一人で種々の事を引受けて爲し働くをいふ。女殺油地獄のこの文は、油賣つたりに、打つたり舞うたりをいひかけたのである。

***うのめたかのめ**　槃特が事問はんとすれど、朋輩の鵜の目鷹の目（釋迦）
〔鵜の目鷹の目〕鵜・鷹は目鋭く物を凝視するが、そのやうに或者の行爲を他から凝視してゐる者があるとの諺。根無草に、「何がな珍しき物見出さんと、鵜の目鷹の目にて探し求むれば」。

うはらたつもも　灸もすゑたし、卯はら辰もも背中に腹、商賣にはかへられず（反魂香）
〔卯腹辰股〕灸の忌日で、卯の日には腹に灸をすゑず、辰の日には股に灸をすゑず。諺に灸の忌日をいふに、「卯腹辰股寅背未頭申尻」といふ、もと繪事から出た調であらう。灸すゑ曾我に、「如月や二日はよき日ぞと暦開けば、成る日とや、なるとはならずと思ひたつ卯腹辰股、とらが背中といひ笑み顔の」。

馬が合ふ　小身なりとも侍に緣組みたい、なんぼう分限者金持でも、町人とはうまが合ふまいと（鶴門松）
猪熊などを狩出し、物頭にうまあひつけ、鏑の遠鳴させざるが殘念なり（冷泉節）
意氣投合する。うまく話が合ふ。この諺はもと馭者の心に馬の氣分が投合する意で、馬術詞より出たものであらう。傾城禁短氣（寶永八年刊）卷之二に、「もの堅き話は根がつづかず、氣をかへて京大阪の色話、いづくの者もうまが合うて、今まであくびしたる人人一所へこぞりよりて」。

***馬が太鼓打つ**　そこの親仁ばかりは七十六であの氣性、午の年に當つたら太鼓打ちやろと笑ひける（百合若）
牡馬がさかつて陰莖を勃起させ、腹に打上げ當てるをいふ。「馬や太鼓打て、とゝい女房よんでやろ」と云ふ俚謠もある。

馬がでんでん打つ　あれ馬がでんでん打つわいの、ああ怖やとぞ逃げにける（雪女）
前條に同じ。「でんでん」は太鼓の音を云ふ語。

産まずの數ならば、根を掘る竹の伏見町（卯月紅葉）（卯月淵色）
俗説に石女（子を産まぬ女）死ぬれば、冥土にて雞剌に爪を剋がれて、竹の根を掘らされると云ふ。竹の節に伏見町をかけたのである。

馬に任する道しるべ、これは若駒（會稽山）
古諺に「老いたる馬ぞ道は知る」といふが、

これは若駒道に迷ふの意。この古諺は平家物語巻九に「老いたる馬ぞ道は知るといふためしもあり」と見え、なほこの古諺と類似の文は、韓非子・和漢古諺・源平盛衰記などに見えてゐる。

生れた後の早め薬(うまれたあとのはやめぐすり)(會稽山)

生れた後には分娩を早める薬は不用なやうに、過ぎ去った後の策は何の用もなさぬ喩の諺。

えてにほ 奥には得手にほふかいりんき(鍵權三) 冷泉は得手に帆、戀の追風便りよく(十二段)

〔得手に帆〕好機會に遇うて之を利用するに喩へた諺。鍵權三重帷子のこの文は、帆に法界悋氣(その條を見よ)をいひかけたのである。

襟に附く 京の小四郎といふ種がはりの大惡人、慾に耽り襟に附き、敵祐經が家の子同然に身を寄せ(會稽山)

懷の溫かなのに附く義、富貴權勢ある者に阿附する意の諺。平假名盛衰記に「大名谷の襟に附き、御勿體ですかえ、我等がやうなかびた襟には附かれまい」。

縁につるれば唐の物くいの八千度(國性爺)

「縁につるれば唐の物食ふ」といふ諺に、悔いの八千度をいひかけたのである。この諺の意は、何かの縁で疎遠な人の厄介になるということで、唐は遠の義の轉じたものである。毛吹草に「縁につるれば唐の物をくふ」。

御釜を打起す やれやれお釜を打起した、これ程嬉しいことはなし(十二段)

好運にて家を興すこと。郭巨家貧にして母に充分の孝養を盡すことが出來ない爲に、我子を埋めようとして地を掘ること三尺、計らずも黄金の釜を掘り出したといふ故事に基いた諺であらう。東海道膝栗毛・一に、「成程さう行けばあいつめはお釜を起す話だが」。俚言集覽に「お釜を興す。家を興す事、此釜は竈のことなり、竈をかまとよむなり」。

奥を聞かうより口聞け それそれそれ奥を聞かうより口聞け、どこに心が直つた(女殺)

兎角心にある事は自(おのづ)から口に漏れるものであるから、人の心の奥を聞かうとするよりも、口に語る事を聞けば眞相がわかるとの諺。

遅牛も淀、早牛もめぐる報の車牛(嵯峨天皇)

「遅牛も淀、早牛も淀」といふ諺に據つたもので、遅かれ早かれ遂には同じ果報の車牛との意。狂言・牛馬に「おそ牛もよど、はや牛もよどといふ、明日の今時分には追付かうぞ」。

鬼に鐵鎚煎餅屋 茶屋中・組中・駕籠の衆、國の侍交りしは鬼に鐵鎚煎餅屋の、伯母は小橋へ急ぎけろ(氷朔日)

國の侍卽ち武士の交つてゐるのは「鬼に鐵棒」であるといふ諺をきかせて、鐵棒を鐵鎚煎餅屋にいひかけたのである。「かなづちせんべい」を見よ。「鬼に鐵棒」或は「鬼に鐵杖」といふ諺は、古くは可笑記にも、「況んや藝能あつて文武に志深からば鬼に鐵杖なるべし」と見えてゐる。國性爺合戰に「父の庭訓鬼に鐵棒」。

鬼に衣 彼の世話に申す鬼に衣といふ事は、この山から起つたげな(花籠)

鬼が忍辱慈悲の僧衣を着けた意で、外形は柔和に見えて内心怖るべきを云ふ諺。本朝町人鑑に「形は出家になれども、なかなか内心は皆鬼に衣なり」。

重荷に小附 戀の重荷に小附して、親子のあはれ打乘せて(壽門松)

負擔の更に增加する譬。後撰集・賀部の歌に「年の數つむとするなる重荷には、いとどこづけをこりも添へなん」。吾吟我集に「思ひあまり外の人目も包むこそ、戀の重荷に小附なりけれ」。

親子は一世(おやこはいっせ)(氷朔日)(田村)

親子は一世の縁で、この世だけの睦びと云ふ。保元物語に、「親子は一世の契と申せども」。謠曲・熊野に、「親子は一世のなかなりに」。

親の涙は火炎となり其の子の功德を燒くとかや(隅田川)

愛著の道は菩提の妨となるを極言した諺。維摩經・問疾品に「於諸衆生、若起愛見大悲、卽應捨離」。

恩の死はせねども、義理の死はする(大聽冠)

命を捨ててまでも恩を報じようとはしないが、義理人情の爲には死ぬ者が多いとの意。毛吹草に「恩の死はせねども、情の死をする」。

かうにきる

「かふにきる」を見よ。

かうやろくじふ・なちはちじふ 近年高野に相勤め小姓廻しは致せしが、高野六十那智八十、きんか頭の若衆にて(薩摩歌)

〔高野六十・那智八十〕高野山では六十歳の老人がなほ若衆を勤め、那智山では八十歳の老齢でなほ若衆となつてゐるとの諺であつて、男色關係をいつたものである。犬子集に「六十になれど心は若やきて、高野も今は戀の最中」。鷹筑波集に「八十になる年はばづかし、那智邊にさもこそ戀のはやるらめ」。傾城禁短氣(寶永八年刊)二之卷に「男色の至つて面白きは年行きの若衆なり、高野六十那智八十といふ事を知らずや」。嬉遊笑覽附錄に、「或說に、高野の紙屋谷と云ふ處より漉出る紙は一帖六十枚なり、今浪花に專ら蚤を張る紙なり、又熊野牟婁郡小塚村より漉出せる紙は一帖八十枚なり、よつてかくいへりとあり、思ふに此諺四十しまだの類にて、男色のことにはあらざるか」。

嘸か出花の相場か何時三百目に極つた(孕常盤)

出花とは茶の出花で、嘸が出花とは、茶の出花のやうに風味の好い所の意。當時京阪地方にて、間男の料料三百目といふ諺があつたのであらうと云うたのである。銀座色町奢(正德三年刊)卷之六、齡はながく生玉の萬歳の條に「密男は家ぬし借屋の男、表屋を取ても堪忍は致さぬとて、只今徇前へゆくになつての身ごしらへ、直打の知れた三百目であつかへば濟む事ながら、無いかねはほつても出ず云

云。女敵高麗茶碗・上に、「重きが上の小夜衣、これさへ三百目とは誰がいひそめし折紙ぞ、近頃沙汰の限りなる了簡なり」。亂脛三本鑓(享保三年刊)六之卷、姙子の男だての條に、「京大阪の間男さへ三百目ぞかし」。近松作・平家女護島第三に、「龍宮の美人局三百目の玉塔」とあるのも、間男の過料三百目をきかせてかく云うたのである。

餓鬼も人數 やあ餓鬼も人數、したらしい事はざいたり(國性爺)

毛吹草・卷第二、世話の題下に、「がきもにんじゆ」とあつて諺である。故事要言に、「物の數にもならぬものと雖も、時ありては便となる事ありといふ心なり」と見えてゐる。餓鬼は餓死した亡者をいふ。

***籠の鳥** 悲しいことになり果てて、籠の鳥になりました(丹波與作)

籠の鳥なる梅川に、焦れて通ふ里雀(冥途飛脚)

身の自由ならぬに譬ふ。また遊女に譬ふ、盖し抱主に拘束されて自由の身ならぬに由る。朱雀還日鏡(延寶九年の序がある)上卷、薫の條に「籠の鳥かやうらめしやと相見まほしく、通ふおてきの心中げにことわりなり」。

歌人は居ながら諸國の手配り(女夫池)

諺に「歌人は居ながら名所を知る」。この諺は名所和歌物語の序にも見えてゐる。

稼ぐに追ひ付く貧乏なし(振袖始)

能く勤勞すれば貧乏と遠ざかるとの意の諺で、博多小女郎浪枕にも「稼ぐに追ひ付く貧はなし」と書いてゐる。左傳・宣公十二年、箴之曰、民生在勤、勤則不匱」。

***かぜくふ** 宵の中には酒飲んで、風くはるゐな覺られな(松風) はや風を食うて、天皇は神鷲寶劔内侍所を帶し行方知れず(井筒)

「風を食ふ」ともいふ。樣子また業振を味ひ知る意。物の樣子や業振によつて密事などの露顯したことを豫知するをいふ。蔦屋道滿大内鑑にも、「それかと疑ふ手がかりも候はず、察する所風をくらひ當地を去りしに疑なし」。

***かたがいかる** ぴらり帽子に加賀菅笠、大振袖の後帶、どんな者でも見返りて、お供に附いた我等までほんに肩がいかつたに(卯月潤色)

「肩が怒る」肩が發起する義。肩身廣く思ふ。「肩が怒る」の反對の詞を「肩がすぼる」といふ。博多小女郎浪枕に「繼しき風の吹立つる柳町には來れども。金銀なければ肩すぼり、おのれと心おく田屋の」。

肩でかぜきる 肩で風切る空ぞめき、位を問ふは田舍客(女殺)

「肩で風切る」肩身廣く風切る義で、威勢よきをいふ。好色二代男(貞享元年刊)卷之一、心を入れて釘附の枕の條に、「薄雲樣の御迎に御紋附の傘角助がさしかけ、肩で風切つて散しぬる粧は玉雨枝無き白梅落つと詩人などの詠むべき所なり」。

肩も怒る 是でこそ女房の肩も怒るわいの(夕霧)

「かたがいかるを見よ。

鐘打つ 野上通ひを恪氣せまいと、そこで鐘打て、鐘を打たいの(隅田川)

爲慎れたわざを止める意にいふ諺。俚言集賛、鐘打の條に、「(夏山雜談)何にても仕馴れたる業をふつと止むる事を鐘打つと云ふ諺あり、御八講などの論議の時詳義師鐘といへば、威儀師聲を打鳴らせばはたと論義を止むるなり、此意なるべし、源氏花鳥餘情にも此意見えたり」。

かはかみか ええこなたは皮か身か合點が往かぬと、顏攀め立つて入るを引留め、それは親父廻氣な(歌念佛)

「皮か身か」皮は皮相の意、身は内心の意。うはべの親切か或は内心から出た親切か。

かはだち まことに川だちは川にて果つる、首の强さは首ゆゑ果つるとどつと笑ふ(吉野忠信)

「川立」川邊に生ひ立つこと。川邊に育つた人。「川だちは川にて果つる」は諺である。俚言集覽に、「川だちは山立の立なり、ソダチの義にて產の字の意なりといへり」。毛吹草に、「川たちは川にて果つる」。淮南子・原道訓に、「夫善游者溺、善騎者墮、各以其所好、反自爲禍」。

川流れであらうが飄箪であらうが(吉岡染)

輕くうきうきした風來の身に喩ふ。盖し飄箪の川流れといふ諺によつたのである。毛吹草に「あつき日や飄箪しばしば川流れ。德元」。

***かふがしやりになる** 首は首・胴は胴、甲が舍利になるとても(薩摩歌)

かふが舍利になるとても、親王を助け奉ると(持統天皇)

「甲が舍利に成る」「甲」は頭の甲卽ち頭蓋骨。「舍利」は梵語のsariira シャリーラ)の音寫、靈骨或は骨身と譯す、俗に人を火葬して骨灰の中に殘る米粒の如きものを云ふ。頭蓋骨が碎けて舍利ほどに成る。

かひをつくる 房若も悲しさうにつくづく見て、おりや焚噌ぢやといふ顏に貝を作るぞ哀れなる(艶容)

「貝を作る」泣顏をする。泣く時には口が蛤貝のやうにへの字形になるより云ふ。源氏物語・明石の卷に、「今日の御送につかうまつらぬことなど申して、かひつくるもいとほしながら」。

***かふにきる** 御使をかふに被て慮外をする事侍の法なるか(大磯虎)

當家に敵對我が威光に恐れぬは、佛をかふにきる故(女護島)

「甲に被る」かさにきるともいふ。威勢ある者を頼みとしその威をかりて勢づく。

かべにうまのりかける 壁に馬乘掛けし今日のお成(宵庚申) 壁に馬のりかけては明くべき埒も明かぬもの(女腹切) 壁に馬乘かけ、誰を斯うとの智慧もなし(井筒)

「壁に馬乘掛ける」豫想してゐない突然な事にでくはして當惑する喩ふ。唐劉禹錫文に、「其雖如三頻策・駕進二壁面一」。

かべにちやつぼ 奉公の身をもつて

出入嚴しき御門を忍び、築地を越え垣を越え放埒のしかた、剩へほてつぢら壁に茶壺とやら、今になつてお暇下されとや（娥）

〔壁に茶壺〕女の懷姙して腹脹れてゐるの喩。

壁に耳　二階には梅川が、心をすます壁に耳、漏るるぞ仇の始めなる（冥途飛脚）　常盤夢とも辨へず、なう恐しや壁に耳、弓手も馬手も平家方（烏帽子折）

壁に耳が附いてゐるやら知れぬとの義で、何人がどこで聞いてゐるやら知れぬとの喩。平治物語・光頼卿參内の條に、「壁に耳・天に口といふ事あり」。詩經・小雅に、「君子無易由言、耳屬于垣」。

かややのあめ　佛法と萱屋の雨は出て聞けと（宵庚申）　藤の木柱萱屋の雨、人こそ知られ屋の内に、直で立つたる人はなし（卯月淘色）

〔萱屋雨〕萱屋に降る雨は屋内では雨の音が聞えない。「佛法と萱屋の雨は出て聞け」「藤の木柱」をも見よ。

***からすなき**　烏啼・鳶啼・雀の小躍・鼬の道切り（百合若）　あはれあはれの烏啼き、心に懸る横雲の、立休ひつつ立戻り（賀古教信）

〔烏啼〕烏が頻に鳴くは凶事を報ずるものとして忌んだものである。毬草に「烏鳴。俗に烏の鳴くを凶事として忌事とす、容齋隨筆云、北人以烏聲爲喜、鵲聲爲悲、南人聞鵲噪則善、聞烏聲則唾而逐之、至於鴉聲挾彈擊使遠去」。「鳴く烏人の末期を知らす」をも見よ。

唐へ投金　「唐へ投金」を見よ。

借る時の地藏菩薩　借る時の地藏菩薩に捨てられ、返す時の閻魔の牒、どう言うて脫れうと（反魂香）

借る時の地慰顏、濟す時の閻魔面と云ふ諺を應用したのである。狂言・駒筭に、「誰と申す者に金銀のあまた取替へてござるが、再再催促致せども今におこしませぬ、今日は某が自身參り是非とも算用致させうと存ずる、まづ急いで參らう、いや誠に世話に申す借る時の地慰顏、濟す時の閻魔面とはよう言うた物でござる」。

雁一足さへ矢は三錢　民の世話に雁一足さへ矢は三錢の喩（蛙合戰）

毛吹草に「雁は八百矢は三文」。

***木から落つ**　思ひがけなき男心、木から落ちたる猿の如くにて（天網島）

「木から落ちた猿」の諺をきかせたのである。この諺は文選に出で、吾吟我集などにも見えてゐる。生玉心中に「私や木から落ちた猿、親方さん頭みます」。

鬼神に横道なし（振袖始）

鬼神は條理正當に缺けたことを爲さない。この諺は孟曲・籟廼にも出てゐる。

氣違の零さぬ水（女桶）

「そなたこそ狂人よ云云」を見よ。

きてはなこくる　行きつ戻りつやすらへば、番の者ども聲聲に、立つまい立つまいお通りやれ、お通りなされと寄付けず、木ではなこくる男ども、梅ばかりこそ色香なれ（井筒）

〔木で鼻こくる〕「こくろ」は「踏みこくろ」「張りこくろ」「言ひこくろ」などいふこくろで、「木で鼻かみこくろ」の義。木で鼻をかんでは紙とはちがつてしなへやうがないやうに、我關せずでさつぱり情愛のないのをいふ。俚言集覽に「木で鼻をこくつたやう。さつぱりした事」。

きてはなもぐ　彼奴は木て鼻もぎどう者、ただは言ふまじ、濡れかけてだまして問はんと思案する間に（冥途飛脚）

〔木で鼻捫ぐ〕前條を見よ。ここの文、「もぐ」に「もきどう者」をかけたのである。「もぎどう」はその條を見よ。

衣は紅梅・魚は鯛……人は武士（堀川波鼓）

尤の草紙、物のかしらの品々の條、一休和尚の狂歌に「人は武士・柱は檜・魚は鯛・小袖は紅梅・花はみ吉野」。

杵で當り杓子で當る　お心に從ばぬ怨みを杵で當り杓子で當るお仕方か（淀鯉）

杵でも杓子でも有放題の物で當る義、何につけかにつけ腹立ちがましう當ることにいふ諺。俚言集覽に「杵にあたり棒にあたり。（演義文）提ㇾ鷄駕ㇾ狗」とあるも、言ひやうを選へた同義の詞である。

巾着の風　一尺五寸の手拭さへ買ひかねる此身代、巾着のいかのぼり、思へば無念千萬なり（賀古教信）

巾着が輕くて、紙鳶のやうに風にまひあがるとの譬であつて、財囊の空虛なるをいふ諺。野郎蟲（萬治二年刊か）村山久米之助を評せる條に「あづまが座敷つきを此人にあたへたらば、洛中のへうきんの巾著は皆いかのぼりなるべし」。

口が上る　これ仁三樣たんと口があがつたの、あんまり鯉鯉と言はんすな（淀鯉）

しやべり方が上手になる。惡口などが巧みになる。

口に針　口に針ある苦い顏（天網島）

言語の中に險惡な意を含めるをいふ。

口を聞こより奥　おろせが送る大門や、口をきこより奥樣の、深きなさけや立歸る（夕霧）

「奥聞かうより口をきけ」といふ諺を逆にいひ、奥樣にいひかけて文を飾つたのである。この諺は毛吹草にも見えて、人の心の奥を聞かうとしたとて語るものでないから、その言ふところを聞いて察せよとの意。

***苦は色變ゆる松の風**（薩摩歌）

苦は松籟を聞く世捨て人にもあつて、ただ苦の品が變つてゐるばかりで、苦の無い者は無いとの意の諺。持統天皇歌軍法に「苦は色變ゆる松が嶋」とあるは、風を嶋にもぢつたの

である。毛吹草に「苦は色をかゆるゃ花に雨と風」。また古歌にも「波の音きかじと入りし山の奥に、苦は色かへて松風ぞ吹く」。

桑名の衆 めでたや今の湯上りは長長の中風病み、なほるも道理桑名の衆（百合若）

伊勢國桑名の人。ここの文は、桑で造つた物をつかへば中風症に罹らぬといふ俗說を應用して、かくいうたのである。諺に「桑の木の杯で酒を飲むと中風に罹らぬ」といふ。

くはばら 耳を塞げば電光眼に燒鐵さす如く、聲を力に桑原桑原、雲雷鼓擘電念彼觀音、臍を隱せと泣喚く（天神記） 御殿も搖ぐ雷聲、わつとひれふし女房達、世直し世直し桑原と、生きたる心地はなかりけり（振袖始）

「桑原」雷鳴の時に落雷の災禍を避ける爲に唱へる呪語。菅公の靈を火雷神とし、菅公のしろしめした桑原には落雷なく、よつて雷は桑を忌むといふ俗傳によつたものである。和訓栞に「くはばら。雷鳴に必ずかくいふは、堂上の桑原は菅家なるを以てなり、菅神を火雷神とするよりの事といへり」。皇都午睡（西澤文庫）三編上卷、雷除桑原の條に、「桑原といふ處は菅菅原のしろし召たる所也、延喜の霹靂その後度度雷の落たりしに、此桑原には一度も落ちず、雷の災なかりしとかや、故に京中の兒女子雷鳴時は桑原桑原と云て咒しけると也」。日本振袖始に、「さしも猛しき素戔嗚も、雲を放れし雷公の桑の立木に挾まれて苦しむ形もかくやらん、しをしをとして詞なく」。

首に懸けたか時鳥 這出の蛙二合半、首に懸けたか時鳥（薩摩歌）

時鳥の啼聲「ほぞんかけたか」をもぢつて、「首に懸けたか」というたので、「首にかける」とは、保有する意にいふ。「にじ」（二字）、「跡を濁さぬ水の面」をも見よ。俚言集覽に「ほぞんかけた＝子規聲、（犬筑波）佛壇にホゾンカケタ歟ほとときす」。

凹い處に水溜る 人は詞の義に逼り、言うて勝たれぬ相手ゆゑ、凹い處に水溜る、搔破つてさへ痛い身を慘らしうも切裂かせ、まだその上に足らぬとや（羅迦）

凹い處には衆くの水流込み、戀物などをも多く流込むやうに、惡事の嵩むを云ふ。論語・子張篇に、「君子惡居下流、天下之惡皆歸焉」。

雲に汁ができる いやこれ雲に汁ができた、どうした緣やら三吉めが與作といふ名にほれて常に己を大事にする（丹波與作）

雲にとざされてゐたのが雨となつてきたやうに、今まで恩案してゐた事件の樣子が變つて期待の生じるに喩ふ。（青雲の中に一片の白雲の現はれるはやてとは別）。西鶴諸土産・卷之四、繼風は米のあがりの條に、「雲に汁が出來て、雨の降りしころ跡は風と定め、てんほに手を打ち思入の米買ひ、一時あまりに立續き、目ふる間に二匁あがれば」。金座色町奢（正德三年刊）卷之六、顧は成就の蒔繪の條に、「此度は平戸の船頭が肝煎、五島の鳥屋の息子百尾なりさうで、先は大阪見物がてらに女房も見てからとの事、然れば雲に汁が付いたと是故の御奢侈」。亂脛三本鍬（享保三年刊）三之卷に、「おしゆんも今は合點し、思ひは何れかはらぬ思ひ、誰やらが片思ひなればわしは片破れ月、になはば中や絶えなんと、どうやら雲に汁が出るや、東の方もしらしらと明くれば」。紀海音寶、呉越軍談・第三に、「伯宰嚴も勇みだし、雲に汁が乘つて來た、きほひ口には聞及ぶ音曲如何と奏すれば」。

暗がりより引出す牛（振袖始）

ぐづつき曖昧なるに喩ふ。出家形氣に「日用の受答さへ只ぐづぐづと、惡智暗がりから牛引出すやうになりしかば」。歌謠部其二、「繼藝の闇のくらがりに」の條をも見よ。

勸學院の雀 智略はお家、勸學院の雀任せておけと小躍して（女楠）

勸學院の雀蒙求を囀ると云ふ諺によつたので、感化受けて眞似るをいふ。この諺の起りについては、藤原冬嗣が天長三年三條の北、壬生の西に勸學院を建て藤原氏の人人の學問所とした、その遺址を雀林といふ、學問盛に行はれて僕隸までも蒙求を囀つたと云ふより出たのであらう。但・北窻言の梅園日記・卷三には、「勸學院雀囀二蒙求一といへること寶物・八幡愚童訓等に出でたり、富樫の舞・類政の謠にもいへり、曾我物語にも勸學院の雀とかやと申しければなどあれば、久しき諺なり、今考ふるに、蒙求の開卷に載せたる李良が薦蒙求一表に、李瀚撰三古人狀跡一編成音頭、名曰二蒙求一、瀚家兒童云云をつゞめて、瀚が家の兒童は蒙求をさへづるとふるき諺にいひしなるべし、唐人などの吻音ふをばさへづるといへればなり、さるを後に瀚が家を勸學院と誤り、さへづるといへるより兒童を雀と誤りたるなり、又宋の方岳が詩に、黃鸝を教得て書を讀むことを解せしめ、能く蒙求中の一句を記せしむといへる句などをも混じたるにや」と見えてゐる。

外宮は四十末社 さてまた外宮の御社は此神の第一王子、あひに相殿大神宮、末社は四十末社なり（冷泉節）

人倫訓蒙圖彙（元祿三年刊）七に、「山伏の所作祭文としてふを聞けば、神道かと思へば佛道、とかく其本據定かならず、伊勢兩宮の末社に四十末社百二十末社などいふこと更になきことにて、このこと神道問答抄といふものに記せり」。伊勢參宮名所圖會に、「俗に外宮は四十末社・內宮は八十末社と云ふこと舊記になきこと、何頃よりいひ傳へしにか」。松の葉（元祿十六年刊）卷三・さいもんの唄に、「……みもすそ川のかげ清く、外宮は四十末社・內宮八十末社云云。

下戸はなくとも妖物はある世なり（閑八州）

諺に「下戸と化物はない」といふを改作した洒落である。俚言集覽に「下戸と化物はない＝毛吹草○（犬子集）思ふが中は下戸ぞかし翌○又下戸と鬼とはないとも云（鶯衣節分庵記）」。

袈裟まで憎い 袈裟まで憎い世の譬、今日は年忌の佛まで憎まする

は我が戀ゆゑ（隣摩歌）

坊主が憎ければ袈裟まで憎いといふ諺によつたのである。毛吹草に、「坊主が憎ければ袈裟まで憎し」。北條時頼記に、「法師憎めば袈裟まで憎い」。

下駄を預く　とても叶ふまじと御覽じ、奉公せよ召使はんなどと下駄を預け給ひしが（天智天皇）

かかりあひをつける。我が利益の爲には氣に入らぬ者にも緣をつけて誘引するをいふ。

***けらはらたつ**　百連公に奉らば百連は鵜の喜び、少將はけら腹立ち、そのほてつばらくり拔いてやらんものと（隅田川）

「蝦蛄腹立」蝦蛄は鵜の好物である、蝦蛄が腹を立てば鵜が喜ぶといふ諺によつたのである。狂言記・富士松に、「蝦蛄腹立つりや鵜喜ぶ」。

毛を吹いて疵を求む（源義經）

藪をつついて蛇を出すと同じ意の諺。韓非子に、「不二吹レ毛而求二小疵一、不二洗レ垢而察レ雖レ知」。

***ごくに立たぬ**　肝心の時には念佛といふものも何のごくに立ちませぬ（反魂香）　ええごくに立たぬ根性と、涙をうかめ齒ぎしみし（氷朔日）　こぐにもたたぬ父めを持つて、かはいや冷いめをするな（天網島）　おばば垣を結ひ圍ひして何時までの住家、ごくに立たぬ事する人と（蛙合戰）

何の頼にならぬ。役に立たぬ。蓋し「ごく」は語句で、言句に立たぬ義か。和訓栞「ごくたふ」の條に「ごくにたたずといふは不二堪一言句一の義なるべし、言語道斷といふが如し」。（但言集覽には「穀につかず、穀にたたずとも云」と見えてゐる）。

五月五日の一夜さを女の家といふ

拾遺和歌集の部、「さつきいつかの一夜さ云云」を見よ。

轉けても土を摑かんで起きる（博多）

轉けても徒手では起きぬ意で、慾心深きをいふ。日本永代藏卷二、借家大將の條に「躓く處で饅石を拾ひて袂に入れける」とあるのと同意。

こじりがつまる　方方の屑金が不埒になり、あたる所が嘘八百、いかうこじりが詰つて來た（冥途飛脚）

さげたる油の二升入、一しやう差さぬ脇指も、こよひこじりの詰りの分別（女殺）

「小尻が詰る」身動きができぬと云ふことで、おもに金錢の融通のつかぬことに云ふ。京童・六に、「昔の劍は今の菜刀にていよいよ鏽び義へ、はがねを鳴すことあらねば誰に身をとはるるょすがもなく、小尻詰りぬれば浮世をしのぎ難く」。

こしをよぢらすとも

「さまがみやげの菅笠云云」を見よ。

碁勢弓力は格別（千疋犬）

智者必らずしも碁に強いわけでなく、強力の者必らずしも強弓をひくわけでなく、別才別力によるとの諺。野語述說に「碁勢弓力、言碁者不二關係一於知之有無一、而別有二此知一也、弓亦不二關係一於力之强弱一、而殊有二此力一也」。

牛蒡も身祝ひ　娘は土器・牛蒡も身祝ひ、太夫樣も御全盛（壽門松）

娘は土器（その條を見よ）の緣で、毛牛蒡を聯想して「御坊も身祝ひ」の諺にいひかけ、そして牛蒡は男の勢を增すといふ意より、太夫樣も御全盛というたのである。

これに懲りよどうさいばう　これに懲りよどうさいばう、ほんに孫子に傳へても、主の娘と懇ろなど駿河の富士と一里塚（歌念佛）

撮棒に打たれて懲りよの義。懲りよの意にいふ諺。「どう」は「どう山伏」「どう掛摸」などの「どう」と同じもので、語氣の强まる時に冠する語、撮棒は木又は鐵で作つた棒で、棒を坊に通はして、「どうさいばう」と擬人名にしたのであらう。地方によつては「これに懲りよ嘲嘲坊」といふ所もある。

牛王の裏に誓紙一枚書く度に、熊野の烏がお山にて三羽づつ死ぬると、昔より言ひ傳へしが（天網島）

この迷信はかなり昔から傳はつたもので、明和頃の川柳にも「熊野では今日も落ちたと埋めてやり」といふのがある。この川柳の意も、熊野牛王の誓紙に誓約を書く者が多いので、今日もその爲に熊野の烏が落ちて死んだから埋めてやりといふのである。「ごわう」をも見よ。

子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪はなし（大磯虎）　子を棄つる藪に夫婦の二股竹（天網島）

困窮しては最愛の子でも敢に棄てるべけれども、己が身を棄てることは出來ないとの諺。御前義經記（正德二年刊）に、「折柄ならぬ貧しさ、子を棄つる藪はあれど身は棄て難くして、手形の印に金子五兩請取り奉公にやりぬ」。

蒟蒻の錢ぢやとて砂にして（丹波與作）

「蒟蒻は單丸の砂拂」といふ諺をきかして云つたのである。（蒟蒻が單丸の砂を取るわけではないが、蒟蒻玉を煮て攪拌ぜ、水を加へ蹈んで糊とすることからかう云ふ諺ができたのであらう）。江戸・深川蒟蒻島のことを畫ける南鐐堂一片彌の書に、「すなはらひ」（安永四年刊）といふのがあるも、蒟蒻が砂拂になると云ふ諺から取つた書名である。

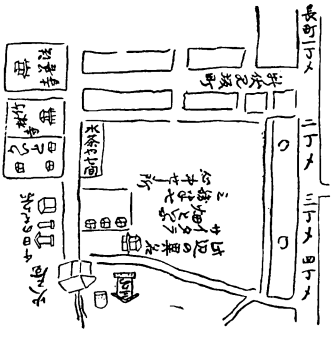
細工はりうりう仕上を見よ（加增曾我）

今も用ゐられてゐる諺である。但言集覽に、「細工は流流しあげを見やれ。（北條時分諺留）細工は流流仕上げを見よ」。

さいたらばたけ　未來は地獄も極樂も、さいたら畠へ遣らうとも、お心一つの情ぞと（五人兄弟）　神道けがれの生首、佛道には五體不具、どちらつかずのさいたらばたけと打笑ひ（聖德太子）　鵜といひし獸の帝を惱し奉る、頼政勅諚蒙つてたんだ一矢にころころころ、落つる所を猪の隼太、九刀そさいたら畠、

畠山重忠も（雪女）

さいたら畠といふ諺には二種の意義がある。その一は、才太郎畠と書いて、小才の利いたことをいひ、また小才の利いて間が抜け、智とも愚ともどちらつかずをいふ。徒に世話をやき骨を折つて益なきことをするを、諺に「さいたら畠に何をする」といふ。その二は、さいたら畠は大阪千日の墓所の傍のあざ名であつたので、よつて以て三昧所のことにいひ、また冥土のことにいふ。異林子の用ひたのは（南水漫遊所載）「さいたら畠」



その一の意義であるが、その二の冥土行きの意をも含んだのがあるやうである。「さいたら畠」は「さいたらばたけ」「せいたらばたけ」ともいふ。なほ用例を擧げれば、甲陽軍鑑・四に「利根の過きたる大將は、下劣の輩にさいたら畠と申す如く、本圖にてましまさねば、物を習へど末通らず、半分知ては然も開山にならんと思召」。乞童人談翁撰・俳諧染糸（寶永元年刊）に、「亦兄立と云句有。青くしてもあろべきものを唐からし芭蕉。自然と形よろしく近年の上手也、此味をよく合點して仕るべし、されども初心の人・氣を高く持過ぎたらば、俗にいふさいたらばたけへ走るべし、智恵才覺利口ありとて上手にはならず、骨を折り魂を碎て考有べし」。故事因緣集・三に「神國に生るる人が現世の神明を捨て、未來の佛を信仰するは才太郎畠へ走り過る」とある。これ等はその一の意義である。また、松の落葉（元祿十七年刊）巻五、三勝心中の唄に、「いざや最期を急がうと言うて、火屋の東のさいたら畠、露か時雨か身を知る雨か」。（序云、三勝・半七は元祿八年十二月六日の夜千日の墓所で情死した）。續小夜嵐・巻上に、「地獄を攻めらるるとも冥途は極めてあし立惡しき所なり、その上兵糧はさいたら畠よりつづけ侍れば、たやすく討つこと叶ふまじ」。紀海音撰・心中二つ腹帶・道行ほしのかずに、「捨つるに極めし身の上もそぞろに心細げにて、三途の川は目の前の、麥吹く風のさざ浪や、空淋しくも名乘るてふ、死出の田長を友がねに、さいたら畠の案山子かと、見るにつけ聞くにふれ、あの世にたぐふぞあぢきなき」とある。これ等はその二の意義である。

相場が惡い　九平次も氣味惡く、相場が惡いおぢやいの、ここなよれ衆は異な事で、おれらがやうに銀遣ふ大盡は嫌ひさうな（曾根崎）

酒戻しはせぬもの　飲んだ酒をかへせとは、法を知らぬ侍、酒戻しはせぬもの（川中島）　其禮として目腐り金樽代として越した、酒もどしはせぬもの故、まあ受取つて置いたぢや（鑁門松）

目出度い酒の返禮はせぬもの。蓋し逆戻し（酒戻しと通じ）になるを忌む。

酒盛つて尻切らる　これ帶刀殿、世話に申す如く酒盛つて尻切らるるとは某でござる（傾城佛原）　此方は物入振舞うてあげくにしたたか踏まれた、向後振舞致すまい、御馳走が身のひしや酒盛つて尻ふまれたと、獨言して歸りけり（今宮）　えどんな所へ給仕に來て、酒盛つて尻踏まれた（宵庚申）

「酒盛つて尻踏まれる」ともいふ。恩を施し却つて仇で報いられる喩にいふ諺。

申の日　花の三月よけぬれば皆吉日ぞ、その外に忌むは申の日猿の頬、おして嫁入の御乘物（艶狂）

俗に申の日には嫁入せぬものといふ。蓋し申と去との音通を忌むのである。ここの文に「花の三月よけぬれば」とあるのも、俗に三月に結婚するは花の咲いて散るやうに離散し易いとて忌むのである。諺に三月は去られ月ともいふ。

さをなぐるま　さをなぐるまの世の業も、子故の闇と哀れなれ（百合若）

（椄投間）光陰の移り易く、歳月の早く過ぎるに喩ふ。椄は「ひ」をいひ、正韻に「桑何切、機杼之屬、所以行緯」。陳造詩句に「病念レ還レ家可二奈愁一、客中日月急二椄投一」。和訓栞に「さをなぐるま＝椄投之間也といへど節を投るの義、萬葉集に投節をなぐるさともよめりともいへり、光陰の移り易きに喩ふるなり」。

三人寄れば公界　三人寄ればくがい、忠兵衛が身代の店おろししてくれる忝い（冥途飛脚）

三人寄集れば公衆の中と見做すべきであるとの意の諺。薩摩守忠度（古淨瑠璃）銘づくしの條にも、「三人よればくがい、御前にいふ事こそあれ忠度を六彌太が討つたるとはいかに」。

四十二の二つ子　大阪のさる人の四十二の二つ子にて產家より貰ひ守育て（二枚繪）　此子は父御の四十二の二つ子にて祖母がお捨と付けたが（鎧櫂三）

親が四十一歳で產んだ子は、親が四十二歳の時は子は二歳になるによつて、四十二は四二即ち死に通ひ、四十二と二と加へた四十四即ち四四は死に通ふとてこれを忌み、假にその子を棄てて他人に拾はしめ、そしてそれを貰受けて育てる風習があつた。貝原好古編・本朝俚諺に、「四十二のふたつ子。世俗男の四十二歳を厄と云ふ、四十二を略すれば四二なり、これ死に通ずといひ、四十二歳にて二歳の子あれば、父子の歳を合せて四十四、略すれば四四なり、これ死に通ずといひて子を棄つる者あり」。

磁石に針　盜人に藏の番・磁石に針、皆に氣を付けられてはやもやもや

と腹が立つ（夕霧）

磁石に針が吸附くやうに、或事をなせと言はんばかりに仕向けることの喩。

死する時節は人魂飛んで其身の影の無きと聞く（二枚繪）

昔からの諺に「人の死ぬる前には影が無い」といふ。蓋し人の生氣の襄へ盡きたのを形容したものである。また人の死ぬる時は魂魄まづ其身を離れて飛ぶと想像されたもので、曾根崎心中にも「アア怖、今のは何といふものやらん、オオあれこそは人魂よ、今宵死するは我のみとこそ思ひしに先立つ人もありしよな」と見えてゐる。

＊したをまく　これ禍の初めなりとて皆舌をまかぬはなかりけり（天鼓）　命にかけがへあらばこそと、舌を卷いてぞかぶり振ろ（用明天皇）

〔卷舌〕甚しく恐れるをいふ。漢書・揚雄傳に、「禮官博士卷二其舌一而不二敢談一」。太平記・卷一・御告文の條に、「告文讖みたりし利行俄に血を吐いて死たりけるに、諸人皆舌を卷き口を閉ブ」。

七月の十六日　あらかしがまし釜の蓋、いつか明くべき七月の十六日も程遠き（吉岡染）

舊暦七月十六日は俗に地獄の釜の蓋が開く日であると云ふ。「ずごくのかまのふた」「盆正月の十六日」を見よ。

七度結びて兄となり、六度契りて弟となると傳へ聞く（會稽山）

兄弟の緣の厚きを云うたものである、顯朝濱出（淨瑠璃）第五に、「七度契りて兄となり、六度結びて弟となる」と見え、曾我姿富士には、「七度契りて親子となり、三度結びて兄弟と生るる」と見えてゐる。

七人の子はなすとも女に心許すな（雪女）

女は根性邪惡なものなれば、よしや七人の子までも生んだ中であつてもなほ男の心を許してはならないとの諺。毛吹草（萬治二年刊）卷二・世話の條に、「七人の子はなすとも女に心許すな」。

忍の緒　勝つて兜の忍の緒、心の紐をしかと締めて（待統天皇）

もと兜の内に忍ばせて髮に括附けたよりの名、兜に附け頃で結ぶ紐。ここの文は諺に「勝つて兜の緒をしめよ」と云ふを應用したのである。醒睡笑・寛永頃刊）二に、「勝つて兜の緒をしめて候よ」。

しはすあぶら　世にひろがりしあだし名をよそに譬ひし言の葉や、其油屋の一節も師走油が身の上にかかる涙とこぼれそひ（今宮）

〔師走油・烈鍋の意にいふ。師走（舊暦十二月の稱）に油をこぼせば火に祟ると云ふ。醒睡笑・一に、「この水が油ならばそもそもよい物か、師走油はかからぬ事といふなるに」。世の是沙汰（寶永三年刊）卷之一、鼠鳴はそれぞれのいはれの條に、「師走に油こぼせば火にたたるとて水あびせること、此月に限り忌む故いぶかし、此心は月月おしつまり人の心もいそがしく、一入始末心も出來るなり、油をそまつにする人寒き頃つめたき水をあびせ、是にて知れと心を付くるなるべし」。ここの文は、お染・久松が戀に死んで世に譬はれるそれのやうに、我身も譬はれることであらうと泣く意に、お染・久松が油屋である緣よりして、師走油にいひかけ、師走油をこぼせば水を浴びてまじなふより、「涙」に水をきかせたのである。

師走坊主　ああ紙子觸りが荒い荒い、これ引けば破れる摑めば跡にしはす坊主師走浪人（夕霧）

師走坊主師走浪人ともいふ。姿變れて便なげな者をいふ。蓋し盆には僧に物をくれるけれども、師走には盆のやうにくれぬによつて、僧の便なげなことから出た諺である。井原西鶴撰・胸算用（元祿五年刊）卷一、長刀はむかしの鞘の條に、「人の後世借心にかはる事はなきに、衣を著たる朝は米五合ももられ、衣なしには二合も勸進なし、殊に師走坊主とて、此月は忙しきに取紛れ、親の命日も忘れくれねば、是非もなく鐘八文にて年を越しける」。同・卷五、平太郎殿の條に、「浮世に住むから師走坊主も暇のない事ぞかし」。柳亭種彦編・用捨箱・中卷に、「夕霧阿波鳴渡のここの文を引きて、「姿やつやつしく便なげなる者をさして師走坊主師走浪人と云ふ諺の昔ありし故に、かくつづけて書きたるなり、盆には僧の物もらふ事常なれども、歳暮には」さることもなきをいふ」。

十四の灸に水が湧く

「水が湧く」を見よ。

しほをふむ　江戸長崎へも逐下ししほを踏ませて人にしや（卯月花）

〔鹽を踏む〕からき目をする。辛い目に遭ふ。東海道名所記に、「諸國をめぐりて、うきもつらきもしほを踏みてかけまはり」。本朝俚諺（貝原好古編）に、「しほをつくる。俗間からき目を見すると云も又同じ」。近松作・淀鯉出世滝徳上卷に、「憂き鹽うんだは身のやいと」とある、これは「踏んだ」を類似音「うんだ」いぼうた意」といふて、「身の灸」といひつづけたのであらう。但九行古院本には、「ふんだ」となつてゐる。「うきしほ踏む」といふ詞は近松作博多小女郎波枕中之卷などにも見えてゐる。

上戸の腹の石橋山　若侍の血氣酒、上戸の腹の石橋山、賴朝はうつぼ木に軍理の工夫を得給ひて（冷泉節）

上戸の腹の燒石が飛び出る（上戸の腹中には燒石があつて酒を吸ふので、酒が慾しくてならない意にいふ）の諺を石橋山にいひかけた。石橋山は相模國足柄下郡石橋村にあつて、治承四年八月源賴朝が大庭景親と戰ひ敗れ、臥木の中に隱れて逃れた所である。

正直の頭に宿る神風　正直の頭に宿る神風は、船中何の氣遣なし（國性爺）

正直の頭に神宿ると云ふ諺を神風にいひかけてその序にしたのである。倭姫命世記に、「日月廻二四州一、雖二照二六合一、須二照二正直頂一」。

釋迦に經　所の人に教へろは釋迦に經か知れれども（薩摩歌）　母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鐵

棒（國性爺）
熟知せるものにむかつてなほ教へることにいふ諺。「釋迦に説法」ともいふ。

じやくはあめ 荒金の刑部山國惡事を工む天罰にて、寂は雨にて討たるるなり（田村） 女夫は母の機嫌顔見ればこの世の本望と思へども、じやくは雨とふる涙隱すぞあはれなる（寄庚申）

〔寂は雨〕死滅するをいふ。釋尊の涅槃繪に、釋尊入寂の場に生類皆寄集つて泣いてゐるによつて、寂は雨と云ふ諺が出來たのではあるまいか。立羽不角編・千代見草・上の卷、虎毛の句に「辻占に寂はと斗聞かする」と見えてゐる。「寂は」は「寂は雨」を略したのである。

親は泣寄り 泣くな泣くなといひつつも傳ふ涙の血筋とて、しんは泣寄りあはれさよ（寄庚申） しんは泣寄り親子なり（冥途飛脚） 野にも山にも欲しきは兄弟、親は泣寄りと世話にいふも道理ぞや（五人兄弟）

骨肉の親は不幸を悲しんだり悲しみに同情したりして寄集るとの諺である。毛吹草に「廣き野も親は泣寄りの雉子かな」。

雀の巣もくふにたまる（女殺）
僅少な物も積れば遂に大となる意にいふ喩。「くふ」は「すくふ」（巣をかまふ）である。

雀の千聲鶴の一聲（蛙合戦）
この諺は和漢古諺にも出で、雀の千聲よりも鶴の一聲が優つてゐるとの意。

鼈に蓼 蜈蚣に唾、鼈に蓼、皆夫夫の敵藥あり（閑八州）
鼈は蓼を嫌ふによつていふ諺。普世俗談卷四に「蛭に鹽、鼈に蓼、月に叢雲、花に風、鯉に胡椒は指合なり」。

酢でさいて呑む 女夫の衆が此いまを酢でさいて呑むやうに言ひたいがひに言籠めて、死んでもまだ言ひ足らぬか（卯月潤色）
醤油に酢を加へたものに浸しいためて呑む義、よつて以て否酷なるに喩へる。「さく」は割で、卽ち醤油を酢で割るを云ふ。寛淵平家物語（寶永七年刊）卷之一に「淺はなだなる男めやと、酢でさいて呑むやうに修羅をもやしける」。

酢につけ粉につけ コレ親父、其方はお花が繼父、酢につけ粉につけ憎いも理り（女腹切）
なににつけかにつけ。なにかにつけ。按ずるに、酢に漬け粉に漬けは料理の詞の如く思はるれども、もともと「四につけ五につけ」の類音に據つた洒落であらう。次條を見よ。

酢の蒟蒻の 小間物屋の・煙草屋の、紙屋で候・呉服屋で候の、酢の蒟蒻のと借錢が今の金で七八兩（女腹切） そなたが請に立つた玉が事につき用があるといへども、酢の蒟蒻のと我儘いうて顏出しもせぬ請人がどこの國にあること（大經師） 此中文を進じても返事もござらず、使をやれば酢の蒟蒻のと、いつ屆けさつしやるぞ（冥途飛脚）
「何の彼の」といふを諺に「四の五の」と云ふ、その「し」（四）を「す」（酢）に云ひ、「ご」を「蒟蒻」にいひなして、臺所に用ひる物品の類音に據つた洒落であらう。「酢につけ粉につけ」（前條を見よ）といふ諺もこれと同じ意に用ひる。（狂言・酢蓋に、酢を賣る男が「すこん」と呼ばはつて賣歩くといふがあるが、これから洒落た諺との説もある。また俚言集覽に「酢の蒟蒻の引の山の」〔傍訓考〕祇園會に山ぼこあり、山ほこを出町に枝町ありて年貢をはかる佳例に其日にあたりて持參す、その時酒をもち甚急がしきをもてかくいふとぞ）。

すゑるぜん 下地は好きに据ゑる膳、甘い首尾とぞなりにける（女腹切）
〔据膳〕膳を据ゑてさあ食へと言はぬばかりに仕向けること、以て欲する盛にせよと言はぬばかりに仕向けることに喩ふ。女の方から男に情を通じようとして挑むを諺に据膳といふもこの意である。

すんぜんしやくま ええ邪魔な奴、名もとがとがしい富樫め、寸善尺魔むれの癪（蛙合戦） さあ寸善尺魔いかがはせんと狼狽ゆる（生玉）
〔寸善尺魔〕善は寸ほどありて惡魔は尺ほどあるとの義、卽ち兎角善なことは少く惡魔は多いとの意。諫早にも「寸善に尺魔といふ事あれば、善事は末へ延ばしては必ず邪魔入り、其事遂げ難きものなり」。

世帶佛法腹念佛 世帶佛法腹念佛、口に食ふが一大事（今宮）
佛法よりも世帶、念佛よりも腹ふくれるが大切である、卽ち生計の道に心配なくして佛法に志すべく、食足つて後に念佛を唱ふべきであるとの意の諺である。西澤與志撰・風流今平家（元祿十六年刊）今樣妾掬の條に、「明暮十露盤はぢき、寺道場は東やら西やら知らぬが佛、世帶佛法腹念佛とわるい世話を聞き、あたら年月を只欲にのみ暮し」。

背中に腹 藤が臥したる北枕、いとしや科もない人をと恐しながら背中に腹、胸先に打跨ぎ切先差當てどうと乘る（泥鰌） 卯腹辰股背中に腹、商賣には換へられず（反魂香）
「背中に腹は換へられぬ」と云ふ諺であつて、何は扨置きまづ我身のことが大切な意にいふ。魔笑波に「背中に腹はかへられもせず、畔る雪を負ひても鳥は餌を拾ひ。安信」。

前車に懲りず後車の罪業 如何ぞ汝王地を犯す冥罰神罰、身を亡せし前車に懲りず、後車の罪業生生はてなき惡毒蟲、羈絆を切らん（閑八州）
「前車の覆るは後車の戒め」といふ諺あるによつて、かくいうた。晏子春秋に「諺曰、前車覆後車戒也」。童子教に「前車之覆、後車之鑑」誡。なほ巢林子のここの文は、諺曲・土蜘蛛に「汝王地に住みながら、君を惱ます其の天罰の、劍にあたつて惱むのみかは、命魂をたたん」とあるの改作である。

＊船頭馬方御乳の人　扨扨利口な野郎ぢや、船頭馬方お乳の人、こちもそちらと同じこと、して年は幾つ（丹波與作）

根性惡であつて口さがない同類の者として並べて言はれた諺である。西鶴織留（元祿七年刊）巻六、子を思ふ親仁の條に「心だての惡しき者を馬追・船頭・お乳の人と申せど」。氣慢三太鑑（享保三年刊）四之巻に「口のさがなきを馬追・船頭・お乳の人と云ふ」。

ぜんのはし　あつちはかうのもの、こつちは糠味噌、切らるるは膳の箸、外に道はあるまいか（聖德太子）

〔膳箸〕膳の上に箸は附き物の意よりして、物の定まつてゐることにいふ。「膳の箸は違つてもこれは違はぬ」などいふ詞もある。

せんみつ　白き鹿の命毛を筆に作つて繪を畫けば、其繪卽ち物言ふよし、何と其繪は出來申さぬか、但例の千みつか、いかに如何にといひければ（五人兄弟）

〔千三〕千言ふ中に三つも眞實の事が無いとの義で、嘘言の意に云ふ。本朝櫻陰比事（元祿二年刊）巻之五、名は聞えて見ぬ人の顏の條に、「今は千いふ事三つも眞實はなしとて、千三といふ男あり」。

＊袖にあしらふ　内には見馴れぬ風俗のうさんらしげな大小に、さすが袖にもあしらはず、亭主太郎揉手をして（酒呑童子）　我夫を袖にしての不義ではなし（堀川波鼓）　商賣は袖にして、小路隱れの家出のと聞くたびごとに、此伯母が胸には釘を打つ如く（卯月紅葉）　その兄分を袖になし志をむげにした（萬年草）　親子一門妻子まで袖になし、身代の手もつれも、小春といふ屋尻切にたらされ後悔千萬（天網島）

粗略にもてなすを袖にあしらふと云ひ、心を留め丁寧にもてなすを身にあしらふと云ふ、蓋し袖は身に附屬してゐるからである。「袖にする」「袖になす」と云ふも疎外にする意。

大海を手で堰く　此末長き大河の川下に、人がなあらうとて御免を請うて渡る者のあるべきか、ええ堰せばし夫は小人の、大海を手で堰くとは御分がこと（大磯虎）

成し得べからざることに喩ふ。後漢書・張儉傳に「儉以二區區一堂一、而欲二獨堰一江河一」。

大魚は小水に棲むことなし（持統天皇）

古今諺に「井水無二大魚一、新林無二長木一」。

唐人の寐言（大織冠）

理解できぬ言語又はつまらぬ理窟を口說くを嘲つていふ諺。

唐へ投げ金　目前日本の寶を、見えもせぬ後世の爲、異國へ渡すうつけ者、それこそ唐へなげがねといふもの（孕常盤）

「唐へ投げ金」ともいひ、大儲を僥倖として、或は元も子も損失するやも知れぬ事に投ずる金。投機金。この諺もと寛永十三年德川幕府が日本商船の海外渡航を禁じた以前、日本貿易船に托して見もせぬ品物に投資したことをいふ經濟用語である。後世轉じて、講の中に金を棄てるといふに同じく、無益な事の喩諺に用ひる）。

鷹は死ねども穗はつまぬ　鷹は死ねども穗はつまぬと、人は讃めても惡業は、落穗を拾ふ群雀に劣つてつらく淺ましや（百合若）

鷹は死んでも穗を啄むやうなことはせぬの意であつて、義の爲には饑餓に迫つても敢て不義の財祿は受けぬ喩に云ふ諺である。毛吹草に、「鷹は死すれど穗をつまず」。

寶は身の指合　大國二ケ國三ケ國の價ともなる名劔、寶は身の指合せ、代なして和女が身の代と（酒呑童子）

寶は有合はすれば身を救ふといふ意の諺。胸算用（元祿五年刊）巻五・つまりての夜市の條に、「過ぎつる暑さを凌ぎし編笠、未だ背背として損ねもやらずありけるを、これ來年の夏までは久しきことなり、寶は身の指合せ、これを賣りて當座の用に立つるより外なしと」。

寶は涌き物（博多）

寶はこれを得ようとすれば自然得られるもの

ただとる山の時鳥　ただ取る山の時鳥、しかも番を引懸けた、かけたかけたと謠ひ寄る（大原問答）　先へ廻つて池へおつぱめ、何の手もなく殺しなば、ただとる山の時鳥、ほととうつてはこれ因果め（三世相）

手數なしに只取る意に云ふ諺である。醒睡笑（元和年中成）に「ある者山路へ行き、不思議に白鳥を拾うたり、更に鳥の名を知らず、人に問つて語る、聞者それは郭公であらうずと云、いや大なる鳥なり、中中小鳥ではない、きりとて時鳥にすくうたただとる山の郭鳥とて時鳥からあることよ」。大原問答胄葉笛のこの文は、元手いらずに姉弟の兒を取得たのを「ただとる山の時鳥」の諺を應用し、「かけた」に時鳥の啼聲の「ほぞんかけたか」をきかせたのである。

蓼は利根草　蓼は利根草・茗荷は鈍根草（懸物掛）

この俗說は初音草咄大鑑にも「蓼を好いて食へば利根になると古よりいふが、十日あまり食して見れどもかはりた分別も出ず」と見えてゐる。

短氣は損氣（冥途飛脚）

短氣といふ氣は損な氣といふことである。損氣といふ氣はなけれども瑞脚を合せたのである。氣みじかでは何事も成功せず結局身の損となる。

地獄の釜の蓋開く　盆正月の十六日を待ち樂しみし我我が、あはれ地獄の釜の蓋開くを待つべき罪人と（今宮）

俗に盆・正月の十六日は地獄の釜の蓋が開く日であると云ふ。椀久末の松山（都太夫一中直正本）上巻に、「あくるあしたは十六日、地獄の釜の蓋さへあき、餓鬼もたしなむ男ぶり、三途の川原をぞめくとかや」。（盆・正月の

十六日は奉公人の藪入の日でもある。「盆・正月の十六日」を見よ)。

智は萬代の寶 智は萬代の寶とかや、大職冠鎌足公明智を以て三國を察し(大織冠)

智の貴ぶべきをいうたもので、紀海音撰・四民乗合船(正徳四年刊)にも「智は萬代の寶と實語教に見えしもさることぞかし」。

***提燈に釣鐘** 提燈に釣鐘と主ある我袖棲引き(卯月潤色)

不釣合なことに譬へる諺である。井原西鶴撰・織留・巻之一に、「聟は目下なるをとつてよし嫁も又我より輕き方より迎へてよし、提燈に釣鐘かけあはぬ事すれば、内證の火消ゆるに程近し」。この諺曾我會稽山にも見えてある。

***ちやうらい** こりやどうぢや、さてもなれば成る物か、ちやうらい柑子が鼠になると、あきれ果てて居たりしが(弘徽殿) 其方へ伊丹・此方へ池田、稚き者に强意見、ちやうらい高じて尼が崎(賀古教信)

〔頂禮〕師命頂禮の頂禮で、印度古來の最敬禮である。信順歸依か餘り過ぎれば尼になる、度を越せば意外な物となる意の諺に、「頂禮かうじて尼になる」といふ。「かうじろ」は高の字音を活かした語で、嵩じるなどの字をも充つ、かさむ、增長す、つのるの義である。「ちやうらい柑子」は、高じに柑子をいひかけ、「高じて尼が崎」は、尼を尼が崎の地名にいひかけたので、共に上述の諺に據つたものである。次條をも見よ。

頂禮高じて尼が崎(賀古教信)

頂禮高じて尼になる諺に、尼が崎の地名をいひかけたのである。この諺は、佛を禮拜歸依すること增長して度を過ぎれば、世を捨てて尼になるの意であるが、蓋し寵愛高じて尼になるの諺から轉訛したものであらう。當世誰が身の上に、「寵愛高じて尼になるとの諺、昔の佛徇前に限らずと、聞く人申しあへり」と見え、毛吹草に「寵愛高じて尼になす」と見えてゐる。前條をも見よ。

***ちんぷんかん** 彼方の餞別此方の門出、上官中官下唐人、ちんぷんかんするちんだの酒盛(大織冠)

わけのわからぬことを云ふ。もと儒生のいふ漢語を世俗の聞いてまねた語であると云ふ。

月夜に釜 ほんにだまされた拔かれてのけたと氣も拔けて、人人とほんと月夜に釜のふたたび恨む後より、爰に爰にと勅諚の(振袖始) これ祐經あんごうらしく出拔かれ、月夜にかまぼこ不覺の至り(加增曾我)

月明の夜に釜を盜まれるは迂濶千萬の意であつて、迂濶にして出し拔かれるに喩へていふ諺である。西鶴撰・織留に、「その合點はして居ながら身の一大事を忘れ、いつも月夜に釜を拔かれ、借錢乞と無理の口論」。

月をうかがふ猿 有明の月をうかがふ猿よりは、なほあだならん我が心(大覺)

及ばぬ望に心を勞する意に喩へていふ。謠曲・善界に「我等如きの類として、たやすく猿ひたまはんこと、螳螂か斧とかや、猿猴が月に相同じ」。

***つちでにはは く** 花車も亭主も槌で庭はく人呼びに(父腹切) 井筒が許へ乘懸の客は八幡の難與平、威勢美美しく飛下るれば、亭主迎の槌で庭、はくまい九郎左見忘れか(寶門松)

〔槌で庭掃く〕鄙直に人をあしらはうとして狼狽するをいふ諺である。覺世見久佐(天和三年刊)に、「槌で庭金銀の砂大黑舞」、とありて大黑天の扮裝で槌を持てる畫が載せてある。本朝櫻陰比事(元祿二年刊)巻五、名は聞えて見ぬ人の顔の條に、「此儘は果てぬと言うて三度首を下げて忝き顔付、槌で庭掃くと云ふ徇馳走古し、新しき徇馳雖取の咄に夜をあかし」。寛淵平家物語(寶永七年刊)巻之五、舞這す金の蟇の條に、「槌で庭をたたき箒で座敷を掃て請じける」。「横槌で庭はく」とも言つたので、世間姐氣質(享保二年刊)の中にその言葉が見えてゐる。なほ此諺に類する詞に、好色旅日記、貞享四年刊)巻一に、「ぐわつたりと揚屋入、亭主藤取て庭を掃くはや太夫が影向なる」といふのもある。長町女腹切に「槌で庭はく人」とあるは、庭掃くに白人をいひかけたのである。(「白人」につきてはその條を見よ)。

頭痛八百 この喜左衞門頭痛八百、一寸なりとも呼びましたいと願ふ折から(夕霧)

頭痛を强めて言うたので、俚諺の「頭痛跡卷」と「嚏八百」とを取合せた言葉である。

苔む花出づる月 苔む花出づる月、玉のやうなる若い者若い女(卯月紅葉)

出づる日苔む花といふ諺(將に盛にならうとするにいひ、毛吹草の世話の部にも出てゐる)の日を月にかへて用ひ、お龜・與兵衞の若年なるに喩へたのである。

つるのあは 口に麁食を啜つて溜めたるは、鶴の粟・蟻の埜をくむ如く、十年以來の塵積つてこの金九千九百九十兩(隅田川) 私仕事に賃苧うみ、女中とまりの袖の下、小萬といふ名でぽつぽつと、鶴のあはれやあさましや(丹波與作)

〔鶴の粟〕鶴が長い嘴で粟粒を拾ふやうに零細な物を辛抱强く積上げること。「鶴のあはれ」とあるは、鶴の粟に哀れをいひかけたのである。東海道名所記に「少しづつ受けたるもの鶴の粟・蟻の埜、細細につもれば都に上り官を望み」。

つをひかせん 班女が色に氣壓され、芙蓉の花に色なしと、唐土までもつをひかせん(隅田川)

蓮を引かせんであつて、蓮を垂させんといふに同じ。羨望させよう。杜甫飲中八仙歌に、「道逢二麴車一口流レ涎、恨不二移封向二酒泉一」とあつて、飲食物を見て欲しがるより出た諺。江戸名所記巻三、角田川の條の歌に「梅若ときくから口はすみだ川、蓮をひく程によき子

手活にする（ていけなりけん）。　能の脇師を手活にして九軒で主の座敷能（淀鯉）

手づから花を活けるを云ふ、轉じて已一人の愛翫者にするを云ふ。

手も足も釘になる（てあしくぎ）（天網島）

手足冷え凍えたのに喩へていふ。

寺から里（てらさと）（越）

寺では檀家から物を貰ふものなるに、寺から里へ物を呉れるとは物の反對なるをいふ諺である。毛吹草・巻二、世話の題下に、「てらからさと」。

てんかくちもく　天角地目天罰自滅、牛の最期は立處（たちどころ）、首捻切（ねじきり）つて棄てたりけり（閑八州）

〔天角地目〕善い牛はその角（つの）天を衝きその目（め）地を見る。俚言集覽に、「天を衝き地を眄（みま）つつ涕（はな）たれて一黒陸頭耳小齒粗（ちがい）＝此は相牛の法なり、天を衝くとは、角の上を衝くをいふ、一黒とは純黒をいふ、陸頭とは頂の平なるを善しとす、耳小とは耳の小なるを善しとす、齒粗とは牙の粗粗せるを善しとす、量歌になずらへて一石六斗二升八合といふ也」。

天に口なし（てん）　天に口なしと申せども、人の口卽ち天の口なり（天神記）

げに天に口なし、人を以て言ばしむとかや（百合若）

文德實錄に、「天無二口、假二人口一」。平家物語・清水炎上の條に、「天に口なし、人を以ていはせよと申す」。

貂に成り兎に成る（てん）　うぬめ繼子を憎み様様惡事をたくみしを、貂に成り兎に成り我身に引請け苦勞せしは、おのれに執心の故ならずや（三世相）

貂のやうな邪險な者とも成り、或は兎のやうな柔和な者とも成つて、種種な手段を盡す諺である。

どうさいばう

「これに懲りよどうさいばう」を見よ。

鳶が産んだる鷹（とび）　和泉の國水間の里の佐治右衞門、畠作りの田鳥や、鳶が産んだるたか給取の手代は、主の代りをも清十郎といふ子を持つて（歌念佛）　竹の子はなほ親優り、鳶が産んだる鷹の羽の、羽がひの下に立返り、奉公させん大人になれ（艶符）

醜き親が美しき子を生んだことに喩へていふ諺である。色里三所世帶（貞享五年刊）江戸の卷に、「又さる太夫樣は當年十九は花よ、それはそれは容自然の美君、麹町の鳥屋の娘とかや、鳶が鷹を生んだとはこれなるべし」。善惡身持扇に、「誠にかかる惡女の腹から美形の娘を生み出し、榮華の身となりしは正眞の鳶が鷹ぢやと羨みける」。「たか給取」は鷹に高給取をいひかけたのである。

飛ぶ鳥まとより落つ　平家の御代にて候はば誰かあらう景淸と、飛ぶ鳥までも落ちし身が今この御代にて候へばこそ、數ならぬ我我を頼みて御入り候ものを（出世景淸）

權勢盛なるに喩ふ。平治物語に、「信西が權威も彌盛を振ひて、飛ぶ鳥も落ち草木も靡くばかりなり」。

問ふには落ちず語るに落ちる（とと）　それ問ふには落ちず語るに落ちると、利口さうにそれが信心の觀音參りか（女殺）

人に問はれては胸の祕密を洩さないやうに注意すれども、何心なく語る時は知らず知らず胸中の祕密を暴露するといふ諺。毛吹草に、「問ふに落ちぬは語るに落つる」。

***とらがなみた**（とと）　虎が涙の兆が見えて空が曇つた五月二十八日、雨が三つぶでも降られればおかぬ（氷朔日）

さいて出でたる傘や、とらが涙も引かへて、丑天神の野邊の露、消ゆる間近き命なり（氷朔日）　されば五月二十八日に今の世までも降る雨を、虎が涙や少將の夜の雨とも名に高き（會稽山）

〔虎が涙〕五月二十八日に降る雨をいふ。日次紀事（延寶年中成）五月二十八日の條に、「虎御前忌。毎年今日多雨、俗謂今日大磯虎頭與二曾我祐成一相別、淚變爲雨、故今雨虎御前淚也」。

飛んで火に入る夏の蟲（とんぶ）（國性爺）

自ら求めて禍を取る喩。法苑珠林に、「如二飛蛾見一火殺一」。

鳶がかけた南無三（とんび）（女殺）

「鳶がかけた」とは、鳶に油揚を攫去られた意、以て呆氣にとられたことに喩ふ。「南無三」は南無三寶の略で、圖らずも失態した時に云ふ。「なむさんばう」を見よ。

とんびなき　烏鳴、鳶鳴、雀の小踊、鼬の道切り（百合若）

〔鳶鳴〕鳶がたびたび鳴けば風吹くといふ。諺草（元祿十四年刊）に、「曲禮曰、前有二塵埃一則載二鳴鳶一。註云、鳶鳴則將二風一」。

泣上戸（なじやうこ）　「じやうこ」を見よ。

鳴く烏人の末期を知らす（なかすとと）（丹波與作）

和漢三才圖會に、「自古相傳云、烏者熊野之神使也、凡病人將死之前、群鳴以爲二凶兆一、大忌之」。「からすなき」をも見よ。

啼く音血を吐く（ねなねを）（寄庚申）

杜鵑の啼聲は咯血する音に似たれば、血に啼く杜鵑などと云ひ、また啼血をほととぎすとも訓む。

歎きの中の悦び（なげよろこび）（女夫池）

悲歎にくれる中にも悦ぶことのあるをいふ。平家物語巻十、ふぢとの事の條に、「熊野へ參らせ給ひて、後世の御事よくよく申させ給ひて、那智の沖とかやにて御身を投げましましさぶらふことこそ、歎きの中の御よろこびにては候へ」。

投櫛は別れの櫛とて忌む（なげくし）（女殺）

「ゆづのつまぐし」を見よ。

なしも礫も打たぬ（つぶて）　此頃はなしも礫も打たんせぬ、氣遣なれど內方の首尾を知らねば便宜もならず（曾根崎）　なしも礫もうつとりと煙草のんでも（反魂香）　それからな

しも礫もせず（鎗權三）

礫を打つて合圖するより出た言葉で、昔沙汰無きを「無しも礫も打たぬ」といふ。礫を打つことも無いの義である。（「なし」を梨と書いてもあれど、もと無の義）。

＊なむさん ハアア南無三、この馬落ちた（鶴門松）　市之進・女を見失ひ、南無三寶と北へ走り南へ戻り（鎗權三）　後を見れば小提灯、河といふ小文字は此方の親父。南無三寶と鎖いたる店に平蜘蛛の、ひつたり身を付け身を忍ぶ（女殺）

〔南無三〕南無三寶の略。「南無」は梵語 Namas の連聲體 Namo の音譯で、歸命す、頂禮するなどの意で、佛を祈るときにいふ語。「三寶」は梵語 Triratna の譯で、佛、法、僧を尊んでいふ。事の心とたがつて辛い時に、佛の救助を乞はうとして南無三寶と祈るより轉じて、失敗した、しまつたと思ふ時に發する語となつた。

態に似せて卷子を卷く（阿八州）

卷子とは積み絲を珠のやうに卷いたもの。この諺は、形態性癖によつてそれぞれ異同あるに喩ふ。巣林子はこの諺を、蜘蛛は腹が大きいから子袋も大きい意に用ひた。

＊二合半 這出の蛙二合半、首にかけたか時鳥（蘭蝶歌）　小七樣にとんと打込み、二合半のもりきりおたい咽に詰つて、ぎつちぎつちてきないこんでごはりまする（宵庚申）

物相に容れる飯の量である。轉じて奴また

僧い者は生けて見よ　内に惡魔のある事も、憎い者は生けて見よ、これも世上のふしやうぞかし（卯月紅葉）

世上のことは鬼角思ふやうにならぬものなれば、我憎いと思ふ者も生けて見るがよいとの意の諺である。毛吹草・卷二、世話の題下に、「にくきものはいけてみよ」。貝原好古編・諺苑に、「にくきものは生けて見よ」。

にそくさんもん 涙片手に道具屋集め、二足三文に實捨て（博多）

〔二足三文〕二束三文とも書く。もと金剛草鞋の價より出た詞であつて、高價な品も草鞋の價程に安く賣捨てる意よりして、捨賣の意にいふ諺。昨日渡今日能物語に「聚樂にて金剛大夫勸進能に芝居鎧三十文づつ取りければ、金剛は二足三文する物を三十とるはせきだ大夫か」。西鶴の織留に、「奈良草履屋を二足三文にしまひて大坂を離れ」。

＊にちやうのゆみ 戀慕はれし二張の弓の本弭の、放さぬ先に弦切れて（鎗權三）　女の操を守つて二張の弓をひくまじとは、弓取の義にも劣らぬ魂（女護島）　二張の弓の引く手あだなるしのび寢に、浮名やはつと立田山（三世相）

〔二張弓〕二張の弓をひくは二心を抱くのであ

る、以て女の一夫を持てるになほ他の男に想を懸けるにいふ。間男する。紙子仕立雨面鑑に、「二張の弓はひかぬと、女の道を立てるそちら」。

にべもしややりもない 生中意見だてして何のにべもしややりもなう一討にしてやらるるは定の物（懸物揃）

蔫久松山千代の若緑には、「にべもしやしやりもない有樣」とある。蓋し「にべ（次條を見よ）もしやりしやりもない」の略語で、粘氣もなくしやりしやりした所もなく無味無愛想なるをいふ。「味もしやしやりも云云」をも見よ。

にべもない ハハアにべもなう埒明いた、如何にしても上つ方へ左樣な慮外申されまじ（雪女）　連合五左衞門はにべもない昔人（天網島）

「にべ」は鰓の膠から製する膠を云ひ、粘著力頗る強い。「鰾膠も無い」とは柔和な粘氣の無い、卽ち同情の心の缺けて愛想無きをいふ。

盗人におひをうつ さては旦那を縛つたか、熊坂の長範の盗人におひを打つたと、皆散散に遁げ失せけり（藤鬘）

既に取られた上に更に鎖などを運らねばならぬ意にいふ諺。「追を打つ」は追鎖を打つの略。また略して「盗人に追」ともいふ。

盗みする子は憎からで、縄かくる人がお恨めしい（冥途飛脚）

曾我物語に、「人の親の習ひ、盗みする子は憎からで、縄つくる者を恨むるは、常の親の習ひにて候ぞや」。

鼠算用 お慈悲な鼠算用、なる程私が逃がしませう（鶴門松）

この諺世話燒にも出てゐる。金錢に利を利が生んで增加して行くを鼠の繁殖の甚しきに喩へたもの。但しここの文は鼠に緣ある言葉を用ひて考案といふ程の意に云うたのである。

涅槃の名殘の雪（吉岡染）

雪は涅槃會（陰曆二月十五日）の頃から降らなくなるといふに據る。毛吹草に「雪の果は涅槃」。

寢耳に水（國性爺）（鎗權三）（博多）

不意に事起つて驚くに喩ふ。和漢古諺に「腰耳に水の入る如し」。

念力の矢に當つたからくり的ぢや（阿八州）

念力岩を通すといふ諺あるに據り、思ひ込んだ一念思ふ壺に當つて、兄の妻たるべき詠歌姫が我が妻となつた意にかくいうたのである。繰的とは、吹矢などの的に中るとき、種種の人形などの躍出るやうに仕掛けたもの。

のこぎりあきなひ 兩方で物を摑み居る、彼奴は鋸あきなひと鋸屑の言ひ甲斐なき（重井筒）　揚屋女郎屋親子して鋸商、金銀は鋸屑と溜りける（酒呑童子）

〔鋸商〕鋸は材木を切るに押しても切れ引いても切れる故に、兩方から利得するに譬へる諺。井原西鶴獨吟・日本永代藏・卷四、祈る印の神の折敷の條に、「さす手引く手に油斷なく、

鋸商にして、十年たたぬうちに千貫目餘の分限とはなりぬ」。

咽元過ぎて熱さ忘るる（冷泉節）

日蓮鉄外書に、「世俗の譬に喉過ぎぬれば熱き忘れ、病癒えぬれば醫師忘るといふらん譬」。

のみとりまなこ　そよと波音船影に心を付ける蚤取眼、物案じ顔も頻すいたる中に頭の毛剃九右衞門（博多）

〔蚤取眼〕ちよつとした事をも見逃すまいと凝視することを、蚤を探して捕へる目付に譬へた語。荒御靈新田神徳に「うそうそを嶽ふ提灯のあかりにきよろつく蚤取眼、かくと見るよりつつと寄り」。

のらがらす

「あはぎののらがらす」を見よ。

疱瘡に二番湯かく

「世並のわるい疱瘡に二番湯かく」を見よ。

坊主憎さに袈裟まで憎き世の譬（川中島）

「坊主が憎ければ袈裟まで憎い」といふ諺に據つたもので、この諺は毛吹草にも見え、其人の憎さに其人に關聯してゐるものまで憎いの意。

ばうふう　犬も歩けばばう風の、指身のけんによもない仕合せ（賀古敎信）

〔防風〕高さ三尺許も成長する草で、葉は芹に似、夏時に小形白色の花を開く。この草中風を防ぐ功あるによつて名づくといふ。防風の葉を切つて指身のけんにすることがある。この文は、「犬も歩けば棒にあたる」といふ諺を取つて、棒を防風にいひかけ、防風の緣で「げん」（その條を見よ）をきかせて「けんにょ」の語につづけたのである。

裸百貫　襦袢一つの裸身や、百貫町へぞ走りける（今宮）

「男は裸百貫」（男は無一物の裸でも百貫の價があるの意）の諺を應用して百貫町へいひかけたのである。夕霧阿波鳴渡に「譬の裸百疋を直に男にやり持に」、とあるも裸百貫の諺を百疋にかへていうたのである。

蜂に上下の禮あり（聖德太子）

關尹子に、「聖人師蜂立二君臣一」と見えてゐる。

鴿に三枝の禮儀あり（百合若）

鴿は親鳥よりも三枝下にとまるといふ。學友抄に、「烏有二返哺食一、鴿有二三枝禮一」。

鼻毛をよまれ（宵庚申）　鼻毛がよまるろ（酒呑童子）

女が己にほれてゐる男の心を知つて翻弄し、又は弱點に乘ずることを、諺に鼻毛をよむといふ。

齒に衣着す　あのばいた髪の毛引拔きすんぼろばうに仕ると、諸人の輕薄裸にして齒に衣着せずぞ申しける（女夫淵）

飾り繕うて婉曲にいふ意の喩。

***はらすぢ**　保昌大聲上げてからからと笑ひ、やれ腹筋や腹の皮、鬼の腕を切つたるが何程の高名ぞ（酒呑童子）　甚平からからと笑ひ、アア腹筋な、然らば足下の女敵何故討たぬ（鍵權三）

〔腹筋〕腹筋を搔る戯。可笑しさに堪へぬをいふ。抱腹。「腹の皮」または「腹の皮を搔る」ともいふ。源氏鳥帽子折に「いさかひ過ぎての棒ちぎり木、後の廣言腹の皮、逃吠の犬侍、臆病臆病とぞ笑ひける」。

萬能一心云云

「まんのういつしん云云」を見よ。

鼻肩の引倒し（會稽山）

鼻肩をして却つて其人の迷惑となることをいふ。

冷えにも熱氣にもならぬ　島が淨瑠璃善かれ惡かれ、おのれが冷えにも熱氣にもなる事か、どうでも外に樣子があらう（二枚繪）

冷えもせねば熱しもせぬ、卽ち身に何の關係もない。

***ひざのさら**　平にそれは火の用心と申し、膝の皿に火が附いたらば御身代の妨げと、いへども兄は懲しめと思ひ（重井筒）　扨は鞍馬の火打石、膝の皿から火が出ると語り散して通りけり（嬢峨天皇）　冬編笠も垢ばりて、紙衣の火打膝の皿、風吹きしのぐ忍草（夕霧）

〔膝皿〕膝蓋骨をいふ。ここに掲げた文は「膝の皿から火が出る」といふ諺を應用したのである。この諺は零落して苦しむ意にいふ。「火が出る」「火がふる」「火が附く」「火が雨」など、いづれも困窮する意にいふ。俚言集覽に「火が雨＝貧を云、火の車とも云、火の雨がふるとも云、（倭訓栞）貧家の譬に火がふると云は詩に云飢火也、（鳳氣波）火をふるや貧者の家に飛ぶ蛍。夕霧阿波鳴渡のこの文は、「火打」（その條を見よ）膝の皿」と頭「韻」語を用ひて、この諺を利かしたのである。「向臘から云云」をも見よ。

祕事は睫　傳授許しは請けれども、祕事は睫何でもないこと（鍵權三）

諺草に、「睫は目の側にあれば見えざる如く、世に祕傳といふ事も、聞きては安きことながら習はざれば知り得ずといふ意なり、韓非子曰、知如レ睫也、能見二百步之外一、而不二自見一二其睫一、是諺と語勢相似たり」と見えてゐる。

ひだりあふぎ　盡なかへての雪見酒、寒風却つて春風と、左扇の歡樂に暫く御座なぞ召されけり（冷泉節）

〔左扇〕「ひだりうちは」（左團扇）ともいふ。安樂閑散の境遇をいふ。毛吹草・卷二、世話の條に「ひだりあふぎをつかふ」。

***ひだりなは**　そも如何なる運命ぞや、成すこと爲ること左繩（國性爺後日）　理は非に落ちる左繩、ゆひがひもなき身なれども（卯月紅葉）

かう左繩になるからは父樣のことも埒あかぬ（丹波與作）

〔左繩〕繩は右へ廻して綯ふが習ひなるに、それを左へ廻して綯ふとは物の反對になるを云ふ、以て齟齬または不運に喩ふ。

ひだりまへ 忘形見に禪師様を見んと思ひて遙遙と來たる甲斐なき旅衣、左前なる世の中や（百日曾我）

「左前」左衽の義、衣の襟は右前に合す習ひなるに、それを左前に合すは習ひに背くものである、ようて以て、事の思うたことに背いて兎角不運で思ふやうにならぬことに喩ふ。

飛鳥懷に入る時は狩人もこれを取らぬ（釋迦）

舊唐書・長孫無忌傳に、「太宗目二無忌一曰、褚遂良學問稍長、性亦堅正、既篤二忠誠一、甚親二附於朕一、譬如二飛鳥依人自加二憐愛一」。

人事言はば筵敷け（重井筒）

人の噂をしてゐると偶然其人がそこに來るものだによって、まづ席を敷けて置いて人の噂をせよの意で、「人事言はば目代敷け」といふ謎の轉訛した謎である。

一つ穴の狐 なま見られぬ一つ穴の狐、惡しく寄つて怪我まくるな（以呂波）

同じ穴の狐とも、一つ穴の貉ともいひ、同類といふ意の謎。漢書・楊敞傳に、「古與レ今如二一丘之貉一」とありて、註に「師古曰、言二其同類一也」。

人でもくゐでも無い いかに鎌足、六位七位八位を下れば人でもくゐでもなし、禁中には穢らはし（大織冠）

人間の資格無しの意にいふ謎である。按ずに「くゐ」は「くひ」（杭又は杙）であつて、狂言に「人か杭か」とあるこれらから出た謎であらう、それを「くゐ」（九位）に取なしたものである。大寶令が撰定されて後世長くこれによつた位階に、諸臣三十階あれども九位といふは無い、よつて人以下の者、無位以下の者の義に取なしたのである。貞享節用集・世話詞に、「無人九位、ヒトデモクキデモナイ」。菅原傳授手習鑑（淨瑠璃）第一に、「九位でもない無位無官に著せた裝束、この冠穢れた同然云云」。この謎はまた「男でもくひでもない」（その條を見よ）とも云ふ。

***人橋を架ける** 御臺所より人橋を架けらるれども、醉臥して御正氣もなしとの便（女夫池） 傳を尋れ便宜を求め、人橋かけて志戸の浦、毎日事をぞ窺ひろ（大職冠）

便言集覽に、「人橋をかける。（毛吹草）、事をいそぐとき歌人使のものを出すをいふ」。

人は素性が恥かしい（田世景清）

「人は筋目が恥かしい」を見よ。

人は筋目が恥かしい 常體の者の子が七つ八つでかうあらうか、人は筋目が恥かしい、流石父様のお子程ある（夕霧） 人は筋目が恥かしい、さすが滿仲の御種にてありしもの（鱗山姥）

人の筋目（素性）は包まれぬもので、育ちの善惡はやがてその者の言動に顯はれるの意の謎。

***丙午の女** 總じて丙午の女は夫にたたるといひ傳へ、賤の妹背も忌むことござめり（佐佐木） 酉でないぞや身は丙午、また房様のいまいまし（重井筒）

丙午の年に生れた女は男を殺すというて忌んだものである。蓋し「丙」は正字通に「陽火也」と見えてゐる、「午」も陽である、男は陽で女は陰たるべきに、女が陽の重つた丙午の年に生れれば男を殺ぐと云ふ意から出た俗説である。男色大鑑（貞享四年刊）に、「丙午の女は必ず男を食へると世に傳へしが」。

百貫に編笠 表具計も百貫に、編笠提灯南京の、八匁から九匁を（博多）

ここの文は、表具だけでも百貫を費したといふに、「百貫の抵當に編笠一蓋」の謎をいひかけ、南京の鉢に八匁をいひかけたのである。

百日法華 可愛さは實子一倍、疱瘡した時日進様へ願かけ、代代の念佛捨て百日法華になる、これ程萬面倒見て（女殺）

一時日蓮宗信徒になること。增補俚言集覽に、「百日法華。他宗の者病など祈るが爲に一時日蓮宗になるを云」。

百様知つて一様知らぬ（會稽山）

博識の人でも知らぬ事もあるとの意の謎。烏帽子折（舞の本）に「百様を知りたりとも一様を知らずば、爭ふこと勿れと申す譬のあるぞよ」。毛吹草・世話に「百様を知るとも一様を爭ふこと勿れ」。

貧女の一燈 現世貧女の一燈も未來にては如意寶珠（釋迦）

謎に「長者の萬燈貧女の一燈」といふ。捧げる物は薄くとも、志厚ければ神佛の御利益を得るの意であつて、蓋し貧女難陀が佛に歸依し、一燈を挑げた功德によつて遂に佛果を得たといふ故事である。委しくは賢愚經・貧女難陀品及び阿闍世王受決經に就いて見よ。巢林子作釋迦如來誕生會に、瑠璃仙女といふ貧女が、釋尊頭陀の道に一燈を挑げた功德によつて遂に佛果を得たことが記してある。

貧は諸道の妨げ（女楠）

この謎は曾我物語にも見えてゐる。

福德の三方論議（蓋門松）

「福德の三年目」（福德の神は三年目に來り、好運に際會する意）の謎の轉用である。

降つて湧く 降つて湧いたる忙しさ、お成座敷の替へ疊（宵庚申）

天より降り、地より湧いたやうな、意外なるをいふ謎。本朝二十四孝にも、「勝頼樣の御身の上降つて湧いたる御災難」。

佛法と萱屋の雨は出て聞け 世話にも申す如く佛法と萱屋の雨は出て聞け、廣く見るにしくはなし（女夫池） そんなら先へ行く、跡からおぢや、佛法と萱屋の雨は出て聞けと、外へ出づれば又有難い事も聞く（宵庚申）

家の内にのみゐては佛法の有難い教も知れぬ、寺院に參詣して其教を聽いてこそ感謝歸依の心を發しる。又萱屋の雨は屋内では其音が聞えない、外へ出てこそ雨の音が知れるの義。よつて見聞を新にして始めて妙味を感知されるの意の謎である。

佛法不思議王對座（加增曾我）

昔時は階級制度が嚴であつた故に、如何程才智があつても地下人が堂上に昇ろなどは極めて六ケ敷いことで、平忠盛が昇殿を許されたそれすら堂上人は大騒ぎをした程であつた。唯僧侶のみは其才能によつては帝王の前にも出られたので、青雲の志ある者は僧侶になつた者が多かつた。佛法不思議王對座の謎もかかることから出來たのである。

瓢箪より駒を出すは張果老（三國志）

謎尻に、「瓢より駒を出す繪あり、是は月江鉄、張果老蹈三破胡蘆」と云ふこと、又張果が紙を以て驢馬とせしことを取合せて描けるにや」と見えてゐる。張果が紙を以て驢馬としたことは太平廣記に見えてゐる。

臍がお茶をひく　九郎右衞門吹出し、いやはや臍がお茶を挽く、わごりよが親仁は村一番下拔きの名人（嵯峨天皇）

「臍で茶をわかす」ともいふ。可笑しさに堪へぬにいふ謎。

箆を使ふ　上は立派な鞘口に箆を使うて別れけり（雪女）

淫つたり剝がしたりする義。ごまかしをいふ。傾城雖波みやげ（寶永七年刊）卷之四、太夫の初陣の條に「大じんも頓をきりたがるばかりにて、たのむ紋日にへらをつかひ」。風俗傾性野群談（享保二年刊）三之卷、色遊びの一時は千兩の金にやうやうの條に「天職にきわたつてゐる客、鹿鹿か嬶はしを買ふ程ならばよもや箆をつかふまじ」。和訓栞に、「俗語にへらを使ふといふ、含糊といふが如し」。

＊へんてつもない　その子を封じられ御産なくては何のへんてつもないこと（浦島）　お目が疎うて花も柳もへんてつもないこと（天神記）

偏綴無の義であらう。何の面白味も無くつまらない。爲愚痴物語に「貪瞋痴の三毒に嚙みまぜて申す念佛題目は、何のへんてつもなき小歌にも劣れる事なるべし」。

ほうはつら　「ほほはつら」を見よ。

佛の顏も三度　又騙されし正直の、親の心や佛の顏も三度飛脚の江戸の左右（冥途飛脚）

謎に「佛の顏も三度撫づれば腹立てる」といふを取つて、三度親を騙したると、騙されて知らぬ親の佛顏と、三度飛脚（その條を見よ）とをいひかけたのである。

ほほはつら　ちと借錢を輕めん爲あぢな商からくんで、三兩餘りは今日明日に請取る筈の約束、はてほほはつら此銀を請取次第遣りませう（氷朔日）

〔頬は面〕頬といひ面といふも同じく顏といふ意よりして、名は還つても物は同じといふ意にいふ謎であつて、頬は顏ともいふ。洗朱（元祿十一年刊）追加百論の條に、「頬は面ぢやとつぶやいて立」。毛吹草・夏部・杜若の題下に、「杜若といふやほほを顏よ花。弘永」と見えてゐる。心中刄氷朔日のこの文は、貸してゐるも我金なれば、所持してゐるも同じことの意にいうたのである。

枕を割る　某も餘りに殘念枕を割りし一手段、短氣を鎭め無念を押ゆる御合點ならば密密申上ぐべし（川中島）

肝膽を碎くの意にいふ。蓋し故事に「邯鄲の枕」といふがある、その枕を邯鄲に取なして「邯鄲」を「肝膽」に通はせ、「割る」を「碎く」に通はせた隱語である。世間娘氣質（享保元年刊）卷之二、哀れなる瀉瑠璃に節のない材木屋の娘の條に「總じて婦人には氣鬱よりして醫書にもないさまざまの異病をわづらひ、醫者に枕をわらす事なり」と見えてゐる。この隱語は寛文・享保頃の草子に往往見えてゐる。

まげる　娘のお末が兩面の紅絹の小袖に身を焦す、これを曲げては勘太郎が手も綿もない袖なしの羽織も交ぜて（天網島）

質におくをいふ。質と七と音相通じ、七は第二畫の曲れる字なるより、曲るを質にいひなした隱語である。呑舟軒箕山編・色道大鑑に、「まぐる。何によらず質におく事をいふ、質屋へ物を預くるを七つ屋へやるといふは昔の詞にて初心なれば、質を七に取なして、又七の字の曲りたるを見立てよべるとはいへり」。風流夢浮橋（元祿十六年刊）卷四に「京に居る内夢にも知らぬ質物といふことを覺え、今は巧者になつてまげるといふ異名までを習ひ」。

睫毛よまれる　賢女ごかしの拜み倒しに遇うて、吾妻殿に睫毛よまれゐるわいの（淺門松）

人に輕蔑されて自身これを知らない意にいふ。蓋し我が睫は我が身に見えぬによつていふ。和訓栞に「睫毛を歌へらるるといふは、身にありながらえ見ぬ故なり」。

まつたけ　これを祝の始にて、なほ打續く松竹の齡も盡きず世もつきず、佛神應護の此所繁昌にこそ榮えけれ（用明天皇）

〔松竹〕謎に「松は千年、竹は萬年」といふによつて、「松竹の齡」というたので、松に近松、竹に竹田と竹本とを利かして祝福の意をかけたのである。「これを祝の始にて」といへるも、竹本座の新座主竹田出雲據を祝うての初興行といふ心である。

＊まゆをひらく　正しく御位を讓らんとの綸言、スハ時こそと眉を開くところ（浦島）

〔眉開〕嬉しい時には顰めた眉を見開けばいふ。謎曲・鉢の木に、「常世は喜びの眉を開きつつ」。眉開くといふことは白氏文集、源氏物語の中にも見えてゐる。

眞綿で首を締められる（酒呑童子）

婉曲に責めさいなまれるに喩へた謎。

萬能一連物　とかく萬能一れん物、鐵槌應へぬ精釘で（氷朔日）

萬能一心と云ふ謎に據り、萬能といふ鋤（三四寸の扁平又は圓く尖れる鋤杵より成る鍵に柄を嵌めたもの）をきかせ、一心を一連物にいひつづけたのである。一連物とは幾箇かを連ねて一組とする物をいふ。

萬能一心の家業なし（酒呑童子）

「萬能一心」の諺に據つたもので、家業に萬の藝能も一心の善なければ無用の者であるとの意。俚言集覽に「世話叢、說苑」詩云尸鳩在桑其十七令、淑人君子其儀一令、傳云尸鳩之所以養二七子一者一心也、君子之所以理二萬物一者一儀也、俗諺本此意に同じ、萬の藝能も唯一心よりすると云事也、然るに今の諺を說くものの。萬の藝能ありとも一の心不善なれば無用の人となるといふ事に用う、(竹馬抄)心の誠なからん人は、何事につけても入眼の侍るまじきなり、萬能一心など申すも、かやうのことをや申すらんとあれば、俗說の如く義を取ること久し、原來佛事萬法一心の語より出たるなるべし。

***みくだりはん** 厭かぬ夫婦の中をさへ三行半の生別れ(蝸山笑) いひごと一つせぬ中の一言二言いひあがり、三くだり半の筆の鞘割れてのくこそ哀れなれ(義經)

(三行半)離縁狀。去狀は俗制に三行半に書き終へるよりいふ。高野紀行に「踏る歷三行半を名殘にて宗」。

***水入らず** 殊にお龜と我等こと從弟同士の水入らず(卯月調色) 湯を沸して水入らずの親の内で盜みをする(二枚繪)

肉親の間柄をいふ。俚言集覽に「水いらず。此は親しき者の中に疎き者の間雜するを油に水のまじりたる如しといふ、それにうち反して親しき者ばかりの集會をかくいふ」。「湯を沸して水入らず」とあるは、湯を沸して水にする(從勞をする意の諺)を水入らずにいひかけた。

水が湧く 十四の灸に水が湧く盛りの女盛りの男(今宮)

生氣あつて血氣盛んなるに喩ふ。今宮心中のここの文は、背中の灸點十四ケ所に灸をすゑれば、熱氣を覺えて汗が水の湧く如くにじみ出る意に、血氣盛りの男女をいひかけたのである。血氣盛りの若者を「水の出ばなの若者」といふ諺もある。(近松作・淀鯉出世瀧徳・上卷に「憂き鹽うんだは身のやいと、十四の冬より今年まで」とあろ、これも灸の緣で十四の灸點をきかせて十四歳の意にいひつづけた。

水の流れと身の行方(冥途飛脚)

俚言集覽に「水の行方と人の行方は知れぬ」。

身に金が入るとて斬らるるが上夢(薩摩歌)

山東京傳撰・盧生夢魂其前日(寛政三年刊)にも「人に切らるる夢は逆夢といつて、身に金の這入ることあり。」

見ぬが佛聞かぬが花(烏帽子折)

「見ぬが佛」は「知らぬが佛」ともいひ、見もせず知りもせねば煩惱も起らぬを、佛の忍辱柔和なのに譬へていふ諺。「聞かぬが花」は「見ぬが花」ともいひ、見も聞きもしないで想像する方が却つて心ゆかしいを、花の美しいのに譬へていふ諺。

身の蜂拂ふ 彼奴も身の蜂拂ひかれ、お暇申しすて駈落致す(鐘權三)

身邊に飛ぶ蜂を追拂ふ義、轉つて以て困つた身の處置をつけるに喩ふ。晉書・劉毅傳に、「蜂蠆作二於懷袖一、勇夫爲之驚駭」。

身を棄つる藪 共に命の棄場ぞと大佛殿の勸進所、身を棄つる藪となりにけり(重井筒)

窮し果てて我身を棄てるに至つたといふを、「子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪なし」といふ諺に據つてかく云うたのである。

蜈蚣に唾 蜈蚣に唾、髓に蓼、皆夫夫の敵藥あり(閑州)

蜈蚣は唾を嫌ふにより云ふ諺。

向臘からでつかちない光物が飛んで出る(二枚繪)

「向臘から火が出る」「向臘から火が降る」などいふ諺を鹿島事觸(その條を見よ)の口調に似せて言うたのである。破産して困窮する意にいふ。「でつかちない」はその條を見よ。「火が出る」「火が降る」は貧家の喩にいふ。風流曲三味線(貧永七年刊)に「萬事大氣に出て高なしの酒きげん、おつつけ向臘から火性の大盜」。元祿太平記(元祿十五年刊)卷之三に「つぎのあたりし古帷子一つ召して、すぬから火を取る此西鶴同前の御有樣」。御伽名代紙衣(元文三年刊)に、「今著てゐる破れ紙衣の古火打、うたねど向臘から火がふり」。「かみこのひうち」「ひざのさら」をも見よ。

むくりこくり 娘を持つたお方は御用心なされ、むくりこくりが以ての外勢が强う成つて、此界へ渡つて或時は美しい稚子若衆と成つてたぶらかし(用明天皇) 神國に生れて神沙汰を停止とは正眞のむくりこくり、御笑止な國の作法(日本武尊) 親里の合力なんどと申して、厄介しつかいむくりこくりの上手ごかしに(二枚繪)

蒙古高勾麗の轉訛であつて、蒙古高勾麗鬼の意である。「むくりこくり」は昔は鬼の意にいうたのであるが、現今この語なほ筑前地方に殘つて、その意を轉じて頑固の意にいふ。嬉遊笑覽・卷六下に、「籠耳といふ草子に、小兒の啼を止る時むくりこくり鬼が來ると云ふこと、後宇多院弘安四年北條時宗が執權の時、元の世祖攻來る、元は蒙古なれば鬼が來るとは夷賊をいふなり、蒙古國褒といふことのいひ誤なり。筠庭云、此說わろし、蒙古高勾麗の二賊をいふなり」。心中二枚繪草紙のこの文は、市郎右衛門が鹿島事觸(その條を見よ)の口上をもぢつていうたのである。

***胸を衝く** 三五兵衞は詞なく手持無沙汰に赤面する、源五兵衞も胸衝きしが(薩摩歌) 先は正直喜んではや談合が極まつたか、さても胸をついた事、誰にどう談合せん(淀鯉) 早う逃げたい逃げたいと肝を冷しておはします、烏陀夷もむねを衝きけるが(鶴迦)

「とむねつく」ともいふ。胸ごたへして事の意外なるに驚愕するをいふ。

茗荷は鈍根草 蓼は利根草・茗荷は鈍根草(懸物掛)

この俗說は狂言・鈍根草にも、「いとど鈍な奴めが茗荷を食ひ、いよいよ鈍になつて」と見

えてゐる。世說故事苑（寶永七年の自序がある）に、茗荷を食へば物忘れするといふ俗說は、蘘荷と生薑と言葉相似てゐるが故に生薑を誤つたのであらうと、東坡志林を引いて述べてある。

目が黑い　かたりごとは古い古い、その爲の遣手、これ目が黑い見ておきや（鶴門松）

物事を見分けるに熟練してゐるをいふ。眼識がある。

めくさりがね　千兩道具の娘を二十兩の日腐金で女房に持たうやべかこ（女腹切）

〔日腐金〕俚言集覽に、「日腐金。もの惜みする人の所持金などをいふ」。物惜みする少しばかり金といふ意に卑しめていふ。

めしろ　此利右衞門が目しろにて弟子手間取をも引廻す（冰朔日）　お雪樣の父御樣母御樣は御座らず、目代になるこの乳母はぐるなり（鑑權三）　人ごと言はば目代置け（五人兄弟）（千疋犬）

〔目代〕在時國守が代理を遣つて任國を治めしめた、これを「もくだい」（目代）と云つたのが轉じて、目代を「めしろ」とよんで監臺・見張の意にいうたのである。

「人ごと言はば目代置け」とは、人の噂をする際は偶然噂されてゐる人の來るものなれば、人の噂するには見張を置けとの謎である。この謎は訛つて「人ごと言はば甚敷け」（その條を見よ）ともいふ。

めだか　これ大臣殿、神道に事寄せ世を奪ふ逆臣とは目高がとつくに見付けたり（聖德太子）　されば、こそ冷泉は目高にてありけるよ（源義經）

〔目高〕見識の高きことをいふ。目に見て何物であるとよく推知すること。野槌旅葛籠（正德五年刊）卷四に、「旦那は大きに目高ぢや、その女郎は京の島原で高尾樣と申した結構な太夫樣なれど」。

目の鞘外す　目の鞘はづすが遣手の役、大事にかける證據には世間に心中十あれば廓に一つあるかなし（反魂香）　さあ討てさあ來いと柄に手を懸け睨み合ふ、目の鞘外しの下鍔、身は竹刀拔きかれて（雪女）　あたりに目を付け目の鞘はづす刀の血痕押拭ひ（女護島）

瞼を張明けて目玉をきよろきよろ光らして見るをいふ。犬子集・德元の句に、「夕立や目の鞘はづすいなびかり」。吾吟集・九に、「ぬくとても我目の鞘はづさずば何の用にか太刀のきつさき」。可吟稿・浮世の北（刊本）、支考の句に、「市人の目の鞘はづすあられかな」。續猿蓑集・卷下、烏附雜の部、傘下の句に、「駒鳥の目のさやはづす高ねかな」。井原西鶴撰・懷硯（貞享四年刊）卷之五、俳の似せ男の條に、「小平太もとより無筆にて、此時目のさやはづれし男ありて、これに氣をつけて與太夫に あらぬことを見出すに、女房合點せず」。

目恥かしい　侍町人の歷歷につきあうて、心も至り目恥かしい、粗相して笑はれな（夕霧）

人の見る目も恥かしの意。謎に「大人は目恥かし下種は口恥かし」。なぼここの文意は夕霧は物の道理も辨へず行き屆いた女であるから、我等をどう見てさげしむかを思うて恥ぢ慎まねばならぬといふこと。

目元にしほがこぼれる（丹波與作）

目元愛嬌たつぷりなるをいふ。「しほのめ」を見よ。江島其磧撰・風流曲三味線（寶永七年刊）二之卷、横絃兒で樂しむ後家の條に、「お笑ひなさるる時目もとにしほがこぼれかかれば」。「同じねをなく云云」をも見よ。

＊めをぬく　河內屋の與兵衞めと帶解いて裸體になつてぢや、ええ口惜しい目を拔かれた（女殺）

〔目を拔く〕人目をくらまし出拔くをいふ。新猿樂記に、「以謀拔三人目」。

もちまるちやうじや　たとひ持丸長者でも金に詰るはあるならひ（冥途飛脚）

〔持丸長者〕面は丸とも書き、錢をいふ。金錢を多額に持てる長者。富貴の者。

物に尾鰭が附く　我夫をさしおいて手代にいふは何事と、結句物に尾鰭が附く（大經師）

複雜になる意。事が面倒になる。物が事實よりも誇大になる。遊君三世相にも「かうした素振を見聞きなば、尾鰭を附けていか樣にか申すべき」と見えてゐる。

燒鳥に擊　燒鳥に擊・用心にあきはない。拍子木たやすかはりがはりに寢ずの番（甚盤太平記）

「擊」は紐緒の義、狩獵の時に鷹の足に繫ぐ紐をいふ。「燒鳥に擊」とは、用心の上に用心して油斷せぬことにいふ謎である。毛吹草に、「燒鳥に捉緒をつけよ」。

疫病の神で讐を取る（田村）

豫て己が讐と思へる人に疫病神が取附いて殺してくれる、己が手を下さないでも彼自身の災難によつて己が目的を達するをいふ。この謎は尤草紙にも見えてゐる。

＊やすだいじ　申してもやす大事、拙者は他言致すまいが、雖は袋と外よりの取沙汰は存ぜぬ（堀川波鼓）

かりそめながらやす大事、何を見てさはいふぞ證據を出せ（堀川波鼓）

〔易大事〕何でもない易いことのやうなれども、取方によつては大事件となることをいふ。平家物語・卷七、木曾山門牒狀の條に、「これこそさすが安大事よ、如何せんと宣へば」。

藪から棒　女房に持つて下されとは藪から棒の異なものなり（天神記）

藪からばう主の佛頂顏（女腹切）　引つ創ぎ竹槍・猪突槍・垣越のめつた突、日鼻の先をぬんぬつと藪から棒に仕込んだる眞魚篝槍の鼠突、頭の上・足の股・前後左右にずんずつと、避けん方なく身を冷す（三國志）

唐突な言行に喩へていふ謎。「藪からばう主」は、藪から棒を坊主にいひかけたのである。又本朝三國志のこの文に就いては、土蜘が光

秀を路に要し藪中から竹槍で右脇を刺したのであるから、この諺を用ひて「藪から棒に仕込んだる眞魚箸槍」といひなし、そして棒に仕込んだ眞魚箸槍をその形より「鼠突」といったのである。眞魚箸槍も鼠突も同物異名で、槍その物にあらぬを形容した語である。近松作・堀川波鼓に「彦九郎あざ笑ひ、何の已れが鼠突、鼓の胴こそ掻るとも槍の柄掻る習ひは知らじ」、とある「鼠突」もこの意である。眞魚箸は和漢三才圖會卷三十一、庖厨具の條に「魚箸以鐵作之、長六寸柄四寸許、而左挾肉抑持也」とあつて、鼠を突くにもこの物適してゐる。

やぶにこうのもの 一僕連れぬ我我でもやぶにこうの者、いかな大病でも仰付けられ、活すか殺すか何方へぞ驗は見せうと自慢する（冷泉節）

三國志に、孔明が司馬懿に巾幗を贈つて戰を挑んだ條に、「豈知野夫有功者也」と見えてゐる。蓋し「野夫に功の者」といふを、藪醫（廚醫）にも巧の者があるの意にとりなした諺となつたのであらう。この諺古くは十訓抄・第三、不可悔人倫事の條に、「藪にかうの物といへる兒女子のたとへぐさにかうの物といへる兒女子のたとへぐさにもたがへざりけり」と見えてゐる。毛吹草に「やぶに剛のもの」と載せてある。色葉集に菅津正法寺の緣起を引用して、「尾州阿波手社は甚目寺の此方法界門の橋を渡り、左の方堤の上を菅津の方に行くに、また右の方堤の下に近く杜あり、天神とてほこらあり。四方は藪なり、菅津の村の入口正法寺の筋違合也、藪に香物といふ事、ふるき者のいへるは、昔は正法寺大地にして住持は唐僧東巖禪師といへり、其比瓜茄子大根小角豆蓼やうのものも商へる人、此杜の前を過る時必ず一つ二つ此神にささげて通りけるを、禪師ただに捨置くべきにあらずと、甕に入れ鹽を交ぜて漬置きしより始まると也、大方日本香物の始めなるべし」と見えてゐれども、一奉强の說であらう。序云、正法寺は天平勝寶八年唐僧東巖禪師の創建であるといふ。）

山賣りの山こかし 主人の供して奥州の金山賣つたる、山賣りの山こかしとは汝が事（隅田川）

藝黠の者をいふ。但言集覽に「山師。山コカシとも云」と見え、また同書・山の條に「山師（詭計子）は金山を鑑定する者を云、本來は藝惡の者をいふにあらず、然るを山師の名を假て徼幸する者あり、是にても山師と云、又山をすると云より、山師は藝黠の者の稱とす」と見えてゐる。近松のこの文は、山を賣つたから山賣りといひ、山師卽ち藝黠者と罵つたのである。（やまこかし）をも見よ。

山の芋が鰻になる 山の芋が鰻になり、喧嘩のさへ人鞆になり、結ぶ緣こそ不思議なれ（天神記） 今日は殿の御成り旦那の御出世、追付け山の芋から鰻にお成りなされう（宵庚申） 豆腐や蒟蒻を鯛や鱈ぢやと思うて食へ、山の芋を鰻と思へ（萬年草）

山の芋も鰻も精力を強うする食物なれば、山の芋が鰻に變化するやうにいひなされた諺であらう。（山の芋が精力の藥になるといふことは、井原西鶴撰・好色一代女・卷之二、諸禮女祐筆の條にも、「晝夜の分ちもなくたはふれかけて、弱れば鹿汁・卵・山の芋を仕掛け、藥の如く此男次第にたたまれて云云」と見えてゐる。また鰻が精力の藥になることは、「うなぎ」の條に述べて置いた。但言集覽に、「魚も龍にこそ、或は蛇の鰻になるとも、山の芋の鰻に成とも云事あり。（續狂言記・成上りもの）また山の芋が鰻になるとも一定でござる」。世話支那草（寛文四年刊）下卷に、「馨薯蕷の鰻になるといふ事＝日本の俗謂薯蕷の鰻鯛に化する事をいへり、しかれどもやつがれいまだ其據をしらず、定て左あらん、且田鼠の鴛となり、雀の蛤に化するためしもあれば にやしゆべからず、或人の語りしは本草綱目に據ありけりとなむ、今かんがうるにおよばず」。

山の芋で足突く あやまり申した、其方が言分眞直に御前へ申すが又御馳走、やれやれやれやれ山の芋で足突いたとどつと笑へば（宵庚申）

籠の底なる山の芋でびつくり足つく革袋（蛙合戰）

思ひ懸けないひよつとした事で失策するに喩へていふ諺。但言集覽に「山のいもで足をつく。長芋で足をつくとも云」。

やまのかみ 我も岩木にあらねども、内に殘せし山の神めつたむしやくしや悋氣する（關八州）

（山神）己が妻を惡口する詞である。藤樂能花子といふ曲に、山神が夫の花子の許へ通ふを嫉妬して狂氣の如くすることあるより出た詞だといふ。（平假名四十七字の内、「やま」の上は「おく」（奥卽ち妻女にとりなし）なるよりいふとの說は非）。

やみらみつちやのかはぶくろ 心の内はむしやくしやとやみらみつちやの皮袋（曾根崎）

暗ら密沙の革袋の義であらう、何が何やらくちやくちやの意にいふ。天然痘に罹つた人の顏面くづれて菊石のやうになつてゐるを「みつちやづら」といふ。また八文字屋本などに「何のへちまの皮袋」などといふが見えてゐる、かかる皮袋か聯想上みつちやにも添加されたものである。鷹筑波集に、「月の顏木の下やみらみつちやかな」。艷道通鑑に、「それでも翻があたらずば佛も神もうその皮、やみらみつちやの說ながら云云」。藤木盛庸撰・日本好色名所鑑（元祿五年刊）大坂新町由來の條に、「遊女ども多く集り髮を結ぶ、夙に起ては身を嗽み、暮にはやみらみつちやの高低見えぬばかりに白粉をぬり」。

病む目より見る目（蜻蛉天皇）

この諺毛吹草にも出で、「病む身より見る目が辛い」の義であつて、身を目に譬り、が辛いを略したもの。

行先に的が立つ この鬪たつた一つでも行先に的が立つ、斯くては家も立つまじ（天網島）

行く先に翻の的が立つて、翻の矢の通る道筋を歩まねばならぬといふ義であつて、將來痛が當つてろくなことはないとの意。八文字屋

自笑撰・分里艷行脚（正徳六年刊）五之巻に、「繻領のお琴もさしつぎのお哥も、尼おちのおみきも父なし子のおとめも、行さき的を立つるが如く、いつしか五人の姉妹此里に身をはめ五人女と名に立ち、此つとめ上方の白人の如し」。西鶴一風撰・色道鑑百人後家（享保三年刊）二之巻に、「暫くして惣八、それがし過分のおごりより身をもちくづし、一度江戸へ下りしが阿波に吹く風は讃岐とやら、行くさきざき的を立つるが如し、これ兩親の甄なり」。

湯の山の道連れ　げに湯の山の道連れと、人もゆげたの數數に（百合若）

この謎世話盡にも出で、湯の山は攝津有馬をいふ。湯の山の道連れにはろくな者はゐないとの意。

夢に見てさへ一富士の、直に拜みて願ひ事（三國志）

瑞夢の次第をいふ謎に、「一富士二鷹三茄子」といふ、夢に富士を見るさへ瑞夢であるに、まして直に富士を拜んでの願ひ事は、必らず驚驚あるべきにの意。

夢は一富士、似たかよ鳶の山（隅田川）

瑞夢の次第をいふに、一富士二鷹三茄子といふ謎に據つた。この謎は嬉遊笑覽卷八、方術の部に「世によき夢とて、一富士二鷹三茄子といふは何の故とも辨へ難し、駿河などの國の謎とは見えたり、其國の名物をいふにや、昔は初茄子駿河より出、鷹は聞えざれども、古への鷹術は雉小鳥を取るのみなり、鶴雁などの大鳥をとることは東國より始りしにや、さらばそれらの事にてもあるべし、云云」。雙生隅田川のここの文、伊勢物語の歌に、「駿河なる宇都の山邊のうつつにも、夢にも人にあはぬなりけり」とあるによつて、「宇都の山邊の」といひて、「夢は一富士云云」と續けたのである。

好い中の垣　懇の中・手形もいらぬとぬかしたれど、好い中の垣と預り證文してやつた（生玉）

親しき中に垣せよともいふ。親疎に押れて禮を濟すこと勿れとの意の謎。

＊よこぐるま　いやはやここな横車、口が過ぎるといひ返せば（十二段）

横車とはナいかずというて、おのれがやうな女の唐名よ（十二段）　雑人の唾は上一人の面汚し、臣が病の根元と諫めてもなほ横車（唐船噺）

〔横車〕車は横には轉び行かないにより、以て我慢偏執の者に喩ふ。この語は赤染衛門榮花物語（巣林子作、延寶八年刊）及び男色大鑑（井原西鶴撰、貞享四年刊）卷之五、涙の種は紙見世の條にも見えてゐる。

よめとほめ　夜目遠目といふ事あり、紅粉でも丹でも塗散し、澁面作つて目を見出し（弘徽殿）　年經る顔におく霜の白きを見れば夜目遠目、九十過とは人知らじ（井筒）

〔夜目遠目〕夜目遠目笠の中といふ謎を應用したのである。晝見るよりも夜に見、近う見るよりも遠くに見、あらはに見るよりも笠の中なるを見るがおくゆかしうて宜しいの意。「年經る顔におく霜云云」は、新古今集・冬部、中納言家持の歌、「かささぎの渡せる橋におく霜の、白さを見れば夜ぞふけにける」とあるを用ゐたのである。

夜の鶴　父は子を呼ぶ夜の鶴（歌念佛）

燒野の雉子夜の鶴といふて、鶴は深く子を思ふものである。詞花集・雜上部の歌に、「夜の鶴都の内にこめられて、子を戀ひつつもなき明かすかな」。白氏文集に、「夜鶴憶子籠中鳴」。

＊りんげん（鰐丸）　綸言汗の如し（鎌田）

〔綸言〕王言。詔。禮記・緇衣篇に、「子曰王言如レ絲、其出如レ綸、王言如レ綸、其出如レ綍」。王言は出でては取消のないこと恰も汗が身體から出でもとにかへらぬやうなものだによつて、謎に「綸言汗の如し」といふ。

王は十善・神は九善（千疋犬）

前世に十善（その條の德を見よ）の德を積んだ人はその果報によつて現世に生れて帝王となり、前世に九善の德を積んだ人はその果報によつて現世に生れて神となるといふ意の謎である。（されば十善の帝王は九善の神よりも果報の勝れたもので、神よりも帝王の尊きを表はした國民思想の面白い謎であるが、この謎はあまり古い書には見當らない。三社託宣由來（加賀掾淨瑠璃・延寶六年刊）四段目の中に見え、後のものには菅原傳授手習鑑の中にも見えてゐる）。

軸の鮒の水をこふ憂きめ（女護島）

軸に水の濁つた中に居る鮒のやうに困窮するに喩ふ。莊子・外物篇に、「車轍中有二鮒魚一焉、曰我東海之波臣也、君豈有二斗升之水一而活レ我哉」。

わらをたく　娘にも疵がつく、さあ男のある證據を出せ、何處ぞでわらを焚かれて銀が惜しうなつたか（萬年草）　島屋の客に賄賂取つて梅川に藁を焚き、あちらへ遣らうといふ事かおいてくれ（哀途飛脚）

〔焚く〕雖鮮をつけて貶すをいふ。俚言集覽に、「藁を焚く。むだ口をいふこと、又古道具を買ふに色色惡しく言つて直ぎるをいふ」と見えてゐる。藁を焚附ける戯よりしておだてるの意にはれ、よつて又俚言集覽にいへる如き意の謎となつたのであらう。

井の中の蛙、夏の蟲にせいれうとや（大原問答）

「せいれう」は「せいれい」（蜻蛉）である、風鈴を「ふりよう」とあるの類である。見る所の小なるに喩ふ。莊子・秋水篇に、「井蛙不レ可二以語一於海一者、拘二於虛一也、夏蟲不レ可二以語一於氷一者、篤二於時一也、曲士不レ可二以語一於道一者、束二於教一也」。

伯父が甥の草を刈る　我了俊の弟と生れながら、仲秋が世を嗣がば、伯父が甥の草を刈ると世話にいふ如く無念たぐひあるべからず（今川了俊）

和漢古謎などにも見えて、目上の者が目下の者に使はれる意にいふ謎。

男でもくひでもない　お二人の葬禮に立派な乘物に乘せうといふ氣がなければ男でもくひでもない（女殺）

「ひとでもくゐでもない」ともいふ、その條を見よ。

男は當つて碎けいぢや（丹波與作）

男は男らしう強く攻勢に出るべく、負けねばならぬ場になつては潔く負けるべしだとの意の謎。

男は裸百貫　男は裸百官の、上に立てば女御樣（酒呑童子）　裸花聟百貫、くわんくわんくわんともなるは夜明の鐘（雪女）

男は裸にしてもなほ百貫の價値があるとの謎。傾城酒呑童子のここの文は「百貫」に「百官」をいひかけたのである。

一昨日來い（關八州）

蜘蛛に來てくれなといふ謎で、この謎は現今も祖山市あたりでは、蜘蛛を取り棄て或は殺す時に往往言うてゐる。

***をばうちからす**　さながら雪の一筆烏、尾羽うちかれし修業の旅（最明寺殿）　昔の劔さび浪人、ひがむ心は上見ぬ鷲、尾羽打からし旅出立ち（三國志）

〔尾羽打枯〕鷹の尾羽の損じてみすぼらしくなれるをいふより出た謎で、人の衰れて貧相なるにいふ。俚言集覽に、「をばうちからす。浪人者などの衰れたる貌を云、尾羽をからすとも云、是詞元來鷹より出でたるなるべし、（建武年中八月二條河原落書）尾羽をれゆがむゐせ小鷹、手ごとに誰もすゑたれど鳥とることは更になし」。「をばをからす」をも見よ。（最明寺殿百人上萬のこの文に「雪の一筆烏」とあるは、銀世界の中に墨染の衣を著た僧のゐるのは、宛然雪景色の畫に烏を一筆畫きせるに似たればかく云うた）。

をばをからす　某は尾羽をからせし鎌倉の浪人者にて候が（出世景清）

〔尾羽枯〕「をばうちからす」ともいふ、その條を見よ。錦文流撰・傾城八花形（淨瑠璃）に、「もとより用意なき身の上、長長の眼病に尾羽をからして深山木の、見る影もなき身となれど」。

***をひれ**　事が延びれば尾鰭が附く（薩摩歌）　まがまがしいあの嘘わいの、まだ尾鰭附けて言はしやんせ（女殺）

〔尾鰭〕ことごとしう誇雜にすることゝ尾鰭を附くといふ。和訓栞に、「をひれ。古事記に口太之尾鰭鱗と見えたり、世俗の謎にをひれをつくるといへり」。「物に尾鰭か附く」を見よ。

尾を見せる　この樣に身代の尾も見せず暮すは小かんの孝行ゆゑ（氷朔日）　それは兄御と談合して商賣の尾は見せぬ（天網島）

狐が化け損うて尾を見せるより出た謎で、正體を知られる意にいふ。榮花物語卷五に、「次第次第に見苦しう。包む世間に尾が見えて、稻荷の前つぼつぼかまかま作り賣り、これも土佛の水遊び」。日本永代藏卷五、世渡りには捉鯉のはたらきの條に、「世間に尾を見せず、狐よりは化けすまして世をわたる事、人の才覺なり」。

をんざ　これはをんざの秋茄子嫁に食はさぬ志（千疋犬）

「をんざん」（遊殘）の「ん」の略された語、果物などのその盛り時を過ぎたるものをいふ。諸國心中女（貞享三年刊）卷之五に、「其夜しも遊殘の秋の十三夜」とありて、遊殘に「おんざ」と振名假が附けてある。ここの文は、「をんざの秋茄子姫に食はすな」といふ謎に據つたのである。

女さかしうして牛賣らぬ　あの景清はな大宮司が娘おのの姫に最愛し、御身が事は當座の花後悔するとも叶ふまじ、女さかしくて牛賣らぬとは御分が事ぞ（出世景清）

女さかしうして牛賣り損ふともいふ。女の怜悧なるは却つて事を仕損ずる意にいふ謎。

女に家なし（女殺）

世俗支那草（寛文四年刊）に、「女に家なしと云事＝大智度論に、女子は幼にして父母にしたがひ肘にしては夫に從ひ、老では子にしたがふとぞ、家なき故也」。

女の猿智惠（生玉）

女の智惠の淺きを猿に喩へた謎。

女は相見互ひ　女は相見互ひ事、切られぬ所を思切り夫の命を賴む賴むと（天網島）

女どうしは相互に同情して助合ふ意にいふ謎。西遊興志撰・風流今平家（元祿十六年刊）今祇王嫉妬の紅葉の條に、「女はあひ見互ひなりき、我もそなたも怨妻、何れに隔てはあらねど云云」。

女は氏なうて玉の輿（日本武尊）

女は家系卑しうしても、貴人の寵を得て富貴の身となることがあるとの意の謎。手吹草に「女は氏なうて玉の輿に乘る」。

歌謠　その一

巢林子は彼が作中に許多の歌謠を引用し、それ等が彼の時代に謠はれたものが多い。これ等の歌謠は總て彼の文に適應するやうに多少添削されてゐるのであるが、それでも歌謠曲節はよつて以て味ふことが出來る。吾人は近松研究に於て、國民精神生活の反映であり、文化史料としても貴重なる歌謠の一面をも知るを得て、更に元祿情調に深みを加へるを覺える。今それ等歌謠の重なるものを列擧すれば、

間の山節

「あひのやま」及「歌謠その二」の中に就いて見よ。

牛壺歌

天神記・第三に、「筑紫さいふかヨヤヨヤヨ、巾着ならばハリノ、博多小梅を腰附けにトヨ

エ云々」。

「さいふ」に宰府と財布をいひかく。「中著」はその條を見よ。小梅は白太夫の娘の名。（近松のこのあたりの文、小梅が親の白太夫を牛に乘せ、角に小竹筒の瓢箪をぶら下げ、春風駘蕩として左に箱崎の松原、右に安樂寺の塔を櫻花の中に望む筑紫の浦曲を、牛牽歌を謠うて牛を牽き行く、閑雅な情景を寫して餘蘊なし）。

白蹈歌

日本武尊・吾妻鑑第三に、「君はわさ米わりや碓よ、こぬかこぬかはふみで見るトツカラコ、トツカラコ」。

歌祭文（祭文）

賀古敎信七墓廻・第二、櫻祭文に、「そもそも欲つて花を眺め桒る、上は梵天山櫻、下は次第に咲く櫻、忝くも此の國の開き初めたる初櫻、……、又煩惱の犬櫻、惡事災難只りんりんそもそこ、崇りをなすとも只今の、御方便の功力を以て繁昌の御酒宴」。

大經師昔暦・下之卷、おさん茂兵衛暦歌に、「おさん茂兵衛にいふやうは、由なき女の情氣故、なんの咎なきそなたまで、あれ不義者と危日、遂に命のほろぶ日、湯殿始に身を清め、新枕せし姫始、かの著衣始引きかへて、ひかゝる駒のくら開、云云」。

生玉心中、嘉平次おさが道行に、「坂町邊のな通り筋、柏屋内におさがとて、年は二十のヨイ花盛り、客衆客衆の揚詰を、貸すの貰ふの喝、なき、辛い勤の中に拠、深い願ひは一つ屋の、嘉平次故に身をはめて、かはるまいとの七枚起請、書いて二人が取りかはす、云云」。

吉野忠信・第四、女郎名寄に、「謹上再拜敬つて申し奉る色は、根本太夫扇拠は天鵬姿なり、まづ江口の始より、君といふ字を書き初めて、世世の末にはよねと讀み替へ、僭上大靡聞の橋に引き縋り、常闇の夜店となりけるを、云云」。

雙生隅田川・第四、狂女道行に、「被ひ清め桒る の驛迦は羅睺羅の親仁にて、布袋は唐子のお媼役、閻魔は鬼の旦那なり、云云」。

「うたさいもん」及「歌謠その二」の中に就いても見よ。

歌說經（說經）

傾城反魂香・下之卷、みくまのかげろふ姿に、「姿を物に狂はせて、曳いやきさらさら、笹の葉に死出の旅路の後世の友、云云」。

歌念佛

五十年忌歌念佛・下之卷、お夏笠物狂に、「少くわん、親ずれば夢の世や、寢て温めし閨子、いつの間にかは浮かれそめ、三界を只家として、袖笠雨のやどりにも、心止めぬ假枕、流れにあらぬ川竹の、云云」。

井筒業平河内通・第二、業平歌念佛道行の中にも見えてゐる。「さんしやうだいふ」の條を見よ。

海老釣歌（西國訛節）

浦島年代記・第一に、「海老遣らうり、鯷や、記長なぜにぜせはん、もう餌上ぐるぞ、もう海老こと上ぐるぞ、上げての後にかいらうが、戻ろがための餌遣ろ、どんぼめ續く、鮴も續く、續き腹が立つならば、親重代の熊手を持つて追ひ拂ひ召せ召せ」。

鹿島辜觸

用明天皇職人鑑・第四に、「これや此方へ御免ならう、これはお鹿島香取より罷り出でた事觸れでござりや申す、御神詫の通り一言僞りはござない、無い事もあるやうに、足らぬ所は取りつけ引つ付け、國國所所を觸れて通る事觸れで御座りや申す、總じてお鹿島と申すには、上の禰宜が三十三人、中の禰宜が三十三人、糟禰宜が三十三人、合せて九十九人の禰宜が正月七日に神前に於て、おやおつかない起請を書く、その起請の文言に、嘘をつくまい慾をせまい奚れぬ物は取るまい、又奚れる物なら辭儀もせまい、なんぼなりとも貰はうと申す誓紙を書いて、六十六國を觸れて通るから僞りは御座りやない、この度お鹿島の御寶殿より、でつかちけない光り物が筑紫の方へ飛び出で、お前の鼎が八文字に開け、神前の白洲が八角に割れ、神馬のお馬の四足に土を附けて大汗をかいて御座る、さるによつて禰宜神主これを歎き、神馬のお馬に三石六斗の豆を食はせて、神樂の太鼓を打たせ、御湯を捧げて七座の物忌み、七日のおこたれとござある、時にお鹿島大明神氏子を不便と思召して御託宣がござやり申す、當年は乙酉春から今まで氏子繁昌、ゆるりくわんと乙の樽に酉の年の萬の鳥が羽を休める如く、十分の世の中なれども爰に一つの大事がある、娘を持つたるお方は御用心なされ、蒙古高勾麗が以ての外勢が強うなつて、この界へ渡つて或時は美しい稚兒若衆となつて、誑かし、或時は貴人高人の執權御使なんどと僞つて、女御に上げい后に立てよなどと申しておやおつかない僞り、跡からはげる化け頭、親はこれを誠と思ひ娘を手放すものならば、あつたら娘も身代もむくりこくり取られん事不便なりとの御託宣、嘘も飾りも申さないお疑やり申すな、出るまま八百萬神の御判のすわつた事觸れ、無上神辜神道加持」。

木遣音頭

夕霧阿波鳴渡・上之卷に、「やあゑい、さツやあゑい、さツやあゑいさツ、云云」。

木割歌

日本武尊吾妻鑑・第三に、「さまの心はあさ木の伽羅に、ふしのあるのは我がわる木トツカラコ」。

獨樂廻し歌

松風村雨東帶鑑・當世獨樂盡しの條に、「うぐるぐや〳〵、うぐるぐつとも、鳴つたるは苗代小田の蛙こ、云云」。

子守歌

賀古敎信七墓廻・第一に、「犬の子犬の子とゆたもなめなかけそ、ここな子はいくつ十三七つ、七つになる子がいたいけな事いうた、殿がほしと歌うた」。

天神記・第一に、「寢んねこせ寢んねこせ、寢んねこ寢んねこ寢んねこせ、吾せでおそれ犬の子犬の子、目だに覺めたら、背にきつと背負うて、神漢へ參らう參らう、神漢の土産にはでんでん太鼓に笙の笛、お山人形に花縅りきせて打ちきせて、きせて雉子のめん鳥、ほろりツとおといて、しよのしよのおいとしよの」。

猿廻し歌

門田八島・第四、早姫道行に、「猿に山王まさるめでたき、云云」。

巡禮歌

心中双は次の朝日、平兵衛小かん夜の朝顔に、「補陀落や大慈大悲の誓にて、云云」。

嶮峨天皇甘露雨・第四、四國遍路に、「眺むれ

ば月白妙の夜半なれや、只黒谷に黒染の袖、云云。

節季候歌

夕鬱阿河渡鳴渡・上之巻に、「大大盡、太夫樣より附屑、門に賣る聲山草や、ちよつと祝ひましよ裏白、楪、ごまめで御座んせの春、永に、いよしもかはらぬ御見まで、篷瀟に契る餅は粁、ついて離れぬお客を祝ひ、云云」。

大黒舞歌

淀鯉出世潮德・あづま勝二郎初木綿に、「わたつたわたつた光る君の渡つた、夢の浮橋六十帖を渡りつめ十帖と詠じた、一に一夜のお情の夕顔の若生え、二に匂たきしめて浮舟にかげろふ、紅梅・竹川・橋姫に手習、我が名ゆかしき東屋でこれさまの忍び髮」。

敲

語釋部「たたき」の條に述べておいた。

手鞠歌

大經師昔噺・上巻に、「……、手鞠とれとれまー つ二つ、三つ四つ五つ六つ七つる八つる九ここのほんほとをんゑ、ゑいころころころ」。

鳥追歌

天鼓・第一、萬歳に、「やんら目出度や千町や萬町の鳥追が參りて、福の神祝ひこめ、白げの米やろ眞白げの米やろ、よねやらうがぢやうには、福と繼と參りて、人目忍びて便せうと申す、心通はば伴れてのき候」。

語釋部「とりおひ」をも見よ。

七草粥の囃

今宮心中・中之巻に、「何處やらの男と他處他所の女と、渡らぬ先にとんとんとん」。

語釋部「ななくさはやす」をも見よ。

鉢敲歌

賀古教信七墓廻・鉢たたきに、「めぐり見る、浮世の波に比ぶれば、阿波の鳴渡は磯小舟、賀古の教信叔父甥の、連れ道心と七墓を、夜な夜な分くる露の間も、亡き人迄らぬ夜半とては、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀、南無といふ聲の中より鐘鳴れて、五色の雲に、乘るぞ嬉しき南無阿彌陀、南無阿彌陀佛南無阿彌陀、阿の字には、胡麻ダの云云」。

蟋歌がるた第二に、「此處に消ゆれば向ふには、今燃えぞむる、無常の煙、昨日後れし其人も今日は又、明日の人に先立つ身とぞなりにけるる、ハア思へば嬉しくも、かかる姿となりしよと思ふも佛の御誓、攝取不捨と鉦打鳴らし、南無阿彌陀南無阿彌陀、南無阿彌陀佛、願以此功德平等施一切同後菩提心」。

開八州繫馬・第一に、「よき光ぞとかげ顯むる、世の光ぞと、顯む茶のきよのきよひよん、御寺に田螺にきよひよん、ヨヨ井の澤の、澤の寒きさんやに、ていと打鳴らす、三界を家とよ走り走り碣る鉢こくりが、ヨヨヨヨ五郎三郎、田舍へお下りあるならば、この程なぐり情に飄をなりとも置いて行け、小飄をなりとも置いて行け、それはや女郎、易き間の事なりとよ諸國をつるで、づでんど叩かうずるにも、飄なうてはお笑止、極樂のホホ、前に流るる涙川、いかなる淵の、瀨になり天地の恩、國王の恩、よしや世の中猩てか寤めて か只何事も、後生なりけりなもうだ、なもだなもだ」。

比丘尼歌

主馬判官盛久・比丘尼地獄の繪ときに、「そもそも往生極樂の、雲の臺に法の花上品蓮に浮ぶ事、この世のこの身この體に取りも直さず成佛す、去此不遠とは說かれたり、かばかり近き極樂も、作りし罪が鬼となり、心の劍身を責むる、一百三十六地獄、無間叫喚阿鼻永沈、この世の色はあだ花の、情の涙流れても、焦熱の火は消えやらず、連理の衾、暖かに、比翼の床を重ねても紅蓮の氷は解け難し、そもや人間一人は三世の諸佛苦しみて、造り立てんとし給ふを、十月に足らで墮し兒の、諸佛一度に御聲を揚げ、歎かせ給ふ御涙、流れて瀦つ血の地獄、火焰となつて身を焦す、さてその次は小夜衣、わが妻ならぬ邪淫戒、嫉妬の煙、妬の焰、僧を落せし女の報、比丘尼を犯せし男の罪、無明の馬の毛をふるひ、愚鈍の牛が角を振り立て、六道四生をくるりくるりと因果はここにめぐり車の我からと、かひも涙に伏し擄む、是は又生まずの地獄、竹の林に寢へて、影もよろよろたよたよと、辿りよろばふ冥れさや、千筋の燈心たぐりもて、心の闇にくれ竹の、竹の根を掘る篠竹の、杖に縋りて泣くばかり、暗しやつらし冥闇城、そもこの苦患と申すは、娑婆にて人の目をくらまし、科なき人を牢に入れ、又閼の戸の閼守よ、往來を惱ますその報、四方は石の門に五體を責められ、五色の鬼が夜に三度日に三度、時こそ來れと呵責をなす、土は精劍山は鐵城、五百生生蘊きせぬ因果弓取とても留らず、力ありとて顯まれず、疑ひ給ふな人人」。

吉野都女楠・第四に、「よき樣の寢姿窓から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、盛りまだしき閨の内、さては野に咲く百合の花しよがゑ、少くわん少くわん」。

舟歌

浦島年代記・第四、浦島太郎入部の纜に、「亂れ小柳亂れそ柳ナ、共に心も亂るるにそもじ、繼にはのエイソリヤしな、ゆきて、エイエイよしな、のゑいゑいおれゑ、濱千鳥が寄せ來る、寄せ來る寄せ來る小浪に搖られて搖まれてちどろもどろ、たどろもん、ちりはになりてきなくようとり、よなくまいかまたのゑいよほん、ほほほんほんとおりおりはんはんゑいゑい」。

平家女護島・第四、舟路の道行に、「やんれ龍頭鷁首の金の、櫂や、玉の棹綴や、錦を帆に上げてやらんやら、お目出たい釣る、鱸釣る」。

馬子歌

歌謠その二、「さても見事な、云云」の條を見よ。

萬歳歌

天鼓・第一に、「德若に御萬歳當御殿榮えます、ありけうあり新玉の、年立ち返るあしたより、水も若やぎ木の芽もさしかえるは、誠に目出度う候ひき、云云」。

大經師昔噺・下之巻に、「德若に御萬歳と御代も榮えましますありきやうありあら玉や、年たちかへる朝より、水も若やぎ木の芽もさしかえるは、誠にめでたう候ひし、京の司は閼白殿、退位の御門日のもく内裏、王は十善神は九善、萬やすやす、浦安が木の下にて、正月三日の寅の一點誕生ます、若夷子商ひ神と、現はれ給ひて商ひ繁昌守らせ給ふは誠に目出度う候ひける、やしよめやしよめ、京の町のやしよめ賣つたる物はやしよめ、賣つたる物は何何、大鯛小鯛鰤の大魚、鮑榮螺、蛤こ、蛤こうと賣つたる物はや

しよめ、京の町のやしよめ其所をば打過ぎ、側の棚見たりや、側の棚見たりや、豆に小豆、大根蕪、加賀の牛蒡、毛牛蒡、辛子の粉山、椒の粉、辛い胡椒召さいの、やしよめやしよめ、京の町のやしよめと賣りためて千貫、つなぎ立てて萬貫、惠方の恵藏づつしり納めて、家も福福節、樣福樣、父樣母樣、和子樣姫恵前産みならべて福福福福」。語釋部「たうゑ」をも見よ。

麥搗歌

持統天皇歌軍法・第五に、「一夜なれなれ帶買うてやろぞ、帶ぢや名が立つ生でためも、ソレソレ姫入さしよとて長持買ひに、柱盧が百度出る晩かあすかの」。

厄拂

雪女五枚羽子板・上之卷、初春厄拂に、「やあら目出度や此方の恵壽命申さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が八千歳、東方朔が九千歳、西王母が桃の核、猿豆小豆、鶏もまめどり雛鳥のはがひ重ねに寶は集る、家は治まる持丸長者の、四方に四萬の戸前の明け行く年から、福神達の御影向、一に市姫辨財天女、二は西の宮若惠比藏殿、三は三面大黒頭巾の襞の、數數十二箇月は、無病息災その身は鐵、槌打出の小槌、打つて打出す金銀、銀錢、福德圓滿惡魔外道、打拂うて西の海へさらりさらりさつさつときやこう」。

以上、これ等の他に、踊歌、小唄、長唄、投節、芝居唄、丹前(田舞)唄、江戸節(半太夫節)、隆達節、文彌節、一中節、冷泉節、道具屋節、海老屋節、林清節、狂言小唄、童謡などが、情緒纏綿の文節となつて織り出されてゐる。

歌謠 その二(考證)

ああさぶこさぶ、猿の衣服借つて着しよ(千疋犬)

童謡に、「おほさぶ小寒、猿のじんべ借つて來い」。

愛宕花見に袖を引かれた(三國志)

松の落葉(寶永七年刊)大津追分繪踊の唄に、「……、愛宕參りに袖を引かれた、……」。

愛宕參りに袖を引かれた(女腹切)(大覺)

大津追分繪踊の唄の文句を引用したのである。增補松の落葉(寶永七年刊)卷四、大津追分繪踊に、「上り下りに目につく姿、鮮の命を君にくれべい、追分の達磨繪、心鬼に衣はそげたもをかし、座頭はしりゐに、犬が吠附く、猫が三味彈く、酒飲む奴、愛宕參りに袖を引かれた、伊達な若衆が鷹手に据ゑて、ふれやれ〳〵大とりげ〳〵、云云」。愛宕參りとは、山城國葛野郡嵯峨村西北にある山上、愛宕權現社に參詣するをいふ。毎年六月二十四日詣づれば、千日の參詣に匹敵すと稱し、參詣者群をなす、これを千日詣と云ふ。

吾妻請出す

吾妻請出す、山崎見ゆる(淀鯉)　吾妻請出せ　山崎與次兵衞、請出せ請出せ山崎與次兵衞、いつか思ひの十下紐とけて、昔思へば憂やつらや、憂やつらや、忍ぶ昔もうやつらや(喜門松)

この文は寛文頃の山崎與次兵御踊の流行唄によつたのである。落葉集(題簽に松の落葉とあつて元祿十七年刊)卷四に、「東妻請出す山崎與次兵衞、うけだす請出す山崎與次兵衞、今は思ひの下ひも解けて、くるわすまひの憂さつらさをば、聞くも中中恨めしや、恨めしや、聞くも中中恨めしや、せうがのせうがの、これこれこれこれ、しましよかの、そつこで請出せ三百兩、二口合せて六百兩、すつとしよてんびんはり口ちんかりり。みをつくしに、「寛文年中此家の抱へに吾妻といへる太夫ありて、……。大盡山本村與次右衞門を世に山崎與次兵衞とぞいひかへたり。其頃にも珍しき事にてありしにや、歌を作り、吾妻請出せ山崎與次兵衞、請出せ請出せ山崎與次兵衞、そつこで請出せ三百兩と風ひしなり云云」。

逢ひた見たさの唱歌

逢ひた見たさの唱歌をば投節に唄うつ書いて見つ、朱雀の野邊の枯るるほど歎き暮らさせ給ひしを(吉野忍信)

新町なげぶし(書名)の唄に、「逢ひた見たさはとびたつなアばかり、羅籠の鳥かや、やアなうううめしやん、とりかやなア羅籠の、羅籠の鳥かやなアうらめしやん」。

(傾城佛の原(元祿十二年春上演、巢林子作)傾城奥州嫉妬の歌に、「……人こそ知らね振分髪も、其方ならでは誰にか見せんこの黒髪を、今は仇なる亂れ髪亂れ心ああ、ああああ逢ひた見たさに來たぞやれ、つらやつらやと思ひはすれどまだ捨てられぬ、……」。秀松軒撰、松の葉(元祿十六年刊)卷三、二あがり・みだれがみ「あがり・みだれがみ」の唄に、「……人こそ知らね振分髪ならでは誰にか見せんこの黒髪を、今は仇なる亂れ髪亂れ心や、ああああ逢ひた見たさに來たぞかし、つらやつらやと思ひはすれどまだ捨てられぬ、……」。語釋「かどのとり」の條をも見よ。

油壺から出すよな

どうでもさがは濡者ぢや、油壺から出すよな女房、しんとろどろりと見惚れる女房(生玉)鏡の權三は伊達者でござる、油壺から出すやうな男(鏡權三)艶艶して美しい形容にいふ。ここの文は當時の流行唄に加筆したものである。「鏡の權三は伊達者」を見よ。元祿曾我(元祿十四年刊?)卷二に、「御袋を見申すに、油壺から出すやうな男、あいそらしき御詞に頭からほれまして云云」。「柏屋さが云云」をも見よ。

雨にはあらでヤこれのこのこの、この木の葉がはらりほろり(蟬丸)

糸竹初心集・吉野山の唄に、「吉野の山を雪かと見れば、雪にはあらで、ヤアこれの花のふぶきよの」とあるの改作。

有馬の湯のだんこ

これこそほんの添げ有馬の湯のだんこ、やれゆのだんこゆのだんこ、今は有馬のゆのだんこ、しよんがえ(女腹切)

松の葉卷三、門柱の歌「書はたんこ〳〵な、桶の輪をさ締みやるさ、のほんへ・夜さりやせんま女の腰締みやるさ、しやうがへ」の中の語を取つて、談合を「だんこ」といひ「しやうがへ」を「しよんがえ」といひ、近松のここの文、氣遣ありを有馬(摂津有馬温泉)にいひかけ、言ふな言ふなを湯女湯女にきかせた。

有馬山、松になりたや(百合若)

有馬の湯女お藤を歌つた唄に、「松になりたや有馬の松に、藤にまかれてねとござる、云云」。この唄、增補松の落葉卷三、古今ぶしの

條に出てゐる。

昔うて歸らぬ死出の旅（氷朔日）

間の山（その條を見よ）の文句に、「鳥は古巣にかへれども、行きてかへらぬ死出の道」。

伊勢衆でないか

「同じねを啼く鶯の春は云云」を見よ。

いとし男と隔てて任めばの、烏鳴くさへわしや氣にかかる（持統天皇）

山家鳥蟲歌に「いとし殿御を遠くに置けば、烏鳴くさへ氣にかかる」。

絲屋の小絲、姉は十三妹は十二、殿御欲しさに宿願かけてえ（卯月紅葉）

手鞠唄、「本町二丁目の絲屋の娘、姉は二十一妹ははたち、妹欲しさに宿願かけて、伊勢へ七度熊野へ三度、愛岩祿へは月參り」。この歌もとは木遣節であつたが、松の落葉卷四、踊歌の中には改作して載せてある。

岩木さへ引く手に寄り來る、心を今ぞつくし琴エイソリヤ、引かれて來れば名も立たぬ（三國志）

糸竹初心集（寛文四年刊）鹿踊の唄に、「裏裏の堰のヲヲ清れウはアア夜毎に落つれエどヲ名もヲ立たアたアぬウエイソリヤ」。

いひきにてすいちやゑんちや…（博多）

增補松の落葉・卷四、唐人踊の唄に、「いきにていきにてすいちやゑんちやすいちやすいふうちやういさらこわいめさはんやさそうわうわうちたるまたひさらきこいさらこわめさはんやさそうつうつうあうあう」。この唐人踊の唄は支那の俗謡・醉胡蝶から出たものである。唐音和解・醉胡蝶の唄に、「一更裡天月黑紗窓人未眠云云」。

いよこの　橋のいよこの橋の上にて賣る麝は（今宮）

拍子を附けて謡ふ時の拍子聲。增補松の落葉・卷五、五尺手拭の唄に、「橋をいよこのかきよやれはしをかきよやれ船橋を橋のいよこの下には橋の下には鵜の鳥が」。

いよしごけんと書いたるは、ほだしの種か花蹲、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結び文、方樣まゐる花よりと、思ひまゐらせ候べくの、わけの杯色見えて、わきて泉の思はくは、只逢ひまして逢ひまして、又の御見をまづかしく（女腹切）

「いよしごけん」を見よ。この唄江戸半太夫節に謡ふ。

おいゑんきや、しさんすゑんとうつゑうりやうへん、なんほはきんざんすゑんのすい、さんとんろてほうはなんすい、くはんとんのていい、くわんすいひんちやうのふうけん（唐船噺）

唐音和解（正德六年成、寛延三年刊）坤卷に、十三省の歌を擧げて、「爲寃家、十三省都走了過南北京山陝西、山東路的河南內、關東地、關西行朝福建。寃家の爲に十三省都走了過れ、南京北京山西陝西山東の路河南の內、關東の地、關西より行いて福建に朝す。

食うたもいとし抱いたもいとし、かたくまの小女郎がなほなほいとし（今川了俊）

增補松の落葉（寶永七年刊）卷四、ぞんぞりこ踊に、「食うたもいとし抱いたもいとし、かたくまの小女郎はなほそつこでなほいとし、ぞんぞりこ」。

沖つ白波さばけて忍べ（卯月枕）

「中よい月に戯れ遊べ云云」を見よ。

沖に戀路の戀路のまだいろは船、惚れてほの字の帆が見ゆる（用明天皇）

（二枚繪）

繼の初心の意にいうもので、流行唄「沖に見ゆるは丸屋の船か、丸にやの字の帆が見ゆる」の改作である。「ほのじ」をも見よ。

落ちて三途の川となる　名ゑや藻屑に埋まんと、又ひたすらのうき涙、落ちて三途の川となる（二枚繪）

「三途」はその條を見よ。この文は間の山の歌詞「これが冥土の友となる」の句調によつて、それをきかせたのである。「間の山」をも併せて見よ。

同じねを鳴く鶯の、春はござれの伊勢衆でないか、目もとにしほがこぼるる（丹波與作）

旅宿賃は何處でも「同じ直」と云ふに、「同じ音を鳴く」とかけて「鶯の」とつづけ、鶯の縁から「春はござれの伊勢衆」とつづけ、「伊勢衆でないか、目元にしほがこぼるる」と、當時の流行唄を引いて來たのである。この流行唄は糸竹初心集（寛文四年刊）に、「伊勢をどりのうた。あの君樣あはあ、伊勢のはまあそだあち、目元にしほがやれ、こぼれかかる」と見えてゐる。「しほ」は「しほのめ」を見よ。ここの文、出女の聲を聞くやうな氣がして、殊に婉曲に流行唄を交へたこと、いつもながら靈腕の妙を極めてゐる。「春はござれの伊勢衆」をも見よ。

お名をばえ申すまいよのしやんしやん（今宮）

由兵衛が繼人の名を問はれて、その繼人の名は申しませぬといふを、當時の流行歌の文句で洒落れたのである。その流行歌は松の葉（元祿十六年刊）卷二、長歌の部に花見の題で、「……、卯月に卯月、卯月八日の花よりだ、お名をばえ申すまいよのしやんしやん、しやんとさいたるなが刀、花か蝶かとうちむれて、……」と見えてゐる。

大君きませ聖にせん（五人兄弟）

催馬樂、我家の歌に、「我家はとばり帳をも垂れたるを、大君來ませ聖にせん、み肴に何よけん、あはびさだえか、かぜよけん」。

思ひきれとは死ねとのことか、生きて添はれぬうき世なら、いつそ煙になりたやな（生玉）

江戸半太夫節の唄である。近松が江戸節を用ひたもの他に「いよしごけん云云」（その條を見よ）などがある。江戸節の詞章は古雅流麗であるが力弱いものが多い。

おんらが在所はの、奥山のててうちの、でんぐりぐり栗の木の（博多）

「おんら」は「おれら」（俺等）の訛。「ててうち」は糸竹初心集（寛文四年刊）の「ててうち栗」の略、「ててうち栗」は「でて

ち栗」（田落栗）の訛。この唄は俗謡「てててちは子供のチヨツチヨツ、でんぐりはかいぐり、かいぐりなり」の改作であらう。

笠がよく似た菅笠の

「向ひ通るは清十郎ぢやないか云云」を見よ。

かさやさんかつ　大和の國や三笠山、笠屋三勝舞の袖、つまとつまとを引寄せて、結ぶ無常の薄煙（水朔日）

〔笠屋三勝〕元祿頃大阪の女舞の妓である、勝邊半七と馴染み、遂に愛兒おつうを殘して、元祿八年十二月六日の夜、千日墓所の南さいたら畠（その條を見よ）で情死した。西澤與志撰・新色五卷書（元祿十一年版）に、「大坂女舞の三勝芝居興行の立札所には、珍しく見る人やるせなく立塞がり、海道塞げて人を通さず、あなたこなたより人橋かけて世渡りの女舞云云」とあれば、當時全盛の舞妓であつた。ここの文に、「舞の袖」とあるは三勝が舞妓であつたのでしか云ひ、「つまとつまとを引寄せて」とあるは、松の落葉・五、三勝心中の文句に、「つまとつまとをしつかと括り」とあるに據つたのである。

柏屋さがははすはにござる、繼の意地酒ヤトントン、手もてかかる押へてかかる、どうでもさがは濡者ぢや、油壺から出すよな女房、しんとろとろりと見惚れる女房（生玉）

鍵權三男踊歌を改作したものである。この調子に似たものは傾城八花形（錦文流作）の中にも、「なりも形も男でござる、ヤツトントン最中で、ヤなさけもあつてはすはに見えて、どうでも男のなりふりぢや、足の運びもしなよや姿、サンノトンとろりと見惚れる姿云云」と見えてゐる。「鍵の權三は伊達者」を見よ。

「はすは」は語彙部について見よ。

柏屋通れば二階からちよいと招く、のつこれ何としよ（生玉）

柏屋は遊女おさがを抱へてゐる置屋號である。ここの文は松の落葉（元祿十七年刊）卷七、吉田小女郎の題で、「ふし田通れば二階からちよいと招く、しかも鹿子のすんど振袖が、なんきみちよいとしよ」とある當時の俗謡をもぢつたのである。

（序云、この吉田小女郎の俗謡は、もとは三州吉田驛（豐橋）の遊女を唄つたものであらうが、後には吉田御殿を唄つたものとされた。吉田御殿の俗説は巢林子作・平家女護島・第三、朱雀の御所で常盤御前の淫行に脚色されてゐるから、その俗説を述べよう。德川家康の孫で、秀忠の長女である千姫が豐臣秀頼に嫁し、元和元年大阪落城の時、家康之を殺すに忍びず、坂崎出羽守政友に命じて千姫を救はしめ、姫を與へるを約した、政友乃ち炎煙を冒し奮戰して敵城に闖入し、千姫を負うて出た、然るに千姫は政友の容貌醜惡なるを以て之と婚するを拒み、他に嫁しようとする由を政友聞いて憤死するに至つた、かくて元和三年九月千姫は本郷森川町本多美濃守忠朝に嫁したが、三年にして美濃守死し、姫は家老吉田修理介の三番町の邸に館を建てて居ることになつた、世人呼んでこれを吉田御殿といふ、姫高畳に出ては自ら往來の人を見、美少年を見れば卽ち招き入れて、姫と共に長夜の飲をなし、そして一度招き入れた者はこの館から出たことがない、蓋し醜聲の洩れるを恐れて之を殺したものであるといふ、寛文六年二月姫も遂に自盡したとの說であるが、眞僞詳でない、千姫の墓は小石川傳通院にあつて天璽院殿といふ。）

肩にかるもの花折りかけて、裾にゐの字が寢た處ゑ、ゑいゑい（蛙合戰）

「繼といふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寢た處ゑ」といふ唄の作替。「ふさ繼といふ字を云云」を見よ。「かるも」「ゐの字」はその條を見よ。

門に立つたは忍びの夫かえ、野風身の毒こち這入らしやんせえ（冥途飛脚）

松の葉（元祿十六年刊）卷一、端手組の唄に、「門に立ちたは八もじ樣か、夜風身の毒うちどざれ」。冥途飛脚のここの文に、「十七八が門に立つたは云云」とあつて、唄に「八もじさまか」とあるので、「八が」というてこの唄につづけたのである。

鐵の鳥居のきざはしを、雲かと見れば加賀菅笠のヤコレノ、紅絹の紐のや（三國志）

糸竹初心集、吉野の山の唄に「吉野のお山を雪かと見れば雪ではああらでんゃあこれのを、花あの吹雪よのんんゃあこれの」。

鴉がな鴉がな、浮氣鴉が月夜も闇も首尾を求めてあはうあはうとさ（冥途飛脚）

「鴉」、「浮氣鴉」は遊廓をぞめく客に當てて云うたのである。此文、巢林子が當時の流行唄に筆を加へたものであらう。これに似た調子のものは伊達髮五人男の中にも見えてゐる。

君が盃いつも飲みたや、武藏野の、月の月の夜すがら戯れ遊べ（女殺）

「武藏野」はその條を見よ。若みどり（寶永三年刊）卷四、てる月の歌に、「月は武藏野よびだしのぢよろを、……いざよひ月に戯れ遊べ、えいえい遊べ、えいえい……」とあるを作替へたのである。

君は早稻米我や唐臼よ、こぬかこぬかはふみて見るトツカラコ〳〵。樣の心はあさ木の伽羅に、節のあるのは我がわるきトツカラコ云々（日本武尊）

舂歌と木剉歌である。「こぬか」は、來ぬかに小糠をいひかけ、「ふみ」は文に踏みをいひかけたのである。「あさ木」は淺木の義、粗惡な材木をいふ。千載集卷十三、繼歌三の部、前嬬院新肥前の歌に、「あづま屋のあさ木の柱我ながら、いつふし馴れて繼しかるらん」。「わるき」は惡きに劣木をいひかけたのである。

君を待つ夜はよやよやよ、西も東も南もいやよ、とかく待つ夜は北がよい（女殺）

松の落葉（元祿十七年刊）卷七、「おもやこそ」の唄に、「君を待つ夜は、のほんほほんにほんにさ、西も東も南もいやよ、ほんにさ、とかく待つ夜はきたがよい、のほんほほんにほんにさ」。

櫛になりたやヤレサテ薩摩の櫛に、諸國娘のヤレサテ手に渡ろ（薩摩歌）

松の葉卷三、ありまの唄に「露になりたや袂の露に、消えぬうきみのかこちぐさ云云」と見え、增補松の落葉卷三、有馬の松の唄に「松になりたやな有馬の松に、藤にまかれてねとござる云云」と見えてゐる。蓋しこれらの唄の調子に據つた作り替である。

廓住居は時雨の雨よ、降つつ降られつ村村雨の、まだ干ぬ露もまだ干ぬやよや（淀鯉）

廓住居の遊女の身は、男を嫌ひ或は男に嫌はれて物思ひに泣き暮らし、その涙の露は今だに乾かぬことよの意であつて、當時の流行唄によつたものである。世繼曾我に「廓住居は時雨の雨よ、降つつ濡しつ村村雨の、まだ干ぬ露もまだ干ぬやよや」。紀海音撰・曾我袞富士（正德四年成）に、「廓住居は時雨の雨よ、降つつ降らしつ村村雨の、まだ干ぬ露もまだ干ぬやよや」。この唄の次に、「ああ露は」とつづけたるは、小倉百人一首にある寂蓮法師の、「むら雨の露もまだ干ぬ眞木の葉に、霧立ちのぼる秋の夕暮」の歌に思ひよせたのである。「露は不斷の云云」をも見よ。

傾城こまめにたらひが女房（喜門松）

小唄の文句に據つたもので、傾城は日に幾度も化粧をし腰湯をつかひ、こまめに盥に親しみ、盥は傾城の女房役といふ意であらう。そして與次兵衛が吾妻を請出さうと思ひたくみたことも失敗しての意に、「請出したらひの底ぬけて」といふのである。「たらひの底ぬけて云云」を見よ。

けけらほ云云　唐の木遣は、けけらほ、けけらほにほう……ほにほう（唐船噺）

唐の木遣唄とあれども、其實唐音らしう見せたでたらめであらう。穗積以貫撰・難波土産卷之四に、「唐船噺今國性爺の口に唐の木遣あり、其文句に「らうがときろくほにやふたうにやくこんもつきんと」と云ふ事あり、これは昔の東國歌に、「うらが嬶坊にや豆腐こんにやくきんもつだ」と云ふを、假名を上下へ置代へて用ひたるなり、此類にて埒もなき事を知るべし」。

ここな子は幾つ、十三七つ（賀古教信）

子守唄に據つたのである。童謠集（近世文藝叢書に收む）子守唄に、「お月さまいくつ、十三七つ、まだとしやわかいな云云」。

ここは竹田か夜は何時ぞ、五つ六つ四つ千日寺の、鐘も八つか七つの芝居（重井筒）

「竹田」は竹田近江の水編り芝居を云ひ、道頓堀の濱側にあつた。「五つ六つ四つ」は時を云つたのである。「千日寺」は法善寺のことである。「八つか七つの芝居」とは、當時芝居の一番太鼓は夜明方から打鳴したので、八つ七つはその拂曉の時刻を云つたのであらう。そして「七つの芝居」はその條を見よ。ここの文は松の落葉（元祿十七年刊）卷五、三勝心中の唄に、「念佛を踏のかずとりに、夫婦一所に千日寺の、鐘の響に夜は何時ぞ、八つでもあろか、いつもおつうが目をあく時分」とあるを作り替へたのである。

五尺いよこの手拭　これはかの五尺いよこの手拭と、歌に唄ひし手拭か（淀鯉）

松の落葉（元祿十七年刊）卷七、五尺手拭の唄に、「五尺いよこの手ぬぐいの五尺手ぬぐいなかそめて、おれにいよこのくりよより、おれにくりよよりやどにおけ」。「五尺」は手中の長さである、「しゆきん」をも併せ見よ。

この世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、……、風しんしんたる曾根崎の、森にぞたどり着きにける（曾根崎）

此道行文は後に唐崎八景耳風の「からさき心中道行（篇山小歌）に少し添削して用ひ、「此世の名殘夜も名殘、死にに行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそあはれなり、あれ歌ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて、殘る一つは今生の、鐘の響の聞き納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見あぐれば、北斗はさえて影映ろ、星の妹背の天の川、渡せる橋を攝の、橋と契りていつまでも、俺おんとそなたは女夫星、必らず添はうと縋り寄り、二人が中にふる涙、川の水嵩もまさるべし、道行く人の聲高く、京大坂の心中の、ことの葉草のとりどりを、聞くに心もくれは鳥、あやなや昨日今日までも、よそに言ひしが明日よりは、われも噂の歌に入り、世に謳はれん謳はば謳へ、どうしたことの緣ぢややら、忘るる腹もないわいの、放ちはやらじと泣く涙、夜の雨かや唐崎の、松の木蔭に着き給ふ」と見え、松の落葉（元祿十七年刊）第七卷、古來中興當流はやり歌の條にも、この辛崎心中の道行文が載せてある。この曾根崎心中の道行は、物狂徠がこれを讀んで、七つの鐘が六つ鳴りて、殘る一つが今生の、鐘の響の聞き納めといふに至り、近松が妙文この中にあり、外を問ふに及ばずと歎賞したことが大田南畝の一話一言に見え、また巢林子がこの文を作るに、死にに行く身の道の霜、一足づつに消えて行く、といふ所まで作つて案じ果て、伊勢の俳諧師涼莵に教へられて、夢の夢こそはかなけれ、と書き續けたことが南畝の俗耳鼓吹に見えてゐる。果してさうであつたかは疑はしいけれど、かういふことでこの道行文が益ゝ有名になつたのである。

戀路の闇の暗り　行燈を踏倒し、戀路の闇の暗りと、謠ふはものかこれも亦、よしなき事の迷ひなり（堀川波鼓）

八百屋お七が繼人と逢はれようかと浸はかな心から放火したので、天和三年三月二十九日火刑に處せられた。上方ではこの事を歌祭文に作つた。「戀路の闇の暗り」はその歌祭文の中にある文句である。紀海音撰・八百屋お七（寶永元年二月上演）の中の八百屋お七江戸櫻（歌祭文）に、「呼子鳥、哀れなるかなお七こそ、戀路の闇のくらがりに、よしなきことをしいだして云云」とあるは、その頃謠はれたお七の歌祭文に據つたものであらう。

戀の櫛田の眞中中で深き思ひをやれ紫帽子（國性爺後日）

「紫帽子」はその條を見よ。「櫛田」は塊名部を見よ。當時の流行唄、「伊勢の櫛田の眞中ほどで、深き思ひのやれ紫帽子」とあるを、改作

して用ひたのである。「そなた櫛田の眞中ほどで云云」を見よ。

戀は曲者（氷朔日）

曲者とはわるもの、又はあやしいものの意。閑吟集に「こしかたより今の世までも、絶えせぬものは戀といへる曲者、げに戀は曲者くせものかな、身はさらさらさらさらさらさら更に戀こそねられね」。謠曲・花月に「戀は曲者」。

紺に鬱金に薄染淺黄、織物縫物染物盡し（霧門松）

松の葉（元祿十六年刊）卷二、長歌・花見に、「紺に鬱金に淺黄に鹿の子、地紅や地紫けんたい郡内云々」。

咲いた櫻になぜ駒繋ぐヨノ、勇めば駒が、駒が勇めば天にも上る靈雀毛や（雪女）

諸國盆踊唱歌（寛文頃後水尾院の御編集になつたといふ）伊賀の部に、「咲いた櫻になぜ駒繋く、駒が勇めば花が散る」。松の落葉（元祿十七年刊）卷七に、「咲いた櫻になぜ駒繋ぐ、のほんへ、駒が勇めば、のほほんのほほん、ほんほのんいよいよ、花が散る散る」。この唄の意は、美人も嫁すればその身が窶れるに至るとて、年頃になつた娘に良人を持たすことを惜んだのである。巢林子この唄を取つて、「花が散る」を作替へて「天にも上る云云」とつづけたのである。蓋し「天馬空を翔る」などいふ詞があるので、かく變いたのである、そしてそれがまた靈雀にかかつてゐる。

＊坂は照る照る　鈴鹿は曇る（千載集）

坂は照る照る鈴鹿は曇る、土山・間の、間の土山雨が降る（丹波與作）

松の落葉（元祿十七年刊）卷四・馬士踊に、「坂は照る照る鈴鹿は曇る、さきはいというてはいどうし、間の土山雨が降る」。

月代剃つて髮結ひし蜈蚣を流す（懸物擬）

童謠に、「京都鼠をとらまへて月代剃つて髮結つて云云」。

櫻花かや散り散り（夕霧）

「更科や姨捨云々」を見よ。

酒には濱松　門には門松、酒には濱松、肥えたは肥松（反魂香）

當時酒宴の座でよく謠つた「三國一ぢや、濱松の音はざざんざ、酒になりすまいたしやんしやん」（「ざざんざ」「三國一ぢや」を見よ）の唄によつてかく云うたのである。

定めなき世に捨てられて……これが寐覺の友となる（反魂香）

「あひのやま」を見よ。

五月雨　五月雨ほど戀ひ慕はれて、今はあき田の落し水（宵庚申）　五月雨よほど戀ひ慕はれて、終になあきたのよ落し水（萬年草）

ここの文は諸國盆踊唱歌（寛文頃後水尾院の御編集と云ふ）河内の部に、「五月雨ほど戀ひしのばれて、いまはあき田の落し水」とある唄によつたのである。「五月雨・と「終にな」「あきたのよ」の「よ」、「な」「よ」は唄の拍子詞である。

薩摩や三が國に霧雨が降らばよな、それぞ立つ名のうき雲の（薩摩歌）

三が國とは薩摩・大隅・日向をいふ。御船唄留に「鹿兒島薩摩三が國霧雨が降らばよの、しづが思ひと思召せ」。

さても命はナあるもの　扨も命はナあるものと、うたひ給ひし寐覺の調子耳にとどまり（三世相）

新町なげぶし（書名）の唄に、「歎きながらも月日を送る、さても命はあるものを」と見えてゐる。好色一代男卷七、その俤は初音の條に、「世之介に引かせて膝枕して、さても命はと投節、聞いてゐられぬ所ぞと」、とあるもこの投節の唄である。野傾友三味線卷二、寶の山を手ふりて歸る男の條に、「近代投節といふは、なぎぶしのかはりにて、籠の鳥かやうらめしやと、好色大鑑の作者が作り替へたる謠歌の根元なり」と見えてゐる。

さても見事な、そんれはお葛籠馬や、七つ蒲團にそんれは曲糸するて（丹波與作）

さても見事なおつづら馬や、七つ蒲團に曲糸するて、蒲團ばりしてナ小姓衆を乘せて、海道百里をはなでやる（堀川波鼓）

「おつづら馬」の唄に據つた小唄節である。若みどり（寶永三年刊）卷四・おつづら馬の唄に、「さても見事のお葛籠馬よ、上にやせんしき唐織の布團、布團はりして小姓衆を乘せて、そなた下りかおりやり今上る、文を遣るにも傳言しようにも此處は箱根の山中なれば、筆にや事缺く硯墨は持たず、若しも水口お泊ならば、札の辻から四五軒目の茶屋で、馬も息休そのの身も無事で、やがて上ろと言うてたもれ、ゑいこのさんさ」。

扨も見事な、ソンレハ馬子衆の振や、繻子の股引天鵞絨の脚絆・手綱帶して（國性爺後日）

前條を見よ。

さまが土産の菅笠と、踊に踊りし笠よなう、それは吾妻の花嫁御（淀鯉）

松の落葉（元祿十七年刊）卷四・菅笠踊に、「東からくる花嫁うれし、おれが目當の菅笠うれし、ほんにうれしお供にとつぐ伊達助が、よぢらすよぢらすよぢらす、腰をよぢらす紅葉笠、まん丸こうてきようて、さまが菅笠百萬貫」。なほここの文の「鴛鴦の衆の仲間から三尺手拭抱帶とて進上す、……これは吾妻が身の果」までは、謠曲・蟬丸に「烏帽衣給つて錢をまねらせ候はん、……ここは處も蓬坂山」とあるを世話に碎いた文である。

更科や姨捨て・親捨て身を捨てて、櫻花かや散り散り（夕霧）

古今集雜歌上の部の歌に、「我が心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」。姨捨山は信州更科郡にある。松の葉卷三、二あがり、さつまふしの唄に「親は他國に子は島原に、櫻花かやちりちりに」。

＊さんごくいち　この軍用意に取交ぜて御祝言、閧の聲にさし合せ三國一も歌はれまい（千疋犬）　三國一ぢや我は佛になりすます、しやん

と左手の腹に突立て（宵庚申）　兄が祝儀の一節も餘所ゑ憚る聲低く、三國一ぢや藥茶に成濟いた（特統天皇）　聲高砂や住吉の濱松の音はざざんざ、三國一ぢや酒になり濟いたしやんしやん（國性爺後日）

〔三國一〕「三國一ぢや何何になり濟いたしやんしやん」といふ小唄がこの當時酒宴の席などで流行した。元祿太平記（元祿十五年刊）卷之四に、遊女うてなが吹上大藏に謂出される祝宴の席で、一座の女郎・禿等が「三國一ぢや奥になりすまいたしやんしやん」と唄ひ、同書卷八に中村七三郎の藝評をせる文中にも、「三國一ぢや藝になりすまいたしやんしやんとした男」と見えてゐる。

「濱松の音はざざんざ」といふ小歌は、室町期から德川期にかけて流行した。清水濱臣の說に、「足利義教公富士見に下向の時、ここ（遠州濱松）の松のもとにて、濱松の音はざざんざと謠ひ酒宴し給ひしより、名付けて今も颯颯松とて野口村の田中にありとぞ」とある。

＊さんさ　さんさ如才はござらぬえ（酒呑童子）　さんさ思ひの種かいの、根からいやなら添ふ氣ぢやないに（生玉）

俗謠の囃の掛聲。近松のこの文は、當時流行せる端歌「さんさぶし」に據つたのである。「さんさぶし」は若みどり卷三に、「心づくしに書きたる文を誰をたよりにさんさ待つよしなの思ひ」などの端唄が載せてある。

さん上・ばつからふんごろ・のつころ・ちよつころ・ふんごろで、まてとつころ・わつから・ゆつくる〳〵〳〵たが、笠をわんがらんがらす、空がくんぐる〳〵も、れんげれんげれ・ばつからふんごろ（天網島）

「山上」とは天人常に充滿せる寶山淨土、「笠」とは天人のかざせる羅蓋、「空がくんぐろ」とは虛空藏じろ、「れんげ」は蓮華で、その他の語句は淨土の法味樂の拍子を形容したものであつて、要するに法華經・如來藏經品の偈文中にある衆生所遊樂の安穩世界をいふ片言であらう。そして菩薩（菩）樂れる享樂界（遊里）

仕合よして今はお江戸の刀ざしぢや、しやんと一筆ふみ馬ごめん（丹波與作）

松の落葉（元祿十七年刊）卷四、與作踊の唄に、「與作丹波の仕合よしのふみ馬御免あづまし入、馬かたなれどいまはお江戸の刀さしぢや、しやんとさせよさ與作へ、云云」。

しげれ松山　喜瀨川の三浦とて年まへの太夫、大彌太殿とは深い中、これも狩場へ呼び寄せられ、しげれ松山羨ましい（會稽山）

「しげれ松山しげちうには、木かげにしげれ松山」といふ唄の句に據つたもので、この唄は閑吟集に載せてある。ここの文は、太夫三浦と大彌太との房事をいうたものである。「しげろ」を見よ。

白妙の晒布ほすてふ襖の島（淀鯉）

襖の島は宇治橋の西北にあたつた島で今は地續きとなつてゐる。この島昔から布を晒す地であつた。夫木集に、「襖の島さらしかけたる手作に、見えまがふまで鷺ぞむれゐる」。松の葉（元祿十六年刊）卷二、さらしの唄に、「襖の島には晒す麻布しづが仕業は宇治川の波か雪かと白妙にいざ立出でて布晒を云云」。

すこしくわん　「ちとくわん」を見よ。

すててんある　物思ふ流れのうき身をすててんあるある（國姓爺我）

流行唄の句「すててんあるある」を用ひて、棄てたるをいひかけたのである。用捨箱上に、「元祿寶永の頃吉原にて、捨ててあるといふ歌の流行せしことあり、……すててん節と名付けしとぞ、福德男（寶永三年刊）に、聞けば聞く程聲やさしく、さん谷土手下にぬしのない子がすててんあると歌ふ」と見えてゐる。

清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思をさしよよりも、思を生きて、生きて思をさしよよりもえ（歌舞佛）

「向通るは清十郎ぢやないか云云」を見よ。

せうくわん

「ちとくわん」を見よ。

關のお地藏は親よりまし　關のお地藏は親よりましぢや、似合ひ似合ひの妻たもる（田村）　關のお地藏は親よりましと聞くなれど（博多）

「閼の地藏」は地名部につきて見よ。松の落葉（元祿十七年刊）卷四、馬子踊の唄に、「閼のお地藏は親よりましぢや、親も定めぬ妻を持つよの、……」。「扱は照る照る」の條をも見よ。丹波與作に「色こそ道の閼の地藏」とあるも、この馬子踊の唄に據つてかくいうたのである。

そなた櫛田の眞中ほどで、深き思をやれ紫ばうし、ほんに口說いたその眞實が、關の地藏を誓にかけて、戀の重荷の馬追ふとても足もかるがる（丹波與作）

「櫛田」、地名部・「紫帽子」・「閼の地藏」（地名部）はその條を見よ。松の落葉（元祿十七年刊）卷七、伊勢之櫛田の唄に、「伊勢の櫛田の眞中ほどで、深き思のやれ紫ばうし、ほんに口說くかそりや眞實か、ごちの如來の慮もあると、戀の重荷ゑ乘りかけ馬に、はなれがたなき我思」。

其また女房は太鼓に張つて候、あんまり打つとて打破つて候（扇八景）

童謠に、「お月樣幾つ、十三七つ、七つなり着せて、お萬はどこいた、油買ひに酢買ひに、油屋のかどで油一升こぼして、其油どうした、犬が舐つて候、其犬どうした、太鼓に張つて候、其太鼓どうした、あんまり叩いて破れ候」。

それはあづまの花よめご

「さまがみやげの菅笠云云」を見よ。

それは若草身をうらみ草、何のそなたに飽いたではなし、飽きも飽かれもせぬ中の（淀鯉）

增補松の落葉（寶永七年刊）卷六、淀川所作の唄に、「……それは若草身をうらみ草、何のそなたに飽いたではなし、飽きも飽かれもせぬ中なれど、謂出すかねのつろにはなれて……」。

大工殿よりナウ鍛冶が憎い、閨の掛鍵鍛冶がうつシヨンガエ、なう鍛冶がうつ、閨の掛鍵鍛冶がうつシヨンガエ（館櫂三）

若みどり（寶永三年刊）巻四、しようがえふしの唄に「大工殿より鍛冶屋が憎い、閨のかきがね鍛冶がうつセウガエ」。

たうがねのよんぢりよめごは好い嫁御（薩摩歌）

唐金の茂右衛門が女房はよぢり腰の好い嫁御と云ふ意。柴崎勘六の唄に「唐金の茂右衛門が女房は好い嫁御云云」と見え、けいせい筑波山に「唐金の茂右衛門よめごは好い女房」とある。唐金は東金で上総の地名。東金の茂右衛門と詠んだ歌千葉縣の民謠に多い。

高い山から谷底見れば　高い山から谷底見れば、おまん可愛やな布晒す（酒呑童子）　**高い山から谷底見れば、布を晒すは夏こそよけれ**（薩摩歌）

松の落葉（元祿十七年刊）巻四・源五兵衛踊の唄に、「高い山から谷底見れば、さつま源五兵衛はめにたつ男、のほんほんにほ、しやれたびんつき茶筅髪、云云」。諸國盆踊唱歌（寛文頃・後水尾院の御編集と云）甲斐の部に、「高い山から谷底見れば、おまんかはいやぬの晒す」。これら當時の流行唄に據つたものである。

但馬の湯桁數ふれば我とそもじは五つと七つ（館櫂三）

源氏物語・空蟬に、「伊豫のゆげたもたどたどしかるまじと見ゆ」、とありて花鳥餘情に、「いよの湯桁の歌は左八つ右は九つ中は十六」、とあるを作りかへたのである。

戯れ遊べやあこれの（懸物揃）

この當時流行した「てる月」の唄の文句に據つたのである。「中よい月に戯れ遊べ云云」を見よ。

だんじり打つて囃した、だんじり打つた見さいな、藤内太郎アリヤコリヤとのはな笛吹のヤ家て（辱女）

樂車は「だいにじり」（鑒圃）の義であらう。祭禮の時に引廻す飾物を云ふ。現今も和歌山縣有田郡湯淺廻國神社の秋祭に、太鼓・小鼓・笛で囃す一隊を「だんじり」というてゐる。ここの文は「藤内だんじり」の踊歌に據つたのである。松の落葉（元祿十七年刊）巻三、藤内だんじり出端の唄に、「だんじり打つて囃した、だんじり打つた見さいな、藤内三郎殿は小鼓の名人で云云」とも見え、「藤内次郎殿わいの笛吹のヤ役で云云」とも見えてゐる。

＊ちとくわん　少くわん觀すれば夢の世や（歌念佛）**紈の帽子の伊勢比丘尼、ここな小比丘尼がちとくわん、今の目許はなる目許エ**（國性爺後日）

（少勸）（少勸の略、少し寄進を乞ふ意で、歌比丘尼が比丘尼唄にいふ。

女中のすきの青梅か、ばんにや梅の木の枝おろそ、ノンヤホ（西王母）

婦人悪阻の時は胸元悪しく吐氣を催し、酸氣ある青梅の類を好むによつて、「女中のすきの青梅か」と云うて、青梅の緣から當時流行した「のんやほ節」の端唄「晩にや梅の木の云云」にいひつづけたのである。秀松軒編・松の葉（元祿十六年刊）巻三、のんやほぶしの端唄に、「晩にござらばひごなたさいて、ござれござれ、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほのんやほのんやほ、ひごなたさいてござれ、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほ」。

沈や麝香は持たねども、におうて來るは焚き物（鹿大臣）

「沈」は沈香。「におう」は匂に荷負をかけたのである。御船唄留・都あたりの唄に、「八瀬や小原の賤しき者は、沈や麝香は持たねども、にほうて來るは焚き物よ」。

蔦の葉の退きも退かれも　黑羽二重の定紋丸に蔦の葉の、退きも退かれもせぬ仲は（天網島）

ここの文、「定紋丸に蔦の葉の」というて、增補松の落葉巻五、蔦の葉の唄、「落ちと落ちよと落して蔦いて、壁に蔦の葉退き心、蔦の葉蔦の葉壁に、壁に蔦の葉退き心」の句に據つて、「退きも退かれも」といひ、離別できぬ夫婦仲の意にいひつづけたのである。

筒井筒　筒井筒、井筒の水は濁られど、今は涙に搔濁す、月も袂に搔曇る（重井筒）　筒井筒、井筒の水は濁らねど、交せし人は朧月、入る方もなき我が思ひ（井筒）

松の落葉（元祿十七年刊）巻二、由與富流所作唄、傾城善の綱に「筒井筒、井筒の水は濁らねど、交せし人は朧月、いる方もなき我が思ひ、ただ變らじと一筋に、寐ても覺めてもいとしさの、あまりてもれて憎うなる、云云」。

露の命を君にくれべい（反魂香）

增補松の落葉（寶永七年刊）巻四、古來中興踊歌、大津追分給踊に「つのぼりくだりに目につく姿、露の命を君にくれべい、追分のだるまゑ、こころ、おにに衣はそげたもをかし云云」とあるに據つたのである。

露の笹原ヤツトントン、連れ立ち走る踏み分け走る、磯の千鳥をおつかけて、鐔摑んでずんずと延ばしやる（鑓櫂三）

流行唄に據つたもので、此の唄に似たものは、生玉心中・上に「戀の意地酒ヤトントン、手もとでかかる押へてかかる、……、拗ねるる男をぼつかけて、そこらをずんずと飲ましやる」と見えてゐる。鑓櫂三重帷子のここの文は、「我を追ひ來る追手かと」あつて、脛に創持てば笹原走るといふ意から、「露の笹原云云」のこの唄にいひつづけたのである。

つよきおきめに粟田口、けあげの水に名を流す、おさん茂兵衛が新精靈、恥かしながら手向草、同じ罪科の下女が名の、玉は冥土に通へども、魂魄此世に留りて（大經師）

松の落葉（元祿十七年刊）巻五、踊音頭之部、おさん茂兵衛の唄に、「つよきうきめに粟田口、けあげの水に名を流す、おさん茂兵衛が新精靈、恥かしながら來りたり、今一人の下女が名は、玉は冥土へ通へども、魂魄ここにとどまりて」。

蝶蝶とまれ、この枝にとまれ（女夫池）

童謠唄に、「てふてふとまれ、榮の葉にとまれ、榮の葉がいやなら手にとまれ」。

照る照る月、月照る照る云云

「中よい月に戯れ遊べ云云」を見よ。

天一天上　思へば天一天上の、五衰八專間日もなし（大經師）

舊曆中段の語、天一神の天に上りゐる間の稱である。天一神の巡る方角を天一神の障ありとて物忌する。故に天一天上の日は何れの方角も忌まないのである。大雜書（寛永十一年刊）に、「天一天上とは、此日天一神八方を四十四日巡り終り、天へあがり給ふ日を天一天上といふなり、此日より十六日の間は八方へ行きても天一神のさはりなし」。ここの文は大經師に緣ある舊盡しの祭文である。かかる名寄せ（または物盡し）の類は祭文を應用したためで、大經師おさん歌祭文に、「君を戀路に思ひぬの、つもる天一天上の、五衰八せんまびもなし、かかる心の中日を云云」と見えてゐる。

殿中ぢや張肱ぢや（國性爺後日）

「おすぎ」「あひのやま」を見よ。

どうて女房にや持ちやさんすまい、いらぬものぢやと思へども、云云（曾根崎）

どうて女房にや持たれぬ中の、死ぬる生くるは愚の沙汰よ（卯月紅葉）

心中江戸三男の小唄に據つたのである。山も見えざるかりそめに云云」を見よ。

とくわか　とくわかにごまんざいと、……產みならべて福福福福（大經師）

徳若に御萬歳、當御殿榮えます、……（天鼓）

〔徳若〕萬歳唄の語で、徳若に常若をきかせたものである。「常若」はとことはに若きことで、即ちいつも若うてあること。「徳若」は張州府志に、「無住國師所作樂稱三萬歳樂一、使三小奴徳若一謳之、以爲賀正、至今眷初稱三萬歳一者、師之遺愛也」と見えてゐる。即ち徳若は小奴の名であつて、これを己が謳ふ萬歳唄の中に常若にきかせて謳つたのが傳はつたのである。萬歳唄はいづれも大同小異で一定してゐない。ここに擧げたのは巢林子作中に見えてゐる萬歳唄である。

どこへ行く

「流行小歌も時につれ云云」を見よ。

どこやらの男とよそよその女と渡らぬ先にとんとんとん（今宮）

往時正月七日の七草粥にする七草を叩き刻む時の囃唄、「唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先に七草叩いてとんとんとん」を作かへたものである。七草の囃唄は古くは定家の桐火桶にも見え、近き世まで一般に行はれ、國所によつてその囃唄にいづれも大同小異であつた。「七草囃す」をも見よ。

鳥威しさりとは鳥威し、粟の鶉や澤の田鶴、ひよひよと鳴くは鵯、小池にすむは鴛鴦、鴛鴦のしかも鰍の夫の留守守（鍵權三）

松の葉（元祿十六年刊）卷三、二あがり、ひよどりの唄に、「ひよひよと鳴くはひよどり、小池にすむは鴛鴦、をしどりのしかも嫦におふやの留守守、さらばえひやとな、なえいさらえいえいえいえいえいえいえいえいえいえい、しかも月の夜か闇の夜にえいさらえい」、とあるに據つたのである。

ないそなないそ　我は袂の乾く間もないそなないそ、澤邊の蛙かかる思ひはよも知らじ（蟬丸）

泣く勿れ泣く勿れの意。元祿九年頃京都で、「ないそなないそ、五月にや戻る、遲くて六月中頃に」といふ小歌が流行して、三つ四つの子供までも謠うといひ、松の落葉（元祿十七年刊）卷七、さけはさかやの唄の中にも見え、若みどり卷四、なる川の唄の中にも見えてゐる。巢林子この小唄の句を用ゐて、「泣いに」に「無い」をいひかけたのである。

中よい月に戯れ遊べえいえい……（卯月紅葉）

若緞（寛永三年刊）卷四、てる月の歌に、「いざよひ月にたはむれ遊べえいえい、遊べえいえいえいえいえいえい、照る照る月、照る照るを見たらば、なんとよござるまいかの照る照る月、照る照る月のおもかげ月を見あかしのみあかす」、とあるを作かへたのである。

なげそ枕にとがもなや

「枕なげそ云云」を見よ。

七八十四五すつとんとんと打ちたいが……（歌念佛）

若みどり（寛永三年刊）卷五、かるかやの唄の文句に、「七八十四五すつとんとんと打こむ色里」。

難波江の蘆のかり寢の一夜さへ、長き契りと結びはすれど、許さぬ戀の闕の戸や、いつそやま邊と思へども、一期さる丸との誓詞のあれば、天智天皇罰おそろしく、親の菅家もそこはかとなく、餘所の人丸賴まれずして、直に大江の千里を越えて、凄き深養父中押し分けて、たんだふれふれな爰て切れさ（鍵權三）

この百人一首名盡しの踊口說唄は、流行音頭半九郎節に據つた拔萃であつて、その全文は音曲色巢籠、百人一首踊歌、「半九郎口傳くどき」の題下にも收めてある。「難波江の蘆の云云」は、（小倉）百人一首、皇嘉門院別當の歌に、「難波江の蘆のかりねの一夜ゆへ、みをつくしてや戀ひ渡るべき」とあるに據つたのである。この歌の意は、難波の地で一夜の旅寢の情がどうも忘れ難くて、終身戀ひて月日を暮すことであらうか、と云うのである。「いつそやまへ」は、いつそ止めに山邊（山邊赤人）をいひかけ、「一期さるまるは、一期去（離別）るまいに猿丸（猿丸太夫）をいひかけ、「親の菅家」は、親の勘氣に菅家（菅原道眞）をいひかけ、「餘所の人丸」は、餘所の人に人麿（柿本人麿）をいひかけ、「直に大江の千里」は、直に逢ふに大江千里をいひかけ、「凄きふかやぶ中」は、凄き深藪中に深養父をいひかけ、「たんだ振れ振れ」は踊の囃詞であつて、松の葉卷三、蹴歌・三さがり、門はしらの唄の中に「たんだふれ〳〵」と見え、また踊づくしの唄の中に「ゑいこの振れ〳〵」と見えてゐる。なほ山邊、猿丸、天智天皇、菅家、人麿、大江千里、深養父は（小倉）百人一首に載れる歌人。

＊鳴るは瀧の水（嫁御）（女楠）

鎌倉時代既に亂舞の歌であつた。「うれしや水、鳴るは瀧の水」、と謡ふこと長門本平家物語・源平盛衰記にも見えてゐる。「これなる山水の落ちて」「とうとうと鳴るは瀧の水云云」なども見よ。

なれなれなすび秋茄子、嫁をそしる姑はなし（卯月潤色）

御船留歌に「なれなれ茄子せどやの茄子、ならねば嫁の、あただ名のたつに」。吉原流行小唄惣まくりに「なれなれ茄子せどやの茄子、ならねば嫁の、コレノ嫁の名の立つにコレノ」。「あきなすび」をも見よ。

＊野邊より彼方の友　野邊よりあなたの友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥土の友となる（反魂香）

（夕霧）相の山の唄の文である。「あひのやま」を見よ。

のぼればさつさ・下ればさつさ、さつさ三六十八番、卯月紅葉）

若みどり（寶永三年刊）巻四、こころすずしの唄に「……あがればさんさん、もどればさんさん、なんひんさんさつさ三六十八番、ほかのおきやくはいやらしう……」。

箱根八里は歌でも越すが、越すに越されぬ死出の旅（加增曾我）

俚言集覽に「箱根八里―箱根八里は馬でもこすが、こすにこされぬ大井川、是れ馬士蜘介などのうたふ道中うたといふものなり」とある、この道中歌の作りかへである。

はしがかけたや佐渡屋町、越後は女の主人とて（冥途飛脚）

佐渡屋町は新町遊廓の町筋なる佐渡島町をいひ、越後はその町内にある揚屋の屋號。ここの文は、松の落葉（元祿十七年刊）巻七、五尺手拭のはやり唄に「佐渡といよこの越後は佐渡と、越後はすぢむかひ。はしをいよこのかきよやれ、橋をかきよやれ舟橋を」とあるに據つたのである。

橋のいよこの　「いよこの」を見よ。

花の吹雪よの吉野山（虎が曆）

糸竹初心集（寛文四年刊）下巻、三味線唄、吉野の山に「吉野のお山を雪かと見いれば、雪ではあああらでんん、やあこれのや、花あの吹雪よのんんやあこれの」。

花は散りても根に返る、人は歸らぬ死出の山（生玉）

間の山（その條を見よ）の唱歌である。新投節の夕霧聞の山節に、「花は散りても春咲きて、鳥は古巣に歸れども、行きて歸らぬ死出の山」。

花聟と名にこそ立てれ下草や（卯月紅葉）

花聟といへば名はよけれども、實際家の中心は嫗なれば、聟は下草のやうなものだの意。補松の落葉（寶永七年刊）首巻、江戸半太夫ぶし、櫻づくしの文句に「あの君を花の心に立て置いて、我下草とぞなりにけり」、とあるに據つたのである。

＊はまぐりこ　大鯛・小鯛・鰤の大魚・鮑・榮螺・はまぐりこ・はまぐりこ・はまぐりこうとうつたる物はやしよめ（大經師）

蛤をいふ。「はまぐりこ」の「こ」は「はん」（判）を「はんこ」といふと同じ類の「こ」で、增加した音である。またこの「こ」を延べて「はまぐりこう」ともいひ、「こ」を擬ねて「はまぐりこん」ともいうてある。巢林子作、天鼓に、「鮑・榮螺・はまぐりこん、こんとうつたる物はやしよめ」。ここの文は萬歳唄の文である。

濱松の音はささんざ　「三國一」を見よ。

濱松のねほれてほれて（小栗判官）

御船歌留に「大坂出てから住吉さまへ、松にねほれて顯はるる」。

流行小歌も時につれ、時の昔と何處へ行く、寛文の頃かとよ　薩摩歌）

おまん・源五兵衛の情話は寛文三年頃で、流行小歌にも「源五兵どこへ往きやる、云云」というたのも昔となつたとの意。この流行小歌は薩摩歌・源五兵衛おまん夢分船の冒頭にも引用されてゐる。

春の夜の夢おどろかすくだかけの、其垂尾のむすぼほれ、解くる思は何時かはと、言はで心にかこちぐさ、根引にせんと言ひかはす、身は捨草の捨てもせで、浮名は流れの淀川や、何をたよりに水鳥の、波に搖らるる世の習（淀鯉）

補松の落葉、巻六、中興當流所作、淀川所作唄に「春の夜の夢おどろかすくだかけの、其きぬぎぬの物思ひ、又逢ふことも何時かはと、深き心にかこちぐさ。根引にせんと言ひかはす、身は捨草の捨てられて、流れしこの身は淀川の、何をたよりに浮草の、波に搖らるるうたかたの、あはぬは君が情なや云云」。

春はござれの伊勢　同じれを啼く鶯の、春はござれの伊勢衆でないか（丹波與作）

春季には伊勢參宮する人人が最も多いによつて、「伊勢」の上に「春はござれの」又は「春はござんせの」と附けていふことが流行言葉となつてゐた。寛調平家物語（寶永七年刊）巻二に「小町踊も一さかり、春はござれのいせ踊、坂は照る照る鈴鹿山」。野傾旅葛籠（正德五年刊）巻二に「冬氣は此里に逗留し、春はござれの伊勢路にかかり、正月から仕合をしなはせと」。近松作・田村將軍初觀音・岩戸の前道行の文に「春はござんせの伊勢參り、拔參宮と偽りの、心を照せ天つ神」。「同じぬを啼く云云」を見よ。

ひいふうみいよう　ちよつと立見の手鞠の曲は、ひいふうみいよう、いつもむなな八よころころ、とんとはずむも可愛らし（卯月紅葉）

補松の落葉（寶永七年刊）巻三、梅揃石切の唄に「とんととんととんとはずんだ手毬梅、ひいふみよ、五つむなんなや、ことはことはしととんとん」。

ひえの山の檜の枝に云云

「ひよどりひえの山の云云」を見よ。

提子の水が湯となる　昔の井筒の女とやらは、妬みの焔に提子の水が湯となつた（大經師）　惡しやう通ひの面憎や、提子の水は湯となれど

まださめやらぬ我思ひ、辛し妬ましあら腹立ちと縋附いては泣くばかり（傾城佛原）　夜な夜なのうき名を包むも戀しき君ゆゑ、ひさげの水の焰となり身は陽炎のあるかなき（弘徽殿）

煩惱の情熱に苦しむことを火に燒かれるに喩へ、その熱火で提子の水が湯となるといふのである。「提子」は酒を盛つて盃に注ぐ器で鉈のあるもの。ここの文は玉川千之丞（寛文頃女形の優名）の高安通ひの唄に、「いつのまにかは高安に、……胸のほむらをさますにぞ、提子の水は湯となれどまださめやらぬ我思ひ……」、とあるに據つたのである。「井筒の女」とは、昔河内國高安の里に住み、業平がその許に通うて、「つつゐつつ井筒にかけしまろがたけ云云」の歌を贈つた女のことであつて、この事は伊勢物語に出てゐる。

鵯・比叡の山の檜の枝にそりや鳥さしか、とりでないぞや（軍井筒）

當時の流行唄に據つたものである。紀海音撰・花山院都興に、「鳥をさいた見さいなさい、鳥さいた見さいな、ひとひの日は又、ひとつひよどり比叡の山の檜の枝に、人は知らじと晝寐する鳥をさいてくりよと思うて思うて、ちつとさいておつ捕つた、鳥をさいた見さいな」と見えてゐる。大黑舞の詞であらう。

ひよひよと鳴くは鵯・・・

「鳥威（とりおどし）さりとは云云」を見よ。

船は新造の乘り心サヨイヨエ、君と我と我と君とは、圖に乘つた乘つて來た、しつとんとんとんしとんとん、しつとと逢瀬の浪枕（女殺）

松の落葉（元祿十七年刊）卷四、君はしんぞ踊の唄に、「君はしんぞのの心さよいよゑい、君とわれと我と君と引寄せてはよるよるさ、男は花の都入り圖に乘つた乘つて來た來た船のや、……」。同・卷四、しととん踊の唄に、「……須磨や明石の月をみしよ、しつとんとん、しつとんとんしつとんしととんとんとんとん、とうからから櫓の音がした、……」。

船を出しやらば夜深に出しやれ、帆影見るさへ氣にかかる（博多）

若みどり・（寶永三年序）卷四、夜ふか船の唄に、「船を出しやらば夜ふかに出しやれ、帆影見ゆればなつかしや」。

文が遣りたや室町筋へ、取り違へて餘の人に遣るな、花のかの樣の云云（賀古敎信）

松の落葉（元祿十七年刊）卷一、古來十六番舞唄歌の第二番、文がやりたやの歌に、「文が遣りたや室町筋へ、取りや違ひて餘の人に遣るな、花のかの樣の手に渡せ」。

振り振り鼓に笙の笛、猿の木登り欲しいか欲しいか、紅絹の附紐いたいけさまに、何が月花勝ろかの（源義經）

子守唄に據つたものであらう。「猿の木登り」とは、躍くやうに裝置した小猿の形の玩具。現今廣く行はれる小守唄は「……里のおみやに何もろた、でんでん太鼓に笙の笛、おきあがり小法師にふり鼓、もつと欲しけりや風車」。

ふろか信濃の信濃のハツア冷たいな、げに雪國で身を寒晒（薩摩歌）

當時流行した「さんがらが節」の唄に據つたのである。紙鳶（元祿十二年刊）さんがらが節の唄に、「あらい風にもよふやよほいほ、あてまいさまをやろか信濃の雪國へ、さあささんがらが、かわじやざんざらやなきがよいやさ、しろねがしろねが、よいてがよいてが、こまのひざぶしんがらが、信濃へやろかやろか信濃のゆきぐにへ、さあさんがらが」。松の落葉・卷四、さんがらが踊の唄に、「やろか信濃の雪國へ、さあさんがらが」。巢林子が「ふろか」といへるは、お供先振ろにいひかけたのである。

文武の花も榮えた、初花咲いた見さいな、・・・辛いかつつてん（雪女）

松の落葉（元祿十七年刊）卷之三、藤内だんじり出端の唄に、「藤内五郎殿わいな太鼓打の役で、大まいの太鼓をあそこらもとに置かせて、きんの桴を手にもちつくつくつく、つてんてんてれつくにはづんでんどん、てれつくつくつつてんてん、とんからつとんとうつ惚れた、なろかならぬか繼の中の町なかの、中の中の町を通りたらはなけれど、なまだこつかんだあたまを見たか、熊野小びくにんがちとくわんくわんくわんくわんともなるは、夜明けの鐘はつんつん、辛いかづんでんとうから櫓太鼓の音によりくろ」。

平家平家と千種も靡く、扨は居よいか住みよいか（女護島）

山家鳥蟲歌に、「江戸へと木草も靡く、江戸には花咲く實もなりて」、の歌謡に據つたものである。

ぼんじやり咲いて匂うた梅の花がた見さいな、藤内二郎アリヤコリヤ、殿ハナ小鼓のヤえてもの、あかうの胴にかがはくれ、紅の調を千鳥がけにかけさせ、合せ打つたるはさつても打つた小鼓と、上の町下の町とつとほめて通した、ほんのり明けて唄うた鳥の掛聲聞きやいな、藤内三郎殿大鼓の上手で、しつたんにしつたんたん（雪女）

松の落葉（元祿十七年刊）卷之三、中興當流丹前出端、藤内だんじりの唄に、「だんじり打つてはやしただんじり打つた見さいな、藤内三郎殿は小鼓の名人で、あかうの胴にかがはくれ、紅の調をちん鳥かけにかけさせ、ちちつちちふつほ……、合せ打つたるはさつても打つた小鼓と、わつと褒めて通した、たんじり打つた見さいな……、藤内四郎殿わいの太鼓の役で、しつたんにしつたんたんたん・・・、上の町下の町どつと褒めて通した云云」とあるに據つたのである。「ぼんじやり」は五十念忌歌念佛（巢林子作）にも「ぼんじやりとしてきつとして」と見えて、寢嬌ある貌をいふ。

ほんちやんのらい・・・　野飼の牛をひきつれて樵歌牧笛かすかなる、杖つくづくと聲きけば、ほんちやんのらいいひちやんのらい、きいちんこふうらい、はかいろてめん

ふうかい、よてへまんことんやん
のはい、ひはりふひやふはいほふ
はいほ（三國志）

逍遙軒編唐音和解（享保元年自序）坤卷、笛譜・相思曲に、「風常來雨常來、書信不曾來、（春去愁不去）花開悶不開、（淚淚）落的（浣了浣了）、（寃家）湖滿東洋ノ海」と見えてゐる。この相思曲に據つたもので、（）の中の語句は省かれ、且つ「はかいろてめんふうかい」は花開落的悶不開になつて前後し、更に誤つたものである。「ひはりふひやふはいほふはいほ」は笛の音譜を寫したものである。相思曲の歌の意は、風常に來り雨常に來れども書信は曾て來ない、春去れども愁は去らない、花開けども悶は開けない、淚の淚落ちてそそぎ了ろ、寃家にそそぎ了つて、湖東洋の海に滿ちたといふのである。

枕なげそ枕に科もなや　抱力なき草

枕なげそ枕に科もなや（百日曾我）

「投げそ」は投げるなの意、「そ」は禁止の意を示す助詞。「そ」を見よ。隆達節の歌に、「手に手をしめてほとほと叩く、我はそなたの小鼓か、恰氣心に枕な投げそ、投げそ枕にとがはよもあらじ、云云」。

まことに今年は此方樣も二十五の厄の年、……數珠の百八に泪の玉の數そひて（曾根崎）

松の落葉（元祿十七年刊）卷七、辛崎心中の唄に、「まことに今年は此方樣と二十五の厄の年、わしも十九の厄なれば、思ひあうたる厄祟り、緣の深さのしるしかや、神や佛に懸けおきし現世の願を今ここで未來へ回向し、後の世も猶し一つ蓮ぞとつまぐる數珠の百八に、涙の玉の數そひて……」。序云、この辛崎心中道行唄も巢林子作であつて、曾根崎心中道行文を取つたものである。

松は平らか追手馬場先繫ぎ馬、がいに冷たき今朝の雪、殿の御馬は錆月毛、連錢葦毛鹿毛糟毛、しとしと打ちては驅けあふり、お江戸育ちのしげしげ男、お馬の口をばしつかとさ、つりりん〳〵、髭男、ねたる髭男、繫ぎ留めたよ戀の關札（天竺）

松の落葉卷四、古來中興當流踊歌、馬場先踊の唄、「松はゆたかに追手馬場先繫ぎ馬、がいに冷たい今朝の雪、殿の御馬は錆月毛、連錢葦毛鹿毛糟毛、しとしと打ては驅けあふり、お江戸育ちのひげひげ男、おん馬の口をしつかとさ、つりりん〳〵〳〵髭男、つりりん〳〵髭男、つりりん〳〵〳〵つりりん〳〵〳〵りん〳〵りんと跳ねたる髭男、繫ぎ留めたよ戀の關札」。巢林子が「松は平らか」といへるは、松平の姓をきかせる爲、「しげ男」といへるは髭男の「ひ」を「し」にいふ江戸訛を應用したのである。

まづ初春の空色に、咲くや花色花に鳴く、……、戀の染絹たつ田姫、手染の錦手もたゆく（融大臣）

增補松の落葉卷二、土佐少掾の染色謠の唄に、「まづ初春の染色に、咲くや花色花に鳴く、鶯染の聲あげて、人に春をやゆつり染、風にしなへて たよたよと、召した姿の柳染、こひを媒竹驚鳥、袂に殘る香染の、うつりやさつと散らし紋、染めし禰茶の着衣はじめ、我が黃枯茶は變らねど、人の心の二重染、袈裟にあらぬ唐紅や、朱な奪ふと名を立てて、唐ケ人はそねめども、彼の一本のはつゆかり、憲法黑茶に雜波江の、よし吉岡に紅檜皮、干さぬ袖だにあるものを、戀に朽葉や身はされ柿の、あはぬえにしは濃柿や、いつ紺鴿鴿の卵色、空にこがるる紅葉はの、紅縅鹿子結ひ立つる、戀をする身の袖の露、紋り千草の妻こめも、襲よげに見ゆる水觴色、我が魂もあくがれて、ゆかしき空に鷹色や、桔梗玉蟲まが染、鬱金黃鬱金紅鬱金、水色淺葱淺くとも、せめて一夜は濃淺葱、染入れ鹿子しめ密せて、幾夜重ねし手枕に、野邊の小薄穗に出でて、打出し鹿子、しくものもなき鼈染、うつぶし色の御所染は、皆思はくの歌の文字、散らし小紋地浮世染、邏羅唐染色の、千千の思ひや桃色に、深き心を染入れて、君が膚の山吹や、染紅梅は足利の、東國の絹に劣らじと、末摘花や田藍の、振出し染むる雲の袖、戀の染衣たつ田姫、手染めの錦色深く、こゑあやをなし染めたりしは、面白かりける次第なり」とあつて、巢林子のここの文と大同小異である。染色に就いてはその各條を見よ。

幻や定業の限とはいかに如何なる塗塗ならむ（萬年草）

人生は幻の如く、必ず生死の苦果を受けるべき定まる業因があるとは、いかにもはかない現世ではないかの意。これは歌謠經の文句であらう。歌謠經は享保末年には衰微してしまひ、余が見た現存せる歌謠經にこの文句が見當らない。

迷ひ行けども松山に似たる人なき浮世ぞと、泣いつエエワハワハワハ笑うつ狂亂の身の果何とあさましやと、芝を褥に臥しけるは目もあてられぬ風情（天網島）

腕久末の松山（都次夫一中節正本）下之卷、腕久狂亂道行の文に、「雜喉場・安治川・福島を迷ひ行けども松山に似たる人なき浮世ぞと、泣いつ笑うつ狂亂の身の果何とあさましやと、芝を褥に臥しけるは目もあてられぬ風情なり」と見えてゐる。これを文彌節で語つたものである。「まつやま」はその條を見よ。

向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよく似た菅笠がよく似た、笠が笠がよく似た菅笠がえ（歌念佛）

貞享頃流行した唄に據つたのである。好色五人女（貞享三年刊）卷之一に、「里の童子袖引連れて、清十郎殺さばお夏も殺せ、とうたひけるを聞けば心に懸りて、お夏育てし姥に尋ねければ返事しかねて涙をこぼす、さてはと狂亂になつて、生きて思ひをさしやうよりもと、子供の中に交はり菅頭取つてうたひけるる、皆皆これを悲しくさまざまとめてもやみ難く、間もなく涙雨ふりて、向ひ通るは清十郎でないか、笠がよく似た菅笠が、やはんはのけらけら笑ひ、うるはしき姿をいつとなく取亂して」。

物に譬へて得申すまいよの（隅田川）

花見の唄の句、「お名をば得甲すまいよの」（その條を見よ）の作り替である。花見の唄は松の葉（元祿十六年刊）卷二、長歌の部にある。

やあんやうりうしやうりうしなつてんりうたん（日本振袖始）

植物の名靈し唄である。「やあん」は唄の拍子、「やうりうし」は楊柳枝、「なつてん」は南天、「りうたん」は瑞瞻である。瑞瞻は「りんだう」とも「りうたん」ともいうた。荒木田麗子撰・富士の岩屋・下卷に、「瑞瞻」の字に「りうたん」と振假名が附けてある。

破れ車でわが惡い　わが善きに人の惡しきがあらばこそ、破れ車でわが惡いとはいひながら（卯月紅葉）

「破れ車で輪が惡い」を「我が惡い」にいひかけた小唄の文句を應用したのである。諸國盆踊唱歌（寛文頃の編集といふ）和泉の部に、「人はわるない我身が惡い、破れ車でわが惡い」。隆達節の唄に、「人はよいものとにかくに、破れ車よわが惡い、明日をも知らぬ露の身を、せめて言葉をうちやかに云々」。匂袋（享保年間刊）に、「古き小歌にうたたるを聞けば、君にとがやうらみはせまじ、やぶれ車でわがわるい。」卯月紅葉のこのあたりの文は謠曲・葵の上から得たものである。葵の上に「枕に立てる破れ車、打乘せ隱れ行かうよ」とある。

山田畠の島威し、さりとは鳥威し、粟の鶉や澤の田鶴、ひよひよと鳴くは鵜云云（鑓權三）

「とりおどしさりとはとりおどし云云」を見よ。

山も見えざるかりそめに、江戸三界へ行かんしていつもどらんす事ぢややら、殺しておいて往かんせの、放ちはやらじと泣きければ（丹波與作）

心中江戸三界といふ當時の流行唄を引用したのである。「江戸三界」は「さんがい」を見よ。松の落葉（元祿十七年刊）卷七、古來中興當流はやり歌、心中江戸三界に、「……江戸三界へ行かんしていつもどらんす事ぢややら、山も見えざるかりそめに、つい馴れ馴染みわしを扨どうせ女房に持ちやさんすまい、いらぬ者ぢやと思へどもどうした事の緣ぢややら忘るるひまもないわいな、それを振棄て行かうとは道ではしませんぞ、手にかけて殺しておいて行かんせな、はなちはやらじと泣きければ、……」。

鑓の權三は伊達者　鑓の權三は伊達者の、どうでも權三は好い男、謠ひはやらす美男草（鑓權三）　鑓の權三は伊達者でござる、油壺から出す樣な男、しんとんとろりと見とれる男、どうでも權三は好い男（鑓權三）

松の落葉（元祿十七年刊）卷五、鑓權三男踊の歌に、「そりや〳〵そりや〳〵、槍の權三ははすはにござる、谷のやつとんと笹やで、やああそろゑにかかる、搖へてかかる、どうでも權三は濡者だ、油壺から出す樣な男、しつとんとろりと見とれる男、……どうでも權三はよつどつこい好い男え」。

やれ湯のだんこだんこ云々　「有馬の湯のだんこ」を見よ。

雲を踏んでは花かと惜む岨かげの、谷水も靜かならで騷がしき木枯の、……野邊のいぶせき東屋も、昔の玉の臺かと、立寄り憩らひ給ひける（川中島）

この衞門姫道行の文は、明暦萬治小歌集（奥書別筆に、「此小歌は萬治三庚年正月よし原三うらや高尾筆」とあつて、紙質墨色などいかにも萬治三年の古寫本かとも思はる。（岩崎男爵所藏本）に「ききやうかはら」と云ふ題で載つてゐる文と大同小異である。されば巢林子のこの文は既にあつた文を引用したものか。（或は明暦萬治小歌集といふ名も、奥書の文も共に僞であるか、疑ひを存して置く）。

行くもちんつ歸るもちんつ、又來る人もちんつちりつて、チリテツテ（女殺）

山崎通ひの唄（次條を見よ）の文句、「行くも山みち戻るも山みち、心のとまるも山崎」とある「山みち」「山崎」を、浮かれて口三味線「ちんつ」「ちんつちりつて、チリテツテ」に言うたのである。多田院開帳（浮瑠璃）第三、たちばな姫道行の條に、「行くも山崎歸るも山崎、又行く先も山崎の」とあるも、山崎通ひの唄の文句である。

行くも山崎歸るも山崎（藝門松）

この唄は多田院開帳（前條を見よ）にも引用されてゐる。松の落葉（元祿十七年刊）卷三、中興當流丹前出端、山崎通ひの唄に、「おもしろの山崎通ひや、行くも山みち戻るも山みち、心のとまるも山崎、かの里のぢよろと一夜暦たれば云云」とある。

夕あしたの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞きてナ驚く人もなし、間の手、野邊よりあなたの友とては、血脈一つに珠數一連、是が冥途の友となる（夕霧）

間の山（その條を見よ）の唄歌である。新投節の夕霧間の山節に、「ゆふべ朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞きてナ驚く人もなし、間の手、野邊より彼方の友としては、胎藏界の曼荼羅と、血脈一つに珠數一連、是が冥途の友となる、間の手」。（巢林子は夕霧阿波鳴渡に「ゆふべあしたの憂き勸め、花一時の眺めとは、知れども迷ふ歌歌の」。また三世相に「夕べあしたの薄霧も、……」などとも書いてゐる）。

よき光ぞと影たのむ、世の光ぞと、頼む茶のきよのきよひよん、御寺にたつぶにきよひよん、ヲヲ井の澤の、澤の寒き山野に丁と打鳴らす、三界を家とよ、走り〳〵廻る鉢こくりが、ヲヲ〳〵五郎三郎、田舍へお下りあろならば、此程のたぐり情に、瓢をなりとも置いてゆけ、小瓢をなりとも置いて行け、それはや女郎、易き間の事なりとよ、諸國を出つるでづでんど、敲かうずるにも瓢なうてはお笑止、極樂のホホ前に流るる涙

川、如何なる淵の瀬になり、天地の恩國王の恩、よしや世の中寐てか、覺めてか只何事も後生なりけりなもうだ、なもだ〳〵（閑八州）

鉢敲の歌に據つたのである。小唄打聞（寛政二年成、俗謡等を集む）鉢敲の歌に、「よき光ぞと影額む、額む額むちやのキヨモ佛のキヨヒヨン、あひづのさとにキヨむつのくにけりキヨヒヨン、ひやうたん瓢に鯰を附て、折々風の吹く時はヒヨヨヨヨヒヨン、しほぜの風の寒き山野に丁と打鳴らし、三界を家と定り廻る鉢敲めが、せい〳〵ここにかけて後生を願はば、などか佛にならざらんキヨヒヨンノウ、五郎三郎それハツ女郎わししワイ、なんどとこうとんづるヤウ、しやうこうくうずテンヅヅヂン、とたたこうづるには、瓢ならではおほせうし、よしや只、寐ても覺めても忘るるなよ、唯一念は念佛なりけり、急いで淨土を願ふべし、南無うみはろうだ、ハウハイドウ茶筌〳〵。「よき光云云」は、謡曲・山姥にも、「よき光ぞと彫たのむ、佛の倒寺尋ねん」。「キヨヒヨン」は瓢を叩く音の形容の囃詞

與作思へば照る日も曇る、關の小萬が涙雨か（丹波與作）

諸國盆踊唱歌（寛文頃の編か）但馬の部に、「與作思へば照る日も曇る、關の小萬が涙の雨か」、とある流行唄に據つたものである。

與作丹波の馬追なれど、今は野末の放れ駒ぢや、しやんとさせ與作（丹波與作）

諸國盆踊唱歌（寛文頃の編か）但馬の部に、「與作思へば照る日も曇る、關の小萬が涙の雨か」、とある流行唄に據つたものである。

夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寢たところ（歌念佛）

流行歌を引用したのである。五十年忌歌念佛・下之卷、お夏笠物狂の條の「夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ、……神の力もかなはぬかと、笠も髢もかなぐりすて、狂ひ歌くぞあはれなる」までは、明暦萬治小歌集（岩崎文庫所藏、萬治三年書寫？）笠ものくろひの歌に「縫といふ字をきんしやで縫はせ、……神のちからもかなはぬかと、笠もかもじもかなぐりすて、ものにくろふぞあはれなり」とあるのと大同小異である。紅海音撰・花山院都賢、れんぼの辻占に「よさ來いといふ字を金紗で縫はせ、裾におてきと寢たところ、裾におてきと寢たところ」と見えてゐる。されば この歌は既に寛文頃に唄はれて後世までも流行し、巣林子や紀海音の文に應用された。

よさこいの玉章翼にかけて、裾に刈り田の秋の雁（吉岡染）

前條に擧げた俗謡「よさこいといふ字を金紗で縫はせ、裾に清十郎と寢たところ」の作り替。

よしののやま　吉野の山の連彈も、昨日の昔今は又、吉野煙草の刻み

賣（蝦山姥）

絲竹初心集（寛文四年刊）下卷、三味線唄、吉野の山に、「吉野のお山を雪かと見いれば、雪ではあああらでんんやあこれのを、花あの吹雪よのんんやあこれの」、と見えてゐる。但蝦山姥のこの後の文に、作り出せし替唱歌とあるから、上述の唄を多少改作したものである。

夜は何時ぞ、五つ六つ四つ、千日寺の鐘も八つか（重井筒）

「ここは竹田か夜は何時ぞ云々」を見よ。

戀慕の闇に暗がりによしなきことを爲出して東の果に名を流す、それに劣らぬ歎ぞと（重井筒）

增松の語葉（寛永七年刊）卷二、中興當流淨瑠璃、四條河原京八景に、「色のさかりは、東なる八百屋の娘お七こそ、繼路の闇の暗がりによしなきことを爲出して、罪は死罪に極まりてすぐにひきたず哀れさよ……」とあつて、八百屋お七歌祭文に據つた。「それに劣らぬ嘆」とは、八百屋お七に劣らぬ嘆といふ意。蟬丸に「繼慕の闇の暗がりに牽出す牛」とあるは、暗がりから牛を牽出すといふ謎を應用し、又三世相に「繼慕の闇に迷ふやと、暗峠名もつらし」とあるは、繼慕の闇のくらがりを暗峠（地名部を見よ）にいひかけた。

渡つた渡つた光る君の渡つた、夢の浮橋六十帖を渡り詰十帖と訴じた、一に一夜のお情の夕顔の若ばえ、二に匂炷きしめて浮舟に蜻蛉紅梅竹河橋姫に手習、我名ゆかしきあづま屋でこれ樓の忍び寢（淀鯉）

巣林子作の大黒舞（その條）の唄である。光る君は源氏物語の主人公。源氏物語は桐壺卷に始まつて夢の浮橋の卷に終る、總て五十四帖ある（天台六十卷に準へ、詰十帖は橋姫以下十帖あるによつていつたのである。夢の浮橋、夕顔、若紫、匂宮、浮舟、蜻蛉、紅梅、竹河、橋姫、手習、東屋は皆源氏物語の卷名

我が繼路は絲なき三味よ……オオそれ二人と二人が名取川（宵庚申）

紀海音作・心中二つ腹帶（淨瑠璃）道行ほしのかずにも、「われが繼路は絲なき三味よ、何のねもせで泣明す、見れば恩ひの雲の帶、拠も短夜心のせくにござんせ、いやとおしやろともうさうさんせ、二人が中に名取川」と見えて、當時の流行唄に筆を加へたものである。

ゑいゑい鴉がな云云

「鴉がな鴉がな云云」を見よ。

ゑいゑい山崎山崎、八幡山崎難與平のお祖母、ヤアこの誠に金を出させ（雪門松）

この盆踊歌は、松の落葉（元祿十七年刊）卷四、山崎與次兵衛踊の唄の中の文句「與次兵衛謡出す謡出す、山崎與次兵衛そこで謡出せ三百兩」の改作海老屋節。（雪門松のこの次の文に「盆にござれ」といへるは、盆踊歌の緣によつたもので、今時にはあはぬ立去れといふ意の洒落である）。

ゑいゑいゑいゑい、紺屋の徳兵衛・房にもとよりこい染込の、内の身代灰汁でも剝げず、なまみだ（天網島）

遊仙窟に據れるもの

巢林子作、丹波與作の與作踊の冒頭に見える文である。蓋し海老屋節踊歌の改作であらう。荒木與次兵衛狂言記・日本女護島の唄は、「よい〜〜〜〜〜仕合せ與次兵衛云云」とあつて、「よい〜〜〜〜〜」になつてゐる。

ゑいゑい〜〜〜〜、紙屋の治兵衛、小春狂ひが杉原紙で、一分小判紙ちりちり紙で、内の身代すきやれ紙の、鼻もかまれぬ紙屑治兵衛、なまみだ佛なまいだ（天網島）

小春狂ひが過ぎを杉原紙（治兵衛が紙屋の縁で）にいひかけ、一分小判を小半紙にいひかけ、ちりちりに費すを塵紙にいひかけ、身代透き破れを漉破紙にいひかけたのである。この唄は丹波與作待夜の小室節の與作踊に、「ゑい〜〜〜〜〜、紺屋の徳兵衛、房に元よりこひ染めこみの、内の身代灰汁でも剝げず、口入銭みて銀四百目を云云」、とあると同じやうな構想で、共に踊唄のもぢりである。

醉うたとさ醉うたとさ、足や千鳥足、はめた谷底殺した山の手、沙汰なし合點ぢや（十二段）

增補松の落葉（寶永七年刊）卷四、山谷土手路踊の唄に、「……三谷土手みちな醉うたとさ醉うたとさ、足や千鳥足、西は田のあぜ、あぶない合點ぢや……」。（源五兵衛・おまん）薩摩歌に、「醉うたとさ醉うたとさ、とさとさとさ」とあるも、この三谷土手路踊の唄に據つたのである。

をかざきぢよろしゆ　岡崎女郎しゆ、岡崎女郎衆と（丹波與作）

繇竹初心集（寛文四年刊）下卷に、「をかざき女郎しゆ岡崎衆、岡崎女郎衆はえいぢよろしゆう岡崎女郎衆はえい女郎衆」、と見えてゐる流行唄に據つたものである。この唄は寶永頃にも廣く行はれたもので、寛闊平家物語（寶永七年刊）卷之二にも、「熱田鳴海の景氣も目の前に、岡崎女郎衆はよい女郎衆、いつもの比丘尼もうたひつれ云云」と見えてゐる。

小笹に露のたまられぬ　名古屋の胸高帶は、小笹に露のたまられぬ、始末算用世智辨も（女殺）

松の葉・卷五、投節の唄に、「花におく露小笹の霰、こぼれ易きは我が涙」。ここの文は、妓女小菊が名古屋の胸高帶の美貌は、それに見惚れて傾絢物惜しみも人・品にこそふれ、花の露小笹の霰の如く粒銀をこぼし散じたうなるとの意。「なごやのむなだかおび」をも見よ。

女嫌やる高野の山になぜに女松は生ゆるぞや（萬年草）

當時の流行唄に據つたものであらう。女人は五障深きによつて往時は女人堂までは行かれても、これより高野の靈地に入るを許されなんだのである。その許されたのは明治五年四月以後である。

（漢文之部）

高嶺天に横はり、刀して削りなすかうらんのいきほひ、鑿して穿つかいがんの形（浦島）

「かうらん」は崗巒。「かいがん」は崖岸で、水崖の高き處。高嶺雲漢に聳えて、恰も刀にて崗巒を削り成した勢がある。深谷地に横はりて、恰も鑿で崖岸を穿ち成した形があるとの意。唐・張文成撰、遊仙窟に、「深谷帶レ地鑿二穿崖岸之形一、高嶺横天刀三削崗巒之勢一」。

刀して削りなすかうらんのいきほひ

「高嶺天に横はり云云」を見よ。

十萬里の波立つて伯禹の縱を遺し、二千年の石橋となりんだり（酒呑童子枕言葉）

十萬里も遠く川波立てて流れ、恰も夏の禹王が大洪水を治めて之を河川に落した縱の殘つてゐるがやうである、石橋は苔滑にして二千年を經たものであるとの意。夏の禹王は初め夏伯に封ぜられたにより「伯禹」と云ふ。「石橋」は謠曲・石橋に、「此石橋と申すは人間の渡せる橋にあらず、おのれと出現してつづける橋なれば石橋と名を名付けたり、其面僅に尺よりは狹うして苔甚だ滑なり、其長さ三丈餘、谷のそくばく深き事千丈餘に及べり」と見えてゐる。「なりんだり」は、「なりにたり」の變つたものである。遊仙窟に、「十萬里之波濤、伯禹遺レ縱、二千年之坂隧、深谷帶地云云」。

千度見れば千千の思きびし、一度見るに一つの面白いこと深しとは、張文成が仙女に契りし詞（酒呑童子）

張文成が仙女と情交を結んだ時の樂しかつたことを云うたもので、遊仙窟・卷五に、「千看千意密、一見一憐深、但嘗把二手子一、寸斬亦甘心」、とあるに據つたのである。

はんあんじん　風雅なる御本性・艷なる御貌、潘安仁が母方の甥にも譬ふべかんめれ（酒呑童子）

「潘安仁」姿容極めて美であつた人。遊仙窟・卷一に、「崔女郎何人也、女子答曰、博陵王之苗裔、清河公之舊族也、容貌似レ舅、潘安仁之外甥」とあるに據つたのである。今川了俊に、「潘安仁が西征賦に云云」とあるは、「貞松」は「年の寒きに云云」を見よ。

日日に衣寛び朝な朝なに帶緩ぶ、愁しみの腸寸寸に斷つとは、文成が仙女に別れし恨み（酒呑童子）

繼慕の情の切なさに、日毎に瘦せ衰へて衣も寛んでひろくなり、朝毎に帶も緩くなつた、離別の愁の爲に腹が寸斷したやうな堪へ難いせつなさを感じるの意。この文は遊仙窟に出で、張文成が仙女の十娘と契り、その別れを悲んだ文である、その文に、「日日衣寛、朝朝帶緩、口上唇裂、胸間氣滿、淚臉千行、愁腸寸斷」。